

タマキとカレンの異世界色々事件ノート

bunz0u

姿を消した勇者の新天地

ノーデルシア王国を後にしたタマキとカレンは何もない、白い空間にいた。

「さて、これからどうしたもんかな」

「さしあたっては、オメガデーモンを確保すべきかと思います」

カレンの言葉にタマキはうなずいた。

「それがいいか。でも、どこにいるんだろうな」

「この空間では、方向も距離もよくわかりませんね」

二人はそれからしばらくの間さまよっていたが、突然二人の前に人影が現れた。見たところ長身の老人のようだったが、見たとおりの存在でないのはタマキにもカレンにもすぐにわかった。

「あんたは？」

「私は様々な次元を管理している者だ」

「次元を？ つまり、例えば俺の世界とカレンの世界とかを見守るような、そういうのなのか？」

「そういうことだ」

二人はその次元の管理人をしばらくの間黙って見ていた。そして、カレンが静かに口を開く。

「しかし、そういう方ならば、タマキさんが世界を越えて召喚された時に介入されるはずではないのでしょうか？」

「いや、それは少し他で忙しいことがあったのだ。それだけでなく、多少都合が良かったから放置していたのだが、手が空いたので、こうして君達と会うことができるようになったのだ」

「なるほどな。で、それって悪魔の件なのか？」

「その通りだ。そもそも悪魔というのはあの世界とは別の存在で、本来はあの世界にあるべきではない。しかし、今までは問題なかったのだが、力の強い存在によって次元に歪みが生じてきたのだ」

「オメガデーモンのことか」

「そうだ。あの世界は少々特殊で次元の壁が歪んでいたのだが、大したことではなかったのだ。だが、今も言ったように最近それが大きくなってきていたので、対策をとることにした」

「で、そのために俺達をここに誘い込んだわけだ」

「そういうことだ。それに、君達が追っていた存在も捕らえておいた」

管理人がそう言って後ろを向くと、その空間が歪み、闇でできた球体を鎖で縛った一人の青年が出てきた。

「えーと、初めまして」

その青年は頭を軽く下げた。

「彼は宮崎要一君だ。私に協力してもらっている。そっちのタマキ君と同じ世界の出身だ」

タマキは要一のことを見てうなずいた。

「俺はタマキだ、よろしく。こっちはカレン」

「よろしくお願いします」

「いえいえ、こちらこそ」

ひとしきり挨拶をした後、タマキは要一の持っている鎖で縛った闇の球体に近づいた。

「これがオメガデーモンか」

「そうですね。しかし、よくそんな鎖だけで拘束していられますね」

カレンの質問には次元の管理人が口を開く。

「彼は特別な存在で、その鎖は次元の鉄槌という物を変化させたものだ。悪魔という存在もそれに対抗することはできない」

「なるほど。それはすごいな」

タマキはそう言うと、鎖に縛られたオメガデーモンの前にしゃがんだ。

「お前もやっとおとなしくなったか。これで安心かな」

「それはどうかな？」

タマキの言葉に反応するかのように、その球体から声が響いた。

「どういうことですか？」

カレンが聞くと、球体はさらに声を発する。

「教えるわけがあるまい」

それだけ言うと、沈黙してしまった。だが、タマキはにやりと笑う。

「分身か。それなら、対策は簡単だな。俺たちが戻ればいいだけの話だ」

「いいや、それはいかん」

だが、次元の管理人が口を挟んだ。

「今君達があの世界に戻っては、次元の歪みが大きくなってしまう。あちらの世界で十年以上は経たなくては駄目だ」

「十年？ それはまた気の長い話だな」

「主観時間ではそうならない可能性もある。それと、君の元いた世界にも送ることもできるぞ」

「それはいいですね」

元の世界という言葉には、タマキよりも先にカレンが反応した。タマキはそれを見てから、軽くうなずいた。

「そういうことなら、まあ暇もありそうだし、少し里帰りでもさせてもらおうか」

「それを望むのなら、叶えよう。君達にはこれから協力してもらいことが沢山あるからな」

「取引成立か？ でも、俺達に協力できることがあるのかな」

「次元を見回しても、君ほどの力の持ち主はそうはいない。それに、そちらの彼女は次元の壁をも切り裂ける。むしろ勝手にされては困る」

タマキとカレンは管理人のその言葉に視線を交わした。

「まあ、そういうことならとりあえずは協力してもいいか。じゃあ、早速俺の元いた世界に帰してくれないか」

「いいだろう。三人とも送ろう」

「え、俺も？」

要一の意見は明らかに無視されていた。

「ここがタマキさんの世界なんですね」

ジーンズに半そでのシャツを着たカレンが興味深そうに周囲を見回しながらタマキの横を歩いていた。

「ずいぶん違うだろ」

「そうですね、魔法は存在しないと言っても、まるで魔法のように見えるものばかりです」

「だよな」

そう言ううなずいたタマキはカレンと同じようにジーンズと半そでのシャツに、帽子をかぶってサングラスをかけていた。そして首から下げているアミュレットをいじくる。

「サモン、お前も面白いだろ」

「そうだな」

周囲に聞こえないほどの小さな声だったが、何か満足そうな様子もあった。

「ところで、どこに向かっているのでしょうか」

「ああ、俺の家だよ。せっかくこっちに帰ってきたんだし、カレンを紹介しておこうと思って」

「ご家族にですか？」

「そう、まあ家族といっても姉ちゃん一人だけなんだけどさ」

「お姉さまですか。楽しみです」

「楽しいかどうか」

そうして二人は古ぼけた平屋の前に到着した。タマキが帽子とサングラスを取ってからチャイムを鳴らすと、中から三十歳くらいの女性が顔を出し、タマキの顔を見るとため息をついた。

「まったく、お帰り」

「ただいま」

二人の挨拶には時間の壁は感じられなかった。そして、三人は居間のテーブルについていた。

「まずは自己紹介から始めたほうがいいか。あたしは高崎佐織、その環の姉」

佐織がカレンに向かってそう言うと、カレンはゆっくりと頭を下げた。

「初めまして、カレンといいます」

「あんたのことは聞いているよ、うちの弟がお世話になってるみたいで、まず礼を言わせてもらうよ」

「いえ、私のほうこそタマキさんにはお世話になっています」

その挨拶を受け、佐織は改めて目の前の二人のことをじっと見た。

「恵美ちゃんから聞いてたけど、これならまあ安心か」

「なんか親しそうじゃないか」

「まあね。というより、あの子が無事だっていうのはわかってたわけ」

「まあその話は聞いたから。それより、その感じだとしょっちゅう会ってたりすんの？」

「なんとなく気が合ってるね。だから詳しい話も聞いてるけど、できればその前から話してもらいたいんだけど」

「わかったよ」

それからタマキは一から異世界でのことを説明し始めた。

「なるほどね」

そしてその説明が終わると、佐織は大きく息を吐き出した。

「色々あったわけだ。それにしてもカレン、まあそう呼ばせてもらうけど、あんたのおかげでう

ちの弟がずいぶん助かったみたいだしね。それにサモンだっけそっちもありがとう」

「礼には及ばん」

まずはサモンが答え、それからカレンが口を開く。

「それは私も同じです。世界も、私も、タマキさんがいなければ、無事ではいられなかったはずですから」

「はあ」

佐織はため息をついた。それからタマキとカレンの顔を交互に見て、もう一度ため息をついた。
「あんた達お似合いだよ。まさかこういうことで弟に先を越されるとはね。で、子供なんかは？」

カレンはそれに微笑を浮かべた。

「いえ、残念ですが私は子供ができない体なのです」

「ああ、そうなのか。悪いことを聞いたね」

佐織は頭をかいて少し気まずそうな表情をした。だが、カレンは微笑を浮かべたまま首を横に振った。

「いいえ、言ってなかったことですから。それに、タマキさんと相談したことがあるんです」

「ああ、これから色んな次元に行くことになるんだろうし、カレンと同じ力を持った子がいれば、引き取ってみたいなと思ってる。大体の場合は不幸なことになるみたいだから」

「そう。それならもしそういう子を引き取ったら、ここに連れてきてもらわないとね」

「そうするよ」

その返事を聞いてから、佐織は立ち上がった。

「さて、しばらくは泊まっていくんでしょ。みんなで夕飯の買出しにでもいこうか」

「いいよ、行こう。カレンも見てみたいだろ」

「はい、是非」

そうして三人は家を出てスーパーマーケットに向かった。

三人でお買い物と夕食

タマキとカレン、佐織の三人は近所のスーパーマーケットに来ていた。カレンは興味深そうに棚を見回している。

「珍しい？」

佐織が聞くと、カレンはうなずいた。

「ええ、向こうの世界ではこんな清潔で整然としている食料を扱っている店はありませんから、面白いですね」

「まあ、余裕はあるからゆっくり見て行こうじゃない」

「俺も久しぶりだし、そうしたいな」

タマキもうなずき、かごを目の前で振った。

「じゃあ、今日はあんたが荷物持ちだからよろしく」

「了解」

それから三人はスーパーの中を歩き始めた。まずは野菜売場。

「どれも似ていますが、違いますね」

「品種改良の度合いの違いじゃないか。原型は大体一緒だと思うけど」

「確かにそうですね」

カレンはニンジンとジャガイモを手にとってしげしげと見つめてうなずいた。

「どれも形が整っていますし、サイズも大きいです。きちんと選別されているんですね」

カレンはそれからその二つを元の場所に戻した。

「そう、それにこんなふうにパックもされてる」

佐織はしめじとえのきを買い物かごに放り込んだ。

「さて、次はあっちかな」

三人は移動し、佐織は今度は白菜と長ネギをかごに放り込んだ。

「これは、鍋かな」

「ああ、わかった」

タマキの一言に佐織は相槌をうった。

「じゃあ、鶏肉いってみようか」

そして肉売場。カレンはパックされた肉を見て感心したような顔をしていた。

「こうして、あらかじめ切られているんですね。それにさっきの野菜売場もですけど、保存のためにわざわざ冷やしているとは」

「冷凍品もあるから、あとでそっちも見ようか」

佐織は鶏のもも肉と手羽元をかごに入れた。

「水炊きか。あっちの世界でもたまに作ったよ」

「へえ、あんたも料理してたんだ。カレンにばかりやらせていたんだと思ってた」

「俺もけっこうやってたよ、昔と同じようにさ。だからカレンも水炊きとか知ってるよ」

「そっか、初めてじゃないのは残念。まあ私のほうがこいつよりうまいから」

「はい、楽しみです」

「いやあ、いいねえ」

佐織はそう言うと、満面の笑みを浮かべてカレンの肩に手を置いた。

「あたしはこういう妹が欲しかった。いいねえ、弟、いい人をつかまえたじゃないか」

「まあ、俺もそう思うよ」

タマキがそう言うと佐織は瞬時につまらなそうな顔になった。

「ちっ、生意気な。ほら、さっさと買い物済ませるよ」

そうして会計を済ませて、三人は家路についた。

「さて、準備はあたしがするから、二人ともあっちで待ってな」

「ああ」

「はい」

台所から居間に移動した二人は隣り合ってテーブルについた。

「どうだった、実際に見てみた印象は？」

「一言で言えば、華やかで明るいですね。話や記憶で知ってはいましたが、まさか実際にここまでとは想像していませんでした」

「まあ、そうだよな。俺だってカレンの世界に行った時は色々驚いたし」

「それほどには見えませんでしたよ」

「いや、精一杯驚いてたよ。まあ最初からカレンがいてくれたからな」

タマキの言葉にカレンは微笑んだ。しかし、そこに勢いよくガスコンロが置かれる。

「はい、いちゃつくな」

「違うって」

「はいはい」

佐織はすぐに台所に戻ると、続いてガス缶と野菜を乗せたザルを持ってきた。

「火をつけんのはコンロだけ」

タマキは無言でガス缶をコンロにセットした。さらにそこに佐織が手羽元が入った鍋を持ってきてその上に置いた。

「ほら、火をつけて」

「了解」

タマキがガスコンロに火をつけてしばらくすると、佐織は野菜をどさどさ入れ始めた。

「さてと」

佐織は再び台所に行って缶ビール二缶とコップ三つを持ってきた。そしてビールをそれぞれのコップに注ぐとタマキとカレンに手渡した。

「じゃあ、あんたの久々の帰宅と、カレンの歓迎会ということで、乾杯！」

「かんぱーい」

「乾杯」

タマキはやる気なさそうに、カレンは自然に佐織のコップと自分のコップをかるくぶつけた。佐織はぐっと一息でビールを飲み干す。

「ふー。ほらあんた達も」

「いただきます」

カレンも同じように一気にビールを飲む。佐織はうなずくと空いたコップにビールを注いだ。

「いい飲みっぷりだ。ほら、そっちも飲みな」

「じゃあ」

タマキもビールを一口飲んだ。

一つ目の仕事

タマキとカレンは週末まで家でのおんびりとしていた。そして土曜日、佐織が出かけている高崎家には二人の客が訪ねてきた。

「初めまして！」

「こちらは赤坂まもるさんです。俺の大学の先輩と一緒に問題を解決するのに協力してくれたりもしました」

「へえ、よろしく」

タマキが手を差し出すと、まもるはタマキのことをじっと見てから手を差し出した。

「やっぱり、勇者っていうのをやってた人は雰囲気違いますね」

タマキはそれを聞いて、カレンの顔を見た。

「そうかな？」

「わかる人にはわかることかもしれませんが」

それからまもるはカレンにも手を差し出した。

「勇者の恋人さんも、雰囲気あっていいですね」

「いえ、そのようなことはありませんよ」

カレンは柔らかい微笑を浮かべて、まもるの手を握り返した。それから、要一はその間に入った。

「で、今日はタマキさん達の力を借りたいことがあってきたんです」

「ま、とりあえず話は座ってからにしよう」

四人は居間に移動してそれぞれ椅子に座った。

「えーっと、昨晚例の次元の管理人から連絡があったんですけど、タマキさんとカレンさんに来て欲しいところがあるそうです」

「俺達に？ どっか別の世界か」

「そうです、まあ俺とまもるさんが最初に行った世界なんですけど、なんかちょっと問題があるらしくて」

「へえ、それは面白そうだ。で、いつ出発するんだ？」

「すぐにでも、みたいです。大丈夫ですか？」

「俺は平気だ」

「私も大丈夫です」

「じゃあ」

それから要一はうつむいてなにか小さくつぶやいた。

「すぐに出発みたいです」

「ああ、じゃあちょっと書き置きだけ残しておこう」

それからタマキが書き置きをテーブルに残すと、すぐに四人は姿を消した。

そして、四人は森の中に立っていた。

「けっこう雰囲気いいところだな」

タマキは周囲を見回してから、カレンの顔を見た。

「そうですね。私の世界と少し似ている雰囲気があります」

周囲を見回す二人より先に要一は歩き出した。

「ついてきて下さい。近くに町があるので」

しばらく歩くと、四人は小さな町に到着していた。その町の入り口付近にいた少女が要一の姿

を認めると、方向転換して走ってきた。

「ヨーイチさん！ マモルさん！」

「エニス！」

エニスと呼ばれた少女は要一の目の前まで来ると、その目の前で急停止した。

「いつ戻ってきたんですか！？」

「まあ、ついさっきだよ。今回はこの人たちを案内するために来たんだ」

エニスはそこでようやく、要一とまもるの後ろにいるタマキとカレンに視線を向けた。

「あの、それでそちらの方達は」

「タマキさんとカレンさんだ」

「よろしく」

「よろしくをお願いします」

タマキとカレンが挨拶をすると、エニスも落ち着いた様子になった。

「初めまして、あたしはエニス・スラナンです」

「エニス、オーラさんはいるかな」

「はい、今の時間ならギルドにいるはずですよ」

「ありがとう、それじゃ後で店のほうにも寄るから」

「じゃあ、ご馳走を用意して待ってますね」

エニスはその場から立ち去っていた。

「ギルドってというのは何なんだ」

「魔獣討伐共同組合ってというのがあるんですけど、その通称です。俺とまもるさんはそこと協力してこの世界の問題を解決したんです」

「国ではないのですね」

「そうです。まあ責任者のオーラさんはかなり有力な人だったんですけど」

「それは会うのが楽しみだな」

そして四人がギルドに到着すると、ちょうど異様に大きな剣をかついだオーラがその前に立っていた。要一とまもるに気がつくのと、軽く手を上げる。

「久しぶりですね、ヨウイチさんにマモルさん」

「どうも、お久しぶりです。こちらはタマキさんとカレンさん、俺と同じように違う世界から来た人達です」

「ほう、そうですか」

オーラはタマキとカレンを見ると、すぐに微笑を浮かべた。

「なるほど、只者ではなさそうな方達ですね。私はオーラ・パラージャ、ギルドの責任者です」

「よろしく」

「よろしくをお願いします」

タマキとカレンは簡潔に挨拶をした。要一はそれから口を開く。

「それでオーラさん、なにか問題があるって聞いてきたんですけど」

「その通りです。どうも最近魔獣になにかおかしいものが入り込んでいるようで、少し困っていたところでした」

「それなら、ちょうどよかったです。タマキさんもカレンさんもすごく強いですから」

「ええ、しかし、それは私が直接確かめさせてもらってもかまいませんか？」

オーラの言葉で一瞬その場が固まったが、すぐにタマキが笑顔を浮かべた。

「面白そうじゃないか。いいよな、カレン」

「はい。この方も只者ではなさそうです」

「では、場所を変えましょうか」

穏やかな微笑を浮かべながらオーラは歩き出した。

とりあえず手合わせ

オーラに先導された一行はまずはギルドの倉庫に向かっていった。

「さて、その格好ではなんですから、まずはこの中から適当にどうぞ」

倉庫の中には様々な資材や、武器や鎧の類がきれいに保管されていた。

「色々ありますから自由に選んでください」

中に入ったタマキはまず壁にかかっているマントを手を取った。

「俺はこれだけでいいや。カレンはどうする？」

「そうですね、私は」

カレンはショートソードを手に取り、それからレザーアーマーが置いてあるほうに向かった。そして、その場で今の服の上からレザーアーマーを手早く身に着けた。

「これもあったほうがいいだろ」

そこにタマキがダガーを放ると、カレンはそれを受け取って腰のベルトに取り付けた。

「これで十分です」

「お二人とも、軽装ですね。では、行きましょうか」

それから五人は町外れの広場に到着していた。

「そちらのカレンさんは剣士のようですから、私とは手が合いそうですね」

そう言ってオーラはかついでいた剣を手に取り、広場の中心に歩いていった。カレンは黙って同じようにオーラの数歩先に立った。そして、ショートソードを抜く。その様子にオーラはうなずく。

「では、始めましょうか」

「いつでもどうぞ」

オーラとカレンは互いの剣を構えた。数秒の間二人は微動だにせずに向かい合い、そして、まずはオーラが動いた。

距離が詰められると同時に剣が上段から勢いよく振り下ろされた。カレンはそれを軽く横にステップしてかわし、オーラの横にまわりこむとショートソードを横薙ぎに振るう。だが、オーラも軽く横にステップしてそれをかわした。

二人はそこからゆっくり移動しながら、最初とは入れ替わった位置で止まる。

「思った通り、一流ですね。しかし、あなたの力はそれだけではないでしょう」

「それは確かにそうです。しかし、それはそちらも同じですね」

互いに軽く笑顔を浮かべると、二人は一歩ずつ下がった。そしてカレンは眼鏡を外してそれをタマキに向かって放り投げる。

「いきますよ」

カレンの瞳と髪が白銀に染まり、ショートソードも同じ輝きに包まれた。それを見たオーラは面白そうな笑顔を浮かべた。

「っ！」

次の瞬間、オーラがとっさに構えた剣にカレンの攻撃が直撃していた。オーラは一歩だけ後ろに下がったが、そこで踏みとどまり、すぐに体を反転させた。そして、一瞬で背後にまわったカレンと再び対峙する。

「完璧に受けられるとは思いませんでした」

「いえ、ぎりぎりでしたよ、これほどとは予想外です。さて、次はどう来ますか」

「では、遠慮なくいきます」

カレンの背中から白銀の翼が開いた。そして上空に舞い上がるとそこから一直線にオーラに向かって急降下していった。オーラはそれに対して剣を肩に担ぐようにして構えると、タイミングを合わせてそれをカレンに叩きつけた。

凄まじい打撃音が響き、オーラの持っていた剣がその後方の地面に突き刺さった。

「まいりました」

片膝をついたオーラは目の前のカレンに向かって静かに言った。すでに元の姿に戻っていたカレンが自分の剣を目の高さまで持ち上げると、それは半ばから折れ、先端が地面に落ちた。

「いえ、私の武器も壊れてしまいましたから」

「その剣はそれなりに上等な物ですが、私の剣と比べたらおもちゃみたいなものですよ。なので、私の完敗です」

そんな二人を見ながら要一は額に手を当てていた。

「なんか、とんでもないというか。それにあのオーラさんより強い人がいるなんて」

「確かに、カレンとあそこまで戦えるとはとんでもない実力者だな」

「すごい」

啞然とする要一に、感心するタマキ、惚れ惚れとしているまもと三者三様の様子だった。

それからカレンがタマキのほうに歩いてくると、タマキはさっきカレンが放り投げた眼鏡を返した。カレンはそれをかけると、一つ息を吐いた。

「お疲れさん。どうだった？」

「大変強い方でした。本当に驚きました」

「そうだな、まさかカレンのあの力をああやって受ける人がいるとは思わなかった。世界は広いな」

「そうですね」

そこに自分の剣を回収したオーラも来た。

「カレンさん、あなたの実力はよくわかりました。しかし、そちらのタマキさんの力も見せていただきたいですね」

「それはいいけど、俺の相手は？」

「そういうことならば、ヨウイチさんにまもるさん。あなた達二人でやってみてはどうですか？」

「え？」

「もちろん」

「ええ？」

要一の反応は鈍いが、まもるはやる気まんまんらしかった。

「じゃあ、やってみるか。二人とも、遠慮はいらないからな」

タマキもやる気があるようで先に広場の中心に歩いていった。

「よし」

まもるが六角形のものを取り出して落とし、それを足で踏むと赤茶色の小型ロボットの的なパワードスーツがその身を包んでいった。

「要一君、早く準備したら？」

「わかりましたよ。次元の鉄槌よ！ その姿を現し我が手におさまれ！」

その言葉と同時に、要一の手の中に巨大な鉄槌が出現していた。

「へえ、面白いな」

二人の武器を見てもタマキはそう言うだけで特に動じた様子はない。

「要一君」

「わかりました。フォーム！ チェーン！」

要一の次元の鉄槌がチェーンに変化し、それがタマキに向かって投げられた。タマキはそれを右腕を上げて防ぐが、チェーンはそこに巻きついてタマキの動きを拘束する。

「アタッチメント！ マシンガン！」

バックパックから右手にマシンガンを装着したまもるはそれをタマキに向かって乱射した。無数の弾丸が土を巻き上げ、タマキの姿を隠す。

「なるほどな。これはすごい」

だが、煙が晴れるとそこには全く無傷のタマキが立っていた。その上、タマキは自分の腕のチェーンをいつの間にか外していた。

「でも、このくらいじゃ駄目だな」

タマキは腰に手を当てて、次の攻撃を待つ姿勢になった。要一はチェーンを手元に戻し身構える。そして、まもるは左手をバックパックに伸ばした。

「アタッチメント！ チェンソーブレード！」

チェンソーが動く音が響く中、まもるは要一の前に出た。

「要一君、援護よろしく」

「わかりました。フォーム！ スピア！」

要一はチェーンをスピアに変えて構えた。

「行きますよ！」

まもるは脚部のジャンプブースターを水平に噴射してタマキに突進する。

「ちょうどいい、考えてた新技いくぜ！ メテオフィスト！」

タマキの左腕を燃え盛る岩が覆っていった。そして、まもるのチェンソーブレードとそのメテオフィストが激突して火花が散る。

「まだまだ！ ライトニングブレード！」

次はタマキの右手が雷をまとい、刃のような形状になった。

「伸びろ！」

だが、そこに要一のスピアが伸びてきた。タマキはライトニングブレードでそれを逸らせながら、足を踏みしめた。

「二十倍！ バースト！」

タマキの足元から爆発が起こり、まもると要一の攻撃をその勢いで弾き返す。タマキはその爆発の勢いのまま二人を飛び越え、その後ろにまわるとゆっくり振り返った。

「どうした二人とも、終わりか」

タマキの言葉に、よろめいていた二人は体勢を立て直した。

「こうなったら」

まもるはバックパックから残りのアタッチメントを排出した。そして脚部からアンカーを地面に打ち込んで体を固定した。

「脚部固定完了。バックパック、キャノンモード変形開始」

バックパックが展開しまもるの頭上に巨大な砲身が構築されていった。

「砲身構築完了。エネルギーチャージ開始」

「じゃあ俺も、フォーム！ キャノン！」

要一のスピアが大砲に変化した。

「タマキさん、ちょっと待っててくださいね」

「ああ、そういうことなら早めにな」

三十秒後、要一とまもるの砲身から同時にエネルギー弾と鉄球が発射された。

「いくぞ、サモン」

そうつぶやいてタマキがマントを取ると同時に、それが漆黒に染まる。そしてそのマントがタマキの目の前にひるがえって二発の砲弾を包み込んだ。

「ブリザードストーム！」

それからタマキの目の前に竜巻が発生しマントの中の砲弾を空に舞い上げた。

「ここだ！」

タマキがその竜巻の中に飛び込み、その体を上昇させていく。

「トルネードクラッシュ！」

その勢いのままタマキは足を空に向け、超高速で砲弾にきりもみ状態のキックを炸裂させた。大きな爆発が起こり、数秒後、やはりタマキは無傷で着地する。

「いや、ありえないよ」

要一はなんとかそれだけ言うだけだった。

この世界の問題

それから五人はギルドの中に場所を移した。オーラは室内を見回すと、まず自分の剣を入口の横に立てかけた。

「まずはここにいるギルド員を紹介しましょうか。ケイン」

オーラは椅子に座っている長髪の男に声をかける。

「はい」

ケインと呼ばれた男は立ち上がってオーラ達の前に来た。それから要一とまもるに軽く目で挨拶をしてから、タマキとカレンに向かって頭を下げた。

「初めまして、ケインといいます」

「よろしく、俺はタマキ」

「カレンです。よろしくお願ひします」

「ケイン、他のギルド員はどうしました？」

「まだ巡回中です、最近は妙な魔獣の動きが活発ですから」

オーラはケインの言葉にうなずいた。

「このお二人はそのために来てくれたんですよ。実力は今確認してきましたから、全く心配ありません。しばらくいてもらうことになるでしょうから、まずは住居の手配ですね」

その言葉に、ケインは深くうなずいて、丸腰のタマキとカレンを見た。

「わかりました。装備はいいんですか？」

「俺は別にいいけど、カレンは」

「はい、ショートソードとダガーを一本頂ければ」

「そういうことならば、それは私が手配しておきます。早速家を見に行きませんか」

「よろしくな」

ケインを先頭に、タマキとカレンはギルドから出て行った。

「ヨウイチさんとマモルさんには他に頼みたいことがあります。いいですね？」

「いいですけど、なんですか？ 戦うならタマキさん達がいれば十分だと思うんですけど」

「いいえ、それ以外なら仕事は沢山ありますよ」

オーラはいい笑顔でそう言った。

そして、タマキとカレンはケインに案内されて空家の前に来ていた。

「ここは客人用の家です。家具の類はありますから、少しの準備ですぐに生活できるようになっています」

「へえ、それはちょうどいい」

それからケインがドアの鍵を開け、三人は家の中に入った。室内は綺麗にされていて、埃っぽということもなく、家具も一通り揃っている。

「つい最近使ったような雰囲気ですね」

「ここは最前線ですから、頻りに他所から応援を頼んでいるんです。特に最近は魔獣の活動が活発ですから」

「忙しいんだな」

「ええ、ですから、オーラさんが手放しで認めるほどの方達の助力が得られるのは大変助かるんです」

「まあ俺達はそういうつもりで来たんだし、やることはやるよ」

「そう言って頂けると心強いです。私は武器を調達してくるので、しばらくここで待っていてく

ださい。あとで食料や必需品の店を案内しますから」

「ああ、よろしく」

ケインは家から出て行き、タマキとカレンはその場に残された。タマキはマントを取って椅子にかけると、室内を見回した。

「居間があって、あとは二部屋か。四人くらいは大丈夫かな」

「しかし、それでは住むとなると少々手狭になりそうですね。二人くらいがちょうどよさそうです」

それからタマキがドアを開けると、そこにはベッドが二つ並んでいた。

「俺達だと荷物がないから一部屋余るな。まあ長居するわけでもないだろうから、気にすることもないか」

それから二人とも椅子に座り、しばらくのんびりしていた。そこにケインが一本のショートソードとダガーを持って戻ってきた。

「どうぞ、カレンさん」

「ありがとうございます」

カレンはショートソードは左に、ダガーはベルトの右に装着した。

「ところで、タマキさんはどのような武器を使うんですか？」

「俺はいわいる魔法だよ」

「魔法ですか、私も使いますが、だいぶ違うものなのでしょうね」

「へえ、どんな魔法を使うんだ」

「自分の血を代償にして使うブラッドマジックというものです。あまり使い手がいない術ですが」

「血ね、それだと沢山は使えなさそうだな。確かそれに似たような魔法は読んだ気がするけど、なんだったかな」

「昔はそういうものがあつたと聞いたことがあります」

「まあ、今度見せてもらおうかな」

「そういうことならば是非。では、私から現状を説明したいのですが」

それから三人はテーブルについた。

「で、魔獣がどうとかっていう話は聞いたけど、詳しくはどういうことになってるんだ？」

「ええ。まず私達の世界には魔獣と呼ばれる危険な存在がいます。その魔獣が特におかしなことになったのは今回が二回目で、前回の山のように巨大なモノはヨウイチさん達のおかげでなんとかすることができました」

「それで、今回はどんな問題なのでしょうか」

「前は新種の魔獣が出現したのですが、今回は既知の魔獣の力が強くなっているんです。我々ギルドとしても対応に苦慮しているところです」

「なるほどな。じゃあ俺達はその原因をなんとかすればいいってわけか」

「しかし、簡単にわかるものなのでしょうか」

カレンはそうつぶやくが、それにはケインがうなずいてみせた。

「それならば、少しは調べがついています。しかし、戦力が足りないせいで、現状ではそこまでの対応ができません」

「わかってるなら、それをなんとかすればいいわけだ。明日からでいいかな」

「そうしていただければ助かります」

「よし、決まりだ！ あとは夕食をどうするかだけだな」

「それなら市場を案内しますよ」

「よろしくお願いします」

そしてケインを先頭にして市場に向かう途中、三人は要一に出会った。

「ああ、良かった。タマキさん、夕食は一緒にとりませんかってエニスが言ってて」

「それはちょうどいいな。ご馳走になろうか」

タマキがカレンの顔を見ると、うなずきが返ってきた。

「そうですね、ご一緒させて頂きましょう」

問題の所在

翌日、タマキとカレンは町の入り口に来ていた。そこにはオーラと要一、まもるの姿もあった。

「それでは、魔獣の場所に案内しましょう。ですが、ヨウイチさんとマモルさんにはここに残って頂きます」

「どういうことなんですか？」

「当然、守りのためですよ」

要一の質問にオーラは当然という表情で答えた。

「まあ、頼んだ」

タマキも要一の肩を叩いた。

「わかりました。こっちはなんとかしますよ」

そういうことで、オーラとタマキ、カレンの三人は町を出て歩き出した。

「どれくらいで到着するのでしょうか」

「あまり離れていません。まあそれが問題なのですが」

そうして話しながら歩いていると、カレンが何かを見つけたようで、立ち止まる。

「何か近づいてきますね」

オーラは周囲を見回すが何も見つけられない。

「地中からです。前方からで数は五十くらいでしょうか」

「距離は？」

「あのあたりでしょうか」

カレンが指差した場所を確認すると、タマキは地面に片手をついた。

「よっと！」

数秒後、カレンが指差したあたりの大地が盛り上がり、大量の土が噴出した。それと同時に巨大なアリのようなものが大量に空に舞い上げられる。

「これはまた、でかいアリだな」

「サンダーアントですね。雷を出す凶暴なアリです。それほど強力な魔獣ではありませんが、面倒な特性があります、けどもこれなら問題なさそうですね」

五十匹以上いるサンダーアントは着地すると、遠距離から一斉に雷を飛ばしてきた。

「プロテクション！」

タマキが大きく魔法の盾を展開し、その全てを防いだ。

「けっこうやるな」

「ええ、普通ならばこれほどの威力はないんですがね。ところで、ここはお任せしてもいいですか？」

「まあ、あれなら俺がやるのが一番手っ取り早いかな」

タマキはそのまま盾を維持して、サンダーアントに近づいて行った。雷は雨あられと降り注ぐが、それは全てタマキの盾に四散させられる。

「まったく、忙しい連中だな」

タマキが左腕を一振りすると、魔法の盾はさらに膨張してサンダーアントを弾き飛ばした。そして右腕を空にかかげると、そこに巨大な火の玉が出現した。

「ホーミング！ ファイア！」

巨大な火の玉が細かく分散すると炎の矢となり、サンダーアントに向かって放たれた。サンダ

ーアントぶんの爆発が起こり、後にはチリも残らなかった。

「いや、素晴らしいですね」

オーラは改めて関心した様子だった。

「まあまあかな。こいつらは元々こんな力を持ってたってことはないわけだ」

「そうです、通常はあれだけの力を持つ魔獣ではありません。対策は後追いなのが現状です」

「この状況の原因に心当たりはあるのでしょうか？」

カレンの問いにオーラは少し考え込むような仕草をした。

「なくもありません。今までは手が出せなかったのですが、あなた方の力があれば大丈夫そうですね。急ぎましょう」

「それじゃあ、おいサモン」

タマキのマントが漆黒に染まる。

「二人とも俺につかまって。飛ぶから」

カレンがタマキの手を握り、目線でオーラにも同じようにするように言った。オーラもタマキの手を握ると、三人はその場から飛び上がった。

「それで、原因の心当たりってというのは」

「このまま進んでいけば遭遇できますね。ああ、見えてきましたよ」

タマキとカレンがオーラの指差すところを見ると、そこには周囲とは違う、むき出しの大地が円状に広がっていた。タマキはそこに着地すると、二人の手を放して周囲を見回す。

「これは、妙な環境だな」

「その通りです。この場所が確認されたのは最近なのですが、ここから魔獣が現れたという報告もあります。それに、どうもここは妙な雰囲気がありますからね」

「確かにそうですね」

カレンは地面に手を当て、つぶやいた。

「何か感じるのですか？」

オーラがたずねると、カレンは静かにうなずく。

「はい、何かがずれていると言いますか、まるでここだけが違う世界のようにです」

「ここだけ次元の境目がおかしくなってるのかな」

「そうかもしれません。少しこの下を確認します」

そして、三人はその大地の境目に移動した。カレンは剣を抜くと、それを上段に構え、一気に振り下ろした。

空間が切断され、むき出しの大地にもそれと同じように大きく剣の跡が残った。空間の切断面から見えるのは虚無。そして大地の切断面から見えるのは虚無とは違い、なにかの力が渦巻いているように見えた。

「これは、サモン何かわかるか？」

タマキが自分の首から下げている狼の形をしたアミュレットに話しかけた。

「わからんな。だが、我と似た存在を感じる」

オーラはアミュレットがしゃべるという光景に、多少驚いたようだったが、特に何も反応しない。

「つまり、実体を持ってなくても、強力な力を持ったなにかってということか。引きずり出せるかな」

「こちらの世界に引き込めば、実体を持って力を抑制できるかもしれんな」

「じゃあ、やってみるか。二人とも、下がっててくれ」

タマキは前に出てからマントを外して手に取ると、それを漆黒に染めた。

「釣り、いってみるか」

タマキはマントを空間の裂け目に伸ばした。それから数秒おいてから力一杯それを引っ張る。

「出て来い！」

漆黒のマントの先に何かがかっついて出てきたが、それはすぐにそこから逃れ、空に向かって上昇していく。そして、その何かは空中で雲と同化して大きく広がった。

「これは、なんかまずいもの引っ張りだしたかな」

「そうかもしれませんね」

カレンも同意して剣を構えた。その間にも裂け目から引きずり出されたものは空を覆っていく

。

「これは、やっかいそうな相手ですね」

オーラもそう言って剣を構えようとしたが、タマキとカレンを見てそれをやめた。

「ここはお任せしてもよろしいですか？」

「そのために来たんだし、むしろ任せてもらいたいかな」

「そういうことでしたらお願いします」

オーラは後ろに下がり、タマキとカレンの戦いを見守る姿勢になった。

「さて、あいつは何をやってくるんだろうな」

タマキは腰に手を当てて空を見上げていた。雲と同化したものはますます広がっていて、あたりは薄暗くなってきている。

「こちらからしかけましょうか」

「そうだな、黙っていることもない。とりあえず、一発食らわせてみるか」

タマキは火の玉を出し、それを雲に向かって投げつけた。だが、何も起こらない。

「飲み込んだか。大食いなんだな」

「そのようですね。今度は向こうから来そうですね」

雲は光を発すると、タマキが撃ち込んだものの倍のサイズの火の玉を吐き出した。タマキはそれに動じず、引き付けてから手をかざした。

「バースト！」

爆発が火の玉をかき消した。

「いきます」

カレンが眼鏡を外してそれをベルトに引っ掛けると、髪と目と剣が白銀に染まり、さらに身につけた鎧が漆黒に染まる。そして白銀の翼を広げると一気に上昇して雲に突っ込んでいった。

カレンの突撃に雲は一部だけ切り裂かれるが、それはすぐに塞がってしまう。しかし、カレンは今度は上から雲を切り裂き、タマキの横に降り立った。

「手ごたえがありません。少し広がりすぎていますね」

「じゃあ、まとめないと駄目だな。そっちは俺がやるから止めは頼む」

「はい」

タマキはマントを漆黒に染め、飛び上がった。そして、いまだに広がり続ける雲の周囲に自らの魔力で壁を作っていく。そしてそれが完成すると、タマキは手を振り上げ、握った。

「反転！」

魔法で作られた壁が一気に収縮を始める。それに押され、雲は一箇所にとまとまっていく。そこに上昇してきたカレンが剣を振り下ろした。

今度はしっかりとした手応えがあり、凝縮した雲が真っ二つになった。だが、それは二つに別れたまま、それぞれがさらに凝縮すると、足が生えて蜘蛛のような形になった。それは二体同時にタマキとカレンに飛びかかる。

「実体を持ちましたか」

「そうらしいな」

カレンとタマキはそれぞれその蜘蛛を片手で止めると、地面に急降下して叩きつけた。しかし、それと同時に蜘蛛は人間三人分ほどの高さまで巨大化して二人を押しつける。

「これは、決まりですかね」

オーラはつぶやき、さらに後ろに下がっていった。そして、タマキとカレンはそれぞれの相手に向かい合った。

「カレン、すぐ終わらせられそうか？」

「どうでしょうか。まだどのようなものかわかりませんので、なんとも言えません」

「どうかな、たぶんそっちのほうが相性はいいんじゃないか」

「それなら、張り切っていきます」

まずはカレンが動き、蜘蛛に向かって正面から剣を振り下ろす。だが、蜘蛛は素早く後ろに

下がってそれをかわすと、すぐに大きく跳躍した。

だが、カレンはそれを読んでいたように、すぐに上昇してそれを追い、足の一本に剣を振った。蜘蛛の足はあっさりとは切断されるが、本体がひるむ様子はなく、カレンに顎を向けて食いつこうとする。

カレンはそれをかるくかわし、蜘蛛の頭に踵を落として地面に叩き落とした。

「私も新しい力を試してみませんか」

カレンは剣を鞘に収め、左手を腰のあたりで構えると、そこに光が集中していった。

「シャイニング！」

そしてカレンの身体は地面の蜘蛛に向かって急降下していく。

「バースト！」

インパクトの瞬間光が炸裂し、蜘蛛を飲み込み、その姿を消し飛ばしていた。タマキはそれを横目で見てにやりと笑う。

「いい技だな。俺も負けてらんないか」

そうつぶやくタマキに、蜘蛛が飛びかかってきた。

「ライトニングブレード！」

タマキは雷の刃を右手にまとうと、蜘蛛と交錯した。その一撃で蜘蛛の左足を全て切り落とす。

「いくぞサモン！」

「ああ」

それからマントを手にとると、それはドリルのような形状になった。タマキはそれで蜘蛛をあっさりとは串刺しにした。

「ダーク！ バースト！」

串刺しにした中心から漆黒のドリルが蜘蛛ごと弾け飛んだ。

タマキとカレンは普通の状態に戻り、それぞれ蜘蛛が消し飛んだ跡を確認する。そこに特に変わったところはなかったが、むき出しの大地に見た目の変化はない。

「これはどうすればいいんだろうな」

「私達では対応できそうにないですね」

そこに、後ろに下がっていたオーラがやってきて口を開く。

「こういうことでしたらヨウイチさんがなんとかできると思います。それより、先ほどの技はすごいものでしたね。あれがあなた達の本気でしょうか？」

「いいや」

タマキは首を横に振った。

「まだ奥の手はある、よな」

話を振られ、カレンは静かにうなづく。

「はい。私とタマキさんの力を合わせれば、もっと大きな可能性があります」

「なるほど、それはそのうち是非見せて頂きたいものです。では、とりあえず一度戻ってヨウイチさんを連れてきましょうか」

「それがいいか。あいつは特別な力を持ってるみたいだし」

「そうですね。あの方の力というのにも興味があります」

カレンがそう言って眼鏡をかけると、それを合図としたように三人は町に戻り始めた。

数時間後、要一はむき出しの大地の前に立っていた。

「じゃあ、行きます」

そして要一がその大地の中心に足を踏み入れると、その身体は地面に吸い込まれるようにして消えていった。

「あれ、どこに消えたんだ？」

「ヨウイチさんの本当に特殊な力はあるんです。私達では踏み込むことすらできない場所に入って行って、その原因を取り除けるんですね」

「へえ、存在そのものが特別ってことなのか。それは面白いな」

「そうですね。私達にも同じことができるのでしょうか？」

「まあカレンならできるかもな、多少強引な方法になるだろうけど。これが終わったら考えてみよう」

「はい」

そうしているうちに、要一が消えた場所から出てきてタマキ達に手を振った。

「終わりましたよ！ これでしばらくすれば大丈夫になるそうです」

その要一の手には小さな石のようなものが握られていた。

「それはなんですか？」

カレンが聞くと要一は軽く首をかしげた。

「よくわからないんですけど、これが原因で次元の歪みが生まれてたらしいです。回収して持って帰って来いってあのじいさんは言っていました」

「へえそんなものがね」

タマキは要一からその石のようなものを受け取った。

「これは、妙だな。変に暖かいし、それに軽すぎる。この状態なら危険はないよな」

「今は動いてないので大丈夫みたいです」

「なるほど」

タマキはその石を要一に返した。

「では戻りましょうか」

オーラはそう言って町に足を向けた。タマキ達もそれに続いて帰っていった。

その日の夕方、タマキとカレンはギルドでのんびりとしていた。そうしていると、そこに慌しく入ってくる小さな人影があった。

「どこなの、ヨウイチ達と一緒に現れた二人っていうのは？」

「セローア、落ち着いて」

小さな少女とケインがギルドに入ってきた。タマキは立ち上がってその二人に手を上げた。

「ケイン、そっちの子はなんだ？」

その問いにセローアと呼ばれた少女は胸を張る。

「私はセローア！ あなた達がヨウイチと一緒に現れたっていう二人ね」

「まあそうだけどな」

「あなた達も異世界から来たんでしょ、それで今回は何があったの？ 詳しく教えて」

タマキはカレンと顔を見合わせてから、セローアに向かって首を横に振った。

「まあ、次元の歪みっていうのが魔獣に影響を与えてたらしいのは知ってるか。で、その歪みから変な雲みたいのが出てきて、それが蜘蛛みたいのになったから片付けてきた。あとは要一がや

ってくれたから、もう心配ないらしい」

「ふうん、そうなの。よくわからないけど、あなた達は強いよね」

「まあそれなりに」

「ふうん、ヨウイチやマモルとは違う力なのよね」

「違うな。俺は魔法だし、カレンは剣だ。あの二人みたいな特別な武器は持ってない」

「見てみたかったわね。でも問題が解決したってことはすぐに帰っちゃうわけよね」

「要一の話だと、何日かは時間がかかるらしい」

タマキの返事を聞くと、セローアは笑顔でうなずいた。

「それなら、まだ力を見せてもらう機会はあるそうね。それじゃ明日よろしく」

それだけ言ってセローアは外に出て行った。

「慌しい方ですね」

カレンの言葉に、ケインは微笑を浮かべた。

「興奮しているんですよ。彼女は異世界のことに興味を持っていますから。それから、食料や必要なものはあの家に運んでおきました」

「そうか、じゃあそろそろ寢床に帰るかな」

「はい、そうしましょう」

「なにかあったらいつでも知らせてくれ」

そういい残してタマキとカレンはこの世界での家に向かった。そしてその家に到着して中に入ると、室内は掃除されていて、台所には食料が色々と用意されていた。

「ちょっと多いくらいだな」

「そうですね、あとでギルドに差し入れにでもいきましようか？」

「それもいいか。じゃあ早速作ろう」

タマキとカレンは食料を調べながら料理の準備を始めた。

しばらくしてから、ドアをノックする音がして、要一が顔を出した。

「あ、えーっと。もう食事の準備はしちゃってるんですか」

「ああ、もうすぐできるけど」

「もしかして夕食のお誘いですか？」

「まあ、そうなんですけど。遅かったですよね」

「いや、ギルドに差し入れしようと思ってたし、問題ないな」

タマキはそう言うと、鍋に蓋をし、それを布で包んで持ち上げた。

「じゃあ、行こうか」

カレンもそれに続いて鍋の一つを持った。

「まずはギルドに寄りましょう」

それから三人はギルドに寄って鍋を差し入れてから、エニスの家に向かった。そこにはまもるとスラナン家の人々が待っていた。

そして、その夕食が終わりタマキとカレンは夜の町を歩いていた。

「ここは悪くない世界ですね」

「そうだな。問題はあるみたいだけど、それでもちゃんと生活してる。きっと、こうやって色々な世界があるんだよな」

「そうですね。そして、その世界だけでは対処できない問題もあるのでしょうかね」

「ああ、だけど俺達にはそれをなんとかできる力がある」

「目の前の問題を見過ごすわけには行きませんね」

「そういうことだよな」

タマキとカレンは微笑を浮かべて視線をかわすと、互いの手を握ってこの世界での家に帰っていった。

タマキとカレンはその世界に数日間滞在した。問題を解決したおかげで魔獣はおとなしくなっていたので、その間、特に派手な戦闘はなかった。だが、タマキとカレンはそれなりに忙しい日々を送っていた。

「うーん」

ギルドの裏でセローアは手のひらを上に向けて、小さな火の玉を出していた。それは頼りなげな感じで浮いていて、今にも消えそうである。

「うまくいかなわいわね」

「それはまあ違う世界の魔法だからな。一応できるだけでもすごいんじゃないのか、たぶん」

「でもあなたは全部使えるんでしょう？」

「まあ、相性が良かったんだよ。でも攻撃魔法より補助系のほうが便利だと思うけどな」

「そういうのは苦手なのよ」

「そうか、それじゃ頑張れよ」

タマキはそれだけ言ってその場から離れた。それから町の入り口のドラゴン、ジローの前で立ち止まった。

「よお、元気か」

タマキがその鼻先を撫でると、ジローは軽く鼻息を吐き出し、目を開けてタマキを見てから、そっぽを向いた。

「相変わらずやる気ない奴だな」

それからタマキは町の外れに足を向けた。そこではカレンが要一にナイフ投げを教えている。カレンが投げるナイフは全てが的に当たっているが、要一が投げたナイフは的を外れたり、当たってもうまく刺さらなかったりで、うまくできてるといふには程遠い。

「全然駄目じゃない」

それを横で見ていたまもるはあきれたような顔をしている。

「けっこう難しいんですよ」

「カレンさんはできてるじゃない」

「私は昔からやっていますから。それに、タマキさんもこれはできません」

話を振られたタマキは軽くうなづく。

「ああ、俺は武器とかは特に使えない。基本的に魔法かケンカだよ」

「普通勇者とか言ったら、武器とか覚えるんじゃないですか？」

要一はそう言ってナイフを投げるが、それは的を外れた。

「必要なかったからな。大体魔法でなんとかなったんだよ」

「ですよー」

タマキの実力の片鱗を見ていたまもるは勢いよくうなづく。

「なんで俺は馬鹿力とトンカチだけなんだ」

要一はため息をつくと最後の一本のナイフを投げた。それは見事に的に突き刺さった。

「その調子です。今日はこれくらいにしておきましょうか」

そう言ったカレンは的に刺さっているナイフを回収し始めた。要一も主に地面に落ちているナイフを拾い集める。

「それより、そろそろ昼のことを考えてもいいんじゃないか」

「それでしたら、オーラさんからお誘いを受けています。ギルドで会食をするとおっしゃってま

した」

「へえ、ならちょっと散歩してから行くか」

そういうわけで、四人はのんびりとギルドに向かった。

そしてギルドに到着して中に入ると、そこにはオーラとケイン、その他のギルド員とそれにエニスが集まっていた。テーブルが中央に集められていて、そこには様々な料理が並べられている。

「おかえりなさい」

エニスが笑顔で四人を迎えた。

「ただいま、というか、ずいぶん短い時間で用意したみたいじゃないか」

要一がそう言うと、エニスは心もち胸を張った。

「しっかり準備したんですよ。ヨーイチさんがまた帰るまえにちゃんとパーティーをやろうって」

「そうなんだ、ありがとう」

「さあ、座ってください」

要一はエニスに座らされ、まもるはそれに生温かい視線を送りながら隣に座った。タマキとカレンはその向かい側に座る。それを見てからオーラはグラスを手にとった。

「さて、今回もヨウイチさんや、そちらのタマキさんやカレンさんのおかげで脅威を乗り越えることができました。とりあえず、こうして来て頂いた異郷の方々にささやかな感謝をささげましょう」

オーラはグラスを掲げた。一同はそれにならい、それぞれのグラスを掲げ、会食が始まった。

「しかし、今回は本当に助かりました。それに、あなた達の力はギルド員の刺激にもなったようですしね」

いつの間にかタマキとカレンの横に来ていたオーラがそう言った。さらに返事を待たずにオーラは続ける。

「本当はほかのギルドの支部からも人を呼びたかったのですが、最近は忙しくてそれもできないのが残念です」

「しっかりと機能しているならば、それはいいことだと思います」

カレンが答えると、オーラは軽く息を吐き出した。

「そうですね。まだまだ発展途上ですが、ギルドもここまで発展しました。このままいけば、何も助けがなくてもなんとかできる日もくるでしょう」

「まあ、そうできないうちはまた来ることもあるかもな」

タマキがそう言うと、オーラは微笑を浮かべた。

「そうですね、その時はまたよろしくお願いします」

そうして会食の時間は過ぎていった。

翌日、タマキ達四人はオーラとケイン、エニス見送られて次元の管理人のところに帰還をしようとしていた。

「ヨーイチさん、用がなくてもまた来てくださいね」

「もちろん。今度はもうちょっとまとまって遊びにくるからな」

「待ってます」

そこでエニスは要一から離れた。それからオーラが一步前が出る。

「では、また会いましょう」

「ああ、またな」

タマキがそれに手を上げて応えると同時に四人の姿は消えた。

隣り合った世界と力の制限

次元の管理人の元に戻った四人だったが、要一とまもるはすぐに自分達の世界に戻っていった。

それからタマキとカレンはその空間でしばらく過ごすことになった。特に何も無い空間に次元の管理人が用意した部屋で二人は生活していた。家具などはタマキが実家から適当に持ってきたものを使い、食料もそうして調達している。

数日後、次元の管理人がその部屋に入ってきた。

「少し君達に話がある。君が最初に召喚された世界なのだが」

「何かあったのか？」

「どうやらあの世界で例の悪魔というのが動いているようで、次元の歪みが増大しているのだ。そこで君達にそれをなんとかしてもらいたい」

「待ってください。私達は十年以上はあちらに行けないはずではないのですか？」

「そうだったのだが、生じた歪みで時間の流れが変わってしまったのだ。すでにあの世界では十五年が経っているから問題はない」

「十五年か、そりゃまた」

タマキは驚いているようだった。

「でもまあ、それなら俺達が向こうに行って問題解決に手を貸しても問題ないわけだ」

「そういうことだ。悪魔の捕獲はまた彼に頼んでおこう」

そういうわけで、それからタマキとカレンは再びノーデルシア王国に戻るようになった。

そして、すぐに問題を解決すると、すぐに元の空間に戻ってきた。そこには鎖でオメガデーモンを捕らえた要一の姿もあった。

「これであっちのほうは心配なくなったわけかな」

タマキの言葉に次元の管理人はうなずいた。

「あの世界は本来安定しているから問題はもう発生しないだろう」

「一安心だな。ところでそいつはどうするんだ？」

タマキは要一が捕らえているオメガデーモンを顎で指した。

「本体と同じ堅牢な次元に幽閉しておくから心配はない。それより、また解決してもらいたい問題がある」

「今度はなんだよ」

「うむ、隣り合った二つの次元があるのだが、どちらも不安定で下手をすると衝突して消滅する可能性がある。それに、不安定な状況なので君達に本来の力を出してもらっては困る状況でもある」

「つまり、私達に力を抑えておかなければならないということですか」

「その通りだ。そして、その二つの世界の問題、次元を不安定にしていることは平行して解決しなければならない」

「じゃあ、俺とカレンで別々にやらないと駄目なのか」

「そういうことだ。強制はしないが、君達がやってくれれば助かる」

「なるほどな、まあとりあえず下見とかさせてくれるか。なんの準備もなしっていうのもきついし」

「それならば問題ない。だが少し時間がかかる」

「別にいいよ。準備できたら呼んでくれ」

そこでとりあえず解散になった。そしてまともな時間ならば翌日、タマキとカレンは旅装を整え、次元の管理人のところに行った。

「さて、実際は別に行動するにしても下見は一緒にいいよな」

「それはかまわない。だが、時間は君達の主観時間で一つの世界につき一時間だ」

「ああ、すぐに頼む」

そしてタマキとカレンの姿は消えた。それから二時間後、二人は消えた時と同じ姿で戻ってきていた。

「俺は最初のほうに行ったほうがいいかな」

「それがいいだろう。最初の世界は召喚獣と呼ばれるものを使役する者が多い世界だ。そして後の世界は吸血鬼というものがいる」

「そういうのは最初に教えておいて欲しかったな。で、あっちの世界では俺達は正体を隠したほうがいいのかな？」

「そうだな。どちらも次元が不安定なだけに、異世界の存在が知られるのは問題の元になるだろうから、それは避けるべきだな」

「なるほどね、じゃあ俺は召喚術って言えばいいのか、それをなんとかしないとな。カレンのほうの世界は近代っぽいから、装備類の準備だな」

「はい。すぐに始めます」

「あと、設定だな設定。俺は田舎から出てきた腕自慢で、カレンは謎の賞金稼ぎとかどうだ？」

「わかりました、そういう方向で準備します。とりあえず私だけタマキさんの実家に戻していただけますか？ あそこなら材料の調達も簡単ですから」

「ああ、俺はこっちで召喚術っぽいのをやっておくから、姉ちゃんによろしく」

「はい、それでは着替えてきますので、それからお願いできますか」

「うむ」

それからしばらくして、現代風の服に着替えたカレンがタマキの世界に行って、タマキは部屋にこもって召喚術っぽいものの準備を始めることにした。

「どうするつもりだ」

サモンの言葉にタマキは鼻の頭をかいて答える。

「実は前から考えてた魔法があるんだよ。まあ分身の術というか、そんな感じなんだけどな」

それからタマキが手を合わせると、目の前にその姿にうりふたつのものが現れた。

「これはなんだ？」

「お前がこれに入って動かすんだよ。まあ一部だし、大した力は出せないだろうけどな」

「ほう、ならば」

アミュレットから小さな虚無の塊が出現し、その分身に入り込む。すると、人形のようなだった分身に生気が満ち、動き出した。

「なるほど、こういうことか。しかしこのままではお前と見分けがつかんぞ」

「そうだな、今回は同じじゃまずいか。ちょっと待てよ」

タマキが目を閉じると、分身の顔にフルフェイスの兜のようなものができ、その身体にも重装の鎧が身に着けられた。

「これで顔も体型もわからないだろ。いけそうか？」

「問題ないだろう。こんなものを我が身体とするのは不本意だが、ないよりはましだ」

最初の出会い

「さて、まずはどこに向かったもんかな」

道のど真ん中に現れたタマキは腰に手を当てて周囲を見回していた。

「まあ、とりあえず人のいるところに向かいますか」

その格好はシンプルな長袖とズボンに皮のジャケットを身につけ、マントに荷物袋という格好だったが、特に目をひくのは、両手につけている、拳の部分と手の甲が金属で補強されている皮のグローブだった。

「確かあっちの方に町があったよな、覚えてるか？」

タマキが首から下げている狼型のアミュレットに話しかけると、そのアミュレットが答える。

「そうだ、そこに行けば何かがわかるというのか」

「さあな、まあしばらくすれば自然とわかるっていう話だから、とりあえずはぶらぶらしてればいいんじゃないか。とりあえずは召喚獣っていうのを使う奴を探すか」

サモンとそれだけ会話すると、タマキは歩き出した。天気は快晴で遠くまでよく見渡すことができる。しかし、特に人影は見当たらず、目に入るのは動物だけだった。

それを見ながらのんびりと歩くこと約二時間。簡素なテントのようなものが並ぶ小さな集落のようなものが見えてきた。タマキは歩くペースを速め、その集落に近づいていった。

集落では人が動き回っていて、煮炊きのための煙も見える。そして、入口には犬のような生き物が何匹も繋がれていた。

それに気がついた犬にほえられながら、タマキは何気ない様子で集落にどんどん近づいていく。すると、何かの鱗でできた簡素な鎧をつけて剣を腰に下げて弓を持った男が現れ、その前に立った。

「旅人か？」

「そうだ、一人だよ」

男はタマキの周囲に本人以外いないことを確認すると、うなずいた。

「旅人は歓迎しよう。名はなんという」

「タマキだ。あんたは」

「俺はオーゲン、お前と同じだ」

「なんだ、あんたはこの集落の人間じゃないのか」

「ああ、しばらく用心棒をして一緒に旅をしているだけだ。ここは遊牧民の集落だからな」

「なるほど。ところで町まではどれくらいあるかな」

「このまま歩いていけば夕方には到着するだろう。だが、今日は休んで明日にしたほうがいいぞ。夜になったら危険も多い」

「そうなのか。俺もここにちょっと世話になってもいいのか？」

「お前は危険な人間には見えないし、かまわないだろう。こっちだ」

そうしてオーゲンに集落に招き入れられたタマキは、ゆっくりとあたりを見回した。集落にはゆったりとした服を着た人々がいたが、その数は多くない。

「今はほとんど遊牧に出ているんだ。だが族長はいるから心配するな」

オーゲンはタマキの疑問に先回りで答えた。

「へえ、まずはそこに挨拶か」

二人は特に何の変哲もないテントに入っていく。その中には、あぐらをかいて目を閉じている老婆が座っていた。

「族長、客人だ」

「ああ、わかっているよ。いらっしゃい、お客人」

老婆は目を開けると、にやりと笑ってタマキのことを見た。

「あんたはずいぶんと遠いところから来たみたいだね」

「まあな。俺はタマキ、よろしく」

「ゲンナだ。よろしく青年、歓迎するよ。なにかあったら用心棒を頼むよ」

「機会があったらな」

それからタマキとオーゲンはテントを出て、かまどの近くに行って腰を下ろした。

「しかし、特に武器はないようだが、それで一人旅は危険だろう」

オーゲンが聞くと、タマキは自分の両手を顔の前に上げて、金属で補強された部分を見せた。

「俺の武器はこれだよ」

「徒手で旅とは、大した度胸だな。その力を見せてもらいたいところだが」

「必要だったらな」

「だろうな」

そう言ってオーゲンは笑顔を浮かべた。

「ところで、なぜ一人旅をしているんだ？」

「まあ、自分の力を試してみたかったんだよ。一人だったら色々自由だろ？」

「それはそうだな。俺もそうして修行中だ」

二人はそのまま黙って座っていたが、しばらくしてオーゲンが立ち上がった。

「どうやら仕事らしい」

「何があったんだ？」

「俺の相棒が何か見つけたらしい」

「相棒ね。それは紹介してもらいたいところだ」

「すぐに紹介してやれるさ。こっちだ」

タマキも立ち上がると、歩き出したオーゲンの後をついていった。オーゲンは馬がつながれているところに行き、二頭の綱を解いた。

「馬には乗れるか？」

「まあ、一応」

それから二人は馬に乗って集落から移動を始めた。数十分後、小さな林の近く、特になにもない場所でオーゲンは馬を止めた。

「ここならいいだろう」

そう言ってから馬から降り、近くの木にそれを繋いだ。タマキもそれと同じようにする。

「特に変わったところはないみたいだな。いったい何があったんだ？」

「それはこれからだ」

オーゲンはそれだけ言うと、タマキから距離をとって振り返った。

「察しはついているだろう。お前は召喚獣を持っているはずだ、それを見てみたくてな」

「なるほど、それでわざわざこんなところまで。まあとりあえずそっちから見せてくれよ、オーゲン」

「もちろんだ、いくぞ」

オーゲンは右手をゆっくりと上げた。

「鋭き牙を持つ獣よ、その輝きで闇を照らし出すがいい！ 駆け抜けろ！ シルバーファンクタイガー！」

セリフが終わると同時に、オーゲンの横に竜巻が発生しそこから巨大な白い虎が姿を現していた。タマキが見るところ、それは全長五メートルはあり、たくましく、凛々しいという言葉が良く似合う立派な白虎だった。

「立派なもんじゃないか」

「そうだろう、これこそが俺の相棒、シルバーファングタイガーだ。さてタマキ、お前の相棒を見せてくれ」

「よし、じゃあやってみるか」

タマキもオーゲンと同じように右手を上げた。

「今ここに混沌と破滅の使者を呼び起こす、現れろ！ ドゥームデーモン！」

タマキが振り上げた右手を地面に叩きつけると同時に、そこから爆発が起こった。そして、その爆発がおさまり、舞い上がった爆煙が晴れてくると、そこには全身を漆黒の甲冑で包んだものが浮かんでいた。

「それがお前の召喚獣か。どれほどの力か楽しみだな」

「俺もだよ、始めようじゃないか」

まずシルバーファングタイガーが動いた。その巨体に似合わず、突進の勢いは凄まじく、あっという間に前足の鋭い爪がオメガデーモンに迫る。

だが、オメガデーモンそれを後ろに下がってかわすと同時に、火の玉をその顔面に叩きつけた。

爆発が起こるがシルバーファングタイガーはそれをものともしないようすで着地した。

そして両者は再び最初と同じ距離をとった。

「やるな」

「そっちの虎もすごいじゃないか。凶体のわりに動きも素早い」

「だが、それだけじゃない。行け！ シャイニングファングクラッシュ！」

シルバーファングタイガーの牙が輝きながら一瞬で鋭く伸びた。次の瞬間にはその巨体が矢のように飛び出し、オメガデーモンに迫る。

「止めろ！」

タマキの声と同時にオメガデーモンは両手を前に突き出して魔力で盾を展開した。両者は激しい衝撃をその場に発生させて拮抗する。

だが、そこで集落のほうから爆音が響く。

「止まれ！」

オーゲンの声にシルバーファングタイガーは後ろに跳んだ。

「何かあったらしいな」

タマキがそう言うと、オーゲンもうなずく。

「そうみたいだな。すぐに戻ったほうがよさそうだ」

それからオーゲンはシルバーファングタイガーの背中に登った。

「タマキ、お前も乗れ。このほうが早い」

「そりゃ楽しみだな。お前も乗れよ」

タマキの言葉に オメガデーモンはシルバーファングタイガーの背中に立った。そしてタマキが背中に乗ったのを合図に、シルバーファングタイガーは猛スピードで集落に向かって駆け出した。

タマキとオーゲンが集落に到着すると、そこには五名の上等な鎧を身に着けた兵士らしき者達
がいた。オーゲンはその前にシルバーファングタイガーを飛び込ませると同時にそこから飛び降
りて、その一団の前に立った。

「お前達は国の兵士か。さっきのあれはお前達の仕業だな」

オーゲンは兵士のうちの誰かが作ったらしい地面の大穴を見てから、そう言った。だが、兵士
の一人はそれを無視するように一步踏み出す。

「お前が何者かは知らんが、我々の邪魔をするならただではすまんぞ」

「この俺の相棒を見て、よくそんな口が叩けるな」

「おとなしく従わないのなら、実力行使も認められている」

その言葉を聞くと、オーゲンはため息をついた。

「タマキ、降りてくれるか。こいつらには少し教育が必要らしい」

タマキは黙ってうなずくと、シルバーファングタイガーの背中から降りて後ろに下がった。オ
メガデーモンも一緒にその後ろに下がる。

「それだけ強気ということは、お前達の中にも召喚獣使いがいるんだろ」

その言葉に兵士達はそれぞれ腰の袋から緑色の宝玉のようなものを取り出した。そしてそのう
ちの一人がにやりと笑うと、それを地面に放り投げた。

「これは？」

オーゲンがつぶやくと同時に、投げられた宝玉が砕け、そこから緑の煙が立ち昇った。そして
、その煙の中から現れたのは五体の巨大な狼だった。

「行け、飢狼ども」

さっき笑った兵士が腕を振ると、五体の狼がオーゲンに迫った。だが、オーゲンは全く動じる
こともない。

「行け！ シルバーファングタイガー！」

声とほぼ同時に、白い影が体当たりで五体の狼を吹き飛ばしていた。オーゲンの前に立ちほだ
かる白い虎は一つ雄叫びを上げて狼達を威圧した。

「この程度か」

オーゲンは多少失望したような声を出した。だが、その表情は剣を抜いた兵士を見て引き締ま
った。

「なるほど。そういうことか」

オーゲンは剣を抜き放った。

「俺も混ぜてくれよ」

そう言いながらタマキがオーゲンの隣に立った。オーゲンは横目でタマキの顔を見てすぐに視
線を正面に戻す。

「殺すなよ。こいつらには聞きたいこともある」

「わかってるさ。おい、そっちの狼連中は頼むぞ。とりあえずここから引き離して片付けろ」

タマキはうなずいてからオメガデーモンに一声かけた。オメガデーモンは手を軽く上げてそれ
に答える。

「よし、行くぜ！」

タマキは気合を入れて一気に兵士達の中心に突進した。兵士はすでに散開していて、そのうち
の一人が前に出てタマキに剣を振り下ろした。タマキはその一撃に合わせて拳を繰り出した。振

り下ろされた一撃はその拳に弾かれ、兵士は体勢を崩す。

「よっと」

タマキはそこから一步踏み込むと、その体が宙に舞った。さらにそこから伸びた足が兵士の顎を捉えた。

兵士は声も出せずにその場に崩れ落ちた。だが、着地したタマキに、すぐに左右から残りの兵士が迫る。

「おお！」

右からの攻撃は飛び込んできたオーゲンが遮り、タマキは左からの最初の攻撃をグローブで受けると同時に身体を回転させてその横に回り込むと、その勢いでもう一人の腹に蹴りを食らわした。

さらに横の兵士の首をつかむと、そのまま足をかけて地面に力づくで叩きつける。

倒した兵士を押さえながらタマキが顔を上げると、オーゲンもすでに一人の兵士を倒し、もう一人と向かい合っていた。だがそれも長くは続かず、オーゲンが兵士の剣を弾き、その股間を蹴り上げることで終わった。

タマキは兵士を押さええていた手を放して立ち上がった。だが、兵士達は意識を失っていないものも動こうとはしない。

「あとはあっちか」

立っている二人の視線の先では、五体の巨大な狼と、シルバーファンクタイガーが向かい合っていた。オメガデーモンは少し距離をとっている。

まず二頭の狼が正面からシルバーファンクタイガーに飛びかかっていったが、そのうちの一頭は瞬時に喉元を食い破られて消失してしまう。もう一体もシルバーファンクタイガーの巨体に弾き飛ばされて地面を転がった。

残りの三頭はそれぞれ左右に分かれて横に回っていて、それが一斉に飛びかかった。だが、一頭は尻尾で弾かれ、残りの二頭はシルバーファンクタイガーの身体に牙を立てようとするが、牙が毛皮を突き破ることはできず、あっさりと振り払われてしまう。

「今だ！ シャイニングトルネード！」

オーゲンの声に反応し、シルバーファンクタイガーが一つ吼えたと、円状に走り始めた。それはどんどん速度を上げていき、輝く白い竜巻のようになっていく。

そして、その竜巻が残った狼を巻き込んで、それらを全て消し飛ばしてしまった。それからその竜巻は小さくなっていき、シルバーファンクタイガーは元の場所で止まると、一声咆哮して姿を消した。オメガデーモンも同じように、いつの間にか消えていた。

「お前達の話聞かせてもらおう」

オーゲンは剣を持ったまま、兵士達に笑顔を向けた。

数分後、タマキとオーゲンは武器を取り上げた兵士を一箇所に集めていた。

「さて、お前達の目的聞かせてもらおう」

オーゲンがそう言うが、兵士の一人は地面に唾を吐いた。

「貴様等、こんなことをしてただで済むと思っているのか」

「どっかの兵士を叩きのめしたって、評判になるんじゃないか？」

タマキがそう言うとオーゲンは一瞬間を置いてから笑い出した。

「ハハハハハ！ それはそうだ。フラウト皇国の兵士を叩きのめしたとなればさぞかし有名になれるだろうな」

フラウト皇国とはこの世界で最大の国である。という情報が予習をしてきたタマキの脳裏に浮

かんだ。

「しかし、見たところお前達はそう下級の兵士というわけでもなさそうだし、本当になんでこんなところに来たんだ？」

オーゲンの言葉に兵士の一人は笑い声を上げた。

「お前等のような流れ者の田舎者じゃ知らないだろうな。皇国は今ある人物を探しているんだよ」

「それはなんだ」

「災厄の痣を持つ者だ。我々はそれを探している」

「災厄の痣っていうのは、一体何なんだよ？」

タマキが質問すると、兵士は首を横に振った。

「さあな。そうした伝説があると聞かされただけだ。だが、とてつもない力を持っているらしい」

「なるほどな、だが、この集落にはそんな者はいないぞ。無駄足だったな」

「そういうことだ」

オーゲンの言葉を引き取ってタマキが指を立てる。

「まあ、お前達はここで何も発見しなかったし、俺たちとも会わなかった。そういうことにしておけばお互い困らないだろ」

「ふん、取引とでも言うつもりか？」

「いいじゃないか。なあ、オーゲン」

「ああ、それでいい。だが、お前達にはもう一つ聞いておきたいことがある」

そこでオーゲンは声のトーンを落とした。

「さっきの召喚獣はなんだ。あれは普通には見なかったが」

兵士達は互いに顔を見合わせたが、それで何か意思疎通できたらしく、一人が口を開いた。

「いいだろう、教えてやる。あれは最近開発された擬似召喚獣だ。誰にでも使えて、量産もできるし、もっと強力なものもある」

そこで兵士はにやりと笑うと、その足元の地面がいきなり盛り上がった。

次の瞬間、なにか巨大なエイのようなものが兵士を乗せて現れ、急上昇していった。オーゲンとタマキはそれを見上げ、特に追おうとはしなかった。

「いいのか、このまま逃がして」

タマキが聞くとオーゲンは首を立てに振った。

「ああ、聞きたいことは聞けた。それに、そろそろこの集落からも離れようと思っていたところだ。奴等に追われることになったとしても問題はない」

「なるほどな。それは俺も同じだ」

二人は顔を見合わせると、互いに笑った。

翌朝、タマキとオーゲンは朝食をとっていた。

「それにしても、まさか素手で武装した兵士を倒すとはな。よく鎧の上から打撃を効かせられるものだ」

「まあ、俺の打撃はちょっと特別なんだよ。それよりお前はこれからどうするんだ？」

「そうだな、あの兵士が言っていたことが気になるから、少し調べてみようと思っている。そっちはどうするつもりだ」

「俺は予定通り近くの町だな。まあ災厄の瘴気というのには興味があるから、俺も調べてみようと思ってるけどな」

「そうか、どうせなら一緒に行かせてもらおう」

「一緒にか。まあ旅は道連れって言うしな、俺もそのほうが助かる。よろしくな、オーゲン」

タマキが手を差し出すと、オーゲンはそれを力強く握った。

「面白いことになりそうだ」

「俺もそう思うよ」

それから二人は出発の準備をして、族長のもとに向かった。

「もう出発するのかい？」

「やっぱりお見通しか。そうだ、俺はタマキと一緒にいく。それと、一つ聞きたいことがあるんだが」

「災厄のしるしのことだね。なに、それはそのうち現れるさ。あんた達の前にね」

それだけ言って族長はにやりと不気味に笑った。オーゲンは軽く首をかしげてからそれに背を向けた。

「楽しみにしてる。あんた達も達者でな」

それからオーゲンはテントを出て行って、タマキと族長がその場に残された。

「行かないのかい？」

「いや、一つ聞いてみたいことがあるんだ。災厄のしるしってというのは、どんな力とつながっているんだ」

「この世界を統べることができるものさ」

タマキはその答えを聞いてからすぐに族長に背を向けた。

「本当に短い間だったけどありがとさん」

「なに、いいものを見せてもらったからね。それと、色々と気をつけるんだね、だけど、あの男は信用していいよ」

「俺もそう思った」

そう言ってタマキはテントから出て行った。

それからほとんど時間もおかず、二人は集落から出て行っていた。馬に荷物を乗せてのんびり歩いている。

「この調子だとどれくらいで町に着くんだ」

「昼には着くはずだ。何もなければな」

「まあ、のんびり行きたいな」

その言葉通り、二人はのんびりと歩き、時たま行商人や旅人、巡回する兵士等とすれ違ったりもした。

「平和に見えるな」

「まあな。街道はさっきみたいな見回りもいるし、日中は大体安全だ。とは言っても、獣や盗賊なんかが出ることもあるけどな」

「盗賊団とか、いるのか」

「まあそれなりに。この間依頼で小さいのを一つ潰したんだが、ああいう連中はそれでもまた出てくるだろうよ」

「それは、これから行く町でやったのか？」

「ああ、そうだ。だから宿代は心配なくていいぞ。報酬は大したことなかったが、いつでもただで泊まれるところなら確保してある」

「それは気前がいいな」

「向こうは俺が頻繁に来るとは思ってないだろ。それに、用心棒をただで使えると考えりゃ安いもんだ」

「なるほど、そりゃそうだ」

それからさらに歩き、ちょうど昼頃に二人は町に到着していた。町は小さいながらも壁で囲まれていて、門には警備兵も立っている。だが、それはオーゲンの顔を知っていたようで、あっさり町に入ることができた。

「さて、とりあえず宿に行くか。満室ってことはないだろうけどな」

というわけでタマキはオーゲンの後について宿に向かう。その宿はそれなりに大きく、中級と言える感じだった。オーゲンがドアを開けて中に入ると、そこは酒場のようになっていて、奥のカウンターにここの主人らしき中年の女がいた。

「あら、また来たのかい」

中年の女はオーゲンの姿を認めるとそう言った。それからタマキに視線を向ける。

「あんたに連れがいるとは珍しいね」

「まあな。それより、二人ぶんの部屋を用意できるか」

「あんたの頼みなら用意してやるよ。名前はなんだい？」

「タマキだ。よろしく」

「そうかい。まあオーゲンの連れなら大丈夫だろう」

宿の主人はそう言って鍵を放り投げ、オーゲンがそれをつかんだ。

「部屋は三階だ。一番奥の部屋だよ」

「ありがとうな」

それから二人は言われた部屋に行って荷物を降ろした。タマキはその室内、ベッドが二つに小さなテーブルとしっかりした椅子、それなりに綺麗にされているのを見回した。

「けっこういい部屋だな。これがただっていうことはあんたが潰した盗賊団っていうのはけっこうなものだったんじゃないか」

「まあ普通ならな」

そう言ってオーゲンが椅子に座ると、タマキもその向かい側の椅子に座る。

「俺が相手にしたのは召喚獣を使う五人組だった。強盗をやってて、この辺りを荒らしに来た頃に、ちょうど俺もこの町にいたんだ」

「それで、困った住民から依頼を受けたのか」

「すぐになってわけでもなかったけどな。ただ最初は町の外だったのが、だんだん町中にも連中が出るようになってきた。俺はあまり興味もなかったし、警備兵の仕事だと思ってたから別に手を出さなかったんだが、さっきのばあさんから頼まれてな。腕試しと思って、連中の討伐を引き受けることにしたんだ」

「それから、あっさり終わったのか」

「まあ、五人のうち三人が召喚獣を使ってたから、いい運動にはなったな」

「どんな召喚獣だったんだ」

「そうだな簡単に説明すると、でかい鳥と狼、それと熊みたいのだったな。名前は忘れたが、まあ俺のシルバーファンクの敵じゃなかったのは間違いない。召喚獣さえ倒せばあとは町の警備兵でなんとかなったな」

「なるほどな。それでこの宿に無料で泊まれるようになったわけか」

「そういうことだ。もしかしたら、また何か話があるかもな。それよりタマキ、お前はこれからどうするんだ？」

「今日のはんびり過ごして、明日から災厄の瘧について調べてみるさ。噂ぐらいなら聞けるかもしれないし」

「そうか、じゃあ俺は少し出かけてくる。鍵は預けておこう」

「俺も出かけるかもしれないぞ」

「鍵ならもう一つ貰っておくから大丈夫だ。また夜にな」

「ああ」

オーゲンは部屋を出て行き、タマキは一人になった。それからタマキは首からさげているアミュレットに手を触れた。

「サモン、災厄の瘧っていうの、お前はと思う」

「わからんな。だが、よほど大きな力なのだろう。それより、なぜ昨日は魔法をほとんど使わなかったのだ」

「こっちではばれない程度にしておこうと思ってな。俺はあくまでも旅をしてる、腕っ節の強い召喚獣使いだ」

「ふん、まあそれもよかろう。だが、我はあの身体で使えるだけの力を使うぞ」

「まあ、あれで使える力なら不安定な次元っていうやつでも大丈夫みたいだからな。でもまあ、ごり押しっていうのは難しそうだ」

結局その日は何事も起こらず、翌日。タマキは一人で町の外に出ていた。

「いい天気だな」

タマキはつぶやきながら、町から少し離れたところにある小さな山に登っていた。その山は大した高さではなかったが、木々はよく育っていて、生き物の雰囲気も豊富だった。

「こんなところで何をするつもりだ」

「いや、なんとなく。まあ、災厄の瘧っていうのを持ってる奴は追われてるみたいだから、素直に町とかには出てこないだろ」

「そうかもしれんな」

そんな調子でたまにサモンと会話しながら、タマキはほぼピクニックをしていたが、あるところで突然立ち止まった。

「どうした」

「近くに妙な気配があるな。行ってみるか」

タマキは方向転換して、早足で歩き出した。しばらく歩くと、木に寄りかかって座り込んでいる少女の姿が見えた。タマキはとりあえず黙ってそこに近づいていった、だが。

「うわあああああ！」

あまり大きいとは言えない人影がナイフを持って突進してきた。タマキは落ち着いてナイフを持った手を払ってから、その頭を手で押さえて、人影をよく観察する。それはまだ少年のようで、ちょうど座り込んでいる少女と同じくらいの年齢に見えた。

「とりあえず落ち着こうか」

そう言ってから、タマキは少年の頭から手を放して、今度は両手でその肩をつかんだ。

「なあ」

その言葉とタマキの普通の表情に少年は暴れるのをやめた。

「落ち着いたか？」

タマキが手を放すと、少年はよろよろと少女の側に行き、同じように座り込んでしまった。

「さて、お前達は何なのか、聞かせてもらおうかな」

そう言いながら、タマキは二人の前でしゃがんで視線を合わせた。少女は長い前髪の間からその姿を眺めているが、特に何の反応も示さない。少年は一つ息を吐き出してから口を開く。

「それより、あなたは？」

「俺はただの流れ者だよ。まあ、お前達がなんであっても特に何かするってことはないさ。だから安心していい」

少年はしばらくその言葉を咀嚼するように、黙ってうつむいていたが、数秒後、おもむろに顔を上げた。

「信じていいんですか」

「まあ、それはそっちで決めてくれ。俺は俺でやりたいようにやるだけだからな」

その言葉に再び少年は沈黙した。そして、今度は数分してから口を開いた。

「本当に信じていいんですか？」

「言っただろ、そうするかどうかはお前達次第だ」

「それなら」

今まで一言も発しなかった少女がそう言っていきなり立ち上がった。そしてその身体から黒い何かが立ち上る。

「私を止めてみせて」

「駄目だ！」

少年が制止しようとしたが、少女から発せられた力で弾き飛ばされてしまう。そして、少女から立ち上る黒い何かは、巨大な竜のようなシルエットをとった。

「さっきの気配はこいつか！」

タマキはそのシルエットから衝撃を受けながら大きく後ろに飛び退くと、右手を掲げた。

「今ここに混沌と破滅の使者を呼び起こす、現れろ！ ドゥームデーモン！」

そして手を地面に叩きつけると同時に爆発が起こり、その中から黒づくめの甲冑をまとったものが現れた。

「気合いれてけよ！」

タマキは自分のマントを外すと、それをドゥームデーモンに向かって放り投げる。ドゥームデーモンはそれをつかむと、すぐに装着した。

そこに間髪入れずに、少女から出た黒い竜のシルエットがその口から黒い炎を噴射した。それはドゥームデーモンが展開した魔法の盾で防ぐ。

「あいつを包むんだ！ 長くは続かない」

タマキの言葉に応じ、ドゥームデーモンは魔法の盾をさらに大きく展開していき、黒い竜のシルエットを包み込むような形に変化していった。

そして、ドーム状になったその中で、しばらくの間黒い炎が吹き荒れていたが、それは徐々に勢いが弱まり、黒い竜のシルエットも消えてしまった。

少女はその場に崩れ落ち、少年がその身体を慌てて支えた。タマキはドゥームデーモンに手を伸ばしてマントを受け取ると、それを手に持ったまま二人に近づいていく。

タマキがその二人の近くに立った頃には、ドーム状になっていた魔法の盾もドゥームデーモンも消えていた。

「その子は大丈夫なのか」

タマキが聞くと、少年は恐る恐るという様子でタマキのことを見上げる。

「なにも、しないんですか？」

「まあ、少し驚いたけどな。それより場所を変えるぞ、さっきので誰か来るだろうからな」

それからタマキは少年が支えている少女の身体を持ち上げた。

「とりあえず行くぞ」

そのまま三人は数十分歩いた。山から下りた林の中でタマキは少女を降ろし、木に寄りかからせる。それから腰につけていた水筒を少年に差し出した。

「座って飲むといい」

そう言ってからタマキは少女の向かい側の地面に座った。少年もすぐに少女の隣に座って、水筒の水で口を潤した。

「ありがとうございます」

少年は水筒をタマキに返そうとしたが、タマキはそれを手で断ると少女に視線を向けた。

「その子が目を覚ましたら飲ませてやれよ。それより、お前達のことを聞かせてもらおうか。」

まあ、あんなものを見せられたら予想はついてるけどな」

少年はしばらく黙っていたが、何かを決意したような表情になった。それから少女の前髪を手で上げて、その額を露出させた。

そこには翼を広げた竜のような形の痣があった。

「やっぱりそうか、いかにも不完全であれだけの力だもんな。でも、よく俺に言う気になったじ

やないか」

「あなたが彼女を売り飛ばしたりするような人には見えないので」

「そうか。それより、そろそろ自己紹介でもしようじゃないか。俺はタマキ、たんなる流れ者だ」

「僕はヒスク、彼女はリシカです。元々はフラウト皇国の田舎に住んでいたんですけど、リシカの額にこれが、災厄の痣が浮かんで来てからは、周り全部が変わってしまって」

「それで、二人で放浪してるってわけか。その様子じゃ、よほど苦労したらしいな」

「はい」

ヒスクはうなずいて沈黙した。

「話すぎでしょ」

いつの、間にか目を覚ましていたリシカが小声で言った。

「リシカ！ 大丈夫？」

ヒスクがすぐに移動して、リシカの肩に手を置く。リシカはうなずいてから、タマキを見た。

「それで、あたしをどうする気なの」

「どうもしないさ。まあとりあえず、まともなところで眠れるようにしてやるかな」

タマキは立ち上がり、リシカの目の前まで来てからしゃがむと、その額に手を置いた。リシカはあきらめたような様子でそれを受け入れている。数秒後、タマキは手を離して、元の位置に戻った。

「これは！？」

ヒスクは驚きの声をあげ、リシカの前髪を持ち上げてその額をよく見る。そこにはさっきまであったはずの竜の形の痣が全く見当たらなかった。

「なにをしたんですか？」

「簡単なおまじないみたいなもんだ。まあ数日は大丈夫だから安心していい。それより、ちょっとナイフかなんかを貸してくれ」

「あ、はい」

ヒスクが自分のナイフを差し出すと、タマキはそれを受け取ってリシカの横にまわった。

「この長い髪を切ってさっぱりしようか」

タマキは器用にリシカの長すぎる髪を切っていった。リシカはされるがままにしていたが、その表情はいままでよりも少しだけ明るくなっているようにも見えた。

変わり者

タマキは二人の少年少女を連れて町に戻ってきていた。そして宿の部屋に戻るとそこにはオーゲンがいた。

「ん、そいつらはなんだ？」

「そこで拾ってきたんだ。ちょっと変わった連中でな」

「変わってるか、どう変わってるんだ？」

「まあとりあえず、リシカとヒスクだ」

タマキが二人を紹介すると、その二人は軽く頭を下げた。オーゲンはそれを見て、軽く首をかしげてみせる。

「リシカは災厄の痣を持ってるんだよ」

タマキはさらっと言ったので、リシカとヒスクは止める間もなかった。だが、オーゲンはあまり大きく反応はせずに、少し目を細めてその二人を見つめた。

「どこで拾ってきたんだ？」

「ちょっとそこらへんでな。で、しばらく面倒を見ようと思うんだけど」

「それは面白い」

オーゲンはにやりと笑うと、リシカとヒスクの前に立った。そして、ヒスクの目線をとらえる。

「ヒスクとか言ったか、お前はそっちの子とずっと一緒だったのか」

「そうですよ。それがどうかしたんですか」

「よし、ちょっとついて来い」

そう言ってオーゲンはヒスクを引っ張って外に向かっていった。

「まずは装備からだ。ああ、俺はオーゲンだ」

ヒスクに何も言わずに、オーゲンは外に出て行った。

「やっぱり心配なかったな、とりあえず座ろうか」

タマキはそう言ってから、リシカに向けて椅子を押し出した。リシカが椅子に座るのを確認してから自分はベッドに座り、しばらくの間二人は無言ですごした。

「あたしはこれからどうするの？」

リシカがそう言うと、タマキは天井を見上げた。

「そうだな、リシカ、お前は力の発動はできるようだが、まだ自分の力をコントロールできてないらしいな」

「そう、それにたまに暴発もするし」

「今まではどうやっておさえてきたんだ？」

「とにかく人気の無いところを通って、暴発したときはおさまるまで待っていただけ。最初はヒスクが止めようとしてたんだけど、いつも怪我をするだけで」

「あれを止めようとしてよく怪我だけですんでたな」

「ヒスクを吹き飛ばして遠ざけておくくらいはできるようになったから。でも、そのたびに追手に見つかってとにかく逃げるしかなかった。もし、ちゃんとこの力を抑えられたら、そんなことにはならなかったのに」

「なるほどな」

それからまた二人の間に沈黙が流れたが、おもむろにタマキが立ち上がった。

「それなら、その力を制御できるように色々やってみてもいいだろ。俺はそういうことはちょっ

と得意だからな」

「でも、そんなことしたって、追われることには変わらないし」

「どうかな、お前はまだ自分の力をわかってないだろ。あの竜の影はあんな状態でもかなりの力だったんだ。もし制御できれば、どれだけの力が出せるかな。それこそ、誰も手が出せないほどのものかもしれない」

タマキの言葉にリシカはどう答えていいのかわからないようだった。

「まあ、やってみればわかることもあるさ。なによりも俺が見てみたいしな。だから俺だって本気でやるぞ、明日からだ」

「は、はい」

リシカはタマキの堂々とした物言いに押し切られる感じで背筋を伸ばして返事をした。タマキはそれを見て満足そうに笑ってから、立ち上がった。

「お前達用の部屋をとってくるから、少し待っててくれ」

一方その頃、ヒスクはオーゲンに連れられて質屋に来ていた。店内には家具などをはじめとして武器防具類も色々置かれている。

「好きな武器を選んでいいぞ」

オーゲンはそう言って小物が置かれている場所に自分だけ移動してしまった。残されたヒスクは戸惑いながらも並べられている武器に向き合う。

剣や斧、メイスや槍など様々なものが並べられていて、ヒスクは次々と目移りしながらもそのいくつかに手を伸ばし、実際に持ってみたりした。

そのうちオーゲンが戻ってきてヒスクの背中を叩いた。

「どうだ、決まったか？」

「いえ、ちゃんとした武器は使ったことがなくて」

「それなら、とりあえず使いたいものを選べばいい」

そう言われてヒスクは手槍を手にとった。

「決まったな。それとそこの短い剣もあったほうがいいだろ」

そして、店を出たヒスクは手槍と短い剣を装備していた。それ以外にも古着を布に包んでかっいでいる。

「あの、どうしてここまでしてくれるんですか？ さっき会ったばかりなのに」

「お前達が面白そうだからだな。それに、お前は武器の一つも使えそうにないのにあの子を守ってきたんだろ、そんなことができる奴なら大物になる。楽しみじゃないか」

「僕はそんなんじゃ。逃げ回ってただけです」

「逃げるっていうのは立派な戦い方の一つだ。俺もお前達を追っている連中には遭遇したが、あんな連中から逃げのびるっていうのは才能がなけりゃできん」

「そうなんですか」

「間違いない。しかし、タマキに会ってから間もないのに、面白そうなことばかり起こるな。まるであいつが色々引き寄せてるみたいだ」

「あの人とは長い付き合いじゃないんですか？」

「いいや、まだ会ってから数日だ。でも、あいつは不思議な奴だし、なんとなく信じられそうな雰囲気があるんだよな」

「わかる気がします。でもすごい人ですね、あの人は。それにオーゲンさん、あなたも。リシカのことを聞いても少しも驚かないなんて」

「そうか？ まあとにかくお前のことはこれから俺が鍛えてやるからな。楽しみにしておけ」

それからその日の夜。リシカとヒスクは久しぶりにまともなベッドに横になっていた。

「リシカ、まだ起きてる？」

「起きてるけど」

「何か、変わった人達だね」

「本当。タマキっていう人はあたしが力をちゃんと使えるようにするつもりらしいし」

「僕のほうはあのオーゲンっていう人に武器の使い方を教えてもらうんだ。僕達のことを知った上でこんなに親切してくれるなんて、初めてだよ」

「別にそういうのじゃなくて、あの二人はきっとこれが楽しいんでしょ。ただの変人よ」

「あははっ！ それはそうかも」

そこで会話は終わり、またしばらくして、リシカが口を開いた。

「じゃあ、おやすみ」

「おやすみ」

それからリシカとヒスクは、それぞれタマキとオーゲンに引きずりまわされることになった。まずヒスクはオーゲンに連れられて町の外に出て、武器の使い方を教えられていた。

「どうした！ その程度の踏み込みじゃかすりもしないぞ！」

オーゲンはヒスクの槍の一撃を軽くいなして叱咤する。

「はい！」

ヒスクは槍を構えなおして、さらに激しく攻撃を繰り返した。だが、それもオーゲンの剣で全て弾かれてしまう。

「そんなものか、もっと体全部を使うんだ！」

「わかりました！」

それからはヒスクは大きく動いて、できる限り様々な方向から槍を突き出した。だが、オーゲンはその全てを身のこなしと一本の剣で捌いて見せた。そして、ヒスクの腹に一発前蹴りをくらわす。

「ぐっ！」

ヒスクはその衝撃に飛ばされると、うずくまってしまった。オーゲンは剣を肩にかつぐようにするとヒスクの腕をつかんで立ち上がらせた。

「少し休むか。まあお前もだいぶ形になってきたしな」

オーゲンは剣を鞘に収めると、適当な場所に腰を下ろした。ヒスクも槍を置いてその側に座り込んだ。

「でも、オーゲンさんにはかすりもしません」

「こう見えても俺は強くてな。そこらの傭兵やら兵士やらなんかなら片手で何人でも相手してやれる。まあお前はとりあえず、とにかく一撃食らわして、相手をひるませてから逃げるくらいは出来るようになるのが目標だ」

「はい」

「逃げるなら見つからないのが一番だが、どうしてもそうは行かない時もある。それに、奇襲をかけたほうが都合がいいことも多い」

「奇襲ですか」

「そうだ、相手の数が多い場合は特にな。逃げてるだけじゃそのうち追い詰められる」

ヒスクはそれに黙ってうなずいた。

一方タマキとリシカは人気のない林の中にいた。そこでリシカは目を閉じて地面に座っていた。

「自分の力を怖がるんじゃない。落ち着いてその力をしっかりと把握するんだ」

タマキはそう言ったが、それから数秒後、リシカは息を一気に吐き出してその場に両手をついてしまった。

「どうだ？」

タマキの質問に、リシカは黙って首を横に振った。

「なにもわからないのか、例えば体の中に何か力を感じるとか、どこかにあの竜みみたいな気配を感じるとか」

「それがよくわからなくて」

「痣が現れてから変わったことを注意して探してみるんだ。あれはお前の中にあるような感じがしたからな、必ず何かあるはずだ」

「あたしの中の力」

「そうだ。一応自分で力を発動できるんだから、わからないってことはないはずなんだよ。まあいきなりそう言っても難しいのもわかるけど」

「わかるなら苦労しないけど」

「じゃあ少し練習してみるか。ちょっと待てよ」

タマキが指を鳴らすと、一枚のカードがその手の中にいきなり現れた。リシカはそれに驚いたようだったが、何も言わずカードだけを見ている。

「ほら、とりあえずこれを持ってみろ」

タマキはカードをリシカに手渡した。

「発動って言ってみろ。その感覚が役に立つかもしれない」

「発動」

リシカの言葉と同時に、カードが光って消えていった。

「自分の体の中に力が巡るのがわかるか？」

タマキの問いにリシカはうなずいた。

「何か、変な力が体に溢れてる感じがする」

「その感じだ。そうやって自分の中の力を感じ取るんだ」

リシカは目を閉じて数秒間じっとした。それから目を開けると、意外そうな表情を浮かべる。

「わかる、あたしの中にある力が。これが、あの竜？」

「初めての感覚ならたぶんそうだな。それを注意して探ってみるんだ」

リシカは再び目を閉じて、深く内省し始めた。数分後、その目が開かれた。

「なんとなくわかってきた気がする。それで、これをどうすればいいの」

「力を絞って出すようにできればいいかもな。昨日みたいなやりかたじゃ制御できないし、不安定ですぐに消える。まあ慎重に、まずはイメージだけでやってみるんだ」

「イメージと言われても」

「そうだな、雑巾でも絞るのを想像してみたらどうだ。それで指先一本ぶんだけ、力を取り出すイメージだ」

「指先一本ね」

リシカは右手を目の前で広げ、その人差し指をじっと見た。そのまま数分間経つと、その人差し指の先に黒いなにかが現れた。

「そのまま、そこで維持するんだ」

「くっ」

リシカは顔をしかめて歯を食いしばった。だが、その黒いものは数秒で消えてしまった。それからリシカは多少青い顔になって肩を落とした。

「できたじゃないか」

タマキはそう言って水筒をリシカに差し出した。リシカはそれを受け取ると、勢い良く水を飲み、大きなため息をついた。

「でもこんな程度じゃ何の役にも立たない」

「最初の一步っていうやつだな。そのうちもっとうまくできるようになるさ」

「そのうちじゃ、駄目」

リシカは顔を下に向けてつぶやく。

「焦るのは禁物だぞ、暴走したところで俺がまた止められる保証もないんだからな。でも、いつ暴走するかはわからないから、うまく制御できるように、多少は焦らないと駄目か」

「一体どっちなの！」

「両方だ。まあ、そのためにはちゃんとした目標があったほうがいいな。何かないのか？」

「別に、何も」

リシカは顔を横に向けた。

「それじゃ、例えばヒスクのためとかか。お前にとってはずっと唯一の味方だったんだろ。あいつを守るために、そのためだけにその力を使えるようになればいい」

それを聞いたリシカは正面からタマキの顔を見た。その表情は冗談を言っているようには見えなかった。

「それで、いいの？」

「いいんだよ。リシカ、その力はお前のものなんだ。別に無理に善いことをしなくちゃいけないってわけじゃないさ、邪悪なことでなければな」

タマキの言葉に、リシカは数秒間うつむいてから、顔を上げる。そこにあったのは、何かを少しだけ決心したような、小さくとも強い芯が感じられる引き締まった顔だった。タマキはそれを見てうなずくと、一発手を叩く。

「さて、続けるぞ」

一方その頃、その町から遠く離れた上空に真紅の巨体を持つ竜の姿があった。その背中には豪華な服を身にまとい、竜の背中にまたがる一人の若い男の姿と、それにしがみつく冴えない雰囲気がある男装をした若い女の姿がある。

「殿下、もう少しゆっくりお願いします！」

「何を言う、それでは目当てのものを逃してしまうぞ！ さあ、行け！ レッドバーストドラゴン！」

男の声に真紅の竜はよりいっそう速度を上げる。

「待っている、強敵よ！」

「殿下あああああ」

タマキがリシカとヒスクと出会って数日が経っていた。ヒスクは日に日にその技量を順調に伸ばしていた。だが、リシカのほうはそれほど順調ではなかった。

「ああ！　こんなじゃ！」

「落ち着けて、焦ったところでうまくいくわけじゃない」

いらついている様子のリシカにタマキはのんびりとした様子で声をかける。だが、リシカはおさまらない様子だった。

「でもこれじゃ」

「一度も暴走させてないんだから大したもんだろ。それだけでも進歩してるさ」

そう言われて、リシカは少し落ち着いたようだった。だが次の瞬間、タマキは上空を見上げた。

「何か来るな」

「え？」

リシカがつぶやいて上空を見ると、何か巨大なものがそこを通過するのが見えた。それはよく見えなかったが赤い、竜のように見えた。

「なんなんだ、あれ？」

タマキの言葉に、リシカは上空を見たまま口を開く。

「聞いたことがあるんだけど、フラウト皇国の王子にもものすごい召喚獣を使うのがあるって」

「へえ、じゃああれはその王子かもしれないのか。ひょっとして、俺達目当てかもな」

「そんな暢気なこと言われるわけ」

「安心しろ、多分そいつの目当ては俺とオーゲンだ。お前とヒスクはおとなしくしてれば問題ないだろ。まあ俺達が挨拶してこないと駄目か」

それからタマキはオーゲンと合流してから、リシカとヒスクを宿に置いて町を出た。

「しかし楽しみだな。あの兵士達のおかげでずいぶんでかいもんが釣れた」

「その王子っていうのはそんなにすごいのか」

「ああ、ほとんど伝説みたいになってる奴だ。恐ろしく強い赤い竜を使うという話だけが広がってる」

「そいつには、あの場所に行けば会えるのか」

「まあ報告を聞いて来たんだろうから、俺達が兵士と戦った場所だろうな」

「そこに着くまであちらさんは待っててくれるのか？」

「それなら心配するな」

オーゲンは右手を上げた。

「鋭き牙を持つ獣よ、その輝きで闇を照らし出すがいい！　駆け抜けろ！　シルバーファングタイガー！」

竜巻と共に白虎が現れ、オーゲンはその背によじ登る。タマキもその後ろにまたがった。

「行くぞ！　しっかりつかまってる！」

シルバーファングタイガーは駆け出し、わずかな時間で二人の人影が見えてきた。オーゲンはその前で止まり、シルバーファングタイガーの背中から飛び降りた。タマキも同じように飛び降りる。

「あんたが王子様か？」

見るからに普通ではない、豪華な服とマントをまとい、身の丈ほどもある大剣を背負っている

その大男は、オーゲンとそれから白虎を見ると、満面の笑みを浮かべた。

「どうやら、報告にあったのは貴様か。なるほど、貴様もその召喚獣も中々のものだ」

「俺の名はオーゲン。こいつは俺の相棒、シルバーファングタイガーだ。あんたの名乗りも聞かせてもらおうか」

「よかろう」

男はマントをひるがえすと、大剣を抜いてそれを両手で逆手に持った。

「真紅の翼の我が従僕よ、その力でこの世の全てを爆砕せよ！ 爆ぜろ！ レッドバーストドラゴン！」

大剣が地面に突き刺さると同時に、男の背後で爆発が起こり、そこから巨大な赤い竜が姿を現した。

「よく聞け！ 我が名はベンハルト！ フラウト皇国第三王子だ！」

そしてオーゲンとベンハルトの二人とその召喚獣は睨み合った。タマキはその緊迫した空気の中を普通に歩き、もう一人の人影、男装をした女性の側に到達していた。

「もしもし」

「は！ はい！」

タマキに驚いた女性は妙にかしこまった様子でタマキに頭を下げた。

「ああ、別にそう困らなくてもいい。俺はタマキだ、あんたは？」

「はい、私はフローニカ。ベンハルト様にお仕えしています。って、なんですかあなたは！」

「いや、とりあえずあそこのオーゲンの連れだけど。別にあんたをどうこうしようってつもりはないから安心していい。今はじっくり観戦しようじゃないか」

「え、ええ。そうですね、殿下も楽しそうですし」

フローニカはタマキに押し切られる形で納得すると、視線をオーゲンとベンハルトに向けた。その二人はどちらも楽しそうな表情を浮かべている。

「それが噂の竜か。俺のシルバーファングほどじゃないが、大したもんだな」

「言ってくれるな、確かに前前の虎も大したものだが、我がレッドバーストドラゴンに比べれば見戯にも等しい」

「それがどうか試してみればいい。行け！ シルバーファングタイガー！」

オーゲンの声に応じ、シルバーファングタイガーがレッドバーストドラゴンに飛びかかった。その爪が到達しそうになったが、ドラゴンはそれを防ごうとせずにその体でその一撃を受ける。

「どうした、その程度の攻撃では我がドラゴンには傷一つ付けられんぞ」

「そうじゃないとな。だが、これからだ」

オーゲンはにやりと笑うと、剣を抜いてそれを掲げた。

「シルバーファング、気合を入れていけよ！」

声をかけられたシルバーファングタイガーは一つ咆哮すると、四肢にさらに力を込めた。それに応じるかのように、レッドバーストドラゴンも大地を揺るがすかのような咆哮をあげる。

「今度はこちらから行くぞ！ 羽ばたけ、レッドバーストドラゴン！」

レッドバーストドラゴンは翼を動かし、空高く舞い上がった。そして上空から急降下してシルバーファングタイガーに襲いかかる。

もちろんシルバーファングタイガーもそれをおとなしく待つことはなく、地面を蹴ってそれと激突した。両者が交差すると、そこから衝撃波が発生して二体の獣が位置を入れ替える。そのまま両者は空と大地で円を描くように移動して、ちょうど九十度くらい回った。その瞬間。

「そろそろ決めさせてもらおう！ 行け！ スカーレットバースト！」

空中のレッドバーストドラゴンの口から真紅の炎が勢い良く噴出した。

「迎え撃て！ シルバーファングブラスター！」

シルバーファングタイガーの口からも白く輝く光が撃たれた。その炎と光が激突し、激しい奔流を巻き起こす。

「押せ！ レッドバーストドラゴン！」

「やれ！ シルバーファングタイガー！」

両者の技の激突はさらに激しさを増し、その空間をかき乱していく。タマキとフローニカもその衝撃を受けるが、それはタマキが呼び出していたドゥームデーモンの魔法の盾で防がれていた。

それからさらに二つの衝撃の激突が激しく渦巻き、その場を衝撃と光が覆っていった。

暴走

オーゲンとベンハルトの戦いの衝撃は町にも伝わってきていて、宿のリシカとヒスクは何事かと外に出ていた。町のほかの住人も外に出て空を見ている。

そしてそこからでも空で光が炸裂したのが見え、少し遅れて衝撃が町にも到達しすると、人々は思わず顔を伏せる。

「今のはまさか」

リシカがつぶやくと、ヒスクはうなずいた。

「たぶんタマキさんとオーゲンさんの行った方だ。もしかして」

「戦ってるんじゃないの。やる気満々みたいだったし」

「大丈夫かな、二人ともすごく強いのはわかるけど、相手が相手だし」

「さあ、放っておけばそのうち戻ってくると思うけど」

そう言うときリシカは先に宿に戻っていった。ヒスクはすぐにその後を追わずに空を見上げていたが、すぐにその後を追う。

だがその途中、突然空に黒い雲が広がっていった。それはあっという間に町の上空に広がり、局地的に夕方のような暗さを作り出す。そして、そこから雲を構成する黒いものが一気に町に降り注いできた。

それは地面に到達すると、次第に集まっていき、人間の二倍ほどの大きさの塊になっていった。それはどかそうとしても動かず、町の住民達は困りきっていた。

だが、それだけでは終わらず、その困惑は数十分後には町全体を包むパニックになっていた。黒い塊の中からは雑多な怪物としか言えないものが現れていたからだ。その内容は巨大なサソリやハチ、他にもカエルのようなもの等、サイズからして凶悪そうな生物ばかりだった。

町の警備兵達が走りまわり、なんとかそれに対応を始めたが、到底手は足りず、町の被害もどんどん広がっていく。

「すごいことになってるみたいだよ」

宿の部屋に戻っていたヒスクが外を見ながら言った。リシカもその横に並んで外の様子を見る。

「本当、ここも危ないかもね」

「早くタマキさん達が戻ってきてくれるといいんだけど、あの人たちならこの騒ぎもなんとかしてくれそうだし」

「それまで持ちこたえられるかどうかね。あの外の怪物がいつここに入ってくるかわからないし」

「大丈夫、その時は僕がリシカを守るから」

ヒスクは手槍を持って軽く構えてみせる。

「戦いに飛び出していったりしないでね。いざとなったら別に逃げたっていいんだから」

「まさか、そんなことはしないよ」

町がそういった状況になっている頃、オーゲンとベンハルトはやっと互いの召喚獣を収めていた。

「やるな。我がレッドバーストドラゴンとここまで戦える者は初めてだ」

「ああ、こっちもだ、と言いたいところだが、お前は二人目だ」

「なに？ その一人目というのは何者だ」

「あいつだよ」

オーゲンはフローニカの前に立つタマキを指差した。ベンハルトはタマキとドゥームデーモンのことを一瞥してから口を開く。

「ほう、お前名はなんと言う」

「タマキだ。こっちはドゥームデーモン、召喚獣だ。それより、少しは自分の従者に気を使ったほうがいいと思うけどな」

「おお、そういえばそうだったな。怪我はないかフローニカ？」

「はい、こちらの方に守って頂いたので大丈夫でした」

「そうか、タマキとやら、とりあえず礼を言っておこう」

「まあそれは受け取っておくとして、町のほうがどうも怪しい状況みたいなんだけどな」

タマキが町の方角の空を指差すと、そこには禍々しい暗雲が広がっていた。オーゲンはそれを見て顔をしかめる。

「おいおい、あれはなんだ？ 恐ろしく危険な気配がするぞ」

「フローニカ、ああいった現象に心当たりはないか？」

ベンハルトの問いにフローニカは一步前を出た。

「あのような現象は見たことがありません。何か非常に危険そうですね、興味深いことです」

「そうか、それならば早速行ってみるぞ」

ベンハルトはレッドバーストドラゴンに飛び乗り、近くに来たフローニカを引っ張り上げた。それからタマキとオーゲンをみる。

「お前達も乗っていくがよい。ただし、召喚獣は消しておいてもらうが」

「そりゃ助かる」

タマキがそう言うとドゥームデーモンが消え、オーゲンもそれを見て自分のシルバーファングタイガーを消した。

「さあ、どこにでも乗るが良い！」

タマキとオーゲンはベンハルトとフローニカから少し距離をとった位置に乗った。

「行くぞ！」

レッドバーストドラゴンは力強く羽ばたき、飛び上がると一気に町を目指す。その速度は驚異的で、瞬く間に町の付近まで到着した。

上空から見ただけでも町からは火の手が上がっていて、ただ事ではない様子がうかがえる。ベンハルトは町の近くにドラゴンを着地させた。

「よし、お前は町の上空で待機している」

ベンハルトの言葉に四人を降ろしたレッドバーストドラゴンは再び飛び上がった。

「さて、行くぞ者ども！」

そう高らかに宣言してベンハルトは町に向かって歩き出した。

「おもしろそうだな」

オーゲンはそうつぶやきながらそれに続いた。タマキはその二人を見ながら、フローニカの顔を見た。

「あの王子様はいつもあんな調子なのか？」

「は、はい。でも悪い方ではないですよ」

「それはわかるし、俺もあいつとは気が合いそうだ。まあもう少し周りに気を使ってくれてもよさそうだけどな」

「それはそうなんですけども」

そこで町から轟音が響き、黒い影のようなものが一気に立ち上った。タマキはそれを見ると軽

く額に手を当てた。

「これは急いだほうがよさそうか。あんたはここで待ってたほうがいい」

それだけ言うとタマキは走り出し、前の二人を抜いて町に突入した。そこは巨大な昆虫や良くわからない生物が徘徊したり破壊行為をしたりしていた。

「これはまた、まあ、こいつらの相手は頼むぞ！」

タマキは後ろの二人にそれだけ言うと、適当に怪物を殴ったり蹴ったりしながら走った。そして、泊まっている宿の前まで到着すると、そこには気を失ったリシカとそれを守るようにして、だがどうすればいいのかわからない様子のヒスクがいた。さらに、背後の宿は燃えている。

「大丈夫か」

タマキが声をかけると、ヒスクはタマキの姿を認め、構えていた手槍を引いて安心したような表情を浮かべる。

「タマキさん、良かった」

「何があったんだ」

「それが、僕とリシカは宿でおとなしくしてたんですけど、あの怪物達が宿に乱入してきて、そしたらリシカの中からまたあれが出てきたんです」

明らかにヒスクは動転していたが、タマキは一応状況を理解したらしかった。そしてタマキは上空の黒い影のようなものを見上げる。

「わかった、後からオーゲン達に来るからそれと合流してリシカを守ってやれ。あっちは俺がなんとかするから」

「はい、お願いします」

タマキはその返事にうなずいてから、上空の黒い影目指して歩き出した。

「さて、あれはちょっと手強そうだな」

「ああ、前回よりも遥かに強い力のようだ。今出せる程度の力でどうになるかな？」

「大丈夫だろ、分身の力を限界まで使えば押さえ込めないこともないはずだ。まあ頑張ってくれよ」

「お前は何かしないつもりか。まあそれもよからう」

「色々あるからな、それじゃ、頼むぞ」

タマキが指を鳴らすと、ドゥームデーモンとしての分身が現れた。

「行け！ ドゥームデーモン！」

ドゥームデーモンは無言で上空の影、さっきまでよりも竜のような形をしっかりととっているものに向かって上昇していった。それを見送ったタマキは周囲を見回して拳を打ち合わせる。

「さて、あっちはとりあえずあいつにまかせて、俺はこっちをやっとくか。おい、そこにいるんだろ、クリーチャーさんよ」

その声に応じたように、人間ほどのサイズのカマキリが姿を現した。タマキは地面を蹴ると、一瞬でそれとの間合いを詰める。

「悪いな」

タマキの拳がカマキリの頭部を一撃で吹き飛ばした。すると、倒れたその生物の残骸は霧となって散ってしまう。

「こいつはなんだ？」

タマキはその霧となったものを調べようとしたが、すぐに背後からまた違う生物、今度は巨大なザリガニのようなものが現れた。

「全く、なんかの博覧会かね」

しかし、それは背後からの大剣の一撃で真っ二つにされた。そしてそれを握ったベンハルトが姿を現す。

「タマキ、あの空の影はなんだ？」

「さあな、とにかく今はあっちの影のほうをなんとかするつもりだ。あんたはあの竜で雲のほうを頼むよ」

「ほう、まあ良からう。しかし、地上の化物どもはどうするつもりだ？」

「それはまあ、一匹ずつ駆除していけばいいだろ。俺達二人でな」

それを聞いてベンハルトはにやりと笑う。

「いい度胸だ。そういうことならばつきあってやろう」

それからベンハルトは剣を天に突き上げた。

「レッドバーストドラゴン！ 天にある暗雲を蹴散らすがいい！」

その声に応じ、空から咆哮が聞こえてきた。

「それでは、お前の力を見せてもらおう」

「その暇があったらな」

さらに姿を現した巨大生物にタマキとベンハルトは対峙した。

そして上空ではドゥームデーモンが黒い竜の影と対峙していた。

「確かに前回よりも強い力のようだな」

次の瞬間、竜の影は黒い火の玉を吐き出していた。ドゥームデーモンは魔法の盾を展開してそれを受け止めるが、四散させることはできずに、勢いを逸らして空に飛ばすのが精一杯だった。

「この体ではこの程度か。だがこれもおもしろい」

それからドゥームデーモンは手のひらに火の玉を発生させると、それを竜の影に向かって投げつけた。それは竜の影に直撃したが、全く動かすことはできない。

「やはり駄目か。まあいい」

ドゥームデーモンは高速で移動し、竜の影の上に出る。そしてそこから細かい氷の牙を降らせた。ダメージは与えられないようだが、竜の影の注意は上空に向けられる。そして、その口にあたる場所から黒い炎が噴出した。

だがドゥームデーモンは高速飛行してそれをうまくさけながら、徐々に竜の影との距離を縮めていく。そして、その頭部にまで到達すると、そこに右手を当てた。

「十倍、か？」

その手から強力な爆発が起こり、さすがに竜の影もいくらか後退した。ドゥームデーモンはさらに間髪入れずにその胴体に蹴りを叩き込み、一気に距離をとる。

竜の影はすぐに体勢を立て直すと、咆哮をあげて連続で黒い火の玉を飛ばした。ドゥームデーモンはそれを回避するが、小さいが速度の速い一発が回避できないタイミングで迫ってきた。

ドゥームデーモンは魔法の盾でそれを逸らすが、その火の玉はさらに連発で放たれる。

「力が増しているのか？」

その火の玉をさばきながら、ドゥームデーモンは余裕が持てる距離にまで後退した。

「このままではどうにもならんな。我が真の力が使えれば簡単なのだが」

そう言っている間にも、竜の影からの攻撃は激しさを増し、どんどん余裕はなくなっていく。

「仕方がない。この体ではあまり長い間は持たないが」

その言葉と同時に、漆黒の甲冑が弾け飛んだ。そして兜の一部だけが仮面のように残り、後はタマキとほぼ同じ姿となった。

「少しだが、我が力見せてやろう」

ドゥームデーモンを中心に力の波動が広がる。次の瞬間には、その体は竜の影の攻撃を潜り抜けてその背後に回っていた。

「静まるがいい」

その左手に雷をまとわせ、竜の影翼の付け根の中心に叩きつけた。激しい雷光が発生し、竜の影はまるで苦悶しているかのようにその身を仰け反らせる。

ドゥームデーモンはさらに力を込め、さらに激しい雷光を巻き起こした。竜の影は徐々に、末端から霧のようになって消え始め、数十秒後には体の全てが霧散していた。

「終わりか。だが、この体も限界だな」

それと同じようにドゥームデーモンの体も消え始める。

「これがこれ以上の力を出したら、この体では止めるのは難しだろう」

そして、ドゥームデーモンの体は消えた。

下で一段落したタマキはその様子を見上げて、一つため息をついた。

「なんとかあったか。あとはあの雲だな」

レッドバーストドラゴンが暴れて雲を散らして、多少は小さくなっているようにも見えたが、町の上空の暗雲は依然としてそこにあった。

「我がレッドバーストドラゴンでも消せないとは、一体なんだと言うんだ、あの奇妙な雲は！？」

ベンハルトが吼える。

「さあな、でもあの妙な生物はもう現れなくなってるようだし、ひとまずは大丈夫になったんじ

やないのか」

「うむ、確かにそれはそうだな。ここは一度状況を確認すべきか。戻れ、レッドバースト！」

ベンハルトの声に応じて一つ声を上げると、レッドバーストドラゴンはその姿を消した。

「タマキよ、この場を治めるために、貴様にも協力してもらおう」

「ああ、別にかまわないぜ。まずはオーゲン達と合流だな」

「うむ、よかろう。フローニカならば何か考えがあるかもしれん」

「随分信頼してるんだな」

「あいつは器量も要領も良くはないが、頭だけはいい。だからいつでも連れてきているのだ」

「へえ」

タマキとベンハルトが燃え落ちた宿の残骸の前に戻ると、ちょうどオーゲンだけがいた。「戻ってきたか、あの二人と、そっちの連れは町の外に出しておいたぞ。今は町よりも外のほうが安全そうだからな」

「そうか、ならばすぐに案内を頼むぞ」

「ああ、こっちだ」

三人は町を出て、そこから少し離れた場所に到着した。そこにはまだ目を覚ましていないリシカと、それを介抱しているヒスクとフローニカの姿があった。そしてフローニカは顔を上げる。

「殿下、もう町は大丈夫なのですか？」

「とりあえずはだ。今は次の対策を練らねばならん」

それからベンハルトは町の上空を見上げる。

「あれは力押しでどうにかなるものではないようだ。お前の考えを聞かせてもらおう」

「少し情報が少ないですが、あれはおそらく災いを運ぶ風と関係していると思われます」

「災いを運ぶ風？」

タマキが首をかしげると、フローニカはうなずいて続ける。

「はい。伝承によれば、その風は災いを運び、大地を荒れ果てさせたといえます。そして、それを止めたのはより大きな災厄の力であったと伝えられています」

「そのより大きな力が災厄の痣っていうやつなのか」

タマキが口を挟むと、フローニカはうなずいた。

「そうだと考えられています」

「なるほどな。まあどっかの国としては予期していたことの対策と、単純に力を手に入れるためにその痣の持ち主を探してたってわけだ」

「そうだ。それならば我がレッドバーストドラゴンにも引けをとらないだろうからな。存分に楽しめる」

ベンハルトは満面の笑顔を浮かべた。

「お前はそんな理由か」

オーゲンは多少呆れたような表情で言った。それからタマキはリシカの隣に膝をついてその額に手を当てる。

「悪いけど、話はそっちで進めてくれ。俺はこの子の様子を見ないといけないからな。ヒスク、一緒に来い」

それからタマキはリシカを持ち上げると、ヒスクと一緒にその場を離れた。そして後の三人からだいぶ離れた木の影にリシカを降ろした。

「あれが出てからずっとこの調子なのか？」

「はい。ずっと目を覚まさなくて」

「そうなのか」

タマキはそう言ってからリシカの前髪をかき上げた。すると、そこに痣が浮かんできたが、それはすぐに消えていく。

「どういうことだ」

そして、数秒後にはリシカは苦しそうにうめきだした。

「リシカ！」

ヒスクが慌てるが、タマキはそれを手で制して、リシカの様子をよく見る。それから、おもむ

ろにその体をひっくり返すと、上着をめくって背中を出した。

そこには、赤く大きな竜の形の痣が浮き出していた。

「これは！ 一体！」

ヒスクは驚いてタマキの行動を止めるのも忘れ、その痣を凝視する。

「痣が大ききはっきりしてきてるってことは、あれの力が増してるのが原因かもな」

それからタマキはリシカの服を戻し、その体を元のように仰向けにした。それからリシカの額に手を当てると、次第にリシカの様子は落ち着いていく。

「リシカ、大丈夫」

ヒスクが呼びかけると、リシカはゆっくりと目を開けて、タマキとヒスクのことをぼんやりと見た。

「ここは？」

「町の外だよ。もうあちは落ち着いてるから大丈夫」

「そう」

それからリシカはもう一度目をつぶる。

「休みたいたろうが、とりあえず今は起きてくれ」

タマキがそう言って、リシカの背中を支えて起き上がらせた。

「気づいてないかもしれないけど、お前の中のアレがまた出てきた。前よりもだいぶ強くなってだ。何か自分の中で変わったことは感じられるか？」

リシカは自分の胸元に手を当てて、息を吐き出した。

「なんか、体が熱い感じがする。それに背中が少し痛い」

「それはあの痣が背中に移ったからだな。他には特に異常はないんだな」

リシカはうなずくと、自分の力で姿勢を変えて、木に寄りかかった。

「後は疲れてるだけ」

「そうか、じゃあしばらく二人で休んでろ」

タマキは立ち上がってその場を離れると、オーゲン達のいるところに戻った。

「あの二人の様子はどうなんだ」

「特に問題はなさそうだ」

タマキはオーゲンに答えてから、ベンハルトの顔を見る。

「それで、これからどうするつもりなんだ？」

タマキは空の雲を指差した。

「あの雲を放っておく気はないんだろ」

「当然だ。フローニカ、説明しろ」

「はい。まずはあの雲のことをしっかり調べることが重要ですから、誰かが偵察しなければいけません」

「それなら俺がやろう」

タマキがそう言うと、ベンハルトは首をかしげる。

「お前の召喚獣は小さいが、大丈夫なのか」

「ああ、俺一人引っ張って行くくらいなら大丈夫だ。王子様とオーゲンは下で待機してくれればいい。すぐに行ったほうがいいよな」

「ああ、行って来い」

ベンハルトの言葉にうなずき、タマキは右手を上げる。

「今ここに混沌と破滅の使者を呼び起こす、現れろ！ ドゥームデーモン！」

そして現れたドゥームデーモンの肩につかまると、空に飛び上がった。

「偵察と言っても何を調べるのだ」

上空でドゥームデーモンがタマキに聞いた。

「あれがどんな力で動いてるのか調べるんだ。とりあえず突っ込むぞ」

「力押しか、まあよかろう」

そして二人は雲の中心に突っ込んでいく。実際に突入すると、妙に重くまとわりつくような雰囲気、視界もほとんどなかった。

「何か見えるか」

「いや、何も見えん」

「でも、何かを感じるな」

「ああ、力の塊がある。どうする？」

「当然突っ込んでみるしかないだろ」

「ふん、だろうな。行くぞ」

そして二人が直進していくと、突然雲が消えて視界が回復した。そこには青い光を放つ球体のようなものが浮かんでいる。ドゥームデーモンは停止し、それと相対した。

「ほう、これは中々のものだな」

「そうだな、しかもこれは周囲の力を取り込んでる。どうも俺達の力も吸ってるな」

「うむ。離れるか」

「そうしよう。でもその前に」

そこでタマキは小さな火の玉をその球体に投げつけた。しかし、それは球体に到達する前に消えてしまう。

「やっぱり駄目か。下手な攻撃は逆効果だな」

「わざわざ確認することもなからう。戻るぞ」

そしてドゥームデーモンは雲からぬけ、元の場所に降下していった。

「どうであった？」

ベンハルトは戻ってきてドゥームデーモンを消したタマキに鷹揚な調子で尋ねる。

「雲の中にあれの核みたいのがあった。どうも周囲の力を吸収してるみたいで、中途半端な攻撃だとあれに吸収されて届かないな」

「力の吸収、ですか。それは厄介なものですね。放っておいてはこのまま大きくなっていくということでしょうか」

フローニカはそう言って額に手を当てた。だが、ベンハルトは腰に手を当てて空を見上げると、口を開く。

「簡単なことだ。それが吸収できないほどの力を叩き込んでやればいいだろう。我がレッドバーストドラゴンのスカーレットバーストをな」

「そう簡単にいくのでしょうか？」

「それを考えるのがお前の仕事だ。そこの二人を使って策を練れ」

それだけ言ってベンハルトはその場から離れて行ってしまった。フローニカは小さくため息をつく。タマキはそれに微笑を浮かべた。

「あんたも大変なんだな」

「それでは行くぞ！ お前らは我が援護だけに集中しろ！」

ベンハルトは力強く宣言してから背中の大剣を抜く。

「真紅の翼の我が従僕よ、その力でこの世の全てを爆砕せよ！ 爆ぜろ！ レッドバーストドラゴン！」

爆発と同時にレッドバーストドラゴンがベンハルトの背後に出現した。

「威勢のいい王子様だ」

タマキはそうつぶやくと、オーゲンの顔を見た。オーゲンはそれに軽くうなずいてみせる。

「これくらいのほうがいいだろう。あいつの全力を見られるいい機会だ」

「そんなに楽しみなもんか？」

「俺は楽しみだ」

「じゃあ、俺も楽しみにしておくか。それと、地上のほうは任せるからな」

「ああ。タマキ、お前も油断するなよ」

「わかってるさ」

それからタマキはベンハルトのところに行く。ベンハルトはそれを一瞥すると、空を見上げる

。

「準備はよいか」

「ああ、俺が合図してからあんたがあの雲の核を撃ち抜くってことでいいんだよな」

「そうだ、スカーレットバーストを収束させて一撃で貫く。位置は正確に頼むぞ」

「わかった。じゃあ行ってくるから、あとはよろしくな」

そして偵察の時と同じようにタマキはドゥームデーモンにつかまって上空に飛び上がっていった。ベンハルトはそれを腕を組んで見送る。

タマキとドゥームデーモンが雲に突入して数十秒後、その雲が一つ鳴動し、そこから黒いものがベンハルトとオーゲンに向かって降り注いできた。

「弾き返せ！ レッドバーストドラゴン！」

レッドバーストドラゴンは翼を大きく動かして風を起こし、その黒いものを吹き飛ばした。

「小賢しい。あれはこの程度の存在なのか？」

だが、その黒いものはいくつか地表に到達し、すぐにオーゲンとシルバーファングタイガーがそこに向かっていった。ベンハルトはそれを見送ると、再び上空を見上げた。

「さあ、早くしろ。一撃で蹴りをつける」

そして数分後、雲のなかで一際強い光があった。ベンハルトはすぐにそれに反応する。

「今だ！ 穿孔のスカーレットバーストオオオオオオオオオオオオ！」

レッドバーストドラゴンの口から、収束され、まるでレーザーのような一撃が放たれ、光の場所に真っ直ぐに伸びていった。その一撃は確実に光の発生した場所を撃ち抜き、上空に大きく派手な爆発を巻き起こした。

「やったか！？」

しかし数十秒後、ベンハルトの近くに何かが勢い良く落ちてきた。

「ああ、全く。ひどい目にあつたな」

その何か、タマキは頭を振りながら立ち上がった。その下敷きになったドゥームデーモンもゆっくりと立ち上がる。

「これは、どういうことだ」

オーゲンはつぶやき、空を見上げる。すると、そこには四散させられた雲が再び集まり、何かを形成するかのように蠢いていた。

「来るぞ！」

タマキが叫ぶとほぼ同時に、集まっていた雲が竜の形をとった。

「あれは、我がレッドバーストドラゴンと同じ姿だと？」

「どうやら、姿を複製したらしいな。あの攻撃を吸収したんだ」

「吸収だと？ まさか、信じられん」

「目の前を見ろよ。アレはまだまだピンピンしてる。さっきの一撃が効かなかった証拠だ。しかし、あの白いドラゴンはなんか変だな」

「当たり前だ！ あのような腑抜けた色で我がレッドバーストドラゴンの姿をまねるとはな！ すぐに粉砕してくれる！」

「待て」

「行け！ スカーレットバースト！」

もう一撃、豪華が上空に伸びていくが、それは白い炎で相殺されてしまった。

「くっ、あれは一体なんだというのだ」

「さあな、でもこのままじゃどうしようもないのは間違いない」

そう会話をしている間にも、白い竜は地表に黒いものを落とし、そこから次々と怪物が生まれていく。

「こいつはまずいな。少しならやるしかないか？」

タマキは空を見上げるが、ドゥームデーモンがその前に出た。

「それよりも我にもっと力を寄越せ」

「限界までやると五秒くらいしかもたないぞ」

「かまわん、どのみちこのままでは打つ手はあるまい」

「それもそうだな、いくぞ」

タマキはドゥームデーモンの肩に手をかけた。そして軽く力を入れると、ドゥームデーモンの鎧が弾け、兜の一部が仮面のように残った。次の瞬間、ドゥームデーモンは弾かれたように飛び出していく。

そして、それは一直線に白い竜に突っ込み、その周囲を激しく回転して雨あられと攻撃を降らせてから、姿を消した。

しかし、爆煙が晴れると白い竜は依然としてその場に浮いていた。

「駄目か、こうなったらアレしかないな。王子様、あいつの足止めは頼むぞ！」

タマキはそれだけ言うと、後ろに向かって走り出した。

「どこに行くかは知らんが、足止めで終わらせる気はないぞ！」

それからタマキはリシカとヒスク、そしてフローニカの元に戻ってきていた。ヒスクはその姿を見て驚いた表情を浮かべる。

「どうしたんですか？ あの白い竜は一体」

「話は後だ。リシカ、お前に相談がある。あとの二人も、とりあえず聞いてくれ」

タマキの言葉にその場の三人はうなずき、話を聞く態勢になった。

「あの白い竜なんだけど、かなり強くてな。はっきりいってこのままだとまずい事になる。そこでだ、リシカ、お前の力が必要だ」

「あたし？」

「ああ」

それからタマキはフローニカの間を見る。

「リシカの災厄の力っていうやつを使うしかない。あの痣も変わったことだし、ここはぶっつけ本番でやってみるしかないだろ」

フローニカは驚きと、何か納得したような表情を浮かべた。

「そういうことでしたか。しかし、その様子ですと、力の制御はできていないんですね」

「やっぱり驚かないか。まあ、そういうことだよ。どうだリシカ」

リシカは戸惑いながらもうなずいた。

「そういうことなら、やってみる」

そうしてリシカは両手を前に出した。すると、その間に黒い炎のようなものが出現する。そしてその黒い炎は一気に大きくなった。

「リシカ！」

ヒスクが駆け寄ろうとしたが、タマキがそれを止めて、様子を見る。その間にもリシカの出した炎は大きくなっていき、次には背中からも黒い炎が噴出した。だが、リシカは何かにとりつかれたかのように、目の前だけに集中して、黒い炎を大きくしていく。

数秒後、リシカの体から黒い炎が勢い良く立ち上り、そこから漆黒の竜が実体化した。その姿はレッドバーストドラゴンよりも一回り大きく、その巨体からは禍々しい雰囲気が出ている。

「こいつは、ちょっとまずいかもな」

タマキの言葉と同時に漆黒の竜は咆哮を上げ、空に舞い上がっていく。リシカは焦点の定まらない目をして、そこに立ち尽くしているだけだった。

「力に飲まれたか」

タマキはそれだけつぶやいて漆黒の竜が飛んでいった、白い竜がいる方向を見上げた。

「おのれ！ 姿を真似ただけの下等な存在が！」

ベンハルトは勇ましく吼えているが、劣勢は明らかだった。レッドバーストドラゴンには明らかにダメージが蓄積していて、攻撃の威力も落ちてきている。

だが、そこに漆黒の竜が飛来し、いきなり白い竜に長い尻尾で一撃を加えた。それで白い竜の体は大きく傾く。

「なんだあれは！」

ベンハルトはうめくように言うと、そこにフローニカが走ってきた。

「フローニカ！ これはどういうことだ」

「あれは災厄の力です。リシカという少女が発現させたのですが」

「が、なんだ」

「どうやら制御はできていないようです」

「ほう、それでは気を抜くわけにはいかな」

「しかし、殿下のドラゴンも傷ついています。ここは一旦引くべきです」

「そうだな、ここは様子を見るべきか。戻れレッドバースト」

レッドバーストドラゴンは姿を消し、ベンハルトは白い竜と漆黒の竜の戦いを見上げてからフローニカと向き合った。

「案内しろ。災厄の力の持ち主を見なければならん」

「はい」

そして二人がリシカの元に到着すると、そこにはただ立ち尽くすリシカと、それを見守るタマキとヒスクの姿があった。

「どういうことだ！」

ベンハルトの鋭い声にタマキは視線をそちらに向けた。

「話は聞いたんだろ、それだけのことだよ。それより、これからのことを考えないとな。まずはリシカを正気に戻さないと、あの竜が何をするかわかったもんじゃない」

「では、どうするつもりだ」

「リシカが自分の力を使えるようにする。それ以外に手はない」

それからタマキはヒスクの隣に立ち、その肩に手を置いた。

「やっぱり、お前がなんとかするしかないな。もう一度、やってみるんだ」

「はい」

ヒスクはリシカの前に立ち、その額に手を置こうとした。

「違う、今度は背中だ。痣に直接触れてみる」

「わ、わかりました」

ヒスクが服の上から背中に手を置こうとすると再びタマキが口を開く。

「背中に直接だ。恥ずかしがってる場合じゃないぞ」

「は、はい。ごめん」

ヒスクは少し躊躇してから、リシカの服をめくって背中中の痣に直接手を触れた。

「気持ちを落ち着けて意識を集中するんだ。呼びかけるのも忘れるな」

タマキの言葉にヒスクは黙ってうなずき、目を閉じた。

「リシカ、戻ってきて。こんなところで、終わるなんて、そんなことあっていいわけじゃないか」

その言葉に応じるかのように、リシカの背中 of 痣が光り、そのシルエットが浮かび上がる。

「これは、なんだというのだ」

「黙って見てろ」

タマキの制止に、その場の雰囲気は静かになった。その間にも痣のシルエットは光りを増していき、そこからの光で周囲が照らされていく。

「リシカ！ 目を覚まして！」

ヒスクが叫ぶと、リシカの目がゆっくりと開き、ヒスクに向かって振り返った。ヒスクはすぐに手を背中から放すと、前にまわって両肩に手を置く。リシカは正面のヒスクの顔をぼんやりと見つめた。

「ヒスク、あたしは？」

「よかった」

ヒスクは大きく息を吐き出した。おもむろにその横にタマキが立つ。

「リシカ、今、自分の力を感じられるか？」

リシカはまだぼんやりとした表情で、首を横にゆっくりと振った。

「わからない。でも、まだあたしの中に感じられる」

「そうか、よし、竜のところに行くぞ」

「待ってください！ こんな状態じゃ」

「今は荒療治のほうがいい。安心しろ、お前達は俺とあっちの王子様が守るさ。行くぞ、王子様、いや、ベンハルト！」

「ふむ、まあよかろう」

ベンハルトはうなずき、五人は二体の竜が見える場所まで移動した。二体の竜の戦いは互角のようで、どちらも目立った傷はなく、戦いは膠着状態にあるように見えた。

ヒスクに支えられたリシカはその白い竜と黒い竜を見上げる。

「あれは、あたしが出したの？」

「それも覚えてないか、黒いほうはお前が出したんだ。あいつと何かつながりっていうか、そういうものは感じないか」

リシカはゆっくり首を横に振る。

「わからない。本当にあれはあたしから？ そうだとしてもどうすれば」

その言葉にタマキは少し考え込むような仕草をした。それから、上空の二体の竜を見上げる。

「あれは力のほんの一部でしかないのかもな。それが暴走してるだけなのかもしれない」

「それじゃ、どうすれば！？」

「ヒスク」

リシカは自分の力で立つと、ヒスクに自分の右手を差し出した。

「リシカ？」

「あたしの手を握って」

「うん、わかった」

ヒスクは自分の左手をそれに重ねると、リシカと一緒に上空の竜を見上げた。

「ずっと、どこかに自分の力を使うのを怖がって迷ってたのかもしれない。でも、ずっと力を使う練習をして気づいたの。一人じゃ駄目なんだってことが」

「でも、僕なんかじゃ」

リシカはすぐに首を横に振ってヒスクの言葉を否定した。

「ヒスクじゃないと駄目。あたしとずっと一緒にいてくれたあなたじゃないと」

ヒスクは迷いを捨てた目になり、力強くうなづく。

「うん、わかった」

二人の握った手に力が込められる。すると、リシカの背中 of 痣が強い光を発し始めた。

「災厄の力でもなんでもいい、あたしはヒスクを信じるし、自分のことも信じる」

「僕もリシカを信じてる。どんな力だって、きつときちんと使えるよ」

「ありがとう、ヒスク」

「ありがとう、リシカ」

二人が同時につぶやくと、リシカの背中 of 痣から発していた光が二人を包み込んだ。それから、その光は二人のつないだ手に集中していく。

そして、リシカの背中から痣が腕を伝って、二人のつないだ手に移動し、ヒスクは顔を歪める。だが、それでも手は放さず、それを受け入れていった。

「わかるよ、リシカはいつもこんなものを背負っていたんだね。でも、これからは僕も一緒に背負っていく」

「今までだってそうだったじゃない。なにも変わらないよ」

二人が同時に顔を見合わせて笑いあうと、つないだ手が一瞬強く光った。光りが消え、二人が手を放すと、そこには今までリシカの背中にあった痣が二つに別れ、半分ずつ存在していた。

「ヒスク、もう一度手を」

「うん、今なら僕にもわかる」

手が再び握られた。それから二人の口が同時に動く。

「全てを統べる英知の存在よ！ 現れてその威容を見せよ！ ダークネスワイズドラゴン！」

リシカとヒスクが互いに握りしめた手を中心に、一筋の闇の柱が空を貫き、それを中心として闇のゲートとでも言うべきものが形成された。

「ダークネスワイズドラゴンだと？」

ベンハルトはそれを見上げながらつぶやき、フローニカは黙って息を呑む。タマキだけは空ではなく、地上の二人をじっと見ている。

空中に形成された闇のゲートから徐々に、漆黒のオーラをまとった何かが出てくる。その圧力は戦っていた白い竜と黒い竜の動きも止めた。

漆黒のオーラをまとったものは、すでにその体の半分を現していた。そして時が止まったと錯覚するような空間の中で、それが全身を現すと、それはスマートで長身な体躯の、翼で体を覆った漆黒のドラゴンだった。

そのドラゴンはそのまま地面に降り立つと、その瞳でリシカとヒスクをじっと見つめる。

「我が力を求めしは汝らか」

低く響く声が眼下の二人に問いかける。だが、その迫力にもリスクとヒシカは動じずに真っ直ぐ見返す。

「そうだ！」

リシカとヒスクは力強く答えた。心なしか立っているドラゴンはその瞳に面白そうな色を浮かべる。

「正解にたどりついた者がいたか。我が力で何を望む？」

「平穏と目の前の危機の解決を！」

「我が力と知の両方を求めるか。よかろう」

その声が終わると同時にドラゴンは翼を開いた。漆黒のオーラがその身体の周囲に広がり、ソノドラゴン、ダークネスワイズドラゴンの格好が明らかになった。

レッドバーストドラゴンや、今は動きを止めている白い竜や黒い竜のような重厚な姿とは違い、その姿はあくまでもスマートで、二本の足で真っ直ぐに立っているのが印象的だった。

「我が力の持主達よ、その願い叶えよう」

「行け！ ダークネスワイズドラゴン！」

リスクとヒシカが同時に叫ぶと、そのダークネスワイズドラゴンは一気に上空に舞い上がった。

「速い！」

ベンハルトはその速度に思わずうめいた。そのドラゴンはあっという間に白い竜を貫き、四散させる。さらに、黒い竜の頭をつかみそれを握りつぶすと、その残滓をその身に吸収した。

「大した力だな。でもあんだけ力出して大丈夫なのか」

「それなら心配はないぞ」

突然タマキの頭の中で次元の管理人の声が響いた。

「不安定さの原因だった力はすでに安定したようだ。だが、その世界にも前と同じような障害が発生しているようだ」

「それなら大丈夫だ。すぐに解決する」

「では、終わったらまた連絡をしよう」

次元の管理人との話を終わらせたタマキは、再び上空を見上げる。そこでは四散させられた白い竜の欠片と雲から落ちていったものが集まり、再び同じ姿をとっていた。

ダークネスワイズドラゴンはそれにたいし、あくまで余裕のある様子だった。それから顔をリシカとヒスクに向ける。

「さあ！ そいつに止めを！」

二人が叫ぶと、ダークネスワイズドラゴンは顔を上げた。そして、腕の間に黒いエネルギー球を形成していく。

白い竜は口に白い炎を漲らせると、ダークネスワイズドラゴンの攻撃よりも先にそれを放つ。その白い炎をぎりぎりまで引きつけると、黒いエネルギー球はゆっくりと前方に動き、一気に膨張した。

白い炎はそれにぶつかり、激しい衝撃を巻き起こす。しかし、その勢い全てを吸収するように黒いエネルギー球は大きくなっていく。数秒後、最初の数十倍に大きくなったエネルギー球から、巨大な黒い光線が発射され、白い炎を飲み込みながら、白い竜に向かっていった。

その光線は広がりながら、白い竜の全身を消し飛ばした。後には塵の一つも残らず、再び再生する気配もなかった。

しばらく後、オーゲンが戻ってきて、町にいた怪物は突然全て消えてしまったことがわかった。

「しかし、これは凄まじいな。こいつとだけは戦う気がしない」

オーゲンの視線の先には地面に真っ直ぐ立つダークネスワイズドラゴンがいた。

「ふん、情けない」

ベンハルトはそう言うが、あまりその態度に力強さは感じられない。そんな中、そのドラゴンはタマキのことを真っ直ぐ見下ろした。

「そこの男、少し話がある」

「ああ、別にいいぞ」

「我が背に乗るがいい」

タマキは言われたとおりダークネスワイズドラゴンの背中に乗り、一緒に空高く舞い上がった。

「お前は这个世界のものではないな。それに、力も隠している」

「ああ、そうだ。さすが、英知の存在ってやつか」

「お前の目的は達成されたようだな」

「幸いな。お前にも礼を言っておこうか。ありがとうな」

「こちらも礼変わりに一つ教えてやろう。お前にはこれから苦しみと激しく孤独な戦いが待っている、だが、その戦いを乗り越えられればお前は更なる力を手に入れることができるだろう」

「ご忠告どうも。ところで、俺のことは聞かなくていいのか？」

「この世界からはすぐに去るのだろう。それに必要なことはすでに知っている」

「そうか。まあ、あの二人のことはよろしくな」

「無論だ」

その翌日、ベンハルトはレッドバーストドラゴンにフローニカと共にまたがっていた。

「それではさらばだ。お前達も達者でな」

事情は何も言わず、ベンハルトはそれだけ言うとその場から飛び去っていった。

「あいつはこれからどうするつもりなんだろうな」

タマキがつぶやくと、オーゲンは自分の顎を手で撫でる。

「まあ、こいつらに手を出そうとは思ってないだろう。あの力がわからないような奴でもないだろうからな」

それからオーゲンはリシカとヒスクに目を向ける。

「お前達はどうするつもりなんだ？」

「僕達は旅を続けます。そのうち安心して過ごせるような場所が見つけられればいいとは思ってますけど」

「そうか、どうせなら俺もついて行くことにしよう。かまわないか？」

オーゲンの言葉にヒスクはうなずいた。

「はい、よろしくお願いします。あの、それでタマキさんは」

「俺はここでお別れだ。まあ、また会うなんてことはないだろうけど、もしそうなったらよろしくな」

タマキは笑顔で手を上げ、三人に背を向けて歩き出す。それからしばらくして、リシカだけが追いかけてきた。

「待って」

タマキは振り返った。

「どうした、あいつらと一緒に行くんだろ」

「この世界の人じゃないんでしょ、なのになんであそこまで」

「仕事というか、趣味というかな。まあ気が向いたんだよ。それよりもよくそのことに気がついたな」

「あの竜から伝わってきたから」

「そうか。まあ、相棒達と仲良くやっていけよ」

「これからどうするの？」

「色々だ。あんまり俺のことなんて気にするな。じゃあな」

それだけ言ってタマキは再び歩き出す。リシカはその背中を見送りながら、口を開いた。

「ありがとう！ 忘れないから！」

タマキは振り向かず手を振りながら去っていった。

賞金稼ぎ

雨が降る中、二人の男が崖で向かい合っていた。

「なぜだ!？」

「答えならわかっているだろ？」

崖の淵の男に、もう片方の男は銃を向ける。

「わかるかよ! その銃を下ろせ！」

「いや、ここでお前とはお別れだ」

言葉が終わると同時に銃声が響き、崖の淵の男はよろめいた。そしてその身体は崖から海に落ちていく。

「安らかにな、相棒」

銃を撃った男はそれだけ言ってその場を立ち去った。後には何も残ってはいなかった。

その翌日、浜辺に打ち上げられた男は、ある人物に見つけられていた。

「息はあるようですね」

その人物はとりあえず男に水を吐かせると、安全な場所まで運んだ。それから毛布を持ってくると火を起こし、男の服を脱がせて毛布をかけた。

それから数時間後、男は咳き込みながら目を覚ました。そして男は周囲を見回してから、自分を見守っている人物のことを認める。

「ここは? あんたは？」

「ただの通りすぎりです。ここは浜辺ですよ」

「そうか、あんたが助けてくれたんだな。ありがとう」

男は身体を起こして焦点の定まってきた目で相手の顔を見た。男から見るとその人物の雰囲気は地味な女という印象だったが、顔の左上部、目と頬を覆う仮面と、所々皮で補強された服と、腰にあるショートソードと大振りなナイフが目についた。

「俺はイシルド、あんたは？」

「カレン、賞金稼ぎですよ。とりあえず服は乾いてますから、着替えてはどうですか」

「そうさせてもらおう」

イシルドは今の自分の状態に気づくと同時に、銃弾を受けたはずの肩が、包帯が巻かれているだけでなんともないのに気がついた。

「傷は浅かったので問題ありませんよ。すぐに治るでしょう」

「あ、ああ」

カレンはうなずいてその場を離れた。その間にイシルドは自分の服を身に着け、最後に残った自分の武器、サーベルとリボルバーの銃を見た。

どちらも無事なようだったが、とりあえず銃はシリンダーを外し、弾と湿った火薬を取り出した。それから弾は込めずに、元に戻すと立ち上がり、ベルトにサーベルと銃を収める。

「歩けますか？」

そこにカレンが戻ってきて口を開く。イシルドは軽く身体を動かして確認してみた。

「大丈夫そうだ。礼は町に戻ればできるはずだから、一緒に来てくれ」

「そうですね、付き合いましょう」

イシルドが歩き出すと、カレンはその後について歩き出した。そしてしばらく歩くと二人は港町に到着していた。

「俺の宿はこっちだ」

イシルドが到着したのは普通の宿ではなく、明らかに娼館であった。

「俺だ、開けてくれ」

少し経ってからドアが開くと、カレンは何も言わずに、イシルドに続いてそこに入って行く。中に入ると、そこには年のいった恰幅のいい女がいた。

「あんた、戻ってこないから死んでるかと思ったよ」

「あいにく生きてるぞ、ウィゼ」

イシルドはそう答えてから、後ろのカレンを親指で指差した。

「俺の恩人だ。賞金稼ぎみたいだから、あんたのところで用心棒にでもしてくれないか」

「へえ、それは面白そうだね。あんた、名前は」

「カレン」

「カレンね、うちの用心棒はけっこう忙しいけど」

「それなら問題はありません」

「大した自信じゃないか。まあ、そこまで言うならやってもらおうか、いいかい？」

「ええ、ちょうど仕事を探していたところですから」

「それなら今日から頼むよ」

「話は決まったな、俺は少し用があるから出かけてくる」

「無理すんじゃないよイシルド、ほら、あんたの財布だ」

ウィゼは財布を取り出してイシルドに手渡した。

その日の夜、カレンは娼館の入口に椅子を持ってきて座っていた。その目の前を様々な客が通過していったが、特に問題は起こらない。

「カレン、この人を送っていってくれないかい。後についていけばいいからね」

初老の男を伴ったウィゼがそう言ってきた。カレンは黙ってうなずくと、杖を持った初老の男の後について館を出た。

それからしばらくして、初老の男は口を開いた。

「初めて見る顔ですね。しかし、常連の私の護衛を任せられるところをみると、あそこの主に信頼されているようで」

「そうですね。紹介者が良かったのでしょうか」

「それはイシルド君かな。しばらく姿が見えなかったが、無事でなによりだ。ところで君の名は」

「カレンです」

「私はハイデル。この歳であんなところに行っているのを見て驚いたかね？」

カレンはそれには無言で答えた。

「まあ話相手もいなくてね。それに酒場なんかでは落ち着かないから、あの店でいつも適当にしゃべらせてもらっているんだよ」

「悪い趣味ではないと思います」

カレンはそれだけ言ってから、いきなりハイデルの前に出た。そして、ナイフを逆手で抜くとそのまま目の前の虚空に突き立てる。そこからは血が流れだし、カレンがナイフを引くと、一匹の大きな蝙蝠が地面に落ちた。

「これは」

「ふむ」

ハイデルは地面に落ちた蝙蝠をしゃがんでよく観察した。

「吸血鬼の使い魔ですよ。こんな町中になんの用があったのだろうか」

「吸血鬼ですか」

カレンはナイフを鞘に収め、蝙蝠を見下ろすが、それは霧となって消えてしまった。

「確かに、これは普通の生物ではありませんね」

「その通りだよ。吸血鬼というのはその気になれば人間も使役できる存在だ。ハンターはいる、例えばイシルド君がそうだが、うまくいかないことも多い。だからこそ、一攫千金が狙えるのがね、吸血鬼ハンターというのは」

それだけ言ってハイデルは再び歩き出した。

一方、イシルドは町のうらぶれた酒場にいた。その酒場の隅のテーブルに自分の銃を取り出し、丁寧に分解と掃除をして、火薬と弾を込め直していた。それが全て済むと、イシルドは銃を組み立て、腰のホルスターに収める。

それからイシルドは外に出て夜空を見上げた。しかし、その視界を何者かが遮った。

「アニエルドォ！」

イシルドは銃を抜いて上空に構える。その先には、屋根に立つ一人の男。

「生きていたとは、しぶといな。さすが俺の相棒だ」

「元、相棒だ。お前は俺を裏切った」

「裏切ったか、まあそうだよなあ」

アニエルドはそう言ってから、声を出さずに高笑いをした。

「まあお前が生きてたのは嬉しいよ。楽しみが増えるからな！」

そしてアニエルドはその場から跳躍して姿を消した。イシルドはそれを黙って見送り、静かに銃をホルスターに戻して歩き出した。

朝というには少し遅い時間を迎えたが、娼館は世間とは違い、まだ眠りの時間だった。だが、カレンはすでに起きていて入口の椅子に座っていた。

「お疲れさん」

そこにウィゼがやってきた。その手には金が入ってるらしい袋が握られている。

「ほら、報酬だ」

カレンはそれを受け取り、中身を取り出して自分の財布に収めてから袋だけウィゼに返した。

「ところで、あんたはいつまでここにいるんだい」

「いくつか仕事をして、それから考えます」

「そうかい、それじゃあそれまではここで用心棒をしてくれるのかい？」

「それまでは」

「よしよし、それならうちの娘達にあんたを紹介しておこうかね。こっちだよ」

カレンとウィゼが奥に行くと、その途中でイシルドと会った。

「今起きたのかい」

「ああ、ちょっと疲れてたからな」

「ちゃんと宿代払えるくらいは稼いできておくれよ」

「わかってる」

イシルドはそれだけ答えて外に出た。そしてまずは酒場に足を向ける。中に入ると朝食をとっている数人の客と、この主人がカウンターの向こうにいた。その主人はイシルドに気がつくやうに軽く手を上げる。

イシルドは軽くうなずくとカウンターのストウールに腰かけた。

「まず聞きたいのだが、あいつは、アニエルドはここに来たか？」

「いや、見てないな。その様子じゃ何かあったらしいな」

「ああ、ちょっと撃たれたくらいだ」

「それにしても元気そうだな」

「自分で賞金稼ぎと言ってる奴に助けられたんだ」

「ほう、ここらじゃ見ない奴か？」

「そうだな。ウィゼのところを紹介したから、今はそこにいる」

「あのばあさんが受け入れたのか、それは面白そうだな」

「今夜にでも行ってみれば、入口に座ってるはずだ。相当な使い手だぞ」

「そいつは見る価値がありそうだ。で、おしゃべりだけじゃないんだろ、何か食うか」

「軽くで頼む」

それからトーストと紅茶だけの食事をして、イシルドは酒場を出た。

一方、カレンも何人かの娼婦達と朝食の席についていた。

「ねえ、賞金稼ぎってどのくらいの稼ぎなの？」

一人のユースと名乗った若い娼婦が聞いてくると、カレンは笑顔を浮かべた。

「あまり安定はしていませんね。報酬がいい仕事にあたれば余裕はできますが、それでも一つのところにとどまっているわけにもいきませんから」

「それって大変じゃない？ やっぱ安定した仕事のほうがいいと思うけど、どうしてそんなことやってるの？」

「色々事情がありましてね。それに荒事は得意ですから」

「そうなんだ、それじゃあなたがここにいる間は大丈夫ってことね」

「ええ、仕事を引き受けたからには、皆さんの安全は保証しますよ」

「なにそれ頼もしい！　じゃあ買物に付き合っよ」

「いいですよ、私もこの町は初めてですから、案内してください」

「じゃあ決定、皆も行かない？」

それからしばらくして、娼婦達とカレンは町に繰り出していた。

「カレン、こっちこっち」

ユースはカレンの腕を抱えて露天に向かって引っ張っていく。その二人を見て、二人の娼婦は顔を見合わせる。

「あの子、ずいぶんはしゃいでるじゃない」

「あの賞金稼ぎさんはなんか妙な雰囲気だけど、優しい感じだから甘えてみてるんじゃないの」

「まあ、ね。何歳くらいだと思う？」

「見た目からすると三十いってるかどうかじゃないの。雰囲気だけだとわかりにくいけど」

「用心棒としては上出来そうね、ウイゼがいきなり信用するくらいだし」

「安心できるようになるならいいじゃない」

そんな調子で歩いていると、市場の入口あたりで人だかりが出来ていた。

「困るんだよねえ、貸した金は返してもらわないと」

三人ほどの屈強な男を従えた蛇のような男が、商店主に詰め寄っていた。

「金なら返しただろ！」

商店主も引かずに強い調子で言い返している。

「利子って知ってるかい？　あんたはそれを払っちゃいないだろ」

「ふざけるなよ！　規定通りには払った！」

「あんたが契約書をよーく確認してないのがまずいんだよ。ほら」

そう言って男は一枚の紙を取り出し、その裏を指差した。

「ここに書いてあるだろ、利子はこっちがいつでも自由に変えられるってさ」

「冗談は寝てから！」

商店主が詰め寄ろうとすると、その鼻先に銃が突きつけられていた。

「それはあんただよ。ついでに言うと、あんたが死んだらこの権利はうちが貰うことになってるんだよ、しっかりと、あんたのサイン付でねえ」

「ま、待て、こんな場所でそんな」

「さて、どうかねえ」

男の指が引き金にかかり、動く。だが、次の瞬間、投げナイフがその銃を弾いた。

「ぐっ！　なんだ！」

男がそれが飛んできた方向を見ると、野次馬がどき、顔の左上部を仮面で覆った一人の女の姿があった。

「カレン！」

ユースが叫ぶが、カレンは手で下がっているようにという仕草をすると、男に向かって歩き出す。

「誰だか知らないが、いい度胸だ。お前達、やっちまえ！」

男の号令に三人の男達がそれぞれの武器を取り出す。二人は銃、あとの一人は背中から大槌。間髪いれずに二丁の銃が火を噴いた。

だが、カレンは右の逆手で素早く抜いたナイフでその弾を叩き落して地面にめり込ませる。

「な！ ひるむなお前ら！」

さらに銃弾が連射されるがその全てをカレンは同じように叩き落して地面に埋める。そして弾が切れると、大槌を持った男がカレンを潰そうと迫る。

カレンはその一撃を素早いステップでかわしながらその男の右に回ると、ナイフの柄をみぞおちに叩き込んだ。男はその場で前のめりに崩れ落ちる。

銃を持った二人はそれを見ると、慌てて銃を捨てて剣を抜きカレンに切りかかるが、その左右からの攻撃より早く、カレンの足がまずは右の男の顎を打ちぬく。

そして左からの斬撃を回転しながらかわすと、男の首筋をナイフを握った拳で打つ。二人の男は声もなく崩れ落ち、カレンはそれを確認することもなく、今は呆然としている蛇のような男の目の前まで到達した。

「不正な契約は、感心しませんね」

すでにカレンはナイフを鞘に収めていたが、男はカレンの物静かな目に震え上がった。

「いや、ほんの冗談だったんだよ、だからあんたも落ち着けて」

「落ち着いてますよ。まずは契約書を出してもらいましょう」

「あ、ああ」

男が契約書を出すと、カレンはそれを受け取り商店主に渡した。

「あ、ありがとう」

商店主はそれを受け取り、内容を確認する。

「これだけではありませんよね、もう一つのでっちあげの契約書もあるのでしょうか」

「け、権利の引渡しのやつだな、わかった、でも今はそれが手元がないんだよ」

「なら、取ってきたほうがいいですね。少しでも早く」

カレンの仮面の奥の左目が赤く光ったように見え、男はあとずさる。

「もちろん、もちろんだ！ それもすぐに渡す！ 夕方に、鐘がなる頃にここで引き渡すから！」

「いいでしょう」

カレンがうなずくと、男はすぐに逃げ出し、他の三人もよろよろとしながらその後を追った。それからユースがカレンに駆け寄る。

「カレンすごーい！ でもあいつらきつと夕方にはまたなにかしてくるよ」

「それはわかっています。ですが、大丈夫ですよ、荒事は得意ですから」

夕方、カレンが椅子に座ってショートソードを研いでいるところにイシルドが戻ってきた。

「あんた、なに考えてるんだよ」

イシルドはすぐにカレンを見つけると、問い詰める。カレンは特に表情を変えない。

「仕事ですよ。もうあの商店主から前金も受け取りました」

「そうじゃない。あんたが相手にしようとしてるのはこの町じゃ保安官も手を出せないような連中だぞ！」

「そうですか。それならもっと他のところからも賞金が出そうですね」

カレンはショートソードを鞘に収めて立ち上がった。イシルドはその前に立ちふさがる。

「そんな暢気なこと言ってる場合か？」

「大丈夫だって」

そこにユースが出てきた。

「昼だって、三人もあつという間に倒しちゃったんだから。銃の弾だってナイフでこう落としたりして」

ユースはその場でナイフを振り回すようなふりをする。イシルドはカレンのことは見て、感心ともなにもつかない表情でため息をついた。

「ナイフで銃弾を落とすなんて、冗談だろ」

「あの程度の速度なら問題ありませんよ」

「あの程度って、それでももっと大勢に撃たれたらどうするんだ」

「今度は周囲に人もいないでしょうから、避けるだけです」

相変わらず落ち着き払っているカレンに、イシルドはもう一度ため息をついた。

「わかった、俺も行く。命の恩人のあんただけを危険な目にあわせるわけにはいかない」

「ありがとうございます。ですが、相手には私が一人だと思わせておいたほうがいいので、最初は姿を隠しておいてください。乱戦になったらほどほどに援護してくれればいいです」

「本当にそれでいいのか」

「はい。いえ、そうでした、現場で見たことは他言無用でお願いします」

それからカレンはユースに顔を向ける。

「ここが開くまでには帰ってきます」

「うん、いってらっしゃい」

そしてカレンは昼間の場所、市場の入口に到着した。その目の前には、ならず者風から傭兵風まで、見えるだけで二十人という集団だった。その中の一人、昼間の男がにやにや笑っている。

「まさか、本当に一人でのこのこ来るとはな」

男は玩んでいた拳銃をカレンに向ける。

「今更許してくれていっても遅いぞ。お前はここで磔にでもしてやる、散々恥をかかせてくれた礼にな」

男はそこで笑い声をあげ、他のならず者風の者も同じように笑った。だが、カレンは落ち着いた様子でショートソードに手をかける。

「偽造の契約書は持ってきましたか」

「ああ、持ってきてやったぞ」

男は紙を取り出してそれを見せびらかすようにヒラヒラさせた。

「どうせお前はこれを手に入れられないけどな」

「約束を守ったのは上出来ですね。それを渡せば、この場は見逃してもいいんですが」

「はっ！ 寝ぼけたことをぬかすな！」

男が契約書を持っていないほうの手を上にはげると、同時に二発の銃声が響いた。だが、カレンは少し首と身体を動かした以外は微動だにしていない。

「伏兵ですか。悪い手ではありませんが」

言い終わる前に前方に踏み出し、ショートソードを抜き放つ。その加速は驚異的で、さらに銃声が響いてもその銃弾は全くカレンをとらえられない。

それは正面からの銃撃も同じで、全て避けられるかショートソードで弾かれてしまう。

そこに傭兵風の男が槍を突き出したが、カレンはそれをつかんで引っ張る。傭兵風の男は前のめりになり、その鼻っ柱にカレンの膝がめりこんだ。その傭兵風の男は意識と身体の両方を飛ばしたが、さらに刀のようなものを持ったのと、短剣を持った男がカレンに向かってくる。

「死ねやあ！」

まず短剣を持った男が身体ごとぶつかってきた。カレンは身を右方向に沈めながらそれをかわし、すれ違いざまに足をすくってそれをひっくり返して、頭から地面に落とす。

そこに刀が振り下ろされるが、カレンは左足を軸に身体を回転させてかわし、その勢いのまま男の即頭部に蹴りを叩き込んだ。

そして再びまっすぐと立ったカレンに、残った者達は飛び込めずに距離をとったままとりあえず困む。さすがに銃弾をかわし、あっという間に三人を無力化したカレンに怯んだ様子だった。

「怯むんじゃねえ！」

昼間の男が叫ぶが、ゆずりあいのような状況になっていて誰も足を踏み出さない。

「くそっ！ 先生はまだか！」

「おーおー、盛り上がってるじゃないか」

この場にそぐわない、のんびりとした声が響いた。そして姿を現したのは、銀髪を頭の後ろでまとめていて、腰のホルスターの左右に二丁、後ろに二丁と、両脇のそれぞれのホルスターに銃を収めた女だった。

「せ、先生！ 遅いじゃないですか」

昼間の男は満面の笑顔でその銀髪の女に駆け寄った。だが、いつのまに抜いたのか、その男の額には右手に握った銃が突きつけられている。

「気色悪いから近寄るなよ」

昼間の男は慌てて後ろに下がり、それから銀髪の女はカレンのことをじっと見る。

「なるほど、あんたかなりできそうだな」

「そうですか。それはあなたも同じようですが」

カレンは油断のない様子だったが、口調は自然で穏やかだった。

「わかってくれるかい、嬉しいねえ。あんた名前は？」

「カレン。そちらは」

「俺はアデーレだ。まあこの連中の用心棒になって雇われてな。あんたに恨みはないけど、そういう稼業だから仕方ないよな」

「それは私も同じです」

「いいねえ。おい！ 他の連中は手を出すなよ！」

アデーレの言葉に周囲の者達は後ろに下がった。アデーレはそれを満足そうに見てから、カレンに向かって笑った。

「さあ、やろうじゃないか」

そして右手の銃を腰で構えた。カレンもショートソードを構える。アデーレはそれを見て楽しそうに唇を歪めた。

「あんた、銃弾を弾くんだってな。面白い芸だよな」

「それほどでもありません」

「じゃあ、こいつはどうだい」

一瞬の早撃ちで六発の銃弾が発射された。カレンはその二発はショートソードで弾き、三発はかわした。だが、一発だけはかわしきれずに左の太腿をかすり、ズボンが破れて血が滲んだ。

「なるほど、確かにあなたの銃は早く正確ですね」

「そうだろ。それにしてもとんでもない動きだな」

そう言うアデーレはすでに今の銃を地面に落とし、左手に新しい銃を構えている。

「まあ、今のはほんのお披露目だ。あと五丁の銃であんたは確実に追い込まれるぞ、カレン」

「私もおとなしくしているつもりはありませんよ」

カレンはそう言って投げナイフのホルダーに左手をやる。

「いいねえ、ゾクゾクしてきたよ。こんな楽しいのは久しぶりだ」

二人の間に張り詰めた空気が流れる。

「まさかあいつがこの町にいたとはな」

ライフルを持った男を気絶させ、イシルドは建物の上階からその様子を見ていた。

「その前にあと一人か、まあちょうどいい」

イシルドはライフルを手に持つと、それを簡単に確認して窓から構える。ちょうど向かいの建物の窓からライフルを構えている男を見つけると、そこに狙いをつけた。

「悪いな」

そして引き金を引いた。

人ではないもの

銃声と爆発音が響くと同時に、まずはカレンが動いた。二本のナイフを一度に投げると、すぐに空いた左手でナイフを抜く。

アデーレの銃が火を吹き、二本のナイフが弾かれる。そして残り四発の弾がカレンに迫るが、それはショートソードとナイフで落とされた。

だが、アデーレは銃を捨てるとさらに右手で左脇のホルスターから銃を抜く。カレンはナイフを空中に放り上げ、再び投げナイフのホルダーに手をやって今度は残りの三本のナイフをつかんだ。

そしてその三本を一斉に投げたが、その三本はアデーレの銃弾で落とされる。残りの三発はカレンのショートソードで切り払われた。さらにカレンは左手のナイフをアデーレに向けて投擲した。

アデーレはそれに向けて弾を撃ちつくした銃を投げつけて落とすと、左手で右脇のホルスターから銃を抜いている。

二人はそこで睨みあい、膠着状態になった。

「あなたの銃はそれも含めて残り三丁ですね」

「あんただってもうナイフの残りはあんまりないだろ？ その剣だけじゃ完全には防げないよな」

だが、そこで上から声が響いた。

「二人とも、もうやめろ！」

「イシルド？」

アデーレは声のした方向を見上げた。そこには建物の上階の窓から身を乗り出し、ライフルを構えたイシルドの姿があった。

「知り合いなんですか？」

カレンはアデーレに尋ねる。

「ああ、まさかこんなところで会うとはな。何の用だよイシルド！ さっきの銃声はそのライフルだよなあ、今楽しんでるんだから邪魔するなよ！」

「その前に、お前もそんなくだらないことは止めろ！ これ以上続けるつもりなら撃たせてもらうぞ」

「はいはい」

アデーレは銃を下ろした。カレンもそれを見て、ショートソードを下ろす。

「ちょっとちょっと、先生そりゃないですよ」

昼間の男が慌てた様子でアデーレに駆け寄ろうとする。だが、また銃を突きつけられて足を止める。

「気色悪いって言ったよな」

「ぐう！」

男はうめいたが、一步下がると、両手を広げた。

「ハハ、アハハハハハ！ 使えない！ 全く使えない！」

その妙な様子にアデーレは後ろに下がって銃を構えなおした。

「こんなところでこの力は使いたくなかったよなあ。まあ慣れるにはいいだろ」

次の瞬間には男の身体を霧が包み込んでいた。そして、そこから足を踏み出すと、それはすでに元の男のものではなかった。

さらに、その全身が現れると、それは全身を緑色の鱗で覆われ、トカゲのような顔をした、鋭い爪を持つ化物だった。

「こいつ」

アデーレは絶句した。他の者達はそれどころでなく、一斉にこの場から逃げ出していった。だが、そんな中でもカレンだけは眉一つ動かさない。

「吸血鬼の眷属ですか？」

「ゲェゲェ、その通りだ」

アデーレの問いにすでにトカゲの化物になった男は気味の悪い声をあげた。アデーレは銃を構えるが、その前にカレンが出る。

「とりあえず、私に相手をさせてもらえますか」

「あんた。いや、まあいいか、お手並み拝見させてもらおうぜ」

アデーレは後ろに下がり、カレンのことを見守る態勢になった。

「待て！ そいつはまずい！」

イシルドが上で叫んでいるが、カレンはそれを無視してショートソードを構える。

「ちっ！」

ライフルが火を吹き、その銃弾は確実にトカゲの胴体をとらえた。しかし、その鱗を貫けずに、それなりの衝撃を与える程度の効果しかない。イシルドはライフルを投げ捨てると、急いで下に降り始めた。

「なるほど、硬そうですね」

「グググ、まずはお前からか。形も残らないように八つ裂きにしてやろう」

そしてトカゲは地面を蹴った。その加速はその重そうな身体に似合わず、凄まじい速度でカレンの横を通り抜ける。カレンは身をかかわしたが、頬に一筋の血が浮かび上がった。

「ゲゲ、うまく避けたな」

「思ったよりも攻撃範囲が広いようで」

今度はカレンが踏み込んで、ショートソードを振り下ろした。トカゲはそれを腕で受ける。鱗が一枚飛んだが、それだけで大したダメージはない。カレンはすぐにバックステップで距離をとり、トカゲの反撃をかわす。

そこで出来た隙を見逃さず、カレンは投げナイフを放った。それはトカゲの目に突き刺さり、聞き苦しい絶叫が響き渡った。

「ボ、ボォノレエ！」

トカゲはナイフを抜いてそれをカレンに向かって投げつけた。だが、それはあらぬ方向に飛んでいって地面に落ちた。

「反応はいまいちか。まあ元がアレだしな」

アデーレはすでに落ち着いて戦いを見ている。

「その程度ですか？ 見かけだおもしろいところじゃありませんか」

「ボォノレボォノレエエエエエエエエエ！」

カレンの挑発にトカゲが吼えると、傷ついた目のちかくの皮膚が裂け、そこから新しい目が飛び出してきた。

「げえ」

アデーレはその気持ち悪さに唾を吐き捨てた。だが、カレンはそれ気持ち悪いものから目を逸らさない。そして、そこにイシルドが戻ってきて、何かを言おうとしたが、アデーレに止められる。

「黙って見てなよ。あんな化物にやられるような奴じゃない」

「しかし相手は」

「できそこないだろ」

その一言でアデーレは再び戦闘に目を向ける。イシルドは自分の銃を抜いていつでも撃てるようにして、同じように様子を見ることにした。

「ゲレゲレゲレ、どうだ、お前の攻撃じゃ俺を倒せないのはよくわかっただろオ」

「そうですね、普通にやっていたのでは時間がかかりそうです。なので」

カレンがショートソードを軽く振ると、その軌跡にかすかに雷光が走る。

「一撃で決めることにします」

それから、突き出されたその刀身は激しい雷を帯びた。トカゲその光景に怯み、カレンは一気に距離を詰める。

「ギョワワワワアアアア！」

それが胴を一閃し、トカゲは絶叫を上げた。そのまま全身を痙攣させ、その場に崩れ落ちた。ショートソードが直撃した場所は黒焦げになっていて、見るからにすでにどうにもならないような有様だった。

そこにアデーレとイシルドもやってくると、トカゲの身体が霧に包まれ、数秒してそれが消えると、もとの男の姿に戻っていた。トカゲの時の外傷は消えていたが、ダメージはあるようで、虫の息だった。

カレンはショートソードを鞘に収めてから、男から契約書を取り上げ、ベルトにはさむ。それから立ち上がり、アデーレのを見た。

「これで私とあなたが戦う理由はなくなりましたね」

アデーレはそれに思わず笑い出した。

「ハハハッ！ そうだな、あんたと本気でやりあいたいとは思わなくなったよ」

それから、イシルドに顔を向ける。

「イシルド、あんたの話も聞かせてもらおうか。こんな面白い奴とどうして知り合ったのかとかな」

「わかった。それよりこいつはどうするんだ？」

イシルドは倒れている男を指さした。

「とりあえず運んで、話を聞きましょうか。色々知っていそうですし」

「わかった」

イシルドはため息をつくと、男を担ぎ上げた。

「そうだ、そういえばさっきの爆発はなんだったんだ？」

「ああ、あれは狙撃の奴のライフルを俺が撃って、それが暴発したんだ」

「相変わらずいい腕だな。まあ、話は後でだ」

「はあ、ここねえ」

娼館を前にして、アデーレは呆れたような声を出した。

「なにしてる、入るぞ」

イシルドは男をかついだままドアを開けた。カレンもそれに続き、アデーレもため息をついてからそれに続いた。

中に入ると、待ち構えていたユースがカレンに飛びついてきた。

「おかえり！ 約束通り！」

「ええ、思ったよりも大変でしたが、なんとかなりました」

それからユースはカレンから離れ、イシルドが担いでいる男を見る。

「そいつは？」

「色々聞きたいことがあるので連れてきました。ウィゼはどこに？」

「呼んでくる」

すぐにウィゼがやってきて、三人の様子を見ると、うなずいた。

「食堂を使いな」

「ありがとうございます」

カレン達三人は食堂に入り、イシルドは担いでいた男を椅子に座らせて。男は相変わらずぐったりしていたが、カレンがそれに近づき、髪をつかんで男の顔を上に向かせた。

「今から質問するので、答えられますよね」

男は何も反応しようとしませんが、カレンはさらに男の髪を引っ張る。

「死んだふりをしてでも無駄ですよ。頭を動かすくらいはできるでしょう。できないというなら、無理をしてでもやりたいようにしてあげましょうか？」

カレンの言葉は静かで落ち着いた調子だったが、不気味な冷たさもあった。男はそれに怖気ついたようで、目を開けるとゆっくりと首を横に振った。

「や、やめてくれよ。何でも話すから」

「いいでしょう」

カレンはそう言ってから、イシルドとアデーレに視線を向けた。

「何かこの男に聞きたいことはありますか」

それにはまずアデーレが口を開く。

「じゃあ俺からだ。お前、どこの吸血鬼からあの力を与えられた？」

「知らない」

「はあ？ そんなわけがないだろうが」

「本当に知らないんだ。うちのボスに連れられて、目隠しされた状態でもらったんだよ。嘘じゃない、本当だ信じてくれ」

男は必死な様子だったが、アデーレは疑っているようだった。

「それにしてもノリが良かったよな」

「それは、いや誰だってあんな力を手に入れればそうなるだろ」

「なるかよ」

アデーレは呆れたようだった。それからイシルドがそれを引き継ぐ。

「お前以外で眷属にされた奴はいるのか？」

「知らない。でも多分いるはずだ」

「本当に知らないんですか？」

カレンが髪をつかむ手に力を入れる。男は慌てて否定した。

「本当だ、本当だよ。俺は知らない」

「そうですか」

それだけ言ってカレンは手を放した。

「ところで、この男のあの力はまだ有効なのでしょうか」

その質問にはイシルドが答える。

「いいや、あの姿になったらあんたに負わされた傷が戻るから、もう無理だな。死ぬ気なら可能だろうが」

「そういうことでしたら、心配はなさそうですね。しかし、放っておくのもいいとは思えません」

カレンの一言に男は縮み上がって、自分の頭を抱えた。

「やめてくれよ！ 俺は、俺は」

「言い訳を聞く気はありませんね」

カレンはナイフを抜いた。だが、それはアデーレが止める。

「よしなよ、イシルドの言う通り、こいつにはもう何もできやしない」

カレンはアデーレその言葉にナイフを鞘に収めた。

「そこまで言うなら、ここで始末するのはやめておきましょう。不衛生ですしね」

男はあからさまに安堵した様子を見せた。

「後はてきとうに放り出しておきましょうか。おそらく利用価値もないでしょうから」

「それでいいのか？」

イシルドの言葉にカレンはうなずく。

「わかった、じゃあこいつは俺が捨ててくる」

「お願いします」

イシルドが男を無理やり立たせて外に連れて行くと、アデーレはにやりと笑ってカレンの顔を見た。

「あんたは芝居がうまいんだな。で、まさかこのまま放っておくことはないだろ」

「そうですね、明日あたりあの連中のアジトに顔を出したいところです」

「いいねえ、俺も付き合ってやろうか？」

「そういうことでしたらお願いしたいですね。ところで、イシルドさんとはどんな知り合いなんですか？」

「何度か一緒に組んだことがあるんだよ。まあ、あいつは腕は立つしい奴だよ。でも、あいつは組んでた相棒がいたはずなんだけどな」

そしてしばらくしてから、イシルドがなぜか一人の少女を背負って戻ってきた。

「おいおい、今度はなんだよ」

「この娘が外で行き倒れてたんだ。放っておくわけにもいかないだろ」

「少し見せてください。それから、少し出ていてくれますか？」

「わかった、頼む」

カレンはイシルドから少女を受け取り、その前に素早く並べていた椅子にその身体を横たえた。イシルドが出て行ってから、カレンは慎重にその少女の身体を探り傷がないのを確認する。

「特に傷はないようですね。疲労で倒れていたのかもしれませんが」

「じゃあ寝かせときゃ大丈夫ってことかい」

「そうですね、ベッドを借りられるなら、そこで寝かせておくのがいいでしょう」

しかし、そこで少女はゆっくりと目を開けた。

「目を覚ましたみたいだぜ」

「ええ、わかりますか？」

カレンは少女の手を握って優しく声をかけた。

「誰？」

「カレン。怪しい者ではありませんよ」

「ここは？」

「娼館ですが、心配することはありません。私はとりあえずこの用心棒ですね。何か食べるものは要りますか？」

「うん」

少女はうなずいた。カレンは微笑を浮かべてから少女の手を放し、何か食べるものを探しに行った。アデーレはその場で黙って少女の観察をした。

少女は髪は短く、行き倒れただけあって、だいぶやつれている。服もみすぼらしい。ちょうどそこにカレンがパンと水を持って戻ってきた。

「どうぞ」

少女はすぐにそれを受け取り、勢い良く食べ始めた。

「落ち着かないと喉に詰まらせますよ、水も飲まないよ」

少女はその言葉にうなずき、水とパンを交互に口に運んだ。それを全部食べ終わる頃には、イシルドも部屋に戻ってきていた。

「そろそろ、名前を教えてくださいませんか」

カレンが問いかけると、少女は手についたパンくずを舐めてから口を開く。

「ルミ」

「ではルミ、あなたはどこから来たのですか」

「わからない。どこか、遠く」

「遠く、ですか。そこからどれくらい時間をかけてここに来たかはわかりますか？」

「わからない。気がついたらここに来てた」

二人のやり取りにイシルドとアデーレは顔を見合わせた。だが、カレンは微笑を浮かべると、ルミの頭を撫でる。

「大変な目にあったんですね、ルミ。詳しい話はまた明日にして、今日はゆっくり休みましようか」

ルミはカレンを見つめていたが、しばらくしてからうなずいた。

「うん、そうする」

アジト

翌日、カレンはルミをウィゼに預けて娼館を出た。アデーレだけが一緒に、イシルドはすでに別に出かけていた。

「まさか、こんな真昼間にあの連中のアジトに殴り込みをかけるのか？」

「そうですね、とりあえず見ておこうと思うので案内してください」

「わかった、面白そうだしな。ついてきな」

アデーレはカレンを先導して早足で歩いた。それからしばらくして二人は高級そうな住宅街に足を踏み入れる。

「思ったよりいいところにあるんですね」

「まあ、この町を仕切ってる連中だからな。そりゃ高級な家だって欲しくなるだろ」

「それもそうですね」

「ほら、ついたぜ」

豪華な門に門番が立っている、まるで要塞のような豪邸だった。

「また悪趣味な屋敷ですね」

「まあな。センスがありゃもっとそれっぽいところにアジト構えるだろうし」

「そうですね。では、軽く挨拶を始めましょうか」

カレンは何気ない様子で門に近づいていき、いきなり一人を打ち倒した。そしてもう一人も簡単に意識を刈り取る。それから鍵を奪うと、すぐに門の隣の通用口を開けて中に入った。

「これが軽くか？」

アデーレは倒れた二人を見てから、カレンに続いて中に入っていく。巡回していたらしい武装した傭兵風の三人が侵入者に気づいて拳銃を構えた。

「止まれ！」

当然カレンは止まらずに、三本の投げナイフを一気に投げて、それぞれの拳銃を手から落とさせた。カレンは隙をみせた二人、アデーレは残りの一人を倒す。

「で、これからどうするんだよ」

「中に入ります。警備が厳重なほうに進んでいけば、ここのボスというのにも会えるでしょう」

「そりゃいい考えだ」

アデーレは銃を手の中で回してからカレンの後に続いた。豪邸の中は静かで、あまり人の気配がしない。

「少し、妙な気配ですね」

「ああ、やばい感じがするぜ。ここは普通じゃない」

カレンはショートソードを抜き、アデーレも銃を右手に持った。二人はそのまま進んでいくが、予想と違い警備とは遭遇しなかった。

「困りましたね。これでは、どこに向かえばいいのかわかりません」

「困ってなさそうだな。あてがあるのか？」

「妙な気配をたどれば何かに遭遇できるでしょうから」

「すごい勘だな。まあいいか」

それからカレンを先頭にして二人が進んでいくと、妙にごてごてして巨大な扉の前に出た。それを見てアデーレはため息をつく。

「こりゃまた、いかにもだな」

「悪趣味でいいですね」

そう言ったカレンが扉に手を触れると、それはあっさりと開いた。中には霧が立ち込め、その奥には人影が一つ。

アデーレはいきなりそれに向けて一発銃弾を打ち込んだ。だが、人影は少しも揺らがない。

「ちっ、こいつ」

アデーレの舌打ちと同時に霧が晴れていき、そこから人影が踏み出してくる。

「不躰な連中だ」

その人影、上品そうな物腰と容姿の中年の男はカレンとアデーレを見てわざとらしいため息をついた。

「あなたは？」

「見てわからないかね？ 私はデズル、ここのボスとでも言えばいいのかな」

「そうですか、あなたには聞いておきたいことがあります」

「何かね？」

「あなたが、あの吸血鬼の眷属を作ったのですか？」

「ふむ、そうだったらどうするかね」

カレンはショートソードをデズルに向けた。

「少し付き合ってもらい必要がありますね。あなたの部下のこともありますから」

「そうか、あれを倒したのは君達か。おもしろい」

そして、デズルは一步踏み出す。カレンはそれに応じるように一步踏み出した。

「あなたは吸血鬼ですか？」

「いや、こいつは違うぜ」

デズルに答えさせず、アデーレがカレンの前に出た。そして残りの銃弾を一気に叩き込む。全ての弾はデズルの腹に命中し今度は一步後退させる。

「本物の吸血鬼だったら、こんな普通の弾は全然効かないはずだよなあ。それなら」

アデーレは銃を腰のホルスターに収め、腰の後ろのホルスターから銃を抜く。それは今までの銃とは違い、銃身に何かの文字が刻まれている。そして、一発の銃弾が放たれた。

「な、なに？」

デズルは右肩を手で押さえた。指の間からは血が流れ出している。

「こいつは吸血鬼にだって効くんだが、眷属なら一発でもかなり効くだろ？」

そう言いながら、アデーレはさらにもう一発、今度は左ひざを撃ち抜いた。デズルは立ってられなくなり、その場に膝をついた。

「なぜ、ぐううう」

「意外そうな顔だな。まあ上級と言っても、眷属じゃその程度だ。相手が悪かったな。それじゃあ、あんたを眷属にした奴について教えてもらおうか。それとも、まだ撃たれたりないか？」

「ま、待て」

デズルからはすでに最初の余裕は消えていた。

「じゃあ少しだけ待ってやる」

だがデズルは口ごもり、三秒後、アデーレは銃の狙いをデズルの眉間に定めていた。

「遅いな」

そして引き金が引かれようとした瞬間、カレンが横から腕をつかんで止めた。

「待ってください、まだ早いですよ」

「そうか？ 俺は無駄な時間ってのが嫌いなんでな。それに眷属を片付けていけばそのうち吸血鬼も出てくるだろ」

「それは効率が悪いやりかたです。それに、話さなくてもこの男には利用価値がありそうじゃありませんか」

「利用価値ねえ。わかった、とりあえず止めを刺すのはやめておくか」

アデーレは銃を下ろした。デズルはそれに明らかに安堵したようで、その場に座り込んだ。「では、この町にあるあなたの組織の拠点を教えてもらいましょうか。地図でもあると助かりますが」

「あ、ああ、それならその壁に」

デズルが指さす先の壁に、布でできたこの町の地図が張られていた。カレンはそれに近づいて行ってはがすと、折りたたんで自分のポケットに入れた。

「行きましょうか」

「こいつはこのままでいいのか？」

「もう大したことはできないでしょうし、無駄弾を撃つこともないのでは」

「それもそうか。じゃあな、長生きできるようにこれからはおとなしくしとけよ」

アデーレはにやっと笑ってから銃をホルスターに戻した。そしてカレンとアデーレはそこから立ち去っていった。

「ぐうう、おのれあいつら」

デズルはなんとか立ち上がり、部屋の奥に足を引きずりながら歩いていった。そして壁に手をつくると、そこが回転してデズルの姿はその奥に消えた

その先は小さな部屋で、壁は全て赤黒く塗られている。中心には燭台が置かれたテーブルがあり、デズルはそこに手をついた。

「この私を愚弄した罪、あいつらの命で贖ってもらおう」

「あれでよかったのか？」

豪邸から出たアデーレは後ろを振り返りながらカレンにたずねる。カレンはそれに前を向いたまま答えた。

「多少危険ではありますが、これであちらが積極的に動くようになれば、何か起こるでしょう。そうすれば手間は省けます」

「そんなこったろうと思ったよ。それで、これからどうする？」

「もっと追い込むために、あの組織の拠点を潰していきます。そうすれば、あちらも焦っていくでしょうし、私達の支援者も増えるでしょう」

「なるほど、そいつはいい」

アデーレはにやりと笑った。

「儲かりそうだし、俺も一枚噛ませてもらうぜ」

「ええ、それは助かります。では少し、宣伝に向かいましょうか」

二人がそうしている頃、イシルドは自分が撃たれた崖に来ていた。ほんの数日前の出来事が、今は妙に昔に感じられた。崖の淵まで歩きそこから下を覗き込むと、よくもほとんど無傷で助かったと思える情景だった。

「こんなところで何をしてるんだ？」

その声にイシルドはゆっくりと振り返る。

「アニエルド」

イシルドは静かにその男の名前を呼んだ。その視線の先の男、アニエルドは拳銃を腰のベルトの左右に身に着けていて、背中には長い剣を背負っている。

「もう一度そこから落ちたいのか？ イシルド」

「いいや」

「じゃあ、今度は俺をそこから落としたいか？」

「いいや」

イシルドは無防備なまま、アニエルドに向かって足を踏み出し、そのまま数歩歩く。

「俺はお前が何をやっているのか、それを知りたい」

「いいねえ、そうやって落ち着いてこそのお前だよ、イシルド」

「話をそらすな」

「ああ、わかったよ。探しものだ」

「探しものだと？ それが俺を裏切ったことと何の関係がある」

「邪魔になったからさ、お前の実力は俺が一番良くわかってるしな」

「つまり、お前は」

「ああ、そうだ。俺は狩るはずのものに惚れこんちまってな、どうしてもあいつらに、吸血鬼に近づきたい」

そういうアニエルドは遠くを見るような目をして、芝居のように両手を広げた。

「そうか、そういうことなら」

イシルドはサーベルを抜いた。

「お前は今ここで倒す」

「そう言うと思った」

アニエルドは笑いながら背中の中剣を抜いた。先手はイシルドで、サーベルを上から振り下

ろす。アニエルドはそれを長剣で受け、逆に押し込んでみせた。

「元気じゃないか、イシルド。とてもここから落としてやったとは思えない」

「運がよかったらしくてな、自分でも不思議なくらいだ」

「それなら次はしっかりと止めを刺さないとな！」

アニエルドは力を込めてさらにイシルドを押し込もうとしたが、それはイシルドが後ろに跳んだことで空振りになる。

イシルドはそこに突きを放つが、アニエルドは勢いのまま地面を転がってその一撃をかわすと、すぐに立ち上がって後ろに下がり、長剣を両手で構えなおした。イシルドもすでに身体の向きを変え、右手でサーベルを中段に構えている。

二人はその構えを維持したまま、円を描くようにゆっくりと動く。そして、二人は同時に地面を蹴った。二本の剣が火花を散らして激しく打ち合い、一度離れると、さらにもう一度剣がぶつかりあう。

「少し勢いが足りないんじゃないのか？」

「それはお前もな！」

二人はもう一度同時に後ろに飛び退くと、イシルドはサーベルを左手に、アニエルドは長剣を右手で持ち、ほぼ同じタイミングで空いた手で拳銃を抜く。

「どうした、撃たないのかイシルド？」

「お前のほうこそ撃たないのか？」

それから一拍おいて、二人は同時に横っ飛びをした瞬間、互いに一発ずつ撃った。どちらの銃弾も逸れていき、二人は素早く身体を起こすと、膝をついた状態で向かい合う。

だが、アニエルドは長剣を放すと、ベルトから煙幕弾を取り出して地面に投げつける。弾が炸裂すると、あっという間にその場に白煙が立ち上ってその姿を隠した。

「今回はここまでだ。お前との決着はまた後でだ、じゃあな」

「待て！」

イシルドは銃を構えたが、結局撃つことはせず、白煙が晴れてからホルスターに戻し、サーベルも鞘に収めた。

それからイシルドが町に戻っていくと、なにやらそこは騒がしかった。騒ぎのする方向に歩いていくと、周囲に何人かの武装した人間やそうでない人間が周囲に倒れている小さな小屋を、野次馬が取り囲んでいる。

「何があったんだ？」

「何がって!？」

手近な野次馬をつかまえると、その野次馬は興奮した様子で口を開く。

「物騒な女の二人組がそこに入っていったと思ったら、いきなり中で乱闘が始まったらしくてさ、ここはくそったれごろつきの溜まり場だったんだけど、中からどんどんそこら辺に倒れてるごろつきが叩き出されてきたんだ。いい気味だよなあ」

「それからその二人組はどうしたんだ？」

「ああ、それなら向こうのほうに向かったらしい」

「そうか」

イシルドはすぐに男の指差した方向に歩き出した。

「あの二人だな。戦争でも始めたのか」

そうつぶやいてイシルドが足を速めると、今度は商店が立ち並ぶ通りの真ん中に人だかりが出来ていた。イシルドがその中に入っていくと、やはりそこでも前と同じように何人もの武装した

人間やそうでない人間が倒れている。

「これをやった二人組みはどこに行ったかわかるか？」

「それなら向こうらしいけど」

「そうか、ありがとう」

イシルドはすぐにその場から離れ、教えられた方向に向かう。そこはこの町の中心近くで、役場などもあって、本来なら静かな場所だった。

だが、今そこは戦闘の現場になっていた。しかし、それは落ち着いて見ると、戦闘というよりはほぼ一方的な蹂躪だった。

その中の主人公とも言える二人、カレンとアデーレは素手で最後に残っていた武装した者達を打ち倒していた。

イシルドはすぐにそこに駆け寄る。

「お前達、一体何を！」

「ああ、イシルドか。どうした、そんなに焦って」

「焦りもするさ、一体何をやってるのか聞いているんだよ」

「この町を開放しようと思ひまして、少し荒療治をしているところです」

カレンは全く息を乱さずに落ち着いた様子で、答えた。

「たった二人でか」

「そうですよ」

カレンはそう言ってから周囲を見回す。

「戦果は確実に上げていますし、問題も今のところありません」

「しかし！」

「おっと、待てよイシルド」

アデーレが二人の間に入り、にやりと笑った。

「お前も付き合いよ。こいつはいい儲けになるぞ」

「儲けて、誰が金を出すって言うんだ」

「この町の住人に決まってるだろ。もうけっこう好意を受けとったりしてるんだぜ」

そうしてアデーレは貨幣が詰まった袋をベルトから取り、イシルドの前で振ってみせる。だがイシルドは首を横に振ってため息をついた。

「まったく、賞金稼ぎってやつは」

だが、すぐに真剣な表情になると目の前の二人を交互に見た。

「わかった、俺も付き合いおう。最近のこの町は息苦しかったしな」

地下

カレンにアデーレ、さらにイシルドを加えた三人は、今度はこの町の貧民街に向かっていった。

「貧民街に何があるんだ？」

「地図によると、地下に色々と存在しているようですから、そこを探索してみます」

「地下？ そんなところがあるのか」

「まあ、連中のボスの部屋から取ってきた地図だからな、確かな情報だろ」

アデーレはそう言って残り二人の前に立ってどんどん進んでいく。そして三人が貧民街に到着すると、そこには情報が周っているのか、武装した傭兵が十人ほど待ち構えていた。

「意外と対応が早いようですね」

カレンはナイフを抜いてすぐに前方に走り出す。傭兵の持つ銃が撃たれるがそれを弾いて、カレンはナイフの峰でその傭兵達を次々と殴り倒していく。それにアデーレとイシルドも加わり、あっという間に制圧をした。

「入口は、こちらですね」

それを放置して、カレンは地図を見ながら進んでいく。

「ここですか」

何の変哲もないボロ小屋の前でカレンは立ち止まった。とりあえず無言でドアを蹴り破る。中は無人で何も無かったが、カレンは部屋の中心に行くと思われていた取っ手を掴み、その扉を持ち上げると隠されていた階段が姿を現した。

「暗いな、明かりがあったほうがよさそうだ。探してくる」

イシルドは一度外に出て行き、すぐにランタンを二つ持って戻ってきた。カレンはそれを受け取ると、先頭に立って階段を下り始めた。

しばらくすると階段は終わり、予想外に広くしっかりとした通路に出た。明かりもある程度はあったが、薄暗いのでカレンは慎重に進んでいく。

「こんだけのダンジョンがあるなんてな」

アデーレは石の壁に触りながらつぶやいた。

「確かに、これほどとは思っていませんでした。しかし、嫌な空気ですね」

「そうだな、ここには妙なものがあるさ。気をつけたほうがいい」

イシルドはそう言うとサーベルを抜いた。それからしばらく歩くと、鉄の扉が左右に向かい合っている場所に到着した。

カレンはランタンを地面に置いてからまずは右の扉に近づいた。取っ手をつかみ、軽く押ししてみると意外と軽く扉は動き出し、カレンは一度手を止める。それから後ろの二人に目配せをすると、そのまま扉を慎重に押し開けた。

そこに銃を構えたアデーレがまず踏み込み、室内を素早く確認する。その部屋はそこそこの広さだったが、人影はなく、あるのは武器の類ばかりだった。

「ここは武器庫か」

アデーレは銃をしまうと、置いてある剣や銃を調べた。

「けっこう手入れされてるな、人の出入りはあるらしい」

「そのようですね、しかし、これだけの武器を準備しているというのは驚きです」

「戦争でも始めようってのかね」

アデーレはライフルを手に取り、それに火薬と弾を込め、雷管も装着させた。

「せっかくだから貰っていくか。イシルド、お前もなんか持ってけよ」

「そうだな」

そしてイシルドもアデーレと同じようにライフルを手に取った。それから三人は向かい側の扉の前に立った。

今度もカレンが扉に手をかけ、ゆっくり押し開き、イシルドがライフルを構えて最初に中に入る。一瞬その身体は緊張したが、すぐに落ち着いてライフルを下ろした。

カレンとアデーレも中に入ると、そこにはいくつかの檻があり、人間とも獣ともつかない白骨が散らばっていた。

「なんだこれ」

アデーレは檻に近づいて白骨に顔を近づけた。

「なんでしょうか？ イシルドさん、わかりますか」

イシルドはライフルを置いて檻の中の白骨をよく見る。

「眷属の失敗作かもな。必ず成功するわけじゃなくて、失敗することもあるというのは聞いたことがある」

「しかし、ここには五体ほどありますし、眷属というのはこれ以上いるということですね」

「そうだな、失敗が多いというのは聞いたことがない。厄介なことになりそうだ」

「そうですね。この先は気を引き締めて行くべきでしょうか」

カレンは廊下に戻るとランタンを持って再び先頭を歩きだした。しばらくするとまた同じように左右に鉄の扉がある場所に到着する。

「またか」

「いいえ、妙な気配を感じます」

カレンは自分のショートソードを抜き、慎重に扉に近づいていく。あと数歩という距離になった頃、いきなり左右の扉が開いた。そして、そこからは全身を鱗のようなもので覆われた人間がそれぞれ一人づつ姿を現す。

「こいつら、吸血鬼の眷属か！？」

「そうだ！ しかし完全じゃない」

「早く片付けるべきですね。下がっててください」

カレンはランタンをアデーレに手渡すと、ショートソードに雷をまとわせ、一気に眷属に近づくと、一撃でその二体を倒した。カレンは手で後ろの二人に合図をすると自分は右の扉に飛び込む。

その中には二人の人間がいたが、カレンの姿を認めると手を上げて抵抗しようとしなかった。

「お、こっちは二人いたのか」

そこにアデーレが入ってきた。

「そちらはどうでした？」

「一人だけだった。まるで抵抗しなかったけど、それはこっちも同じみたいだな」

「そうですね。さて、あなた達はここで何をしていたのか教えてもらいましょうか」

カレンが両手を上げている二人に視線を移すと、その二人はほとんど同時に首を横に振った。

「み、見逃してくれ！ 私達はここに無理やり連れてこられただけなんだ」

「どういうことですか？」

「それはこっちが聞きたい、それよりもここから逃がしてくれ」

「その前に先ほどこの部屋から出てきたものについて、知ってることを話してもらいましょう」

「いや、それは、それはああうううううううう」

いきなり男が悶え始め、その身体に鱗が浮き上がってくる。カレンは素早く動いてまだ生身の

首筋をショートソードの柄で打った。

男は前のめりに倒れて身体の変化も止まった。もう一人の男も変化し始めていたが、アデーレはすぐにカレンと同じように銃床でその男の意識を刈り取った。

「これはどういうことでしょうか」

「さあ、イシルドなら何か知ってるかもしれないぜ」

そう言ってる間に、イシルドが意識を失った男を抱えて部屋に入ってきた。その男は少しも変態していなかった。イシルドは倒れた男二名を見て、うなずくと抱えていた男を壁に寄りかからせる。

「イシルドさん、これがどういうことかわかりますか？」

「呪いの一種だな。上級眷属はこういった不完全な眷属になら人間を変えることができる。まあ俺も実際に見るのは初めてだよ。こんなことをやったらその上級眷属はどんどん力を失うはずだからな」

イシルドの説明にアデーレは手を打ち合わせる。

「ああ、あいつだな」

「誰だ？」

「この町を仕切ってるボスっていう奴だよ。ちょっと前に痛めつけておいたからな」

「そうだったのか。しかし、なんだこんな地下で人を集めていたのか」

「夜になったら町に解き放つつもりだったのではないのでしょうか。私達の行動は予想していたかもしれませんが、自分の組織の力を誇示して、支配を緩めないという目的にはちょうどいいのでしょうかから」

「そうかもしれないな。とにかく奥に進めば、何か見つかるかもしれない。急ごう」

「そうですね」

カレンはうなずき、ランタンを手にとると再び先頭に立って部屋から出て歩き出した。

ダンジョンは予想以上の広さで探索はそれなりに時間がかかっていた。だが、その間、眷属とは出会わず戦闘はなかった。

「しかし、嫌になるほど広いな」

「そうですね、奥に行くほど広さも増しているようですし、中々厄介な場所です」

「いや、もうすぐ終わりだろう。いくらなんでも」

三人は会話をしながらも、警戒は怠らずに進んでいった。そして数分後、装飾が施された大きな扉の前に到着していた。

「ここが終点のようですね」

カレンがそう言うと同時に、扉がわずかに開いた。そこからは光りが漏れてきている。アデーレは一步踏み出した。

「これは誘ってるな。面白いじゃねえか」

アデーレはそのまま扉に近づくと、カレンもそれに並んで、二人でゆっくりと扉を押し開ける。その先には多くの灯りと椅子が並んでいて、まるで礼拝所とでも言うべき雰囲気のある場所だった。

「ようこそ、諸君」

その一番奥、一段高くなっているところに一人の男が立っていた。アデーレはそれを見て盛大にため息をついた。

「なんだ、あんたかよ」

それはデズルだった。しかし、アデーレに撃たれた傷はなくなっている。

「どんな手品を使ったのか知らないが、傷がなくなったくらいでお前に何ができる？」

「それはどうかな？」

デズルは満面の笑みを浮かべて軽く片手を上げた。すると、右側面の壁が崩れ、全身が鱗に覆われた五体の眷属が姿を現した。イシルドはデズルにライフルの銃口を向けている。

「これはお前の力ではないだろう。この力を与えた者はどこにいる」

「ほう、この私の素晴らしい力がわかるのかね？」

「素晴らしいだと？ 吸血鬼の力は人間が持つべきものじゃない」

「そうかね、それは並の人間ならだろう」

「お前は並以下らしいな」

「くっ、かかれ！」

デズルが手を振ると五体の眷属が一斉に動き出した。だが、カレンとアデーレがその前にすぐに移動する。

「イシルド、あっちの馬鹿はあんたに任せた」

「こちらは心配の必要はありませんから」

イシルドはうなずくと、ライフルを構えたままデズルに近づいていく。

「ほう、そんなライフルで私がどうこうできるとでもおう！」

銃声が響き、しゃべっている途中のデズルは頭を仰げ反らせた。

「き、貴様！」

デズルの額は無傷だったが、感情は傷つけられたようだった。その様子を見てイシルドはライフルを捨て、右手でサーベルを抜いた。

「そろそろ本職の俺がしっかりやらないとな」

デズルはそれにかまわずにイシルドに噛みつこうとした。その瞬間、イシルドの銃が光り、そこから一発の銃弾がその口内に放たれる。

「ゲゲッポ！」

デズルは喉を貫かれ、後ずさった。その隙にイシルドは銃をホルスターに収め、その右手の指でサーベルの刀身を根元からなぞった。指に追従するようにサーベルの刀身が光を発し、刀身全体が光に包まれる。

「これで終わりだ」

サーベルが振るわれた瞬間、そこに二発の銃弾が飛来してそれが弾かれた。

「そいつの始末はまだ早いぜ」

その声と同時にデズルの胸を長剣が貫いていた。イシルドは体勢を立て直すと、その長剣の主の正体にすぐに気がつく。

「何をしに来た！ アニエルド！」

デズルをその右手の長剣で貫いているアニエルドはにやりと笑った。

「ちょっとしたものの回収にな」

そして長剣をデズルの身体を抉るようにして引き抜いた。その剣の先には赤く、血に塗れた小さな宝玉のようなものがあった。アニエルドはそれを手に取ると、口に入れて飲み込んだ。

「こんな雑魚に力を与えるとは、吸血鬼にも物好きがいるもんだ」

そう言うと、アニエルドは残りの銃弾全てをデズルの身体に撃ちこみ、その場から走り去っていった。イシルドはそれを追わずに倒れたデズルの様子を見る。

「そいつ生きてるのか？」

アデーレは聞くが、イシルドは首を横に振った。

「駄目だな。もっと話を聞きだしたかったが。眷属にされてた奴はどうだ？」

「大丈夫なようです、全員元の人間の姿に戻っています」

「そうか、とにかくそいつらをここから連れ出して、後のことはそれからだな」

人間と吸血鬼

イシルド達三人は、眷属化させられていた人間達を地表まで連れて行き、とりあえず一息ついていた。

「イシルド、お前の相棒だよな、あの男」

「ああ、元、だけどな」

「何が目的かはわかっているんですか？」

カレンの質問にイシルドは首を横に振った。

「正確にはわからない。予想はついてきたが」

「予想というのは、なんでしょうか」

「あいつがあの男から抉ったものを食ったのを見ただろう。あれはアニエルドの能力で、眷属や吸血鬼の力を凝縮できるんだ。今までは破壊してただけだったが」

「それを食っちゃったってことは？」

「力を自分に取り込んだらだろうな。そんなことができないはずだったが、きっとあいつはそれを見つけたんだ」

イシルドはそこまで言うと、カレンとアデーレを見た。

「これは俺とあいつの問題だ。だから決着は俺がつける」

イシルドは二人に背を向け、足早に立ち去っていった。アデーレはそれを見送ってため息をつく。

「真面目な奴だな。ま、こっちはこっちで後始末を始めるか」

「そうですね、あの組織はほとんど力を失ったでしょうから」

「金はがっぼりだぜ」

「その話もつけに行きましょう」

カレンとアデーレもその場を離れた。

そして時間は経って夕方。カレンは一人で娼館に戻ってきていた。中に入るとウィゼが立ち上がってカレンを迎える。

「あんた、大変なことをやらかしてきたみたいだね」

「もうここにまで噂が広まってましたか」

「そりゃ、あんだけのことをやればそうだろうさ。無茶をしたもんだ」

「それほどでもありませんでしたよ。私一人ではありませんでしたし」

「はあ、まあこれ以上言ってもしょうがないか。それより、今夜の仕事はどうするんだい？」

「もちろんやりますよ」

「それなら頼むよ。奥に夕食は用意してあるから、先に食べておきな」

「ありがとうございます」

カレンが奥の食堂に行くと、そこにはユースとルミがいた。ユースはカレンのことを見るとすぐに立ち上がる。

「カレン！ ウィゼから聞いたけど、大活躍してたんだって？ 詳しく聞かせてよ」

「少し暴れた程度で大したことはありませんよ。それより、ここでは何か変わったことはありませんでしたか？」

「ううん、別に。このルミっていう子も、わからない、だけで何も話さないで食べてるだけだし」

「そうですか」

カレンがルミを見ると、ユースの言った通りに、今もパンをもくもくと食べている。

「ずっとあんな調子なの」

カレンはルミの後ろにまわって、その肩に手を置いた。ルミはパンをくわえたまま振り返ってカレンのことを見上げる。

「何か思い出しましたか？」

ルミは首を横に振ってからパンを皿に戻した。

「わからない」

カレンは微笑んでうなずくと、ルミの肩を軽く叩いて手を放した。ルミは再びパンをかじり始め、ユースはカレンの横まで来た。

「ね、言った通りでしょ」

「元気はあるようですから、そのうち大丈夫になるでしょうね」

「それよりさ、まだ仕事までは時間があるし、あっちでお話しようよ」

「ええ、いいですよ」

それからカレンはユースとしばらく話をして、娼館の営業が開始されると入口横の椅子に座った。しばらくの間は何事も起こらなかったが、ウィゼが前と同じようにハイデルを連れてきた。

「カレン、またこの人を送っていつてくれるかい」

「はい」

カレンは立ち上がり、ハイデルと一緒に娼館を出た。しばらくは無言だったが、ハイデルはおもむろに口を開いた。

「君の活躍は聞いたよ、この町の救世主なんて言われているようだね」

「大したことではありません」

「いやいや、大したものだよ。私からもお礼を言わせてもらうよ、ありがとう」

「なぜハイデルさんが？」

「私はこの町の住人だよ、これでもっとこの町は栄えるだろうし、いいことではないかね」

「それはそうですね。しかしハイデルさん、あなたは人、ですか？」

カレンの突然の問いにハイデルは少し驚いたような表情を浮かべたが、すぐに楽しそうな笑顔を浮かべる。

「鋭いね、君は。いつから気づいていたのかな」

「最初からですが、今日色々見たので、はっきりとわかりました」

「そうかそうか。しかし、君は何もしようとしなないね」

「あなたが害をなそうとする者には見えませんから。狙う者はいるかもしれませんが」

「なるほど、只者ではないと思っていたが、そこまで考えていてくれるとは、ありがたいことですな」

「少し話を聞かせて頂けますか？」

「かまわんよ、私の屋敷まで来るかね」

「はい、そうしましょう」

そうしてハイデルとカレンは夜の町を歩いて行った。

一方その頃、イシルドは貧民街に来ていた。夜ではあるが、様々な人間が動いていて、妙な活気がある。イシルドはその中を真っ直ぐに歩き、昼に潜ったダンジョンの近くまで到着した。そこは封鎖されている上に、警備までいて入ることはできない状態だった。

「物々しいよなあ」

突然背後からアニエルドの声がして、イシルドはその身を緊張させた。

「ここで騒ぎは起こしたくないだろ、着いて来いよ」

イシルドは黙ってアニエルドについていき、人気の無い場所で向かい合った。

「何の用だ」

イシルドの問いにアニエルドは肩をすくめる。

「まず落ち着けよ。俺の目的はこの町にいる吸血鬼だ」

「あの男に力を与えてた吸血鬼か？ そいつはどこにいる」

「いや、その吸血鬼ならさっき始末してきた。それなりに力のあるやつだったぜ。まあ俺の本命は他にあるんだが、それはお前で調べるんだな。結局、俺がやることは結局吸血鬼狩りだ、だから本当ならお前が心配することはないはずだぜ」

「お前はすでに眷属の力を取り込んでる、その上に吸血鬼もか。さらにもう一体となると、人間をやめるつもりだな、アニエルド」

「だったらどうする？」

イシルドは銃を抜いた。

「そういうことなら、お前も俺が狩るべき存在だ」

「それはいい。そうなった時にはお前に狙われるほどになりたいもんだ」

アニエルドはそう言うと、イシルドの顔を見ながら、後ろに下がっていく。

「待て！ お前の言う吸血鬼はどこにいる！」

「それは自分で探すべきだろ、お前なら大して苦勞もしないんじゃないか？ 今のお前には腕の立つ仲間もいるみたいだしな」

そしてアニエルドは闇にその身を消していった。イシルドは銃をホルスターに収めると、ため息を一つついて、その場を後にした。

ハイデルはソファーに腰かけてグラスに注いだ酒を一杯飲んだ。

「さて、どこから話したものかな」

「今の状況の要点だけでお願いします」

「ふむ、それならば、君がこの町に現れる少し前から話そうか。私はこの町は気に入っていてね、それなりに長い間ここに住んでいるが、最近若い吸血鬼がこの町にやってきた」

そこでハイデルは酒を再びグラスに注ぎ、一口飲む。

「その吸血鬼は君が今日大体潰してしまった組織の人間に力を与え始めた。私はあまり色々なことに干渉したくないし、目立っていたので、そのうちハンターが来て収めるだろうと思っていた。だが、ハンターの二人組みが来てみると、そのうちの一人は意外な人物でね。私のような者の力を取り込む術を持っている、野心的な人物だった」

「その人なら私も見ました。油断のならない人物のように見えましたね」

「私も狙われているようだが、まあ、いざという時のために保険はかけている。それもどうなるかな」

「あなたは狙われているというのに、ずいぶん落ち着いていますね」

「私はこうした態度しか知らないのだよ。どうも定命の者とは感覚が違ってしまっていてね」

「そうですか。護衛は、必要ですか？」

「いや、それなら必要はないかな。君は君の仕事をしていればいいのだよ」

「いえ、そうも言っていられない状況になりそうですね」

カレンが立ち上がるとほぼ同時に爆音が響いた。数秒後、居間のドアが蹴り破られ、銃を構えたアニエルドが入ってきた。

「変わったお客さんですね」

カレンはアニエルドとハイデルの間に立ち、ナイフを抜いた。アニエルドはそれを見てかすかに笑う。

「イシルドと一緒にいた奴か、俺の邪魔はしないほうが身のためだぞ」

「そもいきませんね、今の私の仕事は用心棒なので」

「なるほどな、そういうことなら軽く相手をしてやるか」

アニエルドは銃を一発撃つ。カレンはそれをナイフで受けて弾こうとするが、少し押されるようにしてから、銃弾を弾くことができた。アニエルドはそれを見てにやりと笑う。

「やるな、だが、一発じゃなかったらどうだ？」

そう言うとは今度は三発の銃弾を撃った。カレンはその一発だけをナイフで弾くと低い姿勢で残りの二発をかわしながらアニエルドとの距離を詰める。

だが、アニエルドは床を蹴ってカレンの頭上を跳び越え、上から残り二発の銃弾をカレンに向けて撃った。

カレンはそれを身をよじって避けるが、そのぶん体勢を崩してしまう。その隙にアニエルドは銃をホルスターに収めると長剣を抜き、すぐにカレンに向けて突きを放った。

だが、カレンは体勢が崩れた状態からもナイフを投げた。それを長剣で払ったアニエルドは攻撃の手を止め、横に動いた。そして、いまだに座っているハイデルと体勢を立て直してショートソードを抜いたカレンの両方に視線を動かす。

「そっちの吸血鬼、お前は動かないのか？」

「私はこのまま君達を見させてもらうよ」

「いい根性だ。それなら待ち時間を短くしてやろう」

アニエルドはいきなり長剣に自分の右手首を這わせた。その傷から血が流れ出し、長剣が血に濡れていく。そして、アニエルドがその血を舌で舐めとると、その肌から血の気が引いていく。

「なんの芸です？」

「こうしたほうが取り込んだ力は使いやすくてな」

そう言ってうっすらと笑うアニエルドの犬歯は牙のように鋭くなっていた。次の瞬間、アニエルドの長剣がカレンに振り下ろされていた。カレンはそれをなんとか自分のショートソードで防ぐが、強引に力で押し込まれて膝をつく。

「なるほど、ただの手品ではないようですね」

「この状態でそんな減らず口がたたけるとは大したもんだよ、あんたは」

「光栄です」

カレンはショートソードを肩に当て、身体ごとアニエルドを押し返す。アニエルドは体勢を崩される前にバックステップをして距離をとった。カレンもショートソードを構えなおし、再びアニエルドと対峙する。

「君はすでに人間とは呼べそうにないね」

そこにハイデルが声をかけた。だが、アニエルドはわずかに首を横に振る。

「いいや、まだだ。だが、お前の力を手に入れれば、俺は完全に人間を越える」

「さて、そうかな」

ハイデルは静かに微笑む。だが、アニエルドがその意味を問う前にカレンは自らのショートソードに雷をまとわせた。アニエルドはそれを見て真剣な表情になった。

「そいつが切り札か。来いよ」

カレンは正面からその雷の剣をアニエルドに打ち下ろす。アニエルドは一撃目は長剣で受け流し、切り返しの逆袈裟は上から長剣で押さえつける。雷光が周囲にほとぼしるが、アニエルドは表情一つ変えずにカレンのショートソードを押さえ続ける。

「いい技だが、そいつじゃな！」

アニエルドはカレンに回し蹴りを入れた。カレンはショートソードを放すと、自分で飛んで衝撃を和らげたが、壁にぶつかってしまう。

そしてアニエルドはハイデルの方に身体の向きを変えると、一気に近づき、長剣でその胸を突き刺した。ハイデルは穏やかな表情のまま、それを受け入れる。

長剣が胸を抉るように動き、血に塗れた宝玉が取り出される。アニエルドはそれを口に入れて飲み込むが、すぐに意外そうな顔をした。

「どういうことだ？」

ハイデルは血を流しながらも、ゆっくりと微笑んだ。

「私の力がこの程度ということさ。残念だったね」

「そんなわけがあるか！」

アニエルドはそれまでの態度とは全く違い、声を荒げてハイデルに長剣を振り下ろした。血が飛び散り、肩に長剣が食い込む。だが、そこでアニエルドの肩に投げナイフが刺さった。

「ちっ！」

アニエルド長剣から手を放し、銃を抜いたが、それは一発の銃弾で弾かれた。アニエルドが首をまわすと、部屋の入口には銃を構えたイシルドが立っていた。

「何をしている」

アニエルドはそれで逆に落ち着いたようで、長剣を手にとると数歩後ろに下がった。

「その奴は吸血鬼だ。まあもう長くはないがな」

「なに？」

イシルドが一瞬ハイデルに気をとられると、アニエルドは背を向けて走り出し、ドアを突き破っていった。それから轟音が響く。イシルドはそれを追おうとしたが、それは立ち上がったカレンに止められる。

「追っても無駄です。それより、イシルドさんには話があります」

そう言ったカレンはハイデルの横に膝をついた。

「大丈夫ですか？」

「いや、大丈夫とは言えないだろうね」

「それならば、あなたが言っていた保険というものを教えてください」

「それは」

そこでハイデルは口から血を吐いた。だが、それでも言葉を続ける。

「すでに君たちの近くにいる。あの男を止めたいのなら、急いだほうがいいね」

それだけ言うと、ハイデルの身体は灰になって崩れた。イシルドはまだ状況がよく飲み込めないようだった。

「どういうことなんだ、これは」

「話は後です。今は娼館に戻りましょう」

イシルドはまだ何か言いたそうだったが、しばらくしてうなずいた。

「わかった」

カレンとイシルドは娼館に戻ってきていた。そこはまだ何も起こってないようで、特に変わった様子はなかった。カレンはとりあえず中に入り、まっすぐ食堂に向かう。イシルドもそれについていくと、食堂ではルミが椅子に座って眠っていた。

カレンはそこに近づき、そっとルミの額に手を当てる。

「確かに、今までとは違うものがあるようですね」

「どういうことだ？ まさか、この娘があの吸血鬼の言っていた保険、なのか」

「詳細はわかりませんが、おそらくそうでしょう。むしろこうしたことはイシルドさんのほうが詳しいと思いますが」

「保険か。いや、待てよ、そういえば長く生きた吸血鬼は自分の力の一部を独立させて、その力を元に新しく転生できると聞いたことがある」

「では、その転生に必要な力がこの子に宿っているわけですか」

「そういうことになるな。たぶん、アニエルドもすぐにこのことには気づくだろう。何か手をうつ必要があるが」

イシルドは腕を組んでそう言ってから、首を振ってため息をついた。

「この娘を殺せばいいのかもしれないが、それはできないな。俺は吸血鬼ハンターだが、害をなさない者を手にかけるのは主義じゃない」

「意外ですね」

「そうかもな。転生というのはこの娘の生が終わる時という話も聞いたことがある。しかし、それまでは人間なんだ」

「そうですか。では、アニエルドというあなたの元相棒を殺すことになりませよ」

「あいつは、もう人間としての境界を踏み越えた。元相棒としても、ハンターとしても放っておくわけにはいかない」

「強いですよ」

「それでもやるさ」

イシルドはそう言ってからルミの隣の椅子に座ると、銃を分解してテーブルの上に置いて、火薬と弾を装填し、雷管を装着した。それからイシルドは銃を手早く組み立て直し、腰のホルスターに収める。

「アニエルドをここで迎え撃つのはあまりしたくないな。ウィゼには世話になってるし」

「それなら、どうしますか？」

「不意打ちを防ぐためには、どこか開けた場所がいいだろう。あんたは別に付き合わなくてもいいんだぞ」

「ここまで来たら、最後まで付き合いますよ。アデーレさんにも連絡したほうがいいでしょうね」

だが、イシルドは首を横に振る。

「あいつは駄目だろうな。今頃酒でも飲んで寝てるだろう」

「それでも使いくらいは出しておくべきですね。仲間としては非常に頼りになりますから」

「そうだな、すぐに手配はしよう」

「私もウィゼさんにここを空けることを話してきます」

それからそれぞれやることをやって、二人は娼館の外で合流した。イシルドは目を覚ましたルミを背負っている。

「それで、これからどこに向かうんですか？」

「町の中心に広場がある。そこならちょうどいい」

「では、そうしましょう」

時間は経過して深夜。イシルドは広場の真ん中で立っていた。カレンはその少し後ろで、ルミの横に立っている。

その静寂の空間に一発の銃声が響き、イシルドの足元でその銃弾が跳ねた。そして、銃を持った人影がその広場に現れた。

「イシルド、お前も物好きだな」

アニエルドはそう言ってから、イシルドに数歩近づいた。

「さっきの奴も一緒か。で、そっちのガキは」

アニエルドは鋭い目でルミのことを見た。その目は赤い光を放っている。

「なるほどな、そいつが。それを渡せば、お前達を見逃してやってもいいぞ」

イシルドはその言葉に銃を抜き、一步踏み出した。

「いいや、これ以上お前を進ませるわけにはいかない」

「ほう、できるならやってもらおうじゃないか」

二人が同時に銃を撃つと、その弾丸は空中で激突した。そして二人は同時に銃を捨てると、それぞれの剣を抜き、正面から打ち合わせる。火花が散り、二人は睨み合う。

「もう俺を殺す気だな」

「そうするしかないだろう！」

「それでいい」

二人はそこで同時に後ろにステップした。イシルドはそこで自分の手首を長剣に滑らせ、その血を舐め取る。

「お前との遊びはここまでだな」

血の気が引き、白くなったアニエルドは一瞬でイシルドとの間合いを詰めると、その手のサーベルを跳ね飛ばし、その腹に正面から蹴りを入れた。

イシルドは後ずさって膝をつき、アニエルドはその横を通りぬける。カレンはショートソードを抜き、それを受けるが、勢いで数歩押された。

「また邪魔をするか」

「ええ、乗りかかった船です」

「後悔するぞ！」

アニエルドは回し蹴りを放ったが、予期していたカレンはバックステップでそれをすかした。そしてナイフを左手で抜くと、ショートソードとの双刀でアニエルドに攻撃をしかけた。

上段からショートソードを振り下ろし、それがかわされると、今度は左のナイフで間髪いれずに切りつける。だが、アニエルドはそれを素手でつかんだ。

そして、そこに背後からイシルドがサーベルを振り下ろす。

「うおおおおおおおおお！」

イシルドが咆哮を上げると、その衝撃でカレンとイシルドの二人は吹き飛ばされた。そしてアニエルドは真っ直ぐルミに向かい、その目の前で止まる。

「なるほどな、妙な力だ」

そうつぶやき、アニエルドは長剣を構えた。ルミはそれをぼんやりとした様子で見上げるだけで、その瞳には恐怖も興味もない。

その胸元にアニエルドの長剣が迫った。だが、それは何か不可視の壁のようなものに弾かれた

。

「なに!？」

アニエルドは驚愕の声を上げたが、すぐに長剣から放した手を伸ばしてルミの首をつかもうとした。それは何にも阻まれず、アニエルドはルミの首をつかんでその身体目の高さまで持ち上げる。

「驚かせてくれるな」

そうして長剣を再び突きだそとしたが、それは横から飛来した銃弾が肩に食い込み、ルミをつかんでいる手を放した。その隙にルミはそこからカレンのいる方向に走って逃げた。アニエルドが銃弾の飛来した方向に顔を向けると、そこには銃を構えたアデーレが立っていた。

「俺を呼ばずに盛り上がってるのは許せないねえ」

その一言を合図にしたかのように、カレンとイシルドも立ち上がり、それぞれ武器を構える。アニエルドはそれにたいして、特に焦る様子も無く、そして銃弾による肩の傷も全く気にせず、周囲の三人を見回した。

「よくも揃ったもんだ。これじゃあ俺も本当に人間やめないと」

そう言ったアニエルドは長剣を目の前の地面に突き刺した。すると、その足元から霧より濃いものが現れ、アニエルドの身体を覆っていく。

「ちっ！」

そこにアデーレが銃弾を撃ちこむが、なんの反応も手応えもない。そのうちアニエルドを覆っていたものは上に向かっていき、空の雲がそこを中心として渦を巻き始めた。

「これは」

カレンはそれだけつぶやき、ショートソードを構えなおす。

「気をつけてください！ 今までとは桁が違いますよ！」

そして、霧だけではなく、上空の雲ごと吹き飛ばしてアニエルドだったものが姿を現した。それは蝙蝠のような翼を生やし、透き通るような白い肌をもつ、もはや人間とは言えない異形の生物だった。

「どういうことだ！」

イシルドが叫ぶと、すでに死人よりも白く透明な顔をしているアニエルドは薄ら笑いを浮かべた。

「俺はすでに人間を越えた、吸血鬼もな。だが、まだ足りない」

アニエルドは視線をルミに向ける。

「そいつの力があれば、もっと、もっと力が手に入る」

「もう正気も失ったのか」

イシルドは捨てた銃を拾い、左手でそれを構える。だが、引き金は引かない。

「どうしたイシルド？ 撃ってみろよ」

アニエルドは両手を広げて挑発するがイシルドは銃を撃たない。

「ここから撃っても、お前には届かないだろ」

「よくわかってるじゃないか。それなら俺の邪魔をするな」

「いいや、届かせる。必ずな」

「無駄だ」

そこに銃声が響くが、アニエルドはその横からの銃撃を全て翼を動かして受け止めた。

「ちっ、本当に普通のじゃ無駄みたいだな」

アデーレは弾を撃ちつくした銃をホルスターに収め、ベルトの後ろのホルスターから銃身に文字が刻まれている銃を抜いた。カレンもショートソードを構える。

「やる気があって鬱陶しい連中だ。まあ肩慣らしにはちょうどいい」

アニエルドは長剣をかざし、それを一気に振り下ろした。剣の軌道から衝撃波が発生し、イシルドに襲いかかった。イシルドはそれを横に跳んでかわす。アニエルドはさらにカレンとアデーレの方向にも長剣を振って衝撃波を放った。

アデーレはそれをイシルドと同じようにかわすが、カレンは衝撃波をショートソードで薙ぎ払って前に進む。アニエルドはそれを見ると、カレンに向けて足を一步踏み出し、二歩目は一気に加速した。

そして袈裟切りに振り下ろされた長剣をカレンはショートソードでなんとか受け止める。

「どうした、手応えが今ひとつだな」

アニエルドは余裕の表情でカレンを押していく。

「どうですかね？」

カレンがアニエルドをいなすと同時に、二方向から銃弾が一発ずつ飛来した。だが、アニエルドは地面を蹴ってカレンの遥か上を飛び越えてそれをかわす。

カレンはその着地に合わせて突きを入れようとした。だが、アニエルドはその前に翼を動かして滞空時間と距離を延ばし、それを不発に終わらせる。そして着地したアニエルドは素早く振り向いた。

「三人がかりでこの程度とは、俺が強くなりすぎたか？」

アニエルドは恍惚とした表情を浮かべた。しかし、その表情はカレンが馬鹿にするように口を歪めると消え去った。

「貴様、何が言いたい」

「いえ、その程度の力でそんなに幸せそうにされているのなら、なぜ踏みとどまれなかったのかと思ひまして」

「なんだと？」

「まだわかりませんか。イシルドさんの元相棒というから、もう少し頭が働くかと思っていましたが、とんだ期待外れですね」

しばらくの間アニエルドは黙っていたが、満面に不気味な笑顔を浮かべた。

「そこまで言うとは、覚悟の上だろうな」

「なんの覚悟です？」

「貴様等がここで死ぬ覚悟だよ！」

アニエルドは銃を抜いてカレンに向けて二発撃った。カレンはその飛来した弾丸をショートソードで軌道を変える。アニエルドはすぐに銃を捨てると、長剣をかつぐようにして、力強く地面を蹴った。

その勢いはまるで弾丸のようだったが、カレンはそれを横に転がってすかし、アニエルドはイシルドとアデーレに無防備な姿をさらした。

もちろんそこには一発ずつ、イシルドとアデーレの銃弾が飛来する。だが、アニエルドはその二発を素早く長剣で叩き落した。

「ちっ、高い弾を無駄撃ちさせてくれるぜ」

アデーレは悪態をつくが、イシルドは無駄口を叩かずにアニエルドに向かって走る。

「おお！」

気合と共に右手のサーベルを振り下ろした。アニエルドはその一撃を長剣で受けるが、全く押されるということはない。

「弱いな」

アニエルドはイシルドの体ごと押し返した。それを予期していたイシルドは踏ん張らずに素直に後ろに跳躍しながら銃を三連射する。最後の一発は銃が光ったように見えた。

一発はアニエルドの長剣に防がれたが、残りはアニエルドの肩と腿に命中した。肩は浅かったが、腿の弾は貫通する。それでもアニエルドのダメージは大きくないようで、一步後ろに下がっただけだった。

イシルドは弾を撃ちつくした銃を捨て、サーベルを左手に持ち変えると、その刀身を右手の指でなぞる。そしてサーベルの刃全体が光を発すると、イシルドは地面を蹴った。

アニエルドはその一撃を長剣で受けようとしたが、直前でそれを引き、大きく後方に跳躍した。そこにアデーレが銃を連射するが、アニエルドは今度は地面を蹴って上空に舞った。

だが、アニエルドが何かを感じて首をひねると、そのさらに上にカレンの姿があった。その瞳は赤く光り、振り上げたショートソードは闇をまとって大剣と言えるサイズになっていた。それが振り下ろされると、アニエルドは長剣で受けようとしたが、カレンは攻撃の軌道を変えてその背中の翼を切り落とす。

その衝撃でアニエルドは地面に落ち、バランスを崩して長剣でなんとか身体を支える。しかし、イシルドの光り輝くサーベルがその胸に深々と刺さった。

「くはっ」

息を吐き出す音がし、アニエルドの口から血が流れる。

「これで、終わりだ」

イシルドがサーベルを引き抜き、三步後ろに下がると、アニエルドは両膝をつき、そのまま前に倒れた。そして、その傷口から徐々に体が灰になり崩れ落ちていく。

それでもアニエルドは顔を上げ、イシルドに向かって笑った。

「お前は大事な奴だよ。やっぱりあの時、殺しておくべきだったな」

「そうかもな。じゃあな、アニエルド」

「ああ、相棒」

アニエルドはそこで力尽き、全身が灰になって風に飛ばされたいった。イシルドはそれを見届けてから、すでに光が消えたサーベルを鞘に収めた。

その戦いから二日後、カレンは朝早くに町の外れまで来ていた。見送りにはアデーレとイシルド、そしてルミがいた。

「あんたのおかげでたっぷり稼げたし、またなにかあったらよろしくな」

「はい、こちらこそ、アデーレさんのおかげでずいぶん助かりました」

「そうだろ。ま、元気だな」

アデーレが手を差し出すとカレンはそれを軽く握り返した。それからイシルドの方に顔を向ける。

「イシルドさんは、その子と一緒にいるつもりなんですか？」

「ああ、この子はあの吸血鬼が転生のために生み出したのかもしれないが、今は人間だ。それに、あの吸血鬼には興味があるし、転生を阻害したら何が起こるかもわからない。またアニエルドのように力を求めてこの子を狙う者が現れるかもしれないしな」

「それで、ずっと側にいるつもりなんですか。あなたも変わった人ですね」

「まったく、本当に物好きな奴だよ、お前は」

カレンとアデーレにそう言われるとイシルドは軽く笑い、自分のシャツを掴んでいるルミの頭に手を置いた。

「それでいいんだ。なあルミ」

「うん」

カレンはその様子を見て微笑むとうなずいた。

「その様子なら心配ありませんね。では、私はこれで」

「あんたも達者でな」

そして、カレンは様々な事件があった港町を後にした。

消失と出発

「で、一体何が問題だったのかももう聞かせてくれるよな」

タマキはテーブルに肘をついて次元の管理人に尋ねた。

「うむ。まず君のほうはあのダークネスワイズドラゴンというのがまともに発現したことで、あの世界は安定した」

「では、私のほうはどうだったのでしょうか」

「君のほうは、あの吸血鬼の転生だったか、それが無事に済むようになった時点で大丈夫になったのだ」

次元の管理人の言葉に、カレンは顎に手を当てた。

「まるであるべき時間の流れが見えているようですね。そんなこともわかるのですか」

「あまり詳しくわかるわけではないのだよ。それに、何かの妨害もあったようだ」

「妨害か、あの雲みたいな奴だよな」

「それなら私のほうでも現れました。以前ヨウイチさんと一緒に行った世界でも遭遇しましたね。あれの正体は分かっているんですか？」

「それは明確にはわかっていないのだ。私も調べてはいるのだが、まだわからない」

次元の管理人の言葉にタマキは立ち上がった。

「そういうことなら、ちょっと休ませてもらうか。調べるのはよろしくな」

「うむ、何かわかったら君達に報せよう」

次元の管理人はそう言って部屋から出て行った。それを見送ったタマキは急須から自分の湯飲にお茶を注いだ。

「なんだか、きな臭い感じになってきたな」

「そうですね、あの管理人という方と同等かそれ以上の力を持つものがどこかにいるということですから」

「それに、どうも後手にまわってる感じもするしな。任せっきりというわけにもいかないけど、だからと言って俺達だけでどうこうもできないか」

「私達だけでは情報収集もできませんし、残念ですがどうしようもありませんね」

「そうだな、管理人さんにがんばってもらうか」

タマキはそう言ってから立ち上がると、本棚に近づいていった。そして本棚の前まで来た瞬間、その足元が円形に光った。

ほぼ同時にそこから光の柱が立ち上り、タマキの姿を飲み込む。カレンが駆け寄ろうとしたが、その光の柱は全く人を寄せつけない。だが、そこからタマキの右腕が突き出された。

「タマキさん！」

カレンはその手を握ったが、次の瞬間には光の柱とタマキの姿は消えていた。カレンの手に残ったのは、肘の上から切断されたタマキの右腕と、そこに握られていた狼の形のアミュレットだけだった。

呆然としたカレンが顔を上げると、そこにはもやもやとした虚無とでも言うべき塊があった。

「何があったのかね！」

慌てた様子次元の管理人が部屋に駆け込んできた。そしてその異様な状況を見ると、すぐに次元の鉄槌を呼び出した。

「とりあえず、そっちの君はこの中に入りなさい」

次元の管理人がそう言うと、虚無の塊のほとんどはそこに吸い込まれるように消える。残りは

カレンの持つアミュレットに入った。カレンはそれを確認するとすぐにそのアミュレットを強く握る。

「何があったんですか、タマキさんはどこに！」

「我にもわからん、いつの間にかあいつの体から放り出されていた」

「それでは何もわかっていないのと同じでしょう！」

それからカレンは次元の管理人を睨みつけた。

「どういうことですか」

その剣幕に次元の管理人は思わず一步後ろに下がった。

「いいや、私にもまだ詳しいことはわからない。だが、彼がどこかの次元に連れ去られたの間違いない」

「そうですか、ではすぐに調べて下さい」

それだけ言うと、カレンはタマキの右腕をテーブルの上に置き、自分のショートソードを研ぎ始めた。次元の管理人は足早に部屋から出て行った。

それから数時間後、要一とまもるもテーブルにつき、次元の管理人が口を開いた。

「どうやらタマキ君はかなり入り組んだ次元に連れ去られたようだ。そこには私でも簡単には干渉できない」

「詳しく説明してください」

「簡単に言うと、その次元に到達するためにはいくつかの次元を通過する必要がありそうなのだ。そのためには、君の力が最適だ」

「つまり、強引に次元の壁を破っていくわけですか」

「その通りだ」

「そういうことでしたら、すぐに出発しなくてはいけませんね」

カレンは立ち上がったが、次元の管理人はそれを止めた。

「君一人ではいけない。そのためにヨウイチ君達も呼んだのだ」

そう言われてカレンは少し考え込むように顔をうつむけてから、顔を上げてうなずいた。

「わかりました。何があるかはわかりませんし、力を貸していただけるなら是非お願いします」

カレンがそう言って頭を下げると、まもるは勢いよく立ち上がった。

「もちろんです！ ねえ要一君」

「はい。ただ事じゃないみたいだし、俺もがんばりますよ」

「ありがとうございます。準備もあるでしょうから、それが済んだら呼んでください」

そしてカレンはその部屋から出て行った。後に残された三人は同時にため息をつく。

「カレンさん、随分様子が違ったけど、大丈夫かな」

まもるは椅子に座ってから心配そうな声を出した。要一もそれにうなずく。

「確かにそうですね。怖いくらいにピリピリしてる感じでしたよ」

「私も怖いくらいだった」

次元の管理人がそう言っているのを二人は意外そうな顔で見た。

「彼女の力は特別なのだよ。それより、君達の武器の強化が必要になるだろう。希望があれば聞かせてもらいたいのだが」

「それなら！」

まもるはリクエストがあるらしく、勢い良く身を乗り出した。

それから数時間後、三人は出発の準備を済ませて集まっていた。そこに遅れてきた次元の管理人は鞘に納まった一振りの剣を持っている。

「これは君がつかいなさい」

その剣をカレンに差し出す。カレンはそれを受け取ってから軽く首をかしげる。

「その剣は次元の鉄槌の一部から作り出したもので、君達がサモンと呼んでいる存在の力がこの中にある」

「そうですか。サモン、あなたの力を貸してもらいますよ」

カレンが首から下げたアミュレットに話しかけると、それはなんとなく渋々という様子で口を開いた。

「仕方あるまい。しばらくは私の力を貸してやろう」

カレンはうなずくと、受け取った剣はベルトの右側に付けた。

「最初の世界はどのような場所なのですか？」

「君が元々いた世界と大体似たようなものだ。次の次元と繋がっている場所は今は不明だが、ヨウイチ君なら発見できるだろう」

「わかりました。よろしく願います、ヨウイチさん」

「はい、やってみます」

まもるはそう言う要一の肩を叩いた。

「きっと仕掛けてきた相手はその繋がってる場所っていうを守ってるはずだし、そういうのを探せばいいんだから、なんとかなるって。私の新兵器もあるんだし」

「そうですね、カレンさんの足でまといにならないようにがんばりますよ」

カレンはそれにやっと微笑を浮かべた。

「お二人は私が守りますよ」

それから次元の管理人に顔を向ける。

「そろそろ願います」

「うむ」

次元の管理人が軽く手を上げると、三人は光と共にその場から姿を消した。

落ちたその先

タマキは光に飲まれてから、意識が戻っても朦朧としていて、自分がどこにいるのかもわかっていなかった。ただ、なにか硬いところに寝かされているのだけはなんとかわかった。そこで意識は途切れる。

そのタマキを見下ろしている、一人の大柄な男と、小柄で髪の長い少年とも少女ともつかない者がいた。

「本当にこれが力の持主なんだな」

男が聞くと小柄なほうがうなずく。

「そうです。しかし、予想よりは小さいようです。それでも十分な力はあるようですが」

「そうか、それならばすぐにかかれ。それと死なないようにしておけ、欠けた腕はアレでも使っておけばいいだろう」

「はい」

大柄な男はその場から立ち去り、それと入れ違いに得体の知れないものを満載したカートを転がして三人の白衣を着た男が入ってきた。

「では始めましょう」

小柄な者ははさみを手に取り、まずはタマキの服を切り、右腕の切断面に緑色の液体を塗りつけた。それから鋭く薄い刃物を手に取ると、タマキのみぞおちあたりを中心としてそれで何かを描くように動かしていく。

刃物の通った後は綺麗に血が浮き出て、まずは円、そしてその中にさらに円を描き、それと外側の間を十二分割した。さらにその中を一回ずつ刃物を浅く刺していく。

「印を」

刃物を隣の男に手渡し、変わりに金属製の印を受け取った。それを内側の円の中心に押し付けると、両手をその上に重ねて目を閉じた。

「始原の炎よ、我が手に宿りこの者に刻印を刻め」

肉が焼ける音がし、印をどけるとそこにはくっきりとした跡がついていた。それから印を隣の男に手渡した。

「次は右腕にとりかかります」

今度は金色の金属のようだが、不思議な弾力がある塊を受け取った。小柄な者はそれを目の高さまで持ち上げると、何かを口の中につぶやいた。それからその物体をタマキの腕の切断面に近づけた。

すると、その塊から糸のように細い蔓のようなものが伸びて傷口に入り込んでいく。しばらくその様子を見てから小柄な者は塊をタマキの腕の切断面につけた。

少し経ってから手を離すと、その塊はタマキの腕に固定されていた。それを確認してから小柄な者はその周囲を布で拭い、息を吐き出す。

「終わりました。片付けてください」

男達は手早く片づけをし、カートを押して去っていく。一人残された小柄な者はタマキの顔をじっと見ながら、ただ無言でその場にたたずんでいた。

それからどれくらい時間が経ったか分からなかったが、タマキは違和感で再びぼんやりと意識を取り戻した。今度は柔らかい感触が背中にあり、なにか右腕重かったが、それ以上に体の力が抜けていて、指一つ動かせない。

それでもなんとか目だけに意識を集中すると、自分を見ている者がいるのが見えてきた。その

人物はタマキの視線に気づいたようで、何か口を動かしたが、何を言っているのかは分からなかった。そこで再びタマキの意識は途切れる。

「様子はどうだ」

大柄な男が戻ってきて尋ねる。

「印は問題なく刻めました。容態もだいぶ落ち着いています」

「そうか、それならば次の段階に移れるな。すぐに準備を始めよう、これから目を離すな」

「はい」

それから数時間後、巨大なホールに十二人の人間が集められていた。その前に立つ大柄な男は腕を後ろに組んで堂々と立っている。

「我が精鋭達よ、よく聞け。お前達に分け与えた力は世界、いや、あらゆる次元を改変するための礎となるものだ。これからの戦いは厳しいものになるだろうが、あるべき秩序をもたらすためには必要なことだ」

それから男は後ろに組んでいた手を大きく左右に広げた。

「諸君の働きに期待している！」

並んでいた十二人はその言葉にそれぞれ片膝をつき、頭を垂れた。大柄な男はその光景に鷹揚にうなずくと、その場から立ち去って行った。

残った十二人はそれから一斉に立ち上がり、六人ずつに分かれると、そのまま無言でホールから出て行った。

その頃、タマキはまた意識を取り戻していた。脱力感は増していたが、今度は多少頭がはっきりしていて、首を動かすことができた。そして、自分の顔を見ている者に気がつく。

「こ、こは」

かすれた声しか出せなかったが、それでも意図は伝わったようでタマキを見守っている小柄な者は立ち上がってからタマキに顔を近づける。

「ここは危険な場所ではありません。あなたの傷も治療も終わっています」

「そう、か」

それだけ言葉を搾り出すと、タマキは目を閉じて息を吐き出した。

「飲み物が必要ですか？」

タマキがうなずくと、その口に水差しが当てられる。タマキは口を開いてそれから水を数口飲むと、目を開けて少し頭を持ち上げた。小柄な者は水差しを引く。

「ああ、楽になった、名前は？」

「ライトです。あなたは？」

「タマキ」

「タマキさんですね、僕がこれからあなたのお世話をさせていただきます、なんでも言ってください」

タマキはそれにうなずくと、再び目を閉じた。

「少し、寝る」

「はい、おやすみなさい」

ライトはそう言ってから、タマキの右腕に視線を移した。そこにある金色の塊は鈍い輝きを発し、わずかに脈うっているように見えた。

刻印と脱出

タマキが目を覚ましてから数日が経ち、やっと自分の力で起き上がれるまで回復していた。その間、ライト以外の人間が姿を見せることはなく、そのライトはほとんどつきっきりだった。

タマキはベッドの上に起き上がり、金色の塊がくっついている自分の右腕を見ていた。

「しかし、これは妙な感触だな」

「ですけど、それがタマキさんの命を救ったんですよ」

「ああ、まあ腕がこういう塊ってのは不便だな」

「それなら、そのうち平気になりますよ」

「そういうもんか？」

それからタマキはベッドに横になり、ライトは部屋から出て行った。部屋のすぐ外には見張りが立っていて、ちょうど大柄な男が部屋に向かってきていた。男はライトの前に立つと部屋の扉を見てから口を開く。

「様子はどうか」

「順調です。もう起き上がることができるくらいになっています」

「早いな、刻印はしっかり機能しているようだが」

「それだけの生命力があるのだと思います」

「だが、気を抜かずに注意しておけ。あまり元気になられても困るが、死なれるのが一番まずい」

「はい」

時間は経過してその日の昼。タマキは起き上がって昼食を食べていた。

「物足りないな」

タマキは具の少ないスープの入った器を見ながらつぶやいた。

「すみません、今はこれしか出せないんです」

ライトは申し訳なさそうな表情だった。

「まあ仕方ないってのはわかるけどな。それより、ここがどこなのか、そろそろそいつを聞かせてもらおうか」

「わかりました。まずここは、リシルと呼ばれている世界です。今僕達がいるのは小さな島で、この世界のちょうど中心です」

「中心ね、ここに主はいるのか？」

「います」

「そうか、そのうち会ったほうが良さそうだな。で、俺がここに来たのは偶然なのか、それとも、誰かに引き込まれたのか？」

「それは」

口ごもったライトにタマキは手を振った。

「いや、答えたくないなら別にいい。お前がそんなにいい扱いをされてるとも思えないしな」

「そこまで、わかるんですか？」

「この窓もない部屋を見れば俺が諸手を上げて歓迎されてないくらいはわかるさ。でも、殺すわけにはいかないくらいってのもな」

タマキの言葉にライトは驚いた様子を見せた。タマキはそれを見てにやりと笑う。

「凶星か？ まあ俺はそれなりに変な経験豊富だからな、テキトウなことは言える。それで、これから俺はどうなるんだ？」

「鋭いんですね。でも、命の危険はありません」

「命の、ね」

それからタマキは器に直接口をつけてスープを一気に飲んだ。

「まあ、そういうことなら、少しの間はおとなしくしておくか」

「すみません」

ライトは器を受け取ってから、頭を下げた。

「いいんだよ、気にするな」

タマキはそう言って軽く笑うと、また横になった。ライトは食器を持って部屋から出て行った

。そしてその日の夜。ライトは静かに室内に入ってきた。横になっていたタマキは目を開けると上体を起こす。

「こんな時間になんの用だ」

タマキの言葉にライトは黙って自分の服の下から布の袋を取り出した。その中から細かいものいくつか取り出すと、それを使って小さな箱のようなものを作り、タマキの枕元に置いた。

「これで落ち着いて話ができます」

「へえ、手先が器用なんだな。それで盗み聞きの防止でもできるのか」

「そうです」

「それで、話っていうのは」

「もう気づいていると思いますけど、タマキさんの身体には僕が刻んだ印があります」

タマキは自分のみぞおちあたりに左手を当てた。

「こいつか、ずっと妙な感覚があるから何かと思ってたけど、一体これは何だ？」

「それはタマキさんの力を分割して、それを奪うためのものです。今は十二に分割されて、それぞれ刻印を刻んだ者に今も継続的に力を分け与えています」

「それで力が抜けてる感覚があったのか。飼い殺し待遇にも納得だな」

「本来ならこんな短時間でそこまで回復するはずはありませんでした。でも、これだけの回復ということは、タマキさんの力の強さのおかげだと思います」

それを聞いたタマキは微笑のようなものを浮かべる。

「いや、それは俺の力じゃない。まあそれよりもだ、まずはライト、お前の目的を聞こうか」

「僕の目的は、それはこれから起こることを止めて欲しいという、お願いします」

「これから起こることか」

「はい、それはこの世界だけでなく、多くの世界を巻き込んでしまうことです。次元の壁を壊し、複数の世界を一つにして統治する、そして」

「全てを一つにして話か？ なんだか壮大だな」

「夢物語です。そんなことのために多くの人を傷つけることになってしまう。でも僕にはそれが止められない」

「俺にはできるっていうのかな」

「タマキさんのことは知っています。世界を越え勇者と呼ばれ、そして今は次元の管理人を名乗る存在に協力している」

「良く知ってるな。俺もけっこう有名人か」

「だから目を付けられたんです。止められなくてすみませんでした」

「いや、でも、それはお前にとってはいいことでもあったわけだな」

「協力、していただけますか」

「まあ、ここで閉じ込められててもしょうがないしな。何か脱出の手立てでもあるのか？」

「しかし、その前にタマキさんが動けるようにならないと難しいと思います」

「それなら大丈夫だ」

そう言うとタマキはベッドから下りてしっかりと立った。ライトはそれに驚きの表情を見せる

。

「もう、動けるんですか？」

「ああ、でも服と靴が必要だな」

「それなら」

ライトは部屋の隅の戸棚を開けると、タマキが元々着ていたズボンと靴を取り出した。

「すみません、上着は切ってしまったので」

タマキはズボンと靴を履いてから、着せられていた白くゆったりしたズボンをベッドの上にたたんで置いた。

「脱出はどうするんだ？ まさかそのドアからじゃないよな」

タマキは一つしかないドアを指差した。

「もちろん違います」

ライトはさっきの小さな箱を手にとると、ドアの反対側の壁際まで歩く。そしてその箱を持った手で壁を軽く叩くと、ちょうど人が屈めば通れる程度の穴が音もなく開いた。

タマキはそこから外を見る。素直に飛び降りれるような高さではなく、今の状態のタマキでは難しそうだった。

「これから何か手があるのか」

「とりあえず、外に出ましょう」

二人はその穴から外に出て、壁に取り付いた。

「それで、これからどうするんだ」

「飛び降ります」

ライトの言葉にタマキはすぐにうなずいた。

「わかった、頼んだぞ」

「行きますよ」

ライトはタマキの腰に手を回すと同時に、壁を蹴った。

カレン達は最初の世界を数日探索していたが、今のところ目だった成果はなかった。三人の野営地ではカレンが一人で焚き火を見守っている。

「カレンさん、交代しますよ」

そこにまもるがテントから出てきた。だが、カレンは首を横に振る。

「いいえ、私なら問題ありませんから、マモルさんは休んでいてください」

「でも、カレンさんはこっちに来てからほとんど休んでないじゃありませんか」

「これくらいなら大丈夫ですよ。それに、今は急がないといけない状況ですからね」

「確かにそうですけど、いや、そうですよね」

まもるは自分の中で納得したようで、ため息をついた。

「カレンさん、何かあっても一人でやろうとしないでくださいね」

「大丈夫です。ヨウイチさんやマモルさんのことはあてにしていますよ」

カレンが微笑むとまもるは安心したようで、カレンの隣に座った。

「カレンさんはタマキさんといつもどんな生活をしてたんですか？」

「タマキさんと出会ってから数年経ちますが、派手な戦いよりも、旅をしていたりのんびりと過ごしていることが多かったですね」

「家事なんかはどうしてたんですか」

「それは大体半分ずつでしたね。掃除は私がやることが多かったんですけど」

「へえ、意外とマメなんですね、あの人」

「そうですよ、それにタマキさんは勇者としての戦いよりも、ひょっとしたら魔法の開発のほうがあの世界に大きな影響を及ぼした可能性があります」

「魔法の開発ですか」

「あの世界では魔法が中心の技術ですから、もっと時間が経てば、タマキさんが残した技術を元にして大きな発展をするでしょうね」

「そこまで影響を及ぼすなんて、とんでもない人ですね」

「タマキさんはそういう人です。いつも、周囲の予想以上のことをするんですよ」

まもるはそのカレンの表情を見て、少し笑った。

「やっぱりタマキさんのことを話してる時は楽しそうですね。今は、不安ですか？」

「タマキさんなら、大抵のことは大丈夫ですから、そこまでの不安はありません。もちろん、タマキさんにも限界はありますし、今の状況がいいものとも思えませんが」

「今は我の力もないからな」

サモンが声を出すと、まもるはそれを覗き込むように首を動かした。

「そういえば、そのサモンっていうのが話すの、初めて見ましたよ」

「まあ、気にすることはいいですよ。タマキさんに寄生していたようなものですから」

「奴とは共生だ」

サモンが反論するが、カレンはそれを無視する。

「とは言っても、タマキさんを探すためにはこのサモンの力も必要になります。私ではタマキさんのようにはこの力を使えませんが、この剣は役に立つでしょうから」

「そうなんですか、よろしくね、サモン」

「まあいいだろう、こんなところでは落ち着かんがな」

まもるの言葉にサモンは大体同意の返事をした。それから、カレンは立ち上がる。

「では、私は少し休ませてもらいます。ありがとうございました、マモルさん」

「私のほうこそ話を聞かせてもらってありがとうございます、カレンさん」

そして翌朝、三人は揃って朝食をとっていた。それが一段落してから最後に見張りをしていた要一が口を開く。

「実はさっき、あのじいさんから連絡があったんです。どうも手がかりをつかんだようで、ある場所を指定してきたんです」

「それはどこですか」

「ここから南に半日ほど進んだところだそうです。そこの空間がおかしなことになってるらしくて、至急調べて欲しいと言っていました」

「そうですか、そういうことでしたらすぐに出発しましょう。案内はお願いします、ヨウイチさん」

「任せてください」

そういうことで、三人はすぐにその場から出発した。そして、数時間後、三人の前には小さな山があった。

「この山の中にあのじいさんが言った場所があるみたいですね」

要一の言葉にカレンはうなずき、すぐに歩き出した。まもると要一はすぐにその後を追う。

そして山に入って数十分。まだ何も目ぼしいものは見つからなかった。

「要一君、詳しい場所はわからないの？」

「それが、このあたりっていうだけで、なんとも言えないんです」

「とにかくその場所を探しましょう」

三人は手分けをしてその周囲を探り始めた。その中で最初に違和感に気がついたのは要一だった。

「まもるさん！ カレンさん！ ちょっと来てください！」

要一が叫ぶと、すぐにまもるとカレンがその場に駆けつけてきた。

「どうしました」

聞かれた要一は一本の木を指差した。

「この木なんですけど、ちょっと触ってみてくれますか？」

カレンが言われた通りに木に手を触れてみると、特に何の変哲もない木だった。

「やっぱり。見ててくださいよ」

今度は要一がその木に手を伸ばすと、その手は木がないかのようにそのままめり込んでいく。

「この木が次元の歪みそのものみたいです。もしかしたら、次の世界への鍵かもしれません」

要一はそれから手を引き抜いた。カレンはその木をじっと見る。

「問題はどうやってここから次の世界への扉を開くか、ということですか」

「ちょっと待ってください、あのじいさんからです」

そこで要一はしばらく黙ってうなずいていたが、数十秒後にはカレンの方に顔を向けた。

「その木をカレンさんが切ってみると言ってます。強引でもそれが一番手っ取り早い方法だとか」

「わかりました、お二人は下がっててください」

カレンは木の前に立つと、ショートソードを抜き、それを振りかぶった。だが、次の瞬間、木の内部からカレンに向かって雷の矢が飛来した。

カレンはとっさにショートソードでそれを受けたが、衝撃で後ろに飛ばされる。

「我が主の懸念通り、すでに動き出していたか」

低い声と同時に木が歪んで姿を消し、そこには一人の大柄な男が立っていた。その男は金属の胸当てをしていて、大槌を右手で軽々と持っている。

カレンはそれに対し、油断なくショートソードを構えたまま口を開いた。

「何者ですか」

男はその問いに、鋭い視線を送り、大槌を肩にかついだ。

「我が名はジャルリ。世界に秩序をもたらす十二使徒が一人だ。秩序を打ち立てるのを妨害する貴様らを排除する使命をあるお方から授かってここに来た」

それを聞いた要一とまもるは身構えたが、カレンは逆に口の端に笑みを浮かべる。

「なるほど、そちらから来ていただけるとはありがたいことです。聞きたいことは沢山ありますからね」

そしてカレンの髪と瞳が白銀に染まり、その体を漆黒の鎧が包んだ。さらに、背中から白銀の翼が開き、ショートソードも白銀の輝きに染まった。

「次元の鉄槌よ！ その姿を現し我が手におさまれ！」

要一が次元の鉄槌を呼び出し、まもるも懐から何かを取り出した。

「ついにこの新兵器の出番ってやつ」

そしてその懐から取り出したもの、四角い手のひらサイズの箱のようなものを腰に当てた。するとそこからベルトが伸びて腰に巻きつく。それからまもるがバックルになったその箱を軽く叩くと、それは中心から観音開きを開いた。そこには三つのボタンが並んでいる。

「こういうの一度リアルでやってみたかったんだよね」

まもるはそのボタンを右手で三つ同時に押した。そしてすぐに左手は腰にそえ、右手は顔の前で握りこぶしを作る。

「変身！」

バックルから光が溢れ、それがまもるの全身を包み込んだ。ちょうど一秒後、その光が消えると、そこには、いわゆる変身ヒーローのような真紅のスーツに身を包んだまもるの姿があった。

。

使徒の力

戦闘体制に入った三人を前にしても、ジャルリはまったく動じていなかった。その視線はカレンの姿をとらえている。

「それが混沌の力か。実に忌まわしいものだな」

「私の情報もそれなりに持っているようですね、それ以外の情報も、全て吐き出してもらいますよ」

カレンは地面を蹴り、ジャルリに剣を振り下ろした。だが、ジャルリはそれを大槌で受け止め、カレンの勢いも殺してみせる。

カレンはすぐに後方に飛び退くと、入れ違いに要一が次元の鉄槌で殴りかかる。

「おおお！」

渾身の力で振り下ろされた次元の鉄槌は、ジャルリの大槌で受け止められた。

「この程度か！」

要一は弾き飛ばされたが、なんとか着地する。

「要一君、正面から行っても駄目だって！」

まもるは脚部ブースターを噴射して、ジャルリの上に出る。そして左大腿部に収納されていた銃を取り出して乱射した。ジャルリはそれを大槌振り回して防ぐ。

まもるはそのままジャルリの背後に着地して銃を構える。だが、撃ちはせずにそのまま様子を見た。ジャルリは三人に包囲された形になったが、少しも慌てた様子はなく、大槌を肩に担ぐようにして構えなおした。

「確かなかなかの力のようですが、その程度ならば情報だけ吐き出しておくのをおすすめしますよ」

カレンは挑発気味に言うが、ジャルリはそれを意に介した様子はない。

「我が主より与えられた力を見てもそのようなことが言えるかな？」

ジャルリが右手を顔の前で握ると、その手の甲に円状の刻印が浮かびあがる。それが光ると、カレンは顔をしかめた。

「この力、タマキさんと同じ」

そして次の瞬間にはジャルリは今までとは異質な力をまとっていた。

「注意してください！」

カレンが叫ぶと同時にジャルリは地面を蹴って要一に迫った。

「フォーム！ シールド！」

要一はその突進に対し、咄嗟に次元の鉄槌を盾に変化させて防ぐ。だが、衝撃は殺せずに、要一は大きく吹き飛ばされた。カレンはすぐにその間に割り込み、ジャルリの攻撃を受け止める。

ジャルリはすぐに後ろに飛び退いたが、そこにまもるが後ろからジャンプして急降下してきた。

「超振動ブレード！」

右大腿部から取り出したものが伸び、一瞬で細い剣を形成し、まもるはそれをジャルリに振り下ろした。だが、そこにジャルリが振り向きざまに振った腕から一筋の雷が炸裂する。まもるはそれをもろに受け、吹き飛ばされて地面に叩きつけられた。

「その力は、どこで手に入れたんですか」

「我が主からだと言っただろう」

「いいでしょう、とぼけるなら、剣で聞くまで」

カレンはショートソードを構えると、一気に上昇し、そこからジャルリに向かって急降下した。ジャルリは再び雷を放ったが、カレンはそれをかわしてジャルリに突きかかった。

ジャルリはそれを大槌で受けたが、カレンの勢いに体を後ろにもっていかれる。それでもなんとか踏ん張って勢いを止めるが、すでにカレンはその上にいて、ジャルリの頭を蹴り飛ばしていた。ジャルリはその衝撃に吹っ飛び、地面を転がった。

カレンはさらにそこにショートソードを突きたてようとしたが、ジャルリは転がりながら大槌を地面に叩きつけ、その反動で跳び上がってなんとかそれをかわす。

しかし、そこで体勢を立て直す前にカレンはさらに追撃をかける。その振り下ろしたショートソードはギリギリのタイミングで大槌で受け止められたが、カレンは間髪入れずにもう一撃ジャルリに蹴りを食らわせた。

ジャルリは今度は体勢を立て直せずに倒れた。カレンはそこにショートソードを突きつけた。「さて、そろそろあきらめましたか？」

だがその状況でもジャルリは表情を変えない。そしてその前方から炎の矢が迫り、カレンがそれをショートソードで弾くと、その際にジャルリは何とか距離をとった。

「まだいましたか」

カレンの視線の先には細身で長身、長髪の女が立っていた。その女は指先に炎を宿してジャルリを見る。

「ざまあないじゃないか」

「お前こそ、遅かったな」

「あんたが突っ走るからだろ、それより、そいつが混沌の力を持つっていう奴か」

「そうだ、忌まわしい力だ」

その会話はカレンが振った剣の音で遮られる。

「一人増えたようですが、その程度でどうになると思ってるんですか」

「そういえば自己紹介がまだだったか、私はカロミーア、以後お見知りおきを」

カロミーアと名乗った女は大仰に礼をした。

「残念ですが次はありません」

カレンはショートソードを構えたが、カロミーアはそれを見て笑みを浮かべた。

「そちらこそ残念、こっちはここで退かせてもらおうか」

その言葉が終わる前にカロミーアとジャルリの背後に空間の歪みが現れ、二人はそこに姿を消していった。カレンはそれを追おうとしたが、すぐに無駄と悟り足を止める。

そこに復帰した要一とまもるが駆け寄る。

「逃げられちゃいましたね」

まもるはそう言いながらベルトのバックルを外して変身を解除した。だが、カレンはそれほど落ち込んだ様子はない。

「確かに逃がしましたが、あの使徒と名乗る者の主というのが何かの手段でタマキさんの力を奪ったのはわかりました。それに、逃げるのを追っていけば必ず目的の場所にたどり着けるはずですよ」

「それじゃあすぐに追わないと」

要一が焦った様子で言ったが、元の状態に戻っていたカレンは首を横に振った。

「いえ、相手はおそらく罠を張っているでしょう。そこに無策で飛び込んでいくのは上策ではありません」

カレンはショートソードを鞘に収めた。

「でも、どうすればいいんですか？」

要一の疑問にまもるが頭をかく。

「相手が十二使徒っていうんなら、もっと数がいるわけだし、一気にかかってこられたらきついかもね」

だがカレンの表情には余裕があった。

「いえ、むしろそうなってくれば手間が省けます。問題はこちらが戦う時と場所を決められるようにすることと、相手を逃がさずに倒して、そこからタマキさんの手がかりを得るということですから」

それを聞いたまもるは何か納得したような表情を浮かべる。

「今みたいに逃げられたら手がかりも得られないですもんね。でも、どうすればいいんでしょうか」

「とりあえずは、相手に隙を与えないように戦うのがいいでしょうね。そうしていけば、向こうの弱点もわかってくるでしょう。残念ながら、現状では情報が足りないので、理想的な対応というのはできるものではありません。なので、まずは私が先行して様子を見ます」

「カレンさん、一人で行くんですか？」

要一が聞くとカレンはうなずいた。

「はい。要一さんとまもるさんはここで待機して管理人さんと連絡をとっててください」

「危険ですよ！」

まもるはカレンに反論したが、要一は頭に手を当てて口を開いた。

「いや、カレンさんだけでも進んでくれれば、それだけ情報が得られるみたいですよ。うまくいけば相手の裏をかくようなことができるかもしれないって言ってます。連絡はそっちのサモンっていう奴を通して取れるみたいです」

「決まりですね。私は時間を稼ぐように行動するので、情報収集をよろしくお願いします」

「それなら、わかりました」

まもるは多少納得いかない様子だったが、うなずいた。

タマキはライトと一緒に森の中の空家に到着していた。ライトは室内のランプに明かりをつけ、タマキは椅子に腰を下ろした。

「ちゃんと手入れされてるんだな」

「はい、僕が人に頼んで手入れをしてもらってたんです。いざという時のために」

「まさか、俺みたいのが来るのを待ってたわけか」

「はい、そうです。水かワインならありますけど、飲みますか？」

「いや、今はいい。それより、この右手の塊のことを聞かせてくれるか」

タマキは左手で右手の金属のような塊を触った。ライトはタマキの向かい側の椅子に座る。

「それは金属のように見えますが、意識を持った生命体です。タマキさん次第でそれは失くした腕の変わりになるはずですよ」

「これが腕のわりに？」

「はい、それはすでにタマキさんの身体とは繋がっています。下手をすれば全身を侵食される可能性もあるのですが」

「へえ、けっこう物騒なもんだな」

タマキは聞かされたことのわりには反応が薄い。

「で、どうすればいいんだ」

「力で支配下に置けば大丈夫なはずですよ」

「力ねえ、でも今の俺じゃな」

タマキはしばらくの間その塊を撫でていたが、それから突然笑った。

「まあこうなったらこいつも俺の一部みたいなもんだ。意識があるっていうなら、こいつと意思疎通っていうやつを試してみるのもよさそうだな」

「意識があると言っても、人間とはまるで違って、植物みたいなものですから、それは難しいと思います」

「どうかな、まあやってみるさ」

タマキは右手の塊に手をあて、目をつぶった。ライトは何も言わずに、甕を持って外に出た。

それから数時間後、その小屋には一人の中年の男が訪ねてきていた。

「ライト、来てるのか」

何気ない様子で入ってきたその男はすぐに椅子に座っているタマキに気がつき、ライトに視線を送った。

「ついに見つけたらしいな、待ったかいがあったか」

「はい」

タマキは目を開けてその入ってきた男を見た。

「手入れを頼んでたっていうのはこのおっさんか」

タマキがそう言うと、その入ってきた男は苦笑いをした。

「こいつは大物そうだな。俺はタスクだ、よろしくな」

「タマキだ、よろしく」

それからタスクはタマキの右腕に目をつけると、顔をしかめた。

「あれを使ったのか」

「そうしなければいけない状況だったんです」

「まあそうだろうが、大丈夫なのか？」

「俺のことを言ってるんなら、なんとかするさ」

タマキがそう言うと、タスクは面白がっているような表情を浮かべた。

「すごい自信じゃないか」

「まあ、そうするしかないからな」

それだけ言うと、タマキは再び目を閉じた。タスクはそれを見てから、ライトに視線を移す。

「それで、これからどうするつもりなんだ」

「あまり落ち着いていることもできないと思うので、すぐに移動し始めようと思ってます」

「それがいいな。こんなところじゃいつ見つかってもおかしくない」

だが、そこで外から爆音が響いた。ライトとタスクが慌てて外に出ると、少し離れた場所で木が倒れるのが見えた。

「もう来たのか！」

タスクがうめくように言うと、ライトはすぐにその手を引いて屋内に戻った。タマキも立ち上がっていて、二人を迎える。

「追っ手だな。逃げるのか」

「そうしたいんですが、ただ逃げるのはもう無理だと思います」

「なら、俺が食い止めよう」

そう言ったタマキが外に出ようとしたが、ライトはそれを止める。

「待ってください。今のタマキさんじゃ無理です」

「必要だからやるだけだ。それに、たぶんなんとかなるさ」

タマキはそれだけ言って外に出た。そしてその前にはすでに一人の男が立っていた。その男は素手で短髪、一見したところ細身の男だった。その男はタマキを見てにやりと笑う。

「へえ、あんたが」

「納得してないで、名前でも聞かせてくれるか」

「ああ、悪い悪い、俺は十二使徒の一人でトレルだ。あんたを連れ戻すように言われてな」

「そうか、その十二使徒っていうのが、俺の力を持ってる連中だな。なんか妙な気分だけど、まあ、おとなしく連れ戻されるわけにもいかないな」

トレルはタマキの言葉に実に楽しそうな笑みを浮かべた。

「ああ、そうだ、そうこないとな。この力はいけてるからな、その持ち主とやりたいと思ってたところだ」

「そいつはどうも」

「いくぜ！」

トレルがいきなり跳ぶと、タマキは前転してそれをかわし、すぐに走り始める。

「ふん、付き合ってやるよ」

トレルはそれを追って走りだした。そのまま二人は併走する形になったが、トレルが腕を振ると爆発が起こり、タマキの進行方向の木が倒れる。

「おっと」

タマキはそれを飛び越え、止まらずに走り続ける。

「本当にぬけがらか？ いい動きじゃねえか」

「俺がぬけがらかどうか、確かめてみるよ！」

タマキは方向転換してトレルに向かう。トレルもそれと同じように動き、二人は正面からぶつかるうとした。だが、そこでタマキはスライディングをしてトレルの足元を狙う。

「甘いぜ！」

トレルはそれをかわそうと跳ぶが、タマキはその体勢から足を跳ね上げ、その腹に回し蹴りを食らわせた。トレルはその一撃で崩されるが、身体をひねって足から着地する。

「やるな。これならもらった力を試せそうだ」

トレルの手の甲に円状の刻印が光り、その雰囲気が変わった。タマキはそれを見て身構えようとしたが、その前にトレルはその目の前まで来ていた。

「遅いな！」

トレルの拳がタマキに襲いかかった。タマキはとっさにそれを左腕でガードしたが、衝撃で吹き飛ばされた。

そして木に叩きつけられ、そのまま倒れようとしたが、それはトレルが首をつかみ、そのまま木に押し付けられ、持ち上げられた。

「やっぱりこの程度か」

トレルはそう言うが、タマキはかすかに笑うと、左手でその腕をつかんだ。

「さて、どうだろうな」

その言葉と同時にタマキの左手から炎が発生した。トレルはそれに驚き手を放し、タマキはその隙にそこから逃れ、距離をとった。

「なんだ、この手品は」

トレルは驚いたようで、タマキはそれにさらに笑みを大きくした。

「残念だが、お前らは俺の力を全て奪えたわけじゃない。それに、そろそろ準備ができた」

タマキはそれから左手を右手についた塊に手を触れた。

「そろそろ目を覚ませよ、俺の体ならある程度くれてやる！」

すると、その塊が光った。だが、トレルはそこで間合いを詰め、腕を振ってタマキに爆発を浴びせた。だが、次の瞬間トレルは衝撃を受けて後ろに飛ばされた。

「まあ、なんか妙な感じがするけど、そのうち慣れるか」

爆煙が晴れると、そこには黄金の右腕と、その付け根から、まるで血管のように右目の周りまで伸びた何かという姿になったタマキがいた。

タマキはその右腕を目の高さまで持ち上げ、軽く握ってみせる。

「さて、ここからが本番だ」

トレルは体勢を立て直し、その異形の姿を見て笑った。

「そうかい、やっと楽しめそうだな」

「まさか、あそこまで一瞬で形を変えるなんて」

ライトはタマキの変貌に驚いていた。

「お前でも予想外だったのか」

タスクが聞くとライトはうなづく。

「もっと時間が必要だと思ってましたし、あそこまで完璧な腕に変化させて、しかもあれだけしっかりと融合してるなんて、本当に予想外です」

一方、タマキと対峙しているトレルは凶暴な笑みを浮かべていた。

「お前のことは殺すなど言われてるが、それだけだ。半殺しにしてやる」

「それはありがたいな。俺もやる気が出てきたよ」

タマキは右腕を一回まわすと、地面を蹴った。そのままトレルに殴りかかるが、それは簡単にかわされる。タマキはそのまま連続で攻撃をするが、それも全て空振りか防御された。

「さっきは不意打ちだったが、わかってりゃどうってことはないなあ！」

トレルは右手をタマキの目の前に突き出した。

「これでもくらいな！」

その右手から爆発が起こり、タマキの姿を飲み込んだ。だが、タマキは右手をその前にかざして、後ろに押された以外は無傷だった。そしてタマキは顔を上げて笑ってみせる。

「俺の力っていうんなら、もうちょっと強くていいんじゃないか」

「手加減してやってれば調子に乗りやがって！」

トレルの手の刻印が光り、その動きは一段階以上鋭くなってタマキに迫る。そして繰り返された拳をタマキは避けられず、まともに顔面に食らった。タマキは倒れずに、そこからカウンターでトレルの顔面に左の拳を叩き込んだ。

しかし、その一撃はあまり効果をあげられずに、トレルはタマキの腕を左手でつかむと同時に、強烈な蹴りをその脇腹に炸裂させた。タマキはその場に膝をつこうとしたが、トレルは腕を引っ張り倒れさせない。

「どうした！ さっきの調子は！」

さらにトレルはもう一発同じ場所に蹴りを入れた。タマキは小さくうめいたが、トレルは再び腕を引っ張り上げようとする。だが、タマキはそこで勢いよく地面に伏せ、つかまれていた腕を振り払い、さらに四つんばいの体勢から地面を蹴って、トレルの顎に頭突きをした。

トレルはその衝撃でのけぞるが、すぐにタマキに腕を振るって爆発を起こす。しかし、すでにタマキの姿はそこになく、トレルの左にまわっていた。そして右腕をその喉元めがけて振りぬく。

「ちっ！」

トレルはなんとかそれを身をかがめてかわしたが、タマキはその隙に前方に走って、距離をとって反転する。

「半殺し、じゃなかったのか？」

タマキはまるでダメージを受けていないような調子でそう言った。トレルはそれに歯をむき出して獰猛な顔になった。

「お望みどおりにしてやるよ！」

トレルはそう叫ぶと大きく跳躍してタマキに襲いかかった。タマキはそれを横に転がってかわすと、そこからさらに後ろに下がるが、トレルもすぐに方向転換をする。

だが、タマキは黄金の右腕で地面を殴りつけると、その衝撃で木の上まで跳び上がった。そこに地面を蹴ったトレルが追撃をするが、タマキはそれに合わせて右腕を突き出した。その右の拳はトレルを確実にとらえ、地面に叩き落す。

タマキは着地し、それと同時にトレルも起き上がった。

「くそっ！ やってくれたな」

「どうした、力に振り回されてるみたいだぞ」

タマキがそう言うとトレルはまた正面から突っ込む。そしてそれは再びタマキの右腕で跳ね返される。

「さあどうした？ お前のほうが力も速さも上なんだぞ」

「なめるなよ！」

だが次の瞬間、その足元に氷の矢が数本突き刺さった。

「落ち着けよ、ぼうや」

「スレド！ なんのつもりだ！」

トレルの声に中年の男が木の陰から姿を現した。

「お前が熱くなりすぎてるようだから、止めに来てやったんだ」

それからその中年の男はタマキに顔を向ける。

「十二使徒の一人、スレドだ。少し前から見てたが、タマキだったか、あんたはなかなかやるな」

「そいつはどうも。それで、あんたは何の用だ」

「話がわかりそうだな。まあ、俺は戦いに来たわけじゃあない。とりあえずは伝えることがあって来たんだ」

「伝言か、聞かせてくれ」

「お前がおとなしくしているのなら、こちらからは手を出さない。それだけだ」

「だから、何もしないでいろってことか」

「そうだ」

タマキはそれからしばらくの間、腕を組んで顎をかいていたが、一つため息をついて組んでいた腕をほどいた。

「たぶん無理だろうな。まあ、一応しばらくの間は見るだけにしておいてやるよ」

その返答にスレドは笑いをこらえきれない様子だったが、しばらくしてから立ち直った。

「いいだろう、そういうことならこちらもしばらくの間だけ、見逃しておこう」

「ちょっと待てスレド！ こんな奴を見逃してやることはないだろ！」

トレルが声を荒げたが、スレドはそれに笑顔を向ける。

「落ち着けよ、ぼうや。こいつはそう簡単にどうこうできる相手じゃないし、今は無事でいさせるのが必要なんだ」

「クソっ！」

それだけ吐き捨てると、トレルはタマキを睨みつけてから、その場から立ち去っていった。スレドはそれを見送ると、タマキに顔を向ける。

「そういうことだ。できれば、おとなしくしておいてもらいたいな」

「ま、約束はできないけどな」

スレドは軽く笑ってから、トレルの後を追ってその場から立ち去っていった。タマキはそれを見送ると、脇腹をおさえ、近くの木に寄りかかった。

「タマキさん！」

そこにライトが駆け寄る。だがタマキはそれに手を上げて、軽く振った。

「大丈夫だ」

それから黄金の右腕を目の高さまで持ち上げる。

「こいつがこうなってから、かなり力が入ってな。思ったよりも攻撃は効かなかった。まあ、あのトレルって奴にもあんまりダメージは与えられなかったけどな」

「そうですか、それより、その右腕をよく見せてもらえますか」

「ああ、俺もお前に聞きたいと思ってたところだ」

タマキは脇腹から左手を放し、右腕をライトに向けて差し出した。ライトはそれをつかむと、顔を近づけて観察したり、手でぺたぺたと触っていた。だが、しばらくしてライトは我に返って慌てた様子になった。

「すみません、僕の興味で、つい」

「別にいいさ。でもまあ、とりあえずはあっちの小屋で落ち着くとするか」

「はい」

それから三人は小屋の中に戻っていった。

足を踏み入れた先

カレンは一人で二つ目の世界に来ていた。そこは荒野が広がる場所で、見たところ人影も動物の姿も見えない。カレンはその荒野を一人で歩き出した。

そして数時間後、荒野は途切れず、カレンはその場に座って休んでいた。そこで突然首からさげているアミュレット、サモンが口を開いた。

「あのヨウイチとかいう奴から連絡が来たぞ。我が力の宿る剣を抜いてみろ」

「わかりました」

カレンは言われた通りに、その剣を抜いた。すると、そこから霧のようなものが溢れ、それがスクリーンとなって要一の顔を映し出した。

「あ、つながりましたか」

「なにかわかったのでしょうか」

「カレンさんが今いる世界なんですけど、そこは人間はあまりいないみたいです」

「そうですか、それは戦うには都合がいいですね。こちらは今のところ何にも遭遇していませんが、そちらで次の世界への手がかりは見つかりましたか？」

「いいえ、それはまだですけど、特に畏もないなら俺たちもそっちに行こうと思ってるんですけど」

「そうですね、まだ何かあるかもしれませんから、私のすぐ側に来ることができるならば、問題ないと思います」

「それは大丈夫です。それじゃあすぐに行きますから」

そしてスクリーンが消え、カレンが剣を鞘に収めるとほぼ同時に、空間が歪むと、要一とまもるがカレンの目の前に現れていた。

「早いですね」

カレンは特に驚いた様子もなかった。まもるはそれからすぐに四角いバックルを取り出した。

「じゃあ、ちょっとその辺りを見てきますよ。変身！」

まもるは真紅のスーツに身を包むと、脚部と背中ブースターを噴射して空に舞い上がった。

「マモルさんのあれは便利ですね」

「はい。その上、あと三つのフォームがあるらしいですよ。詳しくはお楽しみとか言って教えてくれないんですけど」

「これ以上の戦力があるのなら助かりますね。しかし、ああして飛んでいてはいい的になるのが心配ですが」

その言葉のそばから、まもるに対して雷の矢が放たれていた。さらに続けて炎の矢も迫る。だが、まもるはそれを回避してすぐにカレンと要一のそばに着地した。

「あの二人です！」

まもるの言葉にカレンは自分のショートソードを抜いた。

「位置はわかりますか」

「大体わかりました。でもけっこう遠いですよ」

「そうですか、それなら」

「ちょっと待ってください」

カレンが言おうとしたことをまもるは遮る。

「要一君を一人にするのはまずいですよ。ここは私が先に行って時間稼ぎをしてみますから」

「確かに、ヨウイチさんが狙われるのはまずいですね。大丈夫ですか、マモルさん？」

「まっかせてくださいよ！」

それだけ言ってまもるは飛び立っていった。カレンはそれを見送らずに、すぐにまもるが飛び立った方向に顔を向けた。

「急ぎましょう、ヨウイチさん。あの十二使徒というのは油断できない相手ですから」

「はい」

そして、まもるは撃たれる雷と炎をかわしながら、ジャルリとカロミーアに接近していった。

「まったく、派手に撃ってきてくれちゃって」

まもるはそうつぶやいてから、銃を抜き、適当に乱射した。それからある程度の距離を稼ぐと急降下しながら銃を収め、ベルトの左のボタンを押してから、ベルトの右側面にある四角いものを外した。

「アームドフォーム！」

それをバックルに装着すると同時に、そこから光が溢れ、それがまもるの全身を包んだ。その光が収まると、まもるの左肩にはロケットポッド、右手にはミニガンが握られ、装甲がひとまわり強化されていた。

そのまま、まもるは勢いよく地面に着地しながら、肩のロケットポッドからジャルリとカロミーアに一斉にロケット弾を放った。狙われた二人はその攻撃に後退していく。

「まだまだあ！」

まもるは停止してから、さらにミニガンを構え、その二人に向かって銃弾の雨を降らせた。だが、反撃の雷と炎が撃たれる。

「この程度！」

それもまもるの強化された装甲に当たってもあっさりと弾かれる。そしてまもるは続けてミニガンで銃弾をばら撒くが、それを飛び越えるようにして、カロミーアが横にまわりこんだ。

まもるはロケット弾を正面に放ってからカロミーアを正面にとらえ、ミニガンを撃つ。だが、カロミーアの作り出した炎の壁でそれは遮られ、さらに側面からの雷でミニガンの銃口がそらされた。

「ちっ！」

まもるはそのままミニガンを放すと、ベルトのバックルに装着していたものを外した。そうするとまもるのスーツは元の姿に戻り、その場から飛び退く。

次の瞬間、そこにはカロミーアの炎が襲っていた。さらにジャルリが凄まじい速度で大槌を構えてまもるを追う。その距離はあっという間に詰まり、大槌が振り下ろされようとした。

「フルドライブモード！」

まもるの声が響くと同時に、脚部、背面ブースター、そして上腕部からもブースターが展開されて全開になり、急激にその身体を上昇させた。ジャルリの攻撃は空振りになり、まもるは大きな軌道を空に描く。

「思ったよりも、加速が強いな。まあこれなら」

そこからまもるは方向転換をして、銃とブレードを抜く。

それを下から見上げるカロミーアの肩に刻印が光を放って浮かび上がり、その手からは炎が立ち上って剣のような形になった。それからカロミーアはジャルリに話しかける。

「厄介な相手じゃないか」

「そうだな、あの速度では攻撃を当てるのは難しい」

「なにか考えてるんなら、今がその時だけど」

「我が力をもってすれば、不可能ではない」

ジャルリの手の甲の刻印が光り、大槌が雷光をまとった。そこにまもるが放った銃弾が降り注いだ。それはカロミーアの炎で落とされる。

そして、ジャルリが大槌を振ると、そこから巨大な雷が放たれた。まもるはそれをなんとかかわしたが、左腕にかすって銃を取り落とす。

まもるはそこから急転回するが、ジャルリは再び大槌を振るって雷を放つ。それも直撃はしなかったが、肩にかすってまもるの体勢を少し崩した。

さらにジャルリは三発目の雷を放つべく、大槌を構えた。だが、そこに一条の光が飛来し、振るわれた大槌を弾き飛ばした。その隙にまもるは体勢を立て直して着地した。

「まもるさん！」

さらに遅れて要一が到着し、まもるに駆け寄った。

「あの程度の攻撃なら大丈夫。それより、やっぱりカレンさんはすごいな」

まもるの視線の先には、一人でジャルリとカロミーアに対峙するカレンの姿があった。カレンは軽く白銀のショートソードを振ると、口を開いた。

「さて、今度は逃がしませんよ」

カレンと対峙しているジャルリとカロミーアは刻印の輝きを一層強めていた。カレンはそれを気にせず、ジャルリに突進した。

その一撃は強烈でその巨体を大槌ごと持っていった。残されたカロミーアにはまもるが拾っておいた銃を撃って牽制する。カロミーアはそれを炎の剣で落とした。

「やってくれる」

「おらあ！」

さらにそこに要一が次元の鉄槌で殴りかかったが、それは簡単にかわされる。カロミーアは反撃をせずに、そのまま二人と距離をとった。

「仕方がない、まずはお前達の相手をしてやろうじゃないか」

カロミーアは炎の剣を構えた。

一方、ジャルリはカレンに弾き飛ばされたが、なんとか距離をとって体勢を立て直していた。

「さすがにタマキさんの力はあなどれませんね。今ので決めようと思ってましたが」

「おのれ！　ここまでの力とは」

カレンは再びジャルリに突進した。ジャルリはそれを避けられず、なんとか大槌で受けたが、弾き飛ばされた。そこからカレンは地面を蹴り、もう一撃を加えようとする。

だが、ジャルリは大槌を地面に叩きつけると、その反動で空に舞う。そして雷をそれにまとわせると、そのままカレンに振り下ろしていった。

カレンはそれを避けようとせずに、あえて受けると一瞬で弾き返し、がら空きになったジャルリの腹に強烈な蹴りを叩き込んだ。その衝撃でジャルリは吹き飛び、カレンはすぐにその前に立つと、ショートソードをその喉元に突きつけた。

「動かないでもらいましょう」

「やるな、だがお前がここでこうしていいのか？」

「自分が戦っている相手のこともわからないようですね。まあ、見ていることです」

カレンの視線の先では、要一とまもるがカロミーアと戦っていた。カロミーアは炎の剣を伸ばし、二人目がけて振るう。

「フォーム！　シールド！」

要一は鉄槌を盾に変え、その一撃を受ける。その背後からまもるが飛び出して銃を撃つが、カロミーアは地面を蹴って後ろに跳び、それをかわした。

「フォーム！　チェーン！」

要一はそこで盾を鎖に変え、それをカロミーアに向かって投げつけた。鎖はカロミーアの腕に巻きつき、要一はすぐにそれを引っ張る。

「これは！？」

カロミーアは一瞬体勢を崩され、そこに脚部ブースターを全開させたまもるがブレードを手にとった。だが、カロミーアは瞬時に崩された姿勢を低くして地面を蹴ると、正面からまもるとぶつかる体勢をとる。

まもるの超振動ブレードとカロミーアの炎の剣がぶつかり、炎が激しく撒き散らされて二人の姿が隠れる。

「まもるさん！」

要一がそこに駆け寄ろうとすると、炎の中からまもるとカロミーアが飛び出し、元の場所に戻った。

「大丈夫ですか？」

要一が聞くと、まもるは手を軽く振った。

「大丈夫、でもちょっとこれじゃパワー不足みたいだけど」

その言葉通り、その手の中のブレードの刀身は半ばから折れている。

「まさか、こっちまで使うことになるとはね」

まもるはベルトの左の四角いものを手に取った。だが、そこにカロミーアが炎の剣を伸ばしてくる。

「フォーム！ シールド！」

要一は一步前に出ると、再び盾でそれを防ごうとするが、炎の剣は二又に分かれるとその一方が軌道を変え、要一の背後に回りこむように動いた。

「そうはいくか！ フォーム！ ダブルシールド！」

要一は片方の盾を回りこむように動いた炎に二つになった盾のうちの一つを投げつけた。それで炎の剣は遮られ、まもるは手に取ったものをベルトのバックルに装着した。

それと同時にまもるの全身が光に包まれ、装甲が腕の部分だけ強化され、他は簡素なものに変化した。そして、その手が頭上にかかげられると、そこに長い、剣の柄らしきものが現れ、まもるの手中に収まる。

「いくぞ！ ブレードフォーム！」

声と同時に柄から青い炎が伸び、それがまもるの体躯よりも長く太い剣の形をとった。それが一振りされると、炎は消し飛び、青い刀身の巨大な剣が姿を現す。

「超烈火剣！」

まもるはその剣を振るい、カロミーアの炎を簡単に切り払った。そして、ブースターを全開にすると、今までよりもはるかに増した加速でカロミーアに突進する。

「く！」

最初の一撃はなんとか炎の剣で防いだが、カロミーアは体勢を崩した。まもるはそこから勢いのまま空に上昇し、そこから剣を振りかぶって一気にカロミーアに急降下する。

「一刀両断！」

青い刃が炎を発しながら、凄まじい勢いで振り下ろされた。爆煙と土煙が派手に立ち上がったが、カロミーアの姿はすでにそこになかった。

「くっ」

なんとかまもるの一撃をかわしていたカロミーアだったが、それでも完璧にはかわせなかったようで、腕を押さえている。

それからカロミーアは倒れているジャルリに目をやったが、あきらめの表情を浮かべると、後ろに下がり、空間の歪みに姿を消していった。

「さて、あなたの仲間は撤退しましたよ。あきらめはつきましたか？」

そう言われてジャルリは目を閉じた。

「好きにするがいい」

それから数十分後、ジャルリは要一の鎖で縛られて座らされていた。要一は少し離れた場所で次元の管理人と話していたようだったが、それを切り上げて戻ってきた。

「その手のやつのがわかりました。どうやら、それはタマキさんから力を継続的に奪ってるみたいです」

「そうですか。それで、どうすればいいかはわかりましたか？」

「そっちのサモンが宿ってる剣を使えば、とりあえずは消せるんじゃないかと言っていました。

ただ、それで力がタマキさんのほうに戻るかはわからないみたいですけど」

「それなら、とりあえずはそうしてみましよう」

カレンはサモンが入っているほうの剣を抜いた。そして、それを構えると、ジャルリの手の甲の刻印に軽く振り下ろした。剣が軽く刻印を切り裂くと、それは光となって消えていった。

「こ、これは」

ジャルリはその光景に呆けたような声を出した。

「確かに、これでタマキさんの力の気配はなくなりましたね」

カレンは剣を鞘に収めた。ジャルリは力なくうつむいている。

「あとは話を聞きだすだけです、あまり時間は浪費したくありませんね。何かうまい手はありませんか？」

カレンがそう言うが、要一もまもるもどう答えていいかわからないようだった。その反応を確認したカレンは、静かに短く息を吐き出すと、ジャルリの顎をつかんで顔を上げさせた。

「では、私ができるだけ手早く聞き出すことにしましょう」

世界のありかた

タマキはライトと一緒に近くの町に来ていた。二人は城壁のない町の入口で立ち止まり、町の様子を見ていた。

「けっこう大きい町だな」

「はい、島にある町ではここが一番大きいんです」

「あんまり人が出歩いてないんだな」

「それには事情があるんです。こっちです」

ライトはタマキの先に立って歩き出した。タマキもそれについて行きながら、周囲を見回している。家は大抵二階建てまでで、あまり大きな建物はなく、それほど綺麗な建物はない。そして、屋外に人が少ないのがやはり妙だった。

そして、小さな平屋の前に来るとライトは足を止める。

「ここです」

ライトは鍵を取り出してドアを開けた。中に入ると、軽く埃が積もっていて、あまり大したものを見当たらない。

「ここもいざという時のための場所なのか」

「はい。僕が昔住んでた家なんですけどね」

ライトはそう言いながら、部屋の隅にあった椅子を持ってきた。タマキも薄く埃をかぶったテーブルを部屋の中心に置いた。

それから二人は椅子に座って向かい合う。

「すみません、何もなくて」

「それは仕方ないだろ、それより、俺をここに連れてきた理由を教えてくれ」

「あの小屋では不便ですし、それにタマキさんにこの町を見て欲しかったんです。この町はおおむね平和といえそうですが、自由も活気もありません」

「確かに、空気が淀んでるといえるか、まるで動きがない感じだな。どこもかしかもこんなふうにしてうってことなのか」

「いえ、ここもまだ完成されてるわけではないんです。抑圧されていても、まだこの町の人達にはまだ自分の意思があります。それも危険な状況ですが」

「なるほどな、まずはここをなんとかできないと、どうにもならないか」

「はい、それでも相手にはタマキさんの力が必要ですから、命まで奪われることがないのが数少ない有利なことです」

タマキは自分の腹に手を当てる。

「こいつか。力を取り戻す方法はないのか？」

「今のタマキさんの右腕なら、相手の力を消すことはできるはずですが、でも、それではタマキさんに力は戻りません。まずは十二の刻印全てを消す必要があります」

「そうなのか、それでも相手の数は減らしていけるんだな。だんだんこの腕も馴染んできたし、やってやれなくもないか」

「それについては僕もわかってないことは多いんです。そこまで完璧な腕に一瞬で変化したのは予想外でしたし、それに、かなり深くつながってるみたいですね」

「ああ」

タマキは自分の黄金の右腕を持ち上げ、そこから血管のようなものが伸び、盛り上がっている自分の右目の周囲を撫でた。

「確かに、もうまるで自分の腕みたいだし、こうやって神経が繋がってるっていうのかな、そのおかげで力も沸いてきた。でも、どうもこの腕だと魔法は使えない感じだな」

「そうなんですか、それより、魔法が使えるんですか？」

「一発くらいなら大丈夫だな。まあ、いざという時以外には使わないけど。他にも使えるものはあるからな」

「あの手から炎を出したものですね」

「そうだ。俺がこうして生きてられるのもこの力のおかげなんだよ。それに、これは俺にとって大事なものだ。まあ、ああやって使うのは久しぶりなんだけどな」

それからタマキは立ち上がった。

「ここでこれ以上話しててもしょうがないよな。ちょっと町を案内してくれよ」

「はい、わかりました」

ライトも立ち上がり、二人は外に出て行った。

その頃、町のある場所では、道に倒れている中年の女に若い男が駆け寄っていた。

「おい、大丈夫かよおばさん」

「あんた、駄目だよ放っておかないと」

「ちっ、そんなわけにはいかないだろ」

若い男は中年の女を起こそうとしたが、突然その肩が切れて、血が噴出した。

「うあっ！」

うめき声を上げて若い男は肩を押さえる。その背後から、甲高い声が響いてきた。

「おいおい、困るじゃないか。勝手にそんなことしてもらっちゃあ」

若い男が振り返ると、そこには派手な格好をした中年の男がいた。その男は満面に笑みを浮かべ、若い男に近づいていく。

「まだ若いんだから、余計なことをするもんじゃないよなあ。わかるだろ」

中年の男が若い男の無傷の肩に手をかけると、その肩を強く握った。

「う、うあ、やめてくれえええええええ！」

若い男は悲鳴を上げたが、中年の男は握力でその身体を無理矢理持ち上げて立たせた。

「やめてください！ お願いします」

中年の女は満足に動けないにもかかわらず、中年の男の足にすがりついた。だが、すがりつかれた男はその女を蹴り飛ばす。

「あのなあ、あんたが余計なことをしてるから、この若者がこんな目に会うんだよ。わかるか？」

「目障りなんだよねえ」

「はい、なんでもいたしますから、どうかその子は放してください！」

「ほう」

中年の男は若い男を放り投げ、足にまとわりつく女を蹴り飛ばした。

「調子にのらないほうがいいよなあ。まったく、この町でもまだこれじゃあ参るねえ。始末したほうがいいのかもな」

中年の男は指を立てると、そこに風をまとわせた。だが、そこに一つの石が飛来し、その腰に当たった。

「おや、これは？」

中年の男がその石が飛んできた方向に顔を向けると、そこにはタマキとライトがいた。

「石を投げたのはお前だな。それにそっちのは、ああそういうことか。お前が話しに聞いてた奴だな」

中年の男は一人で納得したようで、指にまとわせていた風をタマキに向けて飛ばした。それはタマキの頬をかすり、切り傷を作る。

「ほう、いい度胸だなあ。確かこれを殺すのはまずかったんだっか」

タマキは無言のまま足を踏み出した。

「俺はタマキだ、あんたの名前は」

「私は十二使徒の一人、リール。お見知りおきを」

リールと名乗った男はわざとらしい礼をしてみせた。タマキはそれを無視して、倒れている中年の女と若い男に目をやる。

「ライト、あの二人を頼む。そこの鬱陶しいおっさんは俺が相手をするから」

「わかりました、気をつけてください」

ライトに軽く手を上げてから、タマキは地面を蹴ってリールに迫った。

「直線的だねえ、そんなことじゃ」

リールが指をならすと、そこから風の刃が走った。だが、タマキはそれを右腕で弾くと、そのまま突進する。

「おっと」

だが、リールは高く飛び上がって、近くの家の屋根に乗った。そして対峙する二人の後ろをライトが走り、倒れている二人に駆け寄った。タマキは一瞬だけそれを見ると、すぐにリールに視線を戻した。

「なんであんなことをやってたのか理由があったら聞かせてもらおうか」

タマキの問いにリールはあからさまに嘲りの表情を浮かべた。

「我らの理想のためには、この町にいるものが勝手な行動をすることは許すことはできないんだなあ」

「そうか、思ったよりもくだらない理由だな」

タマキはため息を一つつくと、右腕で手招きをした。

「好き勝手したいなら、まずは俺を倒してみろよ。楽しませてやるぜ」

「なるほど、それなら適当に相手をしてあげようじゃないか」

リールは屋根から飛び降り、タマキと向かい合った。

実力と形状変化

「どの程度のものなのか見てあげようか」

リールは片手を軽く振って二つの風の刃を飛ばした。それはタマキの肩と膝を狙い、正確に飛来する。タマキは肩のほうを右腕で落とし、膝にきたものは足を動かすだけでかわした。

「ほう、なかなかいい動きじゃないか」

そう言うと、リールはいきなり地面を蹴った。その勢いは瞬時に加速され、タマキはなににもできずに一撃をくらってよろめく。

「よく倒れないな、偉いもんだ」

リールは、背後からよろめいたタマキが立ち直るまで立ったまま待った。タマキは追撃がこないのを確信していたのか、ゆっくりと振り返る。

「悪くない一撃だ。でも、この程度の威力の一発じゃな」

「一発で終わるわけがないじゃないか」

リールがもう一度地面を蹴ると、再び加速した。タマキは再びそれを避けられず、顔面に一撃を食らう。今度はリールは止まらずに往復した。

「どうしたんだ？ 何も出来てないじゃないか」

その言葉通り、一見したところタマキはかわすのも防ぐこともできていなかった。だが、その体勢はそれほど崩れていない。

「何も？ 自分の攻撃が効いてるかもわかってないらしいな」

タマキは口の中を切ったらしく、その場に血を吐き捨てたが、平気な顔をしている。リールはそれを見て首をかしげた。

「おや、攻撃は当たったはずなのに」

「お前らはどうも、なんていうか、なっていないなんだよな」

「言ってくれるねえ、それなら本気を出してあげようじゃないか」

リールの二の腕にある刻印が光った。そして瞬時に今まで以上の加速をする。今度はタマキの身体は吹き飛ばされ宙に舞った。

「まだまだあ！」

その身体にリールはさらに地面を蹴って追撃を加え、タマキの身体はさらに高く舞い上がり、地面に叩きつけられる。さらに、リールはそこに勢いよく足から落下していった。

「惜しいな」

だが、タマキはその足をしっかりと両手で受け止めていた。そしてリールの背中に蹴りをいれて自分の上からどかせると素早く立ち上がった。

「やっぱりなっていない」

タマキはにやりと笑った。その姿はまるでダメージを負っているようには見えない。リールはその姿を見て、始めていらついた表情を見せた。

「生意気じゃないか、ああ、生意気だ」

リールは今までの余裕のある表情を消し、その瞳に殺意を宿した。タマキはそれを見て、始めて身構える。

「やっと本気になったか」

リールは無言で再び加速したが、その左の拳はタマキの右腕で受け止められていた。しかし、リールの力のほうが上で、タマキを押し込んでいく。

「その程度の力！」

リールは空いた手で風の刃を作り、至近距離からタマキに放った。それはタマキの脇腹をかすって血を飛び散らせるが、タマキは逆に一步踏み出し、左手をリールに突きつけた。

「バースト！」

爆発が起こり、至近距離でそれを顎に受けたリールは派手に吹き飛ばされた。そのまま転がると、リールは動かなくなった。

「タマキさん！ 大丈夫ですか！」

そこにライトがすぐに駆け寄ってきた。タマキはまだ出血している脇腹をおさえながら軽く手を上げる。

「まあ、我慢でなんとかなるさ。それより、あいつの刻印をなんとかしないとな」

それから二人が倒れているリールの側まで行くと、それは見事に気を失ってのびていた。タマキはその傍らにしゃがむと、袖を破って刻印を露出させた。

「それで、こいつをどうやって消せばいいんだ」

「今のタマキさんならその右腕をさらに違う形に変化させられるはずです。刻印を切れるようなものに変化させて、それを使えば刻印を消せるはずです」

「違う形か」

タマキは自分の右腕を持ち上げて目をつぶった。数秒後、タマキは目を開けると左手を右手首にそえた。

「頼むぞ」

言葉と同時にタマキの右手首から先が光った。そして、その手は普通の指ではなく、五本の鉤爪

のようなものが生えている物騒な姿になっていた。

「こんなもんか」

タマキはその鉤爪をガチャガチャ言わせ、左手でリールを押さえた。そして、鉤爪で刻印を軽くなぞるようにした。すると血が滲むと同時に刻印が光りになって消えていった。

「おお、消えたな。まあこれでこいつは用なしだ」

タマキはすぐに鉤爪から元の手の形に戻し、立ち上がった。

「いいんですか、このままにしておいて」

「気絶してるだけだから大丈夫だろ。それに、こいつの仲間が回収にくるだろうから、俺達はさっさとここから離れよう」

二人はその場から立ち去った。その途中、ライトは疑問を口にすることにした。

「タマキさん、僕から見ると、力の差のわりに相手を簡単に倒しているように見えたんですけど」

「ああ、確かに単純な力なら今の俺よりあいつのほうが上だろうな。でも、あいつに限らず、その前の奴も力をうまく使えてないんだよ。無理矢理だから見た目は派手でも効果はいまいちっていうことだな」

「それでは、タマキさんが最後に使ったあれは」

「あれが魔法だよ。残ってる力じゃ、あれが限界だったんだけど、それでもあいつらの攻撃よりも上だな。それに、あいつらはそれ以外の攻撃も直線的で読みやすいんだ。経験の差ってやつだな」

「そうだったんですか。タマキさんはすごいんですね」

「いや、まあ時間が経てばあの連中も力に慣れてくるだろうし、簡単にはいかなくなるだろうな。そのぶん、俺もこの右腕に慣れるだろうから、一方的に不利ってわけでもない」

タマキは自分の黄金の右腕をなで、ライトもそれをじっと見た。

「確かに、すごい進化の速度ですね」

「ああ、だんだんこいつの声も聞こえてくるような気がしてきたくらいだ。言うことは聞いてくれてるから、嫌われてはいないだろうな」

「もし、完全に意思疎通できるようになったら、すごいことですよ。でも、今はとにかく家に戻って傷の手当てが先ですね」

「そうだな、これからのことはそれからだ」

「じゃあ、ちょっとこいつをあの爺さんに預けてきます」

要一はそう言って鎖でがんじがらめにしたジャルリと一緒に姿を消した。それを見送ったまもるは一緒に立っていたカレンに顔を向けた。

「とりあえずこれで一人片づきましたけど、これからどうするんですか？」

「情報は思ったより簡単に聞き出せたのが幸いでしたね。軽い拷問も必要ないとは、よほど主という者の力を信頼しているのでしょうか」

「拷問、するつもりだったんですか」

「必要なら、です。その必要がなかったのは幸いでした、それほど得意なことでもないのです」

「いや、見たくなかったのでよかったです。それで、あの話の内容は途方もない話でしたね、全ての世界に秩序をもたらすとか何とか」

「そうですね、とても実現できることとも思えませんが、タマキさんの力をうまく使えばかなりの程度のことはできるかもしれません。ただし、今まで戦った様子ですと、あの十二使徒と名乗る者達はその力をうまく使えている様子はありませんでしたが」

「それならそんなに心配する必要はないんですか？」

「いいえ、あの男も表面的なことしか知らないようでしたが、私としては裏にはそれ以上のものがあるのだと考えています」

「裏、ですか」

「はい、十二に分けられたタマキさんの力。ですが、なぜそれをわざわざ分割したのかも謎ですし、わざわざ閉鎖された世界に引きこもっているのも怪しいですね。時間稼ぎなのか、それともそれ以上の理由があるのかどうか」

それから数分後、要一が戻ってきた。カレンはすぐに気がついて顔を向ける。

「ヨウイチさん、どうでしたか」

「あのじいさんは今の事態が收拾できるまで幽閉しておく、って言ってました」

「それなら安心ですね。次の世界についてはどうでしょうか」

「それなら、ここから近い場所に入口があるみたいですよ。こっちです」

要一が先頭に立って歩き出した。

それから一時間ほど後、三人は大きな岩がある場所に到着していた。要一はそれに歩み寄ると、岩に手を当てた。だが、その手は何もないかのように岩を通り抜けた。

「ここみたいです」

そう言ってから要一が下がると、カレンが前に出てショートソードを抜いた。そしてそれを振り上げてから、一気に振り下ろした。

岩は切り開かれ、そこに空間の裂け目ができた。カレンはショートソードを鞘に収めると、要一とまもるのほうに振り向いた。

「今度は私が先行するのはやめにしておきましょう。不意をつかれたとしてもなんとか対応できそうですからね」

「もちろん、任せてください！」

まもるは胸を張って答え、要一もうなずいた。それから三人は空間の裂け目に足を踏み入れた。

次の瞬間、三人の前には大きな水面が広がっていた。

「これって湖ですかね」

要一は前に足を踏み出して、それを眺めた。まもるもそれに並ぶ。

「そうみたいだけど、やたらと大きいじゃない。本当にこれ湖？」

まもるは水際まで歩いて行って、それに指をつけてなめてみた。

「ああ、淡水だ」

「まもるさん、いきなり口に入れるなんて危ないですよ」

「それもそうか。まあここは大丈夫みたいだけど」

それから二人が振り向くと、カレンは湖の反対側、少し先にある林を見ていた。

「カレンさん、どうしたんですか？」

まもるが聞くと、カレンは振り返らずに口を開いた。

「少し妙な雰囲気ですね」

「妙？ どういうことですか？」

「このような環境にしては生物の気配が少ないようです。何かしかけられているかもしれませんね」

「じゃあ、どうするんですか」

要一が聞くと、カレンはやっと振り返った。

「とりあえずは次の世界へ通じる場所を探しましょう。そうすれば相手も動いてくるでしょうから」

「でも、どこから探します？」

「そうですね、この湖沿いから探しましょうか」

三人はその場から出発した。それから一時間も経ったが、湖がどれだけの大きさなのかはまだわからなかった。

「本当に大きい湖ですね」

要一はあくびをしながら体を伸ばしていた。

「そうですね、今までのことからすると次の世界へ通じる場所はそう遠くない場所にあるはずですが、もしかしたらここでは少し違うのかもしれないですね」

「ひょっとしてこの湖の中なんじゃないですかね」

まもるがそう言うと、カレンは立ち止まった。

「その可能性もありますね。マモルさんのスーツは水中で行動できますか？」

「大丈夫ですよ、でも要一君はできないんじゃない？」

まもるにそう言われると、要一は頭をかいた。

「沈むだけなら大丈夫だと思いますけど、それよりここは歩きまわったりするよりもじいさんからの連絡を待ったほうがいいんじゃないでしょうか」

「それもそうかもしれませんが、少しでも周囲の状況は調べたほうがいいでしょうね。私の勘でしかありませんが、この世界には警戒すべきだと思います」

「世界を警戒ですか、なんだか今までよりも大きな話ですね。なんだか気合が入ってきましたよ」

まもるはそう言ってから握りこぶしを作った。

「じゃあ、とりあえずちょっと休みましょうよ」

要一はそう言うと少し離れ、次元の鉄槌を呼び出し、それからそれをテントの形に変えた。

「わかりました。私は少し周囲を見てくるので、お二人はここで休んでいてください」

「それじゃ私も」

まもるはカレンについていこうとしたが、それはカレンが止めた。

「いいえ、マモルさんはここで待っていてください。ヨウイチさんを一人にしておくわけにはいきませんから」

そう言われると、まもるは多少不満がありそうだったが、うなずいた。

「わかりました。気をつけてください」

「よろしくお願いします」

カレンはその場から離れた。要一は地面に座り、まもるは立ったまま首を回していた。それからまもるは要一のことを見る。

「ところで要一君、何かパワーアップとかないの？」

「まもるさんみたいな大幅なイメチェンみたいのはないですよ。一応次元の鉄槌の制限は多少解除されてて、前よりも重くはできますけど」

「つまり、要一君の想像力のなさが伸び悩みの原因ってわけか」

「いや、まもるさんのほうが色々影響受けすぎなんですよ。前はパワードスーツで今度はヒーローものでしょ」

「別にいいでしょ、前よりも汎用性もスピードも、それにパワーの最大値もあがってるし。それにまだフォームはもう一つ残ってるから」

「まだあるんですか」

「使う機会があるかはわからないけどね」

「あれ、ちょっと見てください」

そこでいきなり要一が立ち上がり、湖面を指差した。まもるが振り返ると、その指差した先の湖面が泡立っているのが目に入った。

「あれは？」

まもるはそう言いながらもベルトのバックルになるものを取り出した。要一もすでにテントを鉄槌の形に変えている。

そして数秒後、水柱と共に、湖から巨大な灰色の竜が姿を現していた。

「変身！」

まもるはすぐに変身をして、竜を見上げた。要一も次元の鉄槌を構えている。

「あれって敵ですかね！」

「わからないけど、敵じゃなくてもやばいでしょあれは！」

その言葉通り、長い身体を持った竜が湖面に着水すると、そこから大きな波が生まれ、まもると要一に迫った。

「ほらね！」

まもるはすぐに要一を抱えてその場からジャンプをしてそれを飛び越えた。そして着地すると要一を放して湖面に注目する。

「また来るんじゃないの」

「どうします？」

「逃げたほうがいいでしょ、これは」

だが、二人の背後に空まで届くほどの水の壁が出現した。

「これは」

「あの竜の仕業じゃないの。敵だと思ったほうがよさそうってこと！ アームドフォーム！」

光と同時にまもるの姿は強化された装甲とミニガン、ロケットポッドを装備していた。

「要一君は下がってて！」

まもるはミニガンを構え、竜の出現を待ち構える。そして湖面が荒れ始めると同時にまもるはミニガンの引金を引いた。そのまま湖面を掃射したが、竜はそれにかまわず湖から飛び出してきた。

今度は竜は全長五十メートルはありそうなその全身を現し、湖の上空で静止してみせる。

「まったく、嫌になるほどのでかさってやつ？」

まもるはミニガンを上空の竜に向けた。そして再び引金を引いて竜に銃弾を浴びせかける。竜が身体を震わせると、その全身から小さな水の弾丸が飛び散り、ミニガンの銃弾を叩き落した。それだけではなく、水の弾丸はまもると要一に迫ってくる。

「フォーム！ シールド！」

要一は鉄槌を盾に変えそれを構え、まもるはロケット弾を一斉に発射した。ロケット弾は空中で爆発し、水の弾丸を散らせた。

竜はそれから甲高い雄たけびを上げると、今度はまもるに向けて口から巨大な水の弾を吐き出した。

「フォーム！ 次元の鉄槌！ 十倍だ！」

要一の盾が次元の鉄槌に変化し、さらにそれが巨大化した。要一はそれを巨大な水の弾に叩きつけ、粉碎する。それから次元の鉄槌はすぐに元のサイズに戻り、要一の手にとまった。

「ナイスサポート！」

まもるは叫んでから、ミニガンを思い切り頭上に放り投げた。

「ストライクモード！」

声と同時にミニガンが光になり、その形は異常に長いライフルになった。まもるはそれを片手で受け止めると、立ったまま竜に狙いをつけ、引金を引いた。ライフルが火を噴き、そこから放たれた弾丸が一瞬で竜に吸い込まれていった。

その弾丸は竜の身体を貫き、大きな声をあげさせた。だが、巨体にはその程度の傷では大きな

ダメージは与えられている様子はない。

竜はすぐにまもるに狙いを定めると、立て続けに口と全身から大小の水の弾丸をそこに発射した。

「そんなもの！」

まもるは大きな水の弾丸はライフルで撃ち落とし、細かい水の弾丸にはロケット弾を撃つ。だが、竜はさらに尾を大きく動かすと、それを振り下ろして湖を打って縦方向に大きな水の刃のようなものを作り出した。

「ちょっと、これは無理だって！」

まもるはすぐにブースターを吹かして高速移動をすると、地面を削るその軌道からなんとか逃れた。だが、竜はさらに尾を湖面に打ち付けて同じように大きな水の刃のようなものをさらに作り出す。

「こうなったら」

まもるはベルト背面の四角いものを取ると、今バックルに装着しているものと素早く入れ替えた。そこに水の刃が襲いかかるが、それはまもるの目の前で碎けた。

水が散り、視界がなくなったが、それが全て地面に落ちると、そこに立っていたのは今までよりも二倍のサイズの巨人とでも言うべき、ずんぐりとした姿になったまもるだった。

それは頭がなく装甲は全身を分厚く覆い、右のアームは三本指、左はドリルになっている。さらにその右肩にはクレーンのアームのようなものがあった。

「これが最後の一つ！ パワードフォーム！」

竜はその姿を見ると、雄叫びを上げて直接まもるに襲いかかってきた。

「甘い！」

まもるは右肩のクレーンアームを伸ばすと、それを横殴りに振って竜を打った。その一撃で突進の軌道がずらされ、勢いが殺される。

そして、まもるは脚部と背面のブースターを全開にすると左のドリルを回転させながら竜に突っ込んで行った。

そのドリルは竜の鱗を削り取りながら、突き進んでいく。そして竜の身体の三分の一程度を削るとまもるは止まり、竜はさすがにかなりのダメージを負ったようで、地面に落ちた。

すると、まもると要一を閉じ込めていた水の壁が崩れ去った。

「終わったんですか？」

要一がまもるの隣に駆け寄ってきた。まもるはパワードフォームから基本のフォームに戻り、落ちた竜を眺める。

「そうみたいだけど、なんであんなに暴れてたのかね」

まもるは竜の頭のあたりに近づき、それをよく観察した。すると、その目の後ろのあたりに小さく光るものがあった。

「これは？」

まもるはそれに手を伸ばして引き抜く。それは大きな針のようなもので、すぐにまもるの手の中で碎けてしまった。そして、上空から拍手が響いてきた。

「よくやったよくやった」

まもると要一がその声のした方に顔を向けると、そこには宙に浮いた一人の若い男がいた。

「誰だ！」

まもるが鋭く叫ぶと、その男はもったいぶった調子で礼をする。

「俺は十二使徒の一人、エドルだ。よくその蛇を倒したな、褒めてやるよ」

「なるほど、私達を分断して始末するつもりでしたか」

そこでカレンの声が響いた。カレンはカロミーアの首根っこをつかんでそれを引きずっている

。「おや、思ったよりもたなかったみたいだな、使えない」

「カレンさん！ 大丈夫でしたか！？」

「問題ありませんよ、マモルさん。それより、お二人とも怪我もないようでほっとしました」

そしてカレンはカロミーアから手を放すと、エドルを見る。

「あなたもこうなりますか？」

「それは遠慮しとこう。じゃあな」

エドルはそれだけ言うと空間の歪みに姿を消した。

「行きましたか。まあとりあえずいいですかね」

カレンはもう一度カロミーアの首根っこをつかむと、それを要一の前まで運んだ。

「すでに刻印は消してありますから、あとはお願いします、ヨウイチさん」

「わかりました、いや、ちょっと待ってください」

要一とりあえず鉄槌をチェーンに変えてカロミーアを縛り上げてから、自分の頭に手を当て、何回かうなずいた。それがすむと竜に歩み寄り、その頭に手を置く。数秒後、その手を放すと、竜は頭をゆっくりと持ち上げた。

「すまなかった。何かに操られていたようだ」

竜の口からは空気を大きく動かす声が響いてきた。まもるはそれに驚いたようだったが、危険はないと判断して変身を解除した。

「操られてたって、さっき抜いたやつのこと？」

「そうだ。あの呪縛から開放してくれたおかげでこうしてられる、礼を言おう」

「ええっと、どういたしまして」

まもるは頭をかいて軽く頭を下げた。そこでカレンが一步踏み出す。

「あなたはこの湖の主でしょうか」

「そうだ、お前達は異世界の者のようだが、何の目的があってこの世界に来たのだ？」

「この世界のどこかに、違う世界に通じる次元の歪みがあるはずなので、それを探しに来たのです」

「歪み？ それならば心当たりがある」

そう言った竜はやっと全身を起こした。そしてゆっくりと宙に浮かぶ。

「案内しよう。ついて来るがいい」

「あっと、じいさん、こいつよろしく」

要一がそう言うのとカロミーアの姿が消えた。そして竜は空中を泳ぐように移動し始め、三人はその後について歩き出した。

挑戦状

「おはよう、ライト」

タマキは床に敷いたマットから起き上がり、食事の用意をしているライトに声をかけた。

「おはようございます、タマキさん」

「お、今日はパンとハムもあるのか」

テーブルの上に並べられているものを見てタマキは声を上げる。

「はい、昨日タマキさんが助けた人たちが持ってきてくれたんです」

「へえ、それは儲けもんだな」

そこにライトがスクランブルエッグを持ってきた。

「じゃあ、いただきますと」

タマキはパンにハムとスクランブルエッグを乗せてかじった。そうして朝食を終えて食器を片付けるとタマキは勢いよく立ち上がった。

「さて、出かけるか」

「はい、行きましょう」

そしてタマキがドアを開けると、そこに挟まっていたらしい紙が落ちた。

「これは」

タマキはそれを拾って広げる。そこには地図のようなものだけが描かれていた。ライトはそれを覗き込んだ。

「この町の地図みたいですね。この印の場所に来いということでしょうか」

「挑戦状、かもな。とりあえず行ってみればわかるか」

「大丈夫ですか？」

「まあ、なんとかできるだろ」

二人が出かけてみると、朝の町は比較的活気があった。

「今日はなんだか雰囲気が違う気がするな」

「タマキさんのことが噂で伝わっているのかもしれませんが。この町にあった重石がなくなるかもしれないんですから、明るくもなります」

「よほど追い込まれてたんだな。何にでも期待したい感じか」

「そうかもしれませんが。でも、ずっと希望なんてなかったんです」

「希望か。それより、その地図の場所はあとどのくらいだ」

「まだ少しかかりますね、町のはずれのほうですから」

「そうか」

そうして歩く二人だったが、町の住人達はそれに陰から注目し、何人かは後についていった。タマキはそれに気がついてしたが、特になにをすることもなく、放っておいた。

そしてタマキとライトの二人は地図に示された場所の近くに到着していた。そこはほとんど民家が見当たらず、倉庫のようなものしかなかった。

「このあたりか」

「はい。地図にはここまでしか載ってませんね」

「それなら、後は足で探すしかないのか」

「その必要はない」

上から声が聞こえてきて、タマキとライトはその方向を見た。そこ、倉庫の屋根の上には中年の男、スレドの姿があった。

「あんたか。違う奴かと思ってたんだけどな、スレド」

「覚えておいていてくれて光栄だ」

「まあ、俺はけっこうめなんだよ。それで、何の用だ？ 挨拶か？」

スレドはこめかみのあたりをかいた。

「おとなしくしていれば手は出さないとしたが、おとなしくしていなかったらしいな」

「そうだったかな。別に覚えはないんだけど」

「とぼけたことを」

「それで、どうするんだ」

「今のお前の力に興味がある。あのできそこないを倒した力にな」

「俺はあんたにはそんなに興味はない。まあでも、相手ならしてやるよ」

「安い挑発だ。だがまあいい」

スレドが手を振ると、そこに氷の槍が出現した。タマキはそれを見て感心したような表情を浮かべる。

「前の二人とは違うな。ライト、下がってる」

「はい」

ライトはすぐに近くの倉庫の陰に隠れた。スレドはそれを見送ってから氷の槍を構え、屋根から跳んだ。そして空中でその槍を振るうとそこから鋭い氷のつぶてが飛ぶ。タマキはそのつぶてを右腕で払ったが、そこにスレドが氷の槍を叩きつけてきた。だが、タマキはそれを身体をひねってかわした。

だが、スレドはさらに着地と同時にその槍を跳ね上げる。タマキはそれを身をかがめてかわそうとしたが、かわしきれずに頭部をかすった。血が飛び散るが、タマキは槍を受けた衝撃のまま地面を転がってそこから距離をとった。

「前よりも動きがいいな」

スレドは槍を構えなおして口を開く。

「慣らす機会はお前達からもらってるからな」

タマキはこめかみのあたりから流れる血を手で拭った。そしてそれから右腕を前に突き出して構える。

「本番はこれからだろ」

「どうかな」

スレドも氷の槍を構えた。二人はその状態で数秒間、睨み合い、ほぼ同時に動いた。

次の瞬間には氷の槍と黄金の拳が激突した。スレドはそこで右手を槍から放すと、その右手に氷の短剣を精製した。その短剣はタマキに向かって突き出される。

だが、タマキの左手は瞬時に氷で包まれ、その短剣を受け止めていた。スレドはすぐに後ろにステップしながら、短剣をタマキに投げつける。タマキはそれを右手でつかむと、そのまま握り潰した。

「ここまでやるか。それならば」

スレドの背中に刻印が浮かび上がり、手に持つ氷の槍の先端に斧のよう形状が足され、ハルバードのようになった。そしてスレドは今までの数倍の速さで宙に舞う。そのまま空から強烈な一撃をタマキに振り下ろした。

タマキはそれは受け止めようとせずに、横に跳んでかわしたが、その一撃の衝撃波で体勢が崩れた。その隙にスレドはさらに地面を蹴ってタマキを追い、ハルバードを叩きつける。

タマキはそれをなんとか右腕で受けたが、衝撃は殺せずにそのまま倉庫に激突した。そこにス

レドは突進したが、土煙の中からタマキは上に飛びだしてそれをかわし、倉庫の屋根まで到達していた。

しかし、間髪いれずにスレドも屋根より高く跳び上がると、ハルバードをタマキに投げつけた。それはタマキの胸に一直線に進み、突き刺さった。だが、タマキはその衝撃で後ろに押されながらも、なんとかそれを右手でつかんで深手を負うのはまぬがれた。

「ほう、やるな」

屋根に着地したスレドはタマキを見ながら笑う。タマキはハルバードを抜くと、それを投げ捨てた。

「ちょっと危なかったけどな」

タマキのシャツには血が滲み、頭部の傷からも再び出血していた。それでもまだタマキはしっかりと立っている。スレドはそれに動じることなく、再びハルバードを手の中に出現させた。

それと同時に上空いきなり土の塊が出現し、タマキに向かってきた。タマキはそれを無言で右腕で粉砕する。

「また新しい奴か」

「なるほど、これほどの実力でしたか」

その声と同時に轟音が響いて地面が隆起した。その先端には一人の女が立っている。スレドはそれに目を向けてため息をついた。

「何をしていた、ラスレシア」

「それを相手にしてるほど暇ではないので」

その二人の会話にタマキはにやりと笑ってみせた。

「また十二使徒ってやつだな。自己紹介はないのか？」

その言葉にラスレシアは髪の毛をかきあげる。

「ラスレシア、十二使徒の一人です。お見知りおきでなくてけっこう」

「これはまた、面倒くさそうな奴が出てきたな」

タマキはため息をついて右の拳を握った。

「まあ、まとめて相手にできるのは面倒じゃないか」

「タマキさん！」

「心配するなよ、ライト」

タマキはそれだけ言い返したが、状況が厳しいのは変わらない。そして、そこに氷の矢と土のつぶてが飛来した。

タマキは氷の矢を右腕で払い、土のつぶてにはかまわずにそのまま突進した。つぶてでタマキの身体に傷が出来るが、それではその勢いは殺せずに、タマキは屋根のふちで踏み切ってラスレシアに向かって跳んだ。

だが、ラスレシアは隆起させていた地面を引っ込めてそれをすかした。タマキは空中で姿勢を建て直しそのまま地面に着地する。

そこに屋上から跳んだスレドがその背後からハルバードを振り下ろした。だが、タマキはそれが見えているかのように前転をしてかわすと、すぐに立ち上がりと同時に振り向いた。

その目の前にはハルバードの先端が迫っていたが、タマキはそれを首を動かしてかわすと、その柄をつかんでスレドを引き込もうとした。しかしすでにスレドは手を放して、タマキはハルバードだけを引き込むことになる。

そこにラスレシアが放った土の塊が直撃し、タマキの身体は吹き飛ばされた。さらに、そこにつぶてが集中する。次の瞬間、そのつぶては雷光と共に一斉に砕けた。

「こんな使い方もできるんだな」

タマキは突き出した右手首に左手を当てて構えていた。右手の指先はまだ雷をまとっている。

「なんだ？」

スレドは思わず動きを止めてタマキを凝視した。一方、ラスレシアはそれにかまわずに足を進める。

「待て！」

スレドはそれを止めようとしたが、ラスレシアはそれを無視して膝の刻印を光らせ歩きながら、自分の周囲に無数の土の塊を浮かび上がらせた。

「もう一発！ ライトニングボルト！」

タマキの左手から雷が発すると、それが右手を伝う。そして。

「うがああああああああ！」

右手から増幅拡散した雷がラスレシアの身体を貫いていた。そのままラスレシアは白目をむいてその場に崩れ落ちた。

「ちっ、待てと言っただろうに」

スレドは悪態をついて、警戒するように後ろに下がった。タマキはそれから目をそらさずにゆっくりと立ち上がる。

「あとはお前だけだな。どうする、逃げてもいいんだぞ」

「そうはいかないな。そこの馬鹿も拾って戻らないといけないんだ」

「逃げといたほうがいいと思うけどな。まあ宮仕えの悲しさってやつか」

タマキは右手を鉤爪に変化させ、それを構えた。

「そんなものまで使えるのか」

スレドもハルバードを出して構える。そして二人はほぼ同時に地面を蹴った。タマキは振り下ろされたハルバードを鉤爪でつかみ、それを砕くと同時に左手を突き出した。だが、それはスレドに到達する前にかわされる。

「甘いぞ！」

スレドはハルバードを放すと、その腕をつかんでそのまま投げようとするが、タマキは投げられるよりも先に地面を蹴ってつかまれた腕を放させ、強引に着地してみせた。

「なぜそこまで動ける」

「なんでだろうな、俺にもよくわからないけど、どうも負ける気がしない」

タマキは鉤爪を動かし音を立てるとにやりと笑った。それを見たスレドは今度は両手に氷の短剣を出現させる。

「ここで止める必要がありそうだな」

「評価をどうも。でも、それは無理だな」

タマキはそう言ってから右手首に左手を当てて構えた。

「ファイアボール！」

声と同時に右手の鉤爪の五本の指先から小さな無数の火の玉が激しくばら撒かれた。その火の玉はスレドに迫り、防ぐ間を与えずにその周囲で炸裂した。

その瞬間にはタマキはすでに地面を蹴っていて、炸裂が終わると同時に右手をスレドがいた場所に突き出す。そして、鉤爪からは確実に肉を裂いた感覚が伝わってきた。

「ぐっ！」

スレドは血とうめき声を上げながらも、なんとかその一撃が致命傷になるのはまぬがれていた。しかし、右肩は大きく抉れて大量の血が流れている。

さらにそこにタマキがもう一撃与えようとしたが、スレドはなりふりかまわずに大きく飛び退き距離をとった。

「完璧には決められなかったか。でもまあ、その傷じゃもう戦えないよな」

スレドは右肩を押さえ、肩で息をしながらその場に膝をついた。

「どうやらお前を止めるのは次の機会になりそうだな」

「次があるかな？」

タマキはもう一度右手を構えたが、それより早くスレドは立ち上がって、背中を見せてその場から逃げ去った。それを見送り周囲に他に敵がいなかったことを確認してから、タマキはその場に座り込んだ。

「大丈夫ですか！」

すぐにライトが駆け寄ってきた。タマキはそれに笑顔で手を振る。

「まあ、死にはしないさ。でもまあ、もう魔法は撃てなかったし、最後のはったりが効いて助かったけどな」

それからタマキはゆっくり立ち上がり、ラスレシアに近づいていく。

「とりあえず、こいつの刻印を消しておくか」

タマキはラスレシアの膝を右手の鉤爪でなぞるように切って刻印を消した。

「これでこいつは放っておけばいいな。でも、ちょっと休んでいくか」

タマキは右手を元に戻してからそこを離れ、てきとうに倉庫の壁にもたれかかった。そのシャツは胸からの出血で赤く染まっている。

「じっとしててください」

ライトはそのタマキのシャツを脱がせると、傷の様子をしばらく確認してから顔を上げた。

「出血はそれなりにありますけど、傷は思ったよりも浅いですね。でも打撲がひどそうですよ」

「まあ、けっこう色々くらったしな。体中痛んでるよ」

「とにかく、ここじゃ手当てもできませんから、早く戻りましょう」

ライトはタマキに肩を貸して歩き始める。

「悪いな」

「いいえ、僕のほうこそタマキさんだけに戦わせてしまって」

「気にするなよ、俺が勝手にやってるみたいなものだ」

「でも、この町の人達はそうは思わないですよ。タマキさんの戦いは希望になるんです」

「そういうもんか？ まあ、食べ物持ってきてくれるんならそれもいいかもな。野次馬もいたみたいだし」

「気づいてたんですね」

「ああ、もういないみたいだけどな。無茶をしないなら別にかまわないさ」

二人はそれからゆっくりと家に戻っていった。

それからしばらくして、倒れているラスレシアの近くに近寄る人影があった。

「ふん、でかい口をたたいてたわりにはざまあないな」

その人影、トレルはラスレシアを肩に担いで、戦闘の跡を見回した。

「あいつを倒すのは俺だ。他の連中なんかにやらせるかよ」

四つ目の世界の罣

「これが四つ目の世界ですね」

カレンが周囲を見渡すと、そこには廃墟が広がっていた。石造りの家はどれもまともな形は残ってなくて、苔が生え、石畳の道も生えてきた植物で滅茶苦茶になっている。

「なんだか荒れ果ててますね」

まもるは崩れた石垣らしいものを触っている。

「人影どころか、生活の痕跡もないですね、なんなんでしょうここ」

要一も周囲を見回してつぶやいた。カレンはそれにうなずきながら足を動かし始める。

「この荒れようは少し異様に見えますね。ただ時間が経過して荒れたという様子よりも、その前に派手に荒らされたという雰囲気があります。前回のエドルという使徒を名乗る男の力はまだわかっていませんし、用心は必要ですね」

「あの男の能力が何か生物を操る力だとしたら、この世界にもあの竜みみたいなのがいるかもしれないってことですかね」

まもるがそう言うと、カレンはうなずいた。

「そうです。ああいったものが出てくると少々やっかいですから」

それから三人は荒れた道なりに進んでいくことにした。そして数時間後、三人はまた別の廃墟に到着していた。

「ここも同じですか」

「一体何があったんですかね。要一君、次の世界へ通じる場所はわかんないの？」

「まだわからないですけど」

「それじゃあ、また空から見てきてほうがいいか」

まもるはバックルを取り出したが、カレンはそれを止めた。

「なにがあるかわかりませんから、うかつに動かないほうがいいかもしれません」

「大丈夫ですよ、ちょっと見てくるだけですから。変身！」

さっさと変身したまもるは上空に飛び上がっていった。

「大丈夫ですかね」

「すぐに援護できるようにしておきましょう」

カレンと要一は空を見上げながら、その場にとどまっていた。それから数分後、まもるは何事もなく降りてきた。

「特に変わったものは見当たりませんでしたよ」

「そうですか、いや」

カレンは何かを感じたようで、最初の廃墟のほうに顔を向けた。

「どうしたんですか？」

「いえ、今何かがいたような気配がしたんですが、すぐに消えてしまいました」

「じゃあ、あっちに何かがいるってことですね」

まもるはまた飛ぼうとしたが、今度はカレンがその肩に手をかけて止めた。

「いいえ、しばらくはここにとどまって周囲を調べることにしましょう」

「わかりました」

まもるはうなずいて変身を解除した。

「でも、調べると言ってもどこから手をつけるんですか？」

「廃墟をもっとよく調べてみましょう。さっきの気配も気になりますからね」

「それなら、私はあっちのほうから調べます」

「お願いします。何かあるかわかりませんからあまり遠くには行かないようにして、注意してください」

「はい」

まもるは指差した方に走っていった。要一はそれを見送ってからカレンの顔を見る。

「俺はどうすればいいんですか」

「ヨウイチさんはここで待っていてください。何かあったら呼んでいただければすぐに戻ります」

「わかりました」

カレンはゆっくりその場から離れていった。それを見送った要一はとりあえずその場に座って周囲を見回す。

要一の目では廃墟はただの廃墟で特に変わった様子はない。そのまま時間は経過していったが、気がつくといつのまにか霧が出てきているようだった。

要一はそれを妙に思ったが、特に気にしなかった。しかし、霧はあっという間に濃くなり、要一に絡み付いてくる。

「これは？」

疑問に思うと同時に要一の周囲の霧が黒くなり、それが異常な重さでのしかかってくる。

「うわっと！ なんだよこれ！」

要一はなんとか立ち上がろうとしたが、身体にまとわりつく黒い霧に足元をすくわれてその場に倒れてしまった。そしてその黒い霧はさらに重さを増してくる。

だが、いきなり光がその場で炸裂すると、その重さがなくなった。周囲の霧もあっという間に引いていく。

「大丈夫ですか」

白銀の輝きを放つカレンが要一の側に駆け寄り、立ち上がるのに手を貸した。

「ありがとうございます。あれは一体」

「わかりません。今はマモルさんが心配ですからすぐに合流しましょう」

「はい」

二人は薄い霧の中をまもるがいるはずの方向に走りだした。

「ちっ！」

その頃まもるも霧に囲まれていて、ブレードを振り回していた。だが、いくら切っても黒い霧は徐々にまもるに迫ってくる。

「まったく、霧だけにキリがないってやつ？」

ぼやきながらブレードを振るうがやはり効果は見られず、まもるは徐々に追い詰められていく。だが、頭上から落ちてきた光がその霧を吹き飛ばした。

「カレンさん！」

「無事だったようですね」

空から落ちてきたカレンに続いて、鉄槌をかついだ要一も到着した。

「まもるさんのほうにも出てきてたんですね」

「ほうにも、ってことは要一君のところにもあの変な霧が？」

「そうです、カレンさんに助けてもらったんですよ」

「なるほど」

まもるはそう言ってから自分の手の中のブレードを見た。

「やっぱりカレンさんみたいにはいかないか。でも、あれは何なんでしょう」

「わかりません。しかし、あれがこの廃墟の原因かもしれないね」

それからカレンは霧の濃い空の一点を見上げた。

「先ほど感じた気配が今はこの上空にあります。恐らくあの霧はその何かが操っているのだと思います」

「でも、何も見えませんよ」

「はい、気配はあっても正確な場所はわかりません。近づく必要がありますが、あの霧にも対処しなくてははいけませんから」

カレンには迷いが見えたが、そこでまもるが一步踏み出した。

「それなら私が見てきます。カレンさんは要一君をお願いします」

「わかりました。くれぐれも気をつけてください」

「任せてください！ フルドライブモード！」

まもるはあっという間にそこから飛び立って行った。それを見送ったカレンと要一だったが、すぐにその周囲に黒い霧が現れた。カレンは白銀に輝くショートソードを構える。

「ヨウイチさん、とにかくあの霧につかまらないように注意してください」

「わかりました」

要一も鉄槌を構えたが、そこに小さなナイフが飛来し、カレンに落とされた。

「お前達の相手はそれだけじゃないぞ」

声の方向には宙に浮いたエドルがいた。

「あなたは確かエドルと言いましたか。これはちょうどいいですね」

「言ってくれるじゃないか。まあいい、こいつならお前達でも簡単には倒せないだろうからな」

「どうですかね、ここに姿を現したことを後悔することになりますよ」

カレンの剣と瞳の輝きが増した。

二つの力

「まったく、こう霧が濃いと視界が狭くてしょうがない」

まもるは高速飛行をしながらも必死にカレンの言っていたものを探していた。フルドライブモードの高速飛行のおかげで霧につかまることはないが、濃霧で目当てのものはなかなか見つからない。

「こうなったら」

まもるは銃を取り出しそれをてきとうに乱射した。だが、手応えはまるでない。

「これじゃ駄目か。たくっ！」

悪態をつくがそれで事態がよくなるわけでもなく、まもるはとにかく高度をとって上から霧を操っているものを探すことにした。

一方、その下ではカレン、要一とエドルの戦いが始まっていた。

「ヨウイチさん、霧は私がなんとかします。あのエドルという男をお願いできますか」

「え、俺がですか？」

「はい。どうやらあの男は特殊な道具は持っているようですが、能力は単純なものだと思います。単純な力の勝負ならばヨウイチさんが負ける要素はありません」

「わかりました、やってみます」

要一は鉄槌を構えて地面を蹴った。その道はカレンが振るった剣で作られている。

「フォーム！ チェーンアンドスピア！」

鉄槌を鎖が繋がった槍に変え、要一はそれを真っ直ぐエドルに向かって投げつけた。だが、エドルは腰から大振りなナイフを手にとると、その槍を弾く。要一はそれにすぐに反応して、チェーンを直接叩きつけるように操作した。

「面白い技を使うな」

エドルはそれを避けると、地面に下りて低い姿勢で要一目がけて突進してきた。

「フォーム！ ソードアンドシールド！」

だが、要一はすぐに槍と鎖を長い剣と大きい盾に変化させると、盾でその突進を受け止めた。

「くそ！」

エドルの突進を止めた要一はなんとか踏み出して剣を振ったが、それは空振りになる。

「動きが鈍いな」

宙に舞っていたエドルはそのまま上から要一に襲いかかった。要一はそれに向けて盾を投げつけ、エドルはそれを空いた手で払おうとした。だがその瞬間。

「フォーム！ ネット！」

盾が網に変化し、エドルを捕らえようと一気に広がった。エドルが素早くベルトの背後に手を当てると、その身体が浮かび上がってその網をかわした。

「なに！」

しかし、その直後にエドルが手を当てた部分に投げナイフが直撃して、小さな爆発を起こした。それと同時にエドルの身体は地面に落ちていく。

「これは？」

要一は何が起こったかわからずに、一瞬足を止めた。

「ヨウイチさん！ それでおそらくその男は飛べません」

霧を相手にしているカレンからの声が飛び、要一は我に返った。

「ありがとうございます！ フォーム！ シールド！」

要一は網を再び盾に変えると、それを手にとって地面に落ちたエドルに突進した。そのまま盾ごと体当たりをしたが、エドルは額の刻印を光らせ、それを正面から受け止めた。要一の突進はすぐに止められ、盾ごと振り回されてしまう。

「うわっ！」

要一はそのまま放り投げられて背中から地面に落ちた。そこにエドルが跳びかかって、ナイフを突きたてようとしてきた。だが、要一は盾を手放すとなんとか横に転がってそれをかわして立ち上がった。

そこにエドルの足が突き出され、要一は無防備にそれを受けてしまったが、なんとか倒れずに踏みとどまり、剣を構えた。

「それだけか！」

そこにエドルのナイフが振り下ろされ、要一はなんとかそれを剣で防いだ。そしてその体勢のまま左手を剣から放す。

「フォーム！ モーニングスター！」

地面の盾が光ると、それが要一の手収まり、棘のついた鉄球が鎖でつながったものになった。それを勢いよく振るったが、エドルは後ろに下がってその一撃をかわした。

それから二人はその間合いで睨みあいになる。要一は剣とモーニングスターをぶらつかせているが、エドルはそれを大して気にしている様子はない。

「手から放れていても自由に姿を変えられる武器とは、厄介な代物だ」

要一はそれに答えはせず、黙って二つの武器を構えた。

「ふん！」

エドルは地面を蹴り、正面からナイフで切りかかった。しかし、要一は避ける様子を見せずに、それに突っ込んだ。

「フォーム！ アーマー！」

二つの武器が光ると、それが要一の全身を包む鎧に変化した。

「うおおおおおおお！」

要一は気合と共に全身でエドルにぶつかり、そのままそれをがっちりつつかんでジャンプすると、自分もろとも地面に落ちた。

「くそ！ なにを！」

「このままおとなしくしてもらおうぞ！」

しばらくそうしてもみ合っているうちに、カレンがその近くに降り立った。

「ヨウイチさん、そのまま動かないでください」

その声と共にサモンの入った剣を振り下ろしエドルの刻印を消した。続けてその顎を蹴ってエドルの意識を刈り取る。

「ありがとうございます」

要一はそう言うのと立ち上がり、鎧を鉄槌に戻した。そして周囲を見回すが、霧はまだ晴れてはいない。

「まもるさんはまだみたいです」

「待ちましょう。大丈夫なはずですよ」

カレンは霧の先にある空を見上げた。

「ああ、まだるっこしい！」

空中のまもるはベルトの左側からとったものをバックルに装着した。

「ブレードフォーム！」

手に持ったブレードが青い刀身を持った巨大な剣になった。まもるがそれを構えると、その剣が青い炎をまとった。

「超烈火剣！ 蒼炎斬！」

剣が振るわれると、それがまとっていた炎が下方の霧に向かって一斉に拡散して放たれた。そして、一箇所だけ何かに当たったのが見えた。

「そこだ！ 一刀両断！」

まもるは一気に降下し、その場所に剣を振り下ろした。確かな手応えがあり、まもるがそのまま地表に勢いよく到達すると、霧はすぐに消えていった。

それからまもるはベルトを外して変身を解除し、要一とカレンの姿を見つけると、そこに向かって歩いていった。

「そっちも終わったみたいですね」

「まもるさん、大丈夫でしたか」

「もちろん、ちょっとでこずったけどね。で、のびてる奴の力って結局なんだったの？」

「色々と特殊な道具を持っていたようです。能力は単純な身体能力の強化だったようですね」

カレンの答えに、まもるは少しがっかりしたようだった。

「じゃあ、カレンさんがあっさり倒してたんですか？」

「いえ、私は霧のほうを相手にしていました。ヨウイチさんに戦っていただいたので、だいぶ楽でしたよ」

「へえ、要一君もやるじゃん。それで、次の世界に通じる場所は？」

「それはまだ、いや、ちょっと待ってください」

要一は頭に手を当てて、次元の管理人と会話をしているようだった。それからカレンとまもるの顔を交互に見る。

「ここから歩いて一日くらい場所だそうです」

「そういうことでしたら、とりあえずこの男を預けたらすぐに出発しましょう」

カレンは鎖で縛り上げられているエドルをつかんだ。

「はい、すぐに連絡します」

要一が再び頭に手を当てると、数秒後にエドルの姿は消えた。

「じゃあ、次の世界に出発！」

三人はまもるを先頭に歩き出した。

タマキが目を覚ますと、まだ外は薄暗いようで、ライトも眠っていた。それを起こさないようにゆっくりと歩いて外に出ると、タマキは自分の右腕を引っ張ったり回したりした。

「やっぱり、なにか変わったな。お前を通して魔法を撃ったせいかな」

そして右腕に語りかけるようにしてから、それが軽く振動したのを確かめた。それだけでタマキには何かが伝わったようで、軽くうなずいた。

「まあ今はお前が頼りだ。戦いはまだ続くからな。もっと違う形も考える必要もあるか」

それからタマキ少し体をほぐして屋内に戻った。それでライトは目を覚まし、起き上がった。

「タマキさん、起きてたんですか」

「まあな、ちょっとこいつと会話をしてたんだ」

タマキは右腕を顔の横まで持ち上げた。

「僕の知らない力がまだまだありそうですね。進化して、新しいものになっているとしか考えられません」

「新しいものか、まあ俺にも予想がつかないよ。こいつには自分の意思もあるんだからな」

「ところで、怪我はもう大丈夫ですか？」

「少し痛むくらいだな、動くには問題ない。まあとりあえず朝食にするか」

「はい」

二人で朝食の準備をしてから、手早くそれを済ませた。

「今日はどうするんですか？」

「まあなんとかなりそうだから、早めに十二使徒の連中を片づけていきたいところだな。どうせなら本拠地に殴りこむか」

「それは危険ですよ」

「待ってても似たようなもんじゃないのか。様子を見る意味でも、軽く行っておきたいな」

「わかりました、この町からは少し離れていますけど、案内します」

「なら、弁当でも持って出かけるか」

それから数十分後、二人は水と昼食を持って町を出ていた。一応道があり、田畑があるのが見える。

「ここは基本的には危険はあんまりなさそうだよな」

「はい、獰猛な獣はいませんし、気候もいいので、今の島民の数くらいなら生活に困ることはほとんどありません」

「問題はあの十二使徒連中か」

「そうです」

「そういうことなら、宿賃変わりになんとかしてもいいかもな」

そして昼、二人は道の側に座って持ってきたサンドイッチを食べていた。

「あとどれくらいで着くんだ？」

「もう少しです」

「伏せろ！」

タマキは手に持っていたサンドイッチを投げ捨て、いきなりライトに覆いかぶさった。次の瞬間、その上を何かがものすごい勢いで通過していった。

タマキがライトを背後にまわしながら立ち上がって顔を上げると、そこには一人の男が背中を見せて立っていた。

「お出ましたな。自己紹介はないのか」

「ガニルだ」

そしてその男は再び瞬時に移動し、タマキを蹴り飛ばした。その一撃はなんとか腕で防いだが、タマキの身体は弾き飛ばされた。だが、タマキはすぐに体勢を立て直し、膝をついて顔を上げる。

「加速か」

そうつぶやいたところに、さらにもう一撃が来てタマキは再び転がされた。そして今度は立ち上がる隙をあたえないように、ガニルは続けて攻撃をしかけた。

「タマキさん！」

ライトは叫んだが、攻撃を受ける中でもタマキが徐々に体勢を立て直しているのに気がついた。そして数秒後、タマキはガニルの攻撃を右腕で受け止めていた。

「ほらよ！」

タマキは左腕でガニルを殴ろうとしたが、その一撃は素早いバックステップでかわされる。

「俺の動きを見切ったとでも言うのか」

ガニルは無表情でつぶやいた。タマキはそれにたいして笑ってみせる。

「そんな大したことじゃない。まあこのほうがお前だって面白いだろ」

そしてタマキが手招きをすると、ガニルは再び加速した。だが、タマキは瞬時に右手を鉤爪にするとそれを軽く横に払った。

一筋の血が飛び、ガニルの腕が切れていた。ガニルはその傷を見ると、明らかに苛ついたようだった。

「まだ速度が足りないようだな」

ガニルの腕の刻印が光り、その姿が消えた。しかし次の瞬間、その首はタマキの右腕でつかまれていた

「足りないのは速度じゃなかったみたいだな」

そしてタマキは左手を構えたが、それは一つの声で止められた。

「動くな」

タマキが首を動かして後ろを見ると、そこにはライトをつかまえ、氷の短剣を突きつけているスレドがいた。

「あんたか、一体何のつもりだ？」

タマキは落ち着いた様子で口を開く。その落ち着きように、スレドのほう若干ひるんだ様子を見せる。

「その手を放せと言っているんだ！」

だが、タマキは手を放さず、身体の向きを変えて正面から向かい合っただけだった。

「手を放さなかったらどうなるか、説明してみてくれないか」

「この状況を見ればわかるはずだ」

「そうだな、普通ならライトを人質にとって、一步でも動いたら命はないぞってあたりか。でもな！」

タマキはガニルを放り投げると同時に、左手をスレドに向けた。

「アイスバイト！」

放たれた氷の牙がスレドの肩を挟み、短剣とライトを手放させた。そしてタマキは地面を蹴ってそれに近づくと、そのままの勢いでスレドの顎に膝蹴りを炸裂させた。

それからすぐに右手を後方に伸ばし、突っ込んできていたガニルの腕をつかんだ。

「これで一石二鳥だな！」

そのままガニルの身体をスレドの上に叩きつけた。その二人がほぼ同時に息を勢いよく吐き出し、動きを止めた。

「さて、とりあえずは」

タマキはガニルとスレドを並べると、鉤爪でその二人の刻印をすぐに消した。それからライトに手を貸して立ち上がらせる。

「油断して悪かった、大丈夫だったか」

「大丈夫です」

「まあでも、やっぱりこいつらはお前には手が出せないみたいだったな。お前もそれはわかってたんだろ」

「はい、タマキさんはわかってたんですね」

「お前は落ち着いてたし、このおっさんも迫力がなかったしな。まあそれはいいさ、今は事情も話さなくていい。それより、これで十二使徒のうち三人は倒せたから、このペースなら心配はないよな」

「それはそうですけど、でも、タマキさんはさっき攻撃を受けてましたよね」

「あれくらいなら大丈夫だ。なんかどんどん頑丈になっていく感じでな、回復もかなり早くなってきてるんだよ。たぶんこいつのおかげだ」

タマキが右腕を軽く叩くと、ライトもそれを見た。

「でも、過信はよくないと思います」

「大丈夫、自分の力一応わかってるつもりだからな。それより、休みが中断したから、もう少し先に行ってからもう一度休むか」

それからタマキは倒れている二人をチラッと見てから、行く先に視線を向けた。

「まあそっちの二人は転がしておけば問題ないだろ。昼飯が無駄になったのはもったいなかったな」

そして二人は再び歩き出した。

時間は夕方より少し前、タマキとライトは五階建て程度のマンションのような建物が見える位置に到着していた。

「ここか。脱出してきた場所と似てるな」

「はい、場所は違いますけど、構造は大体一緒です。以前はあちらが本拠地だったんですけど、今はもうここに移転しているはずですよ」

「まあ、引越のどさくさで脱出してきたわけか」

「そうです。実は僕もあの建物のことはわかってないんですが」

「何があるかはよくわからないか。それなら、ライト、お前はここで待ってたほうがいいのかもな」

「いいえ、僕も一緒に行きます」

タマキはそう言ったライトの目を見てから、うなずいた。

「わかった、そういうことなら一緒に行くぞ」

そして二人は建物に近づき始めた。

その頃、建物の近くには二人の女の姿があった。一人は長身で髪が短く、もう一人は中肉中背で髪を縛っている。

「あいつらはしくじったみたいだな、どうする？」

「黙っていればここに来るんだから、待っていればいいんじゃないの」

「罨くらい用意しないのか？」

「やりたいならやればいいんじゃないの、まあ強い相手らしいから」

「そんなことはしない。お前がしっかり援護すれば問題はないだろ」

「そうなればいいよな」

髪を縛っている女は投げやりな感じで言うと、頭をかいた。そして、タマキとライトの姿が見えてくると、一歩後ろに下がった。反対に長身の女は一歩前に出る。

「よく来たな。私は十二使徒の一人、レザリンだ」

「やっぱり待ち構えてる奴がいたか。それでそっちの後ろは自己紹介なしか？」

タマキがそう言うと、髪を縛っている女は面倒くさそうに首を横に振ってから口を開く。

「キャーサ、一応十二使徒だけど、直接戦闘向きじゃないからよろしく」

「そうか、じゃあ直接戦うのはそっちのレザリンってあんただな」

「援護はするんだぞ」

「了解」

キャーサはやる気がなさそうだったが、一応はうなずいた。タマキは特に構えも見せずにそのやりとりを見ていたが、あまりやる気は感じられなかった。

「正直言って、もうお前達じゃ俺には勝てないし、お互い無駄に傷つく必要もないだろ。刻印だけ消させてもらえば、それだけで済ませるけどな」

レザリンはそのタマキの言った内容に眉を吊り上げた。

「自信があるらしいが、そんなことが受け入れられると思っているのか」

「どっちも得だと思うけどな。まあ、そうしたくなったらいつでも言ってくれ」

タマキは右腕を鉤爪に変化させた。レザリンは腕を突き出すと、そこから一筋の強烈な光線を放つ。だが、タマキはそれを右腕で防ぐと、そのまま前方に走り出した。

そして、タマキはそのまま跳び上がってレザリンに一撃を加えようとしたが、それは見えな

い壁に阻まれ、タマキはすぐにそれを蹴って後ろに飛び退いた。

「あっちのもう一人か」

そうつぶやいたタマキに、レザリンの光線が飛んだ。それは右腕で防いだが、衝撃で飛ばされる。そのまま地面に叩きつけられ、土煙でタマキの姿が隠れたが、直後、その中から無数の雷の矢が放たれた。

「キャーサ！」

「わかってるよ！」

今度はわずかに青味がかった障壁が形成され、その雷の矢を受けた。だが、そこにタマキが突進し、右腕を振ろうと障壁は砕け散った。タマキはそのままレザリンに迫る。だが、直前で方向転換すると、キャーサに向かった。

「悪いが、あんたからだ」

タマキはキャーサをつかもうとしたが、その横からのレザリンの放った太めの光線でタマキの身体は吹き飛ばされた。

「危ない危ない」

「油断をするな」

レザリンはキャーサとタマキの間に立った。その視線の先でタマキはゆっくりと立ち上がると、服についた汚れをはたき落とした。

「思ったよりやっかいだけど、それだけだな。まだ続けるなら、ここからはさっき思いついた、ちょっと変わったものを試させてもらうことになるぞ」

「何を言っている」

「まあ、見たほうが早いな」

タマキは右手で右目を押さえた。すると、そこから顔の半分に急速に薄く金色の膜が広がっていき、さらに右腕の形も変わっていく。

「げっ、あれって」

キャーサはタマキの変貌に思わず一步後ろに下がる。レザリンはそこに光線を放つが、それはタマキの目の前で四散してしまう。

「どういうことだ」

声を絞り出したレザリンの前でタマキの変貌は続いた。

顔の金色の膜は、色濃くなりその半分とほぼ同化している。さらに、右腕は肩の付け根、背面は腰のあたりまで金色になって、そこから蝙蝠の翼のような形のものが一気に生成された。

「右半分だけってというのは、どうもバランスが悪いかもな」

右の瞳まで金色の膜で覆われているという異相のタマキは、なんの不自由もない様子で、その眼で自分の右腕を確認した。それからレザリンとキャーサをその不気味な瞳で見る。

「さて、これでもまだやりあいたいかな？」

キャーサはそれにたいして後ずさった。

「こいつはやばいんじゃないの。こけおどしじゃない」

だが、レザリンは退かない。

「戦いもしないでなにがわかる！」

そしてレザリンは掌の刻印を輝かせ、今までよりもさらに収束させた光線を放った。それはタマキを直撃したが、光が収まると右腕の翼で身体を覆ったタマキはまったくの無傷だった。

「これでわかったか？」

タマキの声は直接頭に伝わってくるような響きを持っていた。レザリンは頭を手で押さえ

たが、もう一度タマキに向けて光線を放つ。しかし、タマキは地面を蹴ると、その光線を右腕で受けながら、今までよりはるかに勢いよくレザリンにむけて突進した。

その目の前に障壁が現れるが、ほぼ抵抗なくそれは破られ、そのままタマキはレザリンの目の前まで到達する。

「悪いな」

タマキは強烈な膝をレザリンの腹にくらわせ、それが崩れ落ちるのを確認すると、キャーサに視線を向けた。

「降参」

キャーサはすでに両手を上げて抵抗する気はないようだった。

「じゃあ、お前達の刻印を消させてもらうか」

タマキはまずレザリンの手をつかんでその掌の刻印を右手で消した。それからキャーサに近づくと、キャーサは自分のすねにある刻印を黙って出した。

「あんまり傷はつけないでもらえるとうれしいけど」

「それなら心配いらない」

タマキは右手で軽く刻印をなでるようにしてそれを消した。キャーサは力が抜けたようにその場に座り込むとため息をつく。

「やっと開放された。これでゆっくり休める」

「そうなのか。それはそうとして、案内をしてもらうのはできるか？」

「それは勘弁。それに案内ならそっちにいるじゃないか」

キャーサは近くに来ていたライトを指差した。

「本気を出していませんでしたね」

ライトがそう言うとキャーサは首を横に振った。

「さあね。まあ、あんたの目的が達成できるといいんじゃないか」

「ありがとうございます。キャーサさんも早くここから離れたほうがいいですよ」

そしてタマキとライトは建物に向けて歩き出した。

五つ目の世界

カレン達三人が五つ目の世界に足を踏み入れてから、すでに一日が経過していた。次の世界へ通じる場所はまだわかっていなかった。

「あの十二使徒っていうのもけっこう倒したし、そろそろ目的の世界についてもよさそうですね」

「そうですね。ヨウイチさんのほうでは何も話はないのですか」

「まだありません。あのじいさんもどうにかして探ろうとはしてるみたいなんですけど」

「では、とりあえずはこちらで次の世界への道を探し続けるしかありませんね」

そしてカレンは今の世界を見回した。この世界は見える範囲では赤い大地が広がり、大きな生物の気配はないところだった。

「じゃあ、また私が見てきますよ。変身！」

まもるは姿を変えると、すぐに飛び立って行った。カレンはその場でそれを見送ってから口を開く。

「マモルさんが戻るまではじっとしていきましょう」

「はい。あのじいさんと連絡をとってます」

三十分ほど後、まもるが戻ってきたが、首を横に振った。

「やっぱり特に変わったものは見当たりません。もっと遠くまで行ってみれば何か見つかるかもしれませんが」

「いいえ、あまり長い時間の単独行動は控えるほうがいいでしょう。いつ敵の襲撃があるかわかりません」

「確かにそうですね。あいつらいつも突然現れるし」

「はい、ですからすぐに合流できないような状況を作りたくありません。しかし、慎重になりすぎて時間をかけるのも避けたいですが」

カレンはそれから少し考え込むような様子を見せたが、おもむろに顔を上げた。

「次の世界へ通じる場所を発見できるのはヨウイチさんだけが私ならそれを開くことができます。そしてこの周辺には生物はいないようですから、広範囲に攻撃をしても問題はないでしょう」

「そんなことができるんですか？」

要一の問いに、カレンはサモンが宿っている剣を抜いた。

「これでできるはずですよ。サモン、力を貸してもらいますよ」

「いいだろう。使えるならばな」

カレンはうなずき、要一に顔を向ける。

「ヨウイチさん、次の世界への道が開けば、感知は容易になりますね？」

「ちょっと待ってください。ああ、それならすぐにわかるみたいです」

「では、お二人とも少し下がってください」

まもると要一がそれに従って後ろに下がると、カレンは剣を右手一本で左の腰のあたりに水平に構えた。そしてそこからなめらかに動き出すと、静かに、一瞬で剣を水平に一閃させた。

まもると要一には何も見えなかったが、風が起こり、空間が切り裂かれていくのだけは感じることができた。数秒後、カレンは剣を鞘に収めて振り返る。

「ヨウイチさん、お願いします」

「はい」

要一が次元の管理人と連絡を取り始めると、すぐに返事があったようだった。

「場所はわかったみたいです。ついてきて下さい」

要一が歩き出すと、カレンと変身を解除したまもるはその後ろにつづいた。

そして二時間も経過した頃、カレンが足を止めた。要一とまもるもそれに気がついて立ち止まる。

「どうしたんですか？」

要一が聞くと、カレンは遠くを見つめて口を開く。

「どうやら、敵が動き出したようですね」

「じゃあ私が」

「いえ、まだ距離がありそうです。こちらに気がついて、罠を用意したと考えるべきでしょう。しかし、それはむしろ都合がいいと言えます」

「なにか作戦があるんですね」

まもるは期待に目を輝かせた。

「作戦と言えるほどのものではありません。相手が待っているなら、それ以上の攻撃を加えるだけです」

「わかりました！ さっそく変身！」

まもるはすぐに変身をした。カレンも自分のショートソードを抜く。

「マモルさんはあのブレードフォームで空からお願いします。合図は私がするので、それまではあまり近づかないようにして、上空で待機しててください」

「はい」

「私は正面から相手に近づきますから、ヨウイチさんは側面から援護をお願いします。お二人とも、攻撃を受けたら無理はせずすぐに下がってください」

「了解！」

まもるは勢いよく返事をして飛び立っていき、要一も歩いて出発した。二人を見送ったカレンは力を感じた方向を見すえると、その姿を白銀と漆黒に染めた。そして、地面を蹴るとそのまま高速で走りだす。

しばらく走ると、前方にそれなりに大きな黒いドームのようなものが見えてきた。そして、そこからカレンに向けて黒く巨大な弾丸が放たれる。

カレンはそれを剣では受けずにかわすと、スピードを上げて黒いドームに向かって突進した。そのまま続けて放たれた黒い弾丸を同じようにかわすと、黒いドームを白銀の剣で切りつけた。

そしてカレンはその真上に上昇して、そこから黒いドームを見ると、剣で切りつけた部分からそれは崩れ始めた。

だが、それが半分ほど崩れた時、ドーム全体が煙のようになると、一気に周囲に広がった。それは信じられない速度と量で広がり、あっという間にカレンを包み込んだ。

「これは」

カレンは動かずに自分を包み込んだ闇をよく観察していた。それは質量のある霧のようで、徐々にカレンの体に巻きついてきていた。

「一気に吹き飛ばすべきですね」

カレンは左手に光を集中させ、それを腰のあたりに構えた。

「シャイニング！ バースト！」

光が派手に炸裂し、闇は一気に消し飛ばされた。カレンはそのまま動かずに黒いドームがあった中心を見ると、そこには一人の男が立っていた。カレンは空中にとどまったまま、その男に剣

を向ける。

「今のはあなたの仕業のようですが、せっかくですから名前を聞かせてもらいましょうか」

男は若干逃げ腰だったが、なんとか気を取り直したようで、カレンを見上げた。

「私は十二使徒の一人、サスだ」

「そうですか、今からでもおとなしく通して頂ければ、あまり手荒なことはしません」

サスはカレンの言葉に答えず、両手から黒い弾を発生させた。

「抵抗するというなら、仕方ありませんね」

カレンが剣を構えると、サスはすぐに足元に黒い弾を叩きつけた。そこから一気に闇が広がると、サスの姿を隠す。

カレンはそこに急降下すると、それを剣の圧力で吹き飛ばした。しかし、そこにはすでにサスの姿はなかった。

「逃がしましたか」

カレンはそうつぶやいてから元の姿に戻ると、ショートソードを鞘に収めた。

「大丈夫ですか、カレンさん！」

そこにまもるが降下してきた。カレンはそれに軽く手を振る。

「問題はありませんでしたが、十二使徒の一人には逃げられてしまいました。すみませんが、ヨウイチさんと呼んできて頂けますか？」

「はい、すぐに行ってきます！」

それからしばらくして、まもるが要一を抱えて戻ってくると、三人は次の世界に通じる場所の前に立った。

「敵が簡単に退いたということは、この先に罠があるのは確実です。注意してください」

まもると要一はその言葉にうなずき、まずはカレンが次の世界に足を踏み入れた。

六つ目の世界

次の世界は闇に閉ざされていた。

「カレンさん、要一君」

まもるは二人の姿を探したが、視界は悪く何も見えない。地面を踏みしめている感覚はあったが、手を動かしても何にも触れることはできなかった。まもるはとりあえず手探りでベルトを装着する。

「変身！」

そしてまもるはブレードを手を取ったが、振り回すことはせずに、とりあえず姿勢を低くして自分の周囲に意識を集中した。

だが、何も見えず、聞こえない状況ではまもるは動けない。

「なに！？」

いきなり背中に衝撃を受けたまもるはよろめいたが、踏みとどまって振り向く。しかし、そこには闇があるだけで、何の気配も感じられなかった。

「たくっ！ こんな姑息なことをしないで正面からかかってこいっての」

叫んでも、何も答えるものはない。まもるは舌打ちをして周囲を警戒した。そして、自分が移動しているような感覚を感じた。

一方、要一も闇の中で身動きができない状況だった。とりあえず鉄槌を鎧に変化させていたが、それ以外はどうにもできなかった。

次元の管理人に連絡を取ってみたが、狭い範囲の効果のようで、何もわからないということしかわからなかった。

「うわっ！」

要一は背後から足に衝撃を受けてよろめいた。そのまま数歩先に進んでから振り向いたが、やはり何も見えない。

だが、視界の隅に光が見えると、それが一気に広がって要一の周囲の闇を払った。

「大丈夫ですか」

白銀に輝く剣を持ったカレンが要一の前に立っていた。

「カレンさん、助かりました」

要一は鎧を鉄槌に戻すと、大きく息を吐き出した。

「大丈夫だったようですね、どうやらマモルさんはここは違う場所に飛ばされたか、連れ去られたのかもしれませんが」

「じゃあ、すぐに探さないと」

「そうですね、すぐに追いましょう。しかし、この世界は少しタマキさんやヨウイチさん達の世界に似ているところがありますね」

そう言われて要一が周囲を見回すと、今立っている場所は荒野のようだったが、しっかりと舗装された道の上だった。

「確かにそうみたいですね。今までの世界とは全然違う雰囲気ですけど、でも、まもるさんはどこに行ったんでしょうか」

「大まかな方向ならわかります。しかし距離はあるようですから、とりあえず私が一人で行って来ることにしようと思いますが」

カレンがそう言うと要一はすぐにうなずいた。

「俺のほうは大丈夫ですから、すぐに行って来てください」

「できるだけこの場でじっとしててください、すぐに戻るようにします」

それだけ言うとカレンはその場から飛び立っていった。それを見送った要一はとりあえず道の傍らに腰を下ろす。

「まあ、カレンさんならすぐに戻ってくるよな」

要一はそのまま座っていたが、十分ほど経った頃、空から轟音が響いてきた。要一がその方向に顔を向けると、小さな点が見え、それが見る間に大きくなってきた。

「おいおい」

要一の視界には人型をした全長十五メートルはありそうなものが三体ほどあった。それはあっという間に上空を通過していった。

「人型ロボットかよ。なんかとんでもなさそうな世界だな」

さらにそれから五分ほど経ってからカレンとまもるが戻ってきた。二人は要一のすぐ側に降りると、それぞれ元の状態に戻る。

「まもるさんも無事だったんですね」

「当然でしょ、ちょっと迷ったってくらいなもんなんだから」

「ヨウイチさん、変わったことはありませんでしたか？」

「変わったことと言うか、さっきすごいものが通過していきました」

要一は立ち上がると、さっきのロボットが飛んできた方角を指差した。

「あっちのほうから巨大なロボット、まあまもるさんのスーツが何倍にもなったものだと考えてくれればいいんですけど、そういうものが飛んできたんです」

「あの音はそれでしたか。しかし、襲われなかったということは、おそらくこの世界のものだったのでしょうか」

「それよりも、今は私を閉じ込めてあんな離れた場所にまで飛ばした使徒って奴をなんとかしましょうよ」

まもるはいくらか焦ってる様子だった。要一はそれをたしなめようと考えたが、それよりも先にカレンが一步前に出た。

「マモルさん、焦りは禁物です。ヨウイチさんの話からすると、この世界のことを無視するわけにもいきませんし、次の世界に通じる道を探すのが最優先です。あのサスという男もそうすれば姿を現すはずですから」

カレンにそう言われてから、まもるはなんとか気持ちを落ち着けたようだった。

「わかりました。でもどこから手をつけるんですか？」

「ヨウイチさんのほうではまだ何もわかっていませんか？」

「はい、まだ駄目みたいです」

「そういうことでしたら、まずはこの近くに町がないか確認しておきましょう。ですが」

カレンはいきなりナイフを取り出すと、それを背後の空中に投げつけた。それは空中に突きささり、そこから血が流れると同時に一人の男、サスの姿が現れた。

「あいつは！」

まもるはバックルを取り出したが、それより早くカレンは髪と瞳を白銀に染め、同じ色の翼を広げると、地面を蹴ってサスを剣の柄で打ち、地面に叩き落した。

それからサスの首をつかんで持ち上げたが、意識を失っているのを確認すると、手を放して地面に転がしてから、刻印を探してそれを消してから、元の姿に戻った。

「これで使徒のほうは大丈夫ですね」

あっという間の出来事にまもると要一はほとんど動く間もなかった。

「ヨウイチさん、とりあえずこの男をお願いします」

「はい」

要一は鉄槌を鎖に変えてサスを縛り上げてから、次元の管理人に連絡を取り、その身柄を預けた。

「まさかあんなところに隠れてたんですね」

「はい。かなりうまく隠れていましたが、少し前から気づいていましたが、行動を起こそうとして隙が出来たので簡単に済みました」

「それじゃあ、これから近くの町を探すんですか？」

「そうですね、まずはそこからです。それにこの世界の今までとの違いも気にはなりますから」

「違い、ですか？」

「今までは人が見当たらない世界でしたが、ここは違うようですから。何か意味があるのかもしれませんが」

カレンの言葉が終わると同時に、空が光り、爆音が響いた。三人がその方向に顔を向けると、さらに光と爆音が発生する。

「行ってみましょう」

カレンはその光と音のしてきた方角を真っ直ぐに見すえていた。

タマキとライトは建物の玄関に立っていた。

「けっこう立派だな」

「そうですね、ここまで立派に作ってあるとは思ってませんでした」

ライトの言葉通り、玄関はこの世界のレベルからはかけ離れた造りと豪華さだった。

「いよいよボスと会えるかと思うと楽しみだな」

そう言ってタマキはガラスの扉に近づき、その取っ手をつかんだ。それからタマキはライトの顔を見る。

「行くぞ」

「はい」

扉は軽く開き、二人は玄関ホールに足を踏み入れた。そこは綺麗に整理されていて、大きなソファ、そしてその前には低いテーブルでそこには花、壁には絵が飾られている。

「これはまた、高級感の演出なのか」

「そうみたいです。僕が知っているものとはだいぶ雰囲気が違いますから、中もどうなっているかわかりません」

「じゃあ、ここからは手探りになりそうだな。相手のボスはどこにいるんだろうな」

「以前は最上階でした」

「じゃあ、上から行ってみるか。その前に階段だな」

タマキはとりあえず通路に向かって歩き出した。廊下は広く、天井も高くて明かりも豊富だった。

「廊下も豪華だ。なんでここまでやってるんだろうな」

「わかりません。前の建物は殺風景だったのに。それにこんな内装はこの世界ではありえません」

「なるほどな」

二人が階段に到着すると、タマキは階段を上ろうとしたが、何かを感じたのか、最初の一段に足をかけたところで動きを止めた。

「やっぱり地下から行ってみるか。近いからな」

タマキは上りの階段にかけていた足を下ろした。ライトはそれに疑問を感じたようだったが何も言わない。そしてタマキは地下に続く階段を下り始めた。

階段は思ったよりも長く、地下一階というよりも二階というくらいまで続いていた。階段を降りきると、大きく重そうな金属の扉が現れ、タマキはその前に立った。

「さて、この先はなんだと思う？」

「わかりません。でもこの扉の大きさからすると、中もかなり広そうですね」

「そうだな、まあとりあえず中に入ってみるか」

タマキは重い扉を両手でゆっくりと押し開けた。

「おお、広いな」

タマキがもらった言葉通り、そこは体育館のような場所と広さで、多くの照明で非常に明るかった。そしてその中心には一人の男が立っていた。

「久しぶりだな」

タマキはその男、トレルに気安い雰囲気で声をかけた。

「待っていたぞ。お前と思う存分決着をつけられる、この時をな」

「そうか、まあ俺もお前とならそんな悪い気もしないな。ライト、下がっててくれ」

ライトは黙ってうなずくと、扉の側に立った。タマキはそのまま進んでいき、トレルの数歩先で止まる。

「さて、最初に聞いておくけど、お前は今十二使徒としてそこに立ってるのか？」

「そんなことはついでだ。俺がやるのはお前を叩きのめしてやること、それだけだ」

「まあ、悪くはないな」

タマキは右腕を構えた。トレルも姿勢を低くして、二人は睨み合った。それから徐々にその場の空気が緊迫していき、それが最高潮に達した時、二人は同時に床を蹴った。

二人の右の拳が激突し、衝撃がその場を揺るがした。そこから二人は後ろに飛び退き、もう一度対峙した。

「前よりもずっと力が増しているじゃないかよ」

「それはお互い様だろうな。お前は他の連中とは違うみたいだ」

「俺をあんな連中と一緒にするな」

「ああ、そうだよな」

それから、今度は真っ直ぐではなく、二人は高く跳び上がると空中で交差した。そして位置を入れ替え、二人はすぐに振り向く。その額からは双方ともに血を流している。

今度はそこからすぐにタマキが床を蹴ってトレルに迫る。その右拳はかわされたが、タマキは間髪入れずにその勢いを利用して後ろ回し蹴りを放つ。

その蹴りはトレルが後ろに下がってすかすと、そこから飛んで片足を真っ直ぐ伸ばした。タマキは右手でその足を受け止める。そしてそのままトレルの身体を振り回し、放り投げた。

だが、トレルは空中で体勢を立て直し足から勢いよく着地すると、手と膝をついてその勢いを殺した。そしてタマキが追撃をしてこないのを確認すると、ゆっくり立ち上がり、笑った。

「ここまでとは思ってなかったぜ、楽しいじゃないか」

「全力じゃないにしてもな。まあ、そろそろ本番だ」

タマキは右手を右目にあてた。そこから金色の膜が顔の半分に広がり覆う。さらに肩の付け根まで黄金の腕が広がり、それは背中にも達した。そしてタマキが右腕を振ると、そこには蝙蝠の翼のような形の黄金の翼が広がっていた。

「さて、俺は準備完了だ。お前もその刻印を使ったらどうだ」

「そうしてやる」

トレルは手の刻印を光らせた。その輝きは今までのものよりもずっと強い。タマキはそれに感心したような表情を浮かべた。

「なるほど、だいぶ特訓でもしたらしいな。なんだか嬉しい話じゃないか」

タマキは右手を鉤爪に変化させてから、それでトレルに向かって手招きをした。

「行くぞお！」

床を蹴ったトレルは今までとは段違いの勢いでタマキに迫り、その直前で腕を振った。大きな爆発が起こったが、タマキは反射的に右手の翼で自らを守った。

トレルはそこから上に跳ぶ。だが爆煙の中からタマキが飛び出し、一撃を加えようとした。トレルはそれに対して足を振ったが、タマキはそれを右腕で受け、左手で逆の足をつかもうとした。

。

しかし、トレルは自分の目の前で爆発を起こすと、その衝撃で回避をして離れた位置に着地する。そこにわずかに遅れて着地したタマキが床を蹴って迫った。

トレルは大振りの右手を身をかがめてかわし、足払いをしかけた。タマキはそれをバックステ

ップしてかわすと、右手を前方に突き出し、左手をそれにそえた。トレルもそれに応じるように低い体勢のまま、タマキと同じように構える。

「バースト！」

「食らえ！」

二人の声が同時に響くと、双方の右手から凄まじい勢いの爆発が起こった。その爆煙は地下室に充満し、二人の姿を覆い隠す。

ライトは身をかがめていたが、しばらくして顔を上げると、まだ視界の悪い中でなんとかタマキの姿を見つけようとした。

数十秒後、徐々に煙が薄くなってくると、二人のシルエットがおぼろげに見えてくる。そして、そのうちの一つがその場に倒れた。

「お前はよくやったよ。まあ、やっぱり経験の差ってやつだな」

タマキはその場に膝をつく、倒れたトレルに優しいと言える調子で語りかけた。それからその刻印がある手を取ると、鉤爪でそれを消した。

「まあ、これで終わりじゃない。お前はまだ強くなれるだろうよ」

タマキはトレルの手を床にゆっくりと置き、立ち上がり、ライトのほうに振り返った。

「ここは済んだ。上に行くとするか」

「はい」

タマキとライトはその地下室を後にした。

本当の戦場

「さて、ここが最上階か」

タマキは廊下に立って左右を見回していた。

「それよりタマキさん、まだ魔法は使えるんですか？」

「ああ、それならまだ大丈夫だ。あと二発くらいならなんとかなりそうだな」

「力が増してるんですね」

「そうだな、それでも元からすると誤差の範囲なんだけど、それでも今は助かる。とりあえずこっちから見てみるか」

タマキは自分から見て右に進みだした。ライトもそれに黙ってついていく。ひとまずタマキは一番手近なドアの前で止まり、無造作にそのノブに手をかけた。

「おじゃましますよっと」

ドアを押し開けて中に入ってみると、そこに人の気配は無く、そこそこの広さの中に一人用のテーブルと椅子が並んでいるだけだった。

「なんだ、まるでオフィスみたいだな」

タマキは中に入ると、机に並べられているファイルを手に取って見てみた。

「読めないな、まあこんなところに重要な情報もないか」

タマキはファイルを元に戻すと、室内を見回す。別のファイルを見ていたライトもそれと同じように元に戻した。

「そうですね、ここにあるのは細かいことが書いてあるものだけみたいです」

「それなら次に行くか」

「はい」

二人はその部屋を出るともう一つ奥の部屋に向かった。そのドアも同じようなものだったが、タマキが手をかけても簡単には動かなかった。

「鍵かな」

タマキは一度手を放すと、勢いをつけて右手でドアを殴りつけた。ドアは勢いよく開き、室内が露になったが、そこにあるのは書棚ばかりだった。

「今度は資料室かなんかか」

「そうみたいです、役に立つものがないか探して見ます」

「頼む」

ライトが書棚を調べている間、タマキは入口が見える位置で立っていた。しばらくして、ライトは手に持っていた数十冊目の本を戻した。

「ここにも重要なものはなさそうです」

「そうか、こっち側は見たところあと二部屋くらいだな。それにしても人が全然いないんだな」

「僕達に来ることを予期していたのかもしれませんが」

「それとも今日はちょうど休みだったのか。まあ誰もいないのは都合がいいから問題はないさ」

二人が廊下に出て次の部屋の前に立つと、そこにあるのは今までよりも大きなドアだった。タマキが手をかけると、今度はそれはあっさりと開いた。

室内は今でより広く、椅子と机が並ぶそこは、タマキが受けた印象では教室というものだった。

「ここは特に何もなにか」

「そうみたいです」

「まあ、一応ざっと調べよう」

二人は手分けをしてその部屋を調べたが、特に目立ったものは何も見つからなかった。

「何も見当たりません」

「こっちもだ。次はこの階の反対側だな」

タマキはドアを開けて外に出ようとしたが、その時、突然建物が激しく揺れた。タマキはすぐにライトを支えると、すぐに廊下に出る。そして、廊下の窓から外を見た。

「どういうことだ」

タマキの視線の先、窓の外には何もなかった。しばらくして揺れが小さくなると、ライトは自分で立ち、窓に近づいた。

「建物ごと違う空間に来ているみたいですね」

「移動中かもな。俺達を飛ばすためだけにこんなことをやったのか？」

「いえ、それはないと思います。でも、これで人がいなかったわけがわかりました」

「そうだな、これはお世辞にも上等な乗り物じゃないし」

「でもいったいどこに向かっているのか、それがわかりません」

「向かってるのは違う世界だろうな。多分何かの準備でもできたんだろ」

「もしかすると、いよいよ準備が整ったのかもしれない。それに刻印の力を最大限生かせる状況も」

「全ての世界を一つにしてどうこうするっていうことか。それと、刻印の力っていうのはどういうことだ？」

「刻印が最後の一つになると、力はその最後の一つを持つ人間に集中されるんです」

「なるほど、俺が倒したのだけじゃ足りないから、たぶんカレン達だな」

それからタマキは何もない外に目を凝らした。

「まあ、この目的地に到着すればわかる話だな？」

「でも、移動した先が本当の本拠地なのは間違いありません」

「ああ、着いてみればわかるから、今はのんびりしておくか」

タマキとライトはこの階の最初の部屋に行って、そこで待つことにした。そして一時間も経った頃、窓の外の景色が変わった。タマキはその景色を見て、思わず感心したように息を吐き出した。

「これは大した都会だな」

その言葉通り、窓から見えるのはタマキからすると現代的なビルと、しっかりと舗装された道路などだった。

「すごいですね、何もかもが大きく見えます」

「そうだな、多分ここは俺の元の世界よりも進んでそうだ」

「そうなんですか」

「ああ、とりあえず外に出てみよう」

二人は階段を下り、玄関ホールに到着した。そしてそこから外を見て、ライトはつぶやく。

「この場所は最初から決まっていたんですね。最初からここにあるべきものとしてこの建物は作られたというのがよくわかります」

「そうだな、不自然な繋ぎ目みたいのものもないし、あらかじめここに置くために作ったわけだ。いよいよ隠れる必要がなくなったってところだろうな。それに人がいないのは現地調達するつもりっていうことか」

「そうですね、そうかもしれません」

「まあ、とりあえず外に出てみるか」

そう言ってタマキが玄関のドアを開けようとしたが、それは全く動かなかった。

「おかしいな」

タマキはそう言ってから、さらに力を込めたが、ドアはやはり動かない。そして、いきなりその場の明かりが消え、タマキが振り返ると、テーブルが光っていた。

タマキがそこに近寄ると、テーブルの上に光のスクリーンのようなものが現れた。

「これは？」

ライトがつぶやくと同時に、そのスクリーンには一人の男が映し出された。

「初めて会うな、勇者とやら」

「あなたは、いえ、やはりあなただったんですね」

ライトがそう言うと、スクリーンの中の男はかすかに笑ったように見えた。

「ライトか。お前は役割を見事に果たした。やりすぎというくらいにな」

「ちょっと待て」

そのライトの前にタマキは出た。

「あんたの御託は別にどうでもいいんだけどな、とりあえずここがあんたがやろうとしている中心だっていうことでいいんだろ」

「そうだ。ここから全てが始まる。秩序が全ての世界にもたらされるのだ」

「なるほどな。で、あんたは今どこにいるんだ？」

スクリーン中の男はタマキの問いに両腕を広げた。

「私はいつでも世界を統べる場所にいる」

「なるほどな」

タマキは足を踏み出すと、右腕を机に向けて振り下ろした。机は砕け、スクリーンも消える。

「あいつがこの世界のどっかでふんぞり返ってるのはわかった、それで十分だ」

それからタマキは玄関のドアに近づくと、それを右腕で粉碎し、振り向いた。

「行くぞ。あいつを張り倒してやる」

ライトは少しだけ固まっていたが、すぐにタマキを追って外に出た。

ロボット兵器

カレン、まもる、要一の三人の前にはまだ煙の上がる広範囲な焼け野原が広がっていた。そこには建物の土台のようなものだけが残り、他には焼け焦げたガレキや色々なものが転がっている。

「ひどい状況ですね」

カレンはそれだけ言ってその焼け野原を見回した。

「これって、さっき要一君が言ってたロボットの仕業だったりとか」

「わかりませんが、でもあれだったらこれくらいできそうですよ」

そうして三人が歩いていると、カレンが立ち止まり、瓦礫が積もっている場所に目を向けた。すると、その瓦礫がわずかに動いていた。カレンは黙ってそこに近寄ると、その場所の瓦礫を素早くどけ始める。

要一とまもるもすぐにそこに駆け寄ると、ちょうど地面に頑丈かつ重そうな扉が見えてきたところだった。

「俺が開けます」

要一はその地面の扉に手をかけると、一気に持ち上げた。その先にあったのは、拳銃を構えた人影だった。

「敵ではないようだな。だが、何者だ」

「あー、通りすがりです」

「妙なことを言う奴だな」

人影は銃を下ろすと、姿を現した。その男はまだ若く、シャツにベスト、ジーンズというラフな格好だった。そして、まもるのことは見てから、カレンを見て首を傾げた。

「剣？ 本当にあんたらは何者だ？」

「話すと長いんですけど、どこか落ち着ける場所は」

「それならまずはこの周囲に危険がないか見回るのに付き合ってもらおう」

「いいですよ」

それから男は扉を閉め、先頭に立って歩き始めた。

「そういえばまだ名乗っていなかったな。俺はケイランだ」

「要一です」

「まもる、よろしく」

「カレンです」

「ヨウイチにマモルにカレンか。お前達もこことは違う世界とかいうところから来たのか？」

「お前達も、ということは私達以外にもこことは別の世界から来た者がいるのですか」

カレンが聞くと、ケイランは頭をかいて首を縦に振った。

「ああ、あいつらが来てからここは滅茶苦茶だ」

「あの巨大なロボットのせいですか？」

「ロボット？ あのでかいガラクタはそういう名前なのか」

「いや、俺の世界ではそう呼ばれてるってだけです」

「そうか、ロボット、ロボットな。これからは俺達もそう呼ぶことにしよう」

「あれがどこから来ているかはわかるのでしょうか？」

カレンが聞くとケイランは首を横に振った。

「わからない。ただこの近くでないだろうな。俺もだいぶ遠くまで偵察に出たんだが、それらし

きものは見当たらなかった」

「そうですか」

カレンは口を閉じて何かを考えているようだったが、そこにまもるが近づいた。

「巨大ロボットが敵だったら、なんで要一君が襲われなかったんですかね」

「情報がうまく伝達されていないのかもしれないね、それとも」

カレンはそこで言葉を切ると、ケイランに顔を向ける。

「ケイランさん、ロボットは空を飛んでいるときに人間を確認できるのでしょうか？」

「いや、連中が飛んでたら地面の人間は見つけれないはずだ。おかげで俺も遠くまで偵察に行けたんだがな」

そうして話しているうちに、焼け野原の安全は大体確認できた。

「とりあえず問題はなさそうだな」

ケイランがそう言うと、いきなりカレンはショートソードを抜いてその身体を押し倒した。次の瞬間その上を銃弾が通過して、後方に着弾する。まもると要一もすぐに地面に伏せて上空からの銃撃を回避していた。

「なんだ!？」

「動かないでください」

カレンはそう言いながら髪と瞳を白銀に染め、その身を漆黒の鎧で包むと、一気に立ち上がってさらに飛来してきた銃弾を白銀の剣の一振りでもし飛ばした。

それを見て啞然としているケイランを尻目に、まもるは変身し、要一も次元の鉄槌を呼び出した。

「お二人はケイランさんをお願いします」

そのカレンの視線の先には、まもるの姿を二回りも大きくし、両手が長い銃になっているものが三体降下してきていた。

「あれって、パワードスーツ!？」

まもるは驚いていたが、それでも銃を手にとると、そのパワードスーツのようなものに向けて撃つ。だが、すでに散開していたためにそれは回避されてしまう。

しかし、カレンはそのうちの右の一体に素早く迫ると、袈裟切りに剣を振るった。その一撃はパワードスーツのようなものの胴を切り裂き、真っ二つにする。そして、カレンが飛び退くと同時に爆発した。

「無人です! あと一体は頼みます!」

そう叫んでから、カレンは上に逃れたほうを追って地面を蹴った。

「こっちは大丈夫です!」

「オーケー!」

要一は鉄槌を盾にしてケイランの前に出て守りを固め、まもるはブースターを全開にすると、残りの一体に向けて突進した。

パワードスーツのようなものはそれに両手の銃を向けるがまもるはマスクの奥でにやりと笑う。

。

「フルドライブモード!」

一気に推進力を増したまもるは銃弾をかいくぐると、パワードスーツのようなものの横を通過しながらその脚部に銃を連射した。

そして急激に軌道を変えて宙返りをするとブレードを抜き放ち、そのまま降下しながらバランスを崩している標的の片方の腕をすれ違いざまに切り落とす。

さらに、そこから再び上昇して同じように宙返りをするとその逆さまの体勢のまま銃を構えた。

「いけ！ チャージブラスト！」

まもるの銃が光を発し、銃口に集中した。引金が引かれると、それがそのままパワードスーツのようなものの中心に吸い込まれていった。

その一撃は装甲を貫き、パワードスーツのようなものは小さな爆発を起こすとそのまま動かなくなった。すぐにその上にカレンがしとめたものの残骸が落ちてきて、二体とも潰れた。

それからカレンは素早く、しかし静かに着地すると、元の姿に戻ってすぐに着地していたまもるに近づいた。

「大丈夫でしたか」

「はい、この程度だったら全然問題ないですよ」

それからまもるも変身を解除し、二人で要一とケイランの元に戻った。すでに立ち上がっていたケイランは今の戦闘を見てなんといいのかわからない様子だったが、とりあえず口を開く。

「いや、すごいなあんだ。それにしてもあんなものは初めて見た」

「あれくらいならば問題はありません。どうやらあれは対人用の新しい兵器のようですが、無人であれほどの戦闘力ですと、数がまとまると厄介なことになります」

カレンの言葉にまもるもうなずいた。

「私達ならともかく、ここの人達だと対処できないんじゃないですか？ あれじゃ大きいのと違って接近されてもすぐにわからないですし」

「それもそうだな、あれが人間用とすると、俺達も今までと同じようにしてたら生き残れない」

ケイランは難しい顔をしていたが、そこでまもるが勢いよく手を上げた。

「はい、とりあえずここじゃなんですから、ケイランさんのいた地下に行きましょう。巨大ロボットの爆撃にも耐えられるなら、とりあえず外に出なければ安全だと思いますけど」

「そうですね、いいですか？」

カレンにそう言われると、ケイランはうなずいた。

「ああ、あんだ達が一緒にいてくれるなら心強い。それより、さっきの奴らはもういないのか？」

「それは大丈夫です。ですが、敵はあれが倒されたことに気がつくでしょうから、時間はあまりないですね」

「そういうことなら心配するな」

ケイランは笑みを浮かべてそう言うと歩き出した。要一はそれに首をかしげたが、とりあえず黙ってついていくことにした。

抗う者

カレン達が案内されたのは、想像以上に広い地下の迷宮ともいえる場所だった。明かりは豊富ではなく、薄暗かったが、それでも歩くには十分といえた。

「ここは元々昔の遺跡でな、それを改造してシェルターにしてるんだ」

「一体どれくらいの広さなんですか」

まもるに聞かれるとケイランは天井を見上げた。

「正直この遺跡の全ては把握できてないんだ。だが、かなり遠くまで移動できるルートもあるのは確認してある」

「意外なところで冒険だ」

まもるがそうつぶやいて何か考えているうちに、四人は大きな食堂のような場所に到着していた。そこには老若男女様々な人がいて、入ってきた四人に注目が集まる。

「なんか注目されてる？」

「新顔は注目されるもんだ」

そして四人は食堂を注目されながら通過すると、あまり広いとは言えない会議室風の部屋に入った。

「座って待っててくれ、会わせたい人がいる」

それだけ言うとケイランは三人を残して部屋から出て行った。しばらくすると、一人の地味な雰囲気の中年の女性を伴って戻ってきた。

「俺達のリーダーだ」

「ケイトです。話はケイランから聞きました。とりあえず座って話しましょうか」

そして五人は向かい合って座ると、まずはケイトが口を開いた。

「あなた達は違う世界から来たということですが、目的を聞かせてもらえませんか？」

その質問にはカレンが口を開いた。

「私達の目的は人探しです。そのためにここまで旅をしてきました」

「なるほど、きっとその人というのは大事な人なんですね」

「はい」

カレンが深くうなずくと、ケイトは微笑んだ。

「そうですか。それでは、ここが目的地というわけではないわけですね」

「いえ、それはわかりません。ただ、ここは今までとは明らかに違うので、もしかすると目的地かもしれません」

ケイトはそれにうなずき、カレンは続けて口を開く。

「ですから、とりあえず拠点としてここを使わせていただけないでしょうか。もちろん、私達も全力であなた達の力になります」

「そういうことなら、私のほうからもお願いしたいところですね。ケイランの話では新しい敵の兵器も出現したようですし、大きな戦力が得られるのは大歓迎ですよ。それで、早速お願いがあります」

ケイトは立ち上がり、地図を取り出すと黒板に張り出した。

「今はちょうどこの地点になります」

地図の一点を指差し、さらにそこから離れた場所にその指を運ぶ。

「そしてここが、現在確認されている、この遺跡から通じている最も遠い場所になります。ここで陽動を行って欲しいんです」

ケイトが指を動かした先はかなり離れた場所だった。

「そんなに遠くまで行けるんですか」

まもるが驚きの声を上げると、ケイトは笑ってうなづく。

「そうです。移動手段も確保できているので安心してください」

「それならば、すぐに出発しましょう」

カレンが立ち上がったが、その瞬間、鈍い音と共に部屋が揺れた。

「これは、思ったよりも早く敵が来たようですね。とりあえずこれに対応すべきでしょうか」

カレンがそう言うと、ケイトはうなづくケイランを見た。

「ケイラン、カレンさん達の案内を頼みます。とりあえずは近い地点から奇襲をかけるのがいいですね」

「了解しました」

ケイランは返事をする、カレン達三人にうなづくみせた。

「では、ヨウイチさんはここに残っていただけますか？ もしもの時でもヨウイチさんなら時間が稼げると思うので」

「わかりました」

要一がうなづく、カレン、まもる、ケイランの三人はその部屋を出た。そして三人が向かったのはさらに地下、そして、そこにあったのは、二十人ほどは余裕で乗れる、屋根のない車両だった。

「これって、地下鉄みたいなもん？」

まもるが言うと、ケイランは車両の運転席に乗り込んだ。

「それが何かはわからないが、こいつが移動手段だ。乗ってくれ」

カレンとまもるが車両に乗り込むと、ケイランはすぐにそれを出発させた。車両はゆっくりと動きだすと、瞬く間に速度を上げていった。

「おお、速い速い」

まもるが感心しながら、手を叩いていると、車両はわずか数分で停止した。

「着いたぞ」

ケイランはそう言うとすぐに車両から飛び降り、階段を上り始めた。三人はそれから、重い扉を開けて地表に出た。

「かなり激しい攻撃のようですね」

カレンはすぐに最初に入った入口付近に目を向けると、そこでは今でも空中から三体の巨大ロボットが爆撃をしていた。

「ああ、連中本気だな。どうするんだ？」

カレンはそれに答えず、黙って自分のショートソードを抜いた。

「ケイランさんはここで待っていてください。マモルさんは援護をお願いします」

そう言うと、カレンの瞳と髪と剣が白銀に染まり、身体は漆黒の鎧を身にまとう。

「片付けてきます」

白銀の翼が広がると、カレンは巨大ロボットに向かって飛んだ。まもるは出遅れたがすぐに変身をするとカレンを追った。

「頼むぞ」

ケイランはそれだけつぶやいて二人を見送った。

「攻撃中止、地表をスキャンしろ」

「了解、降下します」

巨大ロボットのパイロット達は無線で通信をとると、そのうちの一体が地面に下りていった。だが、一筋の光が閃き、そのロボットの腕が落とされた。

「どうした！」

「わかりません！ レーダーにも何も！ うわあ！」

もう一度光が閃くと、今度はそのロボットの足が爆発し、そのまま落ちていった。

「敵が近くにいる！ 気をつけろ！」

そう叫ぶと同時に、その機体の肩に何か被弾した。

「くっ、まだいるのか！」

機体の向きを急激に変えたが、すでに攻撃してきたものは移動したのか補足できない。

「くそっ、一体なんだというんだ！ ぐっ！」

正面からの衝撃でパイロットはうめいた。コンソールを見ると、片足に大きなダメージを受けたようで、警告が出ている。

さらに、続けて背面から衝撃を受け、今度はその部分に警告が出る。

「ちっ、不時着するしかないか」

パイロットは悪態をついてなんとか着地しようとしたが、その間にももう一体のロボットが攻撃を受けて落ちるのが見えた。

「なんだっていうんだよ！」

さらに悪態をついてからパイロットはコンソールを叩き、通信を始める。

「こちらファイアチーム、現在何者かの襲撃を受けています。至急救援を願います！」

数秒間、何の反応もなく、今度は右腕に攻撃を受けた。

「応答願います！」

「そう慌てなさんな、今向かってる」

「イグシー様！ 出撃されたのですか」

「そうだよ、変わった連中が現れたらしいからな。それに、もう着いた」

通信が終わると、はるか上空にまるで太陽のような輝きが現れた。

「あれは」

三体のロボットを沈黙させたカレンはその輝きを見つめた。

「マモルさん退いてください！」

「え？ でも」

「いいから退いてください！」

カレンはそう叫ぶと、白銀の剣を構えた。そして上空の近づき、それが収まってくると、両肩から生々しい竜の頭のようなものを生やしたロボットが姿を現す。

「なるほど、あんたが十二使徒を倒してる奴か」

そのロボットから声が響く。

「そうです、あなたも十二使徒のようですね」

「そうだ、俺こそが十二使徒の最後の一人、イグシー！」

その声と同時に、ロボットの胴に巨大な刻印が現れ、それに十二の炎が灯った。

「行くぞ！」

ロボットが手に持つライフルを構えると同時に、カレンは地面を蹴った。

「これじゃ手が出せないじゃない」

まもるはカレンとイグシーの戦いを距離をとって見ていた。その両者はサイズは全く違うが、互いに素早く動き、他の何者も寄せ付けない。

「カレンさんはともかく、あのロボットがどうしてあれだけ動けんだか」

まもるは独り言以上のことができない自分を齒がゆく思っていたが、とにかくこらえて戦いを見守ることにした。

「こいつ、ちょこまかと！」

イグシーは悪態をついていたが、その機体の動きはカレンに劣るものではない。

「機動力に力をまわさないと駄目だな」

イグシーはコックピット内の装置を動かして調整すると、さらに機動力を上げた。

カレンはすぐに相手の動きが変わったことに気がついた。そして、自らも速度を上げる。

「どうやら、タマキさんの力をほぼ全て使っているようですね」

そしてカレンがロボットの上に出ると、イグシーはすぐに反応して右手のライフルをそちらに向け、ビームを三連射した。

カレンはその三発を避けながら、ロボットに向けて降下するとライフルを破壊しようとした。だが、イグシーは機体を素早く後退させると、さらにライフルを連射する。

カレンはそれを避けようとしたが、避けきれずに自らの剣をビームを迎撃しようとした。そこにビームが直撃し、さらにイグシーはそこにライフルを撃ち続ける。

しかし、その中からカレンは下に飛び出し、地面すれすれまで降下すると、そのまま低空飛行をしてイグシーの背面にまわろうとした。

「本当に生身かこいつは？」

イグシーは機体を上昇させると、ライフルを地面に向けて連射するが、カレンはそれを避けながら、ちょうど真下の位置に到達した瞬間に直角に上昇を始めた。

「ちっ」

イグシーは左手を動かすと、腰に装着されている柄だけを抜く。それと同時に、それからビームの刃が伸びた。そして機体を急降下させながら、カレンに向かってそのビームブレードを振り下ろした。

それはカレンの白銀の剣と正面から激突し、激しく光を発した。力は拮抗し、両者は動かない。

「こいつ、機動力に振ってると言っても、普通受け止めるか？」

イグシーはパワーを上げようとしたが、その前にカレンがその場を離脱し、地面まで急降下した。そしてカレンは剣を構えると、輝きが増し、その光で巨大な剣が作り出された。

「正面からくるか」

イグシーはパワーとビームブレードの出力を上げると、カレンより先に動き出し、機体の向きを変えた。カレンはまだ動かず、さらに剣に力を集中させている。

「行くぞ！」

イグシーはブースターを全開にすると、一気に速度を増し、カレンに向かって急降下を開始した。

「行きますよ」

カレンも翼を大きく開くと、それに向かって一気に急上昇を始めた。そして、両者が激突す

ると、前回とは比べ物にならない光と衝撃が爆発的に発生し、両者の姿を飲み込んだ。

「どうなったの!？」

まもるは光と衝撃に耐え、なんとかその光景を見ていたが、光でどうなったのかは全くわからなかった。だが、その光も徐々に小さくなり、まもるにも状況が見えてきた。

すでにカレンとイグシーの機体は距離をとって、どちらにも目立った傷はないように見えた。

「互角とは、とんでもない奴だな」

イグシーの機体から声が響いた。

「そちらも、さすがにタマキさんの力を使っているだけのことはありますね」

「ふん、だがそれだけだと思ふな」

イグシーはそう言ってマイクを切ると、足元にあるレバーに手をかけた。

「こいつを使うことになるとはな」

そして、そのレバーを引いてから半回転させ手を放すと、コンソールに手を当てた。すると、そこに機体に現れた刻印と同じものが浮かび上がり、コックピット内に光が満たされる。

「最大開放」

イグシーの機体全体が光り、カレンはそれに今までにない力が満ちていくのを感じ、剣を構えた。だが、イグシーの機体の姿が消えると、カレンはその衝撃を受けて地面まで叩きつけられる。

機体が再び姿を現すと、カレンが落ちた地点に向けてライフルを乱射した。カレンはその中を高速で動き、ビームをかわすと上昇しようとしたが、再びイグシーの機体が消え今度はカレンのすぐ上に現れると、そこからビームブレードを振り下ろした。

「くっ」

カレンはなんとか白銀の剣でそれを受け止めたが、勢いを止めきれずに、再び地面に叩き落される。さらにイグシーの機体はその地点の近くに瞬時に移動し、カレンに向けてビームブレードを振り下ろした。

「そうはさせない！」

その一撃は伸びてきたクレーンアームによって邪魔をされた。

「おおおおおおお！」

さらにまもるはブースターを全開にしてドリルで突っ込む。だが、イグシーの機体はそれに向けてライフルを連射した。

ビームの直撃を連続で受けたまもるはバランスを崩し、転がされてしまう。そうしてできた隙に、カレンは飛び上がってイグシーの機体に切りかかった。

「遅い！」

イグシーはビームブレードを振るい、三度カレンを地面に叩きつけた。そして、今度は確実に地面のカレンに向けてビームブレードを振り下ろした。

「カレンさん！」

まもるが叫ぶが、イグシーのビームブレードは確実にカレンが落とされた場所を地面ごと抉っていた。まもるは元のフォームに戻ると、突進しようとしたが、そこで声が響いた。

「心配ありませんよ」

カレンの声が響き、ビームブレードが抉った場所から黒い円盤状のものが無数に出現した。それはビームブレードを瞬時に霧散させ、イグシーの機体そのものを後退させる。

そして、今までの白銀の輝きも漆黒の鎧もなく、一見したところ身の回りの黒い円盤以外は何

の変化もしていない、元の姿のカレンがゆっくりと立ち上がった。

「ここまで危険を感じたのは久しぶりです。しかし、そのおかげで私も思い切ったことができました」

「カレン、さん？ それって」

まもるはようやくカレンの変化に気づいた。それにうなずいてみせるカレンは、ただ髪の毛と瞳が黒く染まっていた。

「私の切り札ですよ。マモルさん、すぐに終わらせますから下がっててください」

「はい」

まもるはカレンの様子に今までにない力強さを感じ、すぐに後退していった。それを確認したカレンはイグシーの機体に視線を向ける。

「待っていただいて感謝しますよ、イグシーさん」

「ふん、余裕だな」

「すぐにわかりますよ」

「いいだろう！」

イグシーの機体が消えたが、カレンはただ指を少し動かしただけで、その場から動こうとしない。

「こ、これは？」

カレンの背後に現れたイグシーの機体だったが、それには黒い円盤がまとわりつき、動きを封じていた。

「くそっ！ どういうことだ！ なぜ動かない！」

イグシーはコックピット内で激しく動揺していた。カレンはゆっくりと振り向くと、その黒い瞳でまるで見えているかのように、その目を射た。

「終わりにしましょう」

カレンはごく普通に歩くと、足元に黒い円盤を発生させると、それに乗ってイグシーのいるコックピットの前まで身体を浮かせた。それから剣を軽く振り、そのハッチを弾き飛ばした。

イグシーはその光景をただ呆然として見ていた。

「話は外で聞かせてもらいましょう」

カレンはその目を黒く染まった瞳で覗き込んだ

「しかし妙なところだな」

タマキは空を見上げていた。ライトもそれにうなづく。

「そうですね、人も出歩いてませんし、それに」

そこでライトは口を閉じたが、まだ何か言おうとしていた。

「それに、どうした？」

「いえ、なんだか空気が淀んでいる感じなんです」

「たしかにそうだな。まあ、とにかく一度ここを離れてみるか。外から見ればわかることも多いだろ」

「はい」

二人はこの街から出るべく、足を速めた。

「おかしいな」

だいぶ歩いてから、タマキは空を見上げた。

「どうしたんですか？」

「この空だ。どうも低いような気がするんだよな」

「そうでしょうか」

「それにな」

タマキは視線を下げ、道の先を見ると、左手を構えた。

「アイスバイト！」

小さな牙が飛び、それは空中で何かに当たったかのようになって砕けた。

「やっぱりな」

タマキはそうつぶやくと早足で歩き、ライトも黙ってそれについていった。そうしてタマキがさっきの場所に右手を出すと、それは見えない壁に触れた。

「ここは屋内ってわけだ」

ライトもタマキと同じように壁に手を触れてから、空を見上げた。

「あの空も作り物なんですね」

「まるで本物だけだな。問題はこの先がどうなってるかだけど、まあ、何もないってことはないだろうから、とりあえず外に出てみるか」

「でも、どこから出るんでしょうか」

「出口なら作ればいいだろ」

そう言ってタマキは構えたが、何かに気づいた様子で構えをといた。

「どうしたんですか？」

「今、馴染みのある力を感じた。外からだな」

「それは、タマキさんの仲間の方ですか？」

「そうだな。それがわかったんなら、早速外に出てみるか」

タマキは再び構え、右腕を真っ直ぐ壁に叩きつけた。低い音が響き、拳を叩きつけた部分からひびが広がったが、それだけだった。

「分厚いな」

タマキは右腕を引くと、そのひびの部分を見て首をかしげた。

「やっぱりちゃんとした出口を探したほうがいいんじゃないでしょうか」

「いや、どこにあるかもわからないし、それに簡単に通してはくれないだろうから、ここを破る

のと大差ないだろ」

タマキはそう言ってから、壁に右手をつき、それに左手をそえた。

「バースト！」

激しい爆発が起こり、壁が吹き飛ぶと、人が一人通れる程度の穴が開いていた。それから二人はその穴を通して外に出た。

そして振り返ると、二人は感心したようにうなずいた。

「なるほどな、外からだとかう見えるわけか」

「まるでなにもないように見えますね」

「ああ、魔法かなんかかな」

「わかりません。しかし、これだとかかなり近くに来たとしてもここにこんなものがあるとは気づけませんよね」

タマキは背後の荒野を見回した。

「そうだな、それにこんな荒野の真ん中じゃ、見つかるってことはほとんどなさそうだ」

「これからどうするんですか？」

「一度ここから離れよう」

「タマキさんの仲間の方を探すんですね」

「そうだ、今の俺だけじゃ勝てないだろうしな」

「でも、この荒野では探すのは大変そうですね」

「ああ」

そうしてタマキは歩き出そうと身体の向きを変えたが、そこで背後から低い音が響いてきた。二人振り向くと、今まで何もないように見えた空間の上のほうに灰色の帽子のようなものが現れていた。

そしてそれが開いていくと、そこから巨大なロボットの姿がせりだしてきた。

「またすごいもんが出てきたな」

タマキはのんきにそう言いながら、ロボットが発進していくのを見ていた。

「あんな兵器は見たことがありません」

「俺も現実では初めてだよ。おお、どんどん出てくるな」

ロボットは次々と出てきて、結局六体が出撃していった。

「とりあえずあれで全部か。さて、あれを追うか、それともここにとどまるかどうか、どっちがいいと思う」

「危険かもしれませんが、追ったほうがいいと思います」

「そうだな、そうしよう。とにかく、あれが飛んでいった方に行けばいいだろ」

そうして二人は歩き出した。だが、しばらくして、タマキは足を止めて振り返った。

「また別のが来たらしいな、ライト少し下がっててくれ」

「はい」

ライトはタマキの側から離れ、近くの岩に身を隠した。それからしばらくすると、カレン達が遭遇したのと同じ、二体のパワードスーツのようなロボットが現れた。

「対人用の小型ロボットだな」

タマキはそうつぶやくと、右手を右目にあてて、姿を変えた。飛来した二体はタマキに向かって両手の銃を撃つが、タマキは右手の翼でそれを防ぐと、地面を蹴り、交錯する瞬間に一体の片腕ごと腹を抉った。

残った一体はすぐに反転し、タマキに向けて銃撃をしたが、それを右腕で防ぐと、タマキは一

直線に突進した。

そしてそのまま右腕でパワードスーツのようなものの腹を貫くと、それを無造作に放り投げた。

「単純な機械だな」

そして元の姿に戻ったタマキに岩から出てきたライトが駆け寄る。

「大丈夫ですか？」

「あれくらいなら問題はないさ。それより、次が来る前に移動しとくか」

その時、遠くから爆音のようなものが響いてきた。

「さっきのがカレン達と接触したのか、急ぐぞ」

「はい」

二人が歩き出そうとしたが、突然その周囲が暗くなると、その頭上の空にスクリーンが現れた。タマキはそのスクリーンを見上げると、苦笑いを浮かべた。

「またあんたか。よほどこういう仕掛けが好きらしいな」

スクリーンの中の男はそれに首をかしげた。

「おとなしくしていれば少しは生き残れる可能性が高くなるのだがな」

「そうかな。俺はそうは思わない」

「そう思いたいならそうしていればいいだろう。だが、これから始まることは止められはしない」

「お祭りでもやるのを教えてくれるわけか、それは助かるな。で、何を始めるつもりだ？ 外から見えない場所で何かこそそそやるだけじゃないよな」

「あれは準備が整うまでの保険だ。だが、これからは違う。世界が変わっていくのを見ているがいい」

そこでスクリーンは消え、周囲は元の明るさに戻った。

「またそれか。たぶん無理だと思うけどな」

タマキがそう言うと同時に、巨大なものが落ちた衝撃が響き、続けて爆発音がした。

「やっと合流だな」

そのつぶやきが終わらないうちに、二人の前に一筋の光が降り立ち、そこから一人の人影が姿を現した。

「タマキさん」

「心配かけたかな」

タマキは目の前のカレンに右手を見せるように上げて、それを軽く振って見せた。

「はい」

それだけ言うと、カレンはタマキの右手を握り、そのままその身体を抱きしめた。タマキもそれに応えてカレンの背中に手をまわした。

二人はしばらくの間そのまま動かなかったが、まもると要一も追いついてくると、どちらからともなく離れた。それからタマキは全員を見回し、軽く笑う。

「これから何か始まるらしいから、とりあえず話は手短に済ますか」

神というもの

「つまり、そのライトという少年がタマキさんを手助けしていたんですね」

「そういうことだ。この右腕もライトのおかげだ」

「しかし、まだ話していないことがありますね」

「それは終わってから聞けばいいんじゃないか」

カレンはそう言うタマキの目を見ると、ライトに向かってうなずいた。

「わかりました。そういうことでしたら、今はこれ以上聞きません。それより、十二使徒の刻印は全て消えたはずですが、タマキさんの力はまだ戻っていないのはなぜでしょうか」

「それは、僕の知らないところでさらにもう一つの刻印があるのかもしれませんが」

「そうですか。ではタマキさん、これを」

カレンは首から下げていたアミュレットと、サモンが入っている剣をタマキに渡した。タマキがそれを受け取ると、剣から虚無の塊が出現し、タマキの胸に吸い込まれていった。それからアミュレットを首にかけると、すぐにそれが動き出す。

「妙なものを身に付けたようだな」

「ああ、仲良くしろよ、サモン」

「まあよかろう」

それからタマキは剣をカレンに返し、自分の左手を握りしめた。

「これならいけそうだな。じゃあ、早速敵の本拠地に挨拶しに行くか」

タマキが先頭に立って歩き出した。カレンとライトがすぐその後につき、殿はまもとと要一という並びだった。

「いやー、恋人の再会っていいもんだねえ」

「まもるさん、あんまりそうやって茶化すもんじゃないですよ」

「茶化してないって、うらやましいってだけ。要一君はそう思わないの？」

「いや、まあ」

「まったく、まだまだお子様だねえ」

そうしている間に、一向はタマキが壁を破った場所に到着していた。

「さすがに、まだ修理なんて無理だよな。まあそれでいいんだけど」

まずタマキは穴を潜って中に入ると、あとの四人もそれに続き、まもると要一はその光景に驚いた様子だった。

「すごい、これって大都会風じゃない」

「本当にそうですね。場違いというか、なんというか」

まもるは盛り上がっていて、要一は困惑している様子だった。タマキはその様子を見て腕を組むと口を開く。

「ここに敵の親玉がいるはずなんだけど、場所はわからない。まあ馬鹿と煙はなんとやらだから、高いところにいそうな気もするけどな」

「でもタマキさん、最初のあの建物からは目を離さないほうがいいと思います」

ライトの言葉にタマキはうなずいた。

「そうだな、わざわざ違う世界から持ってきたんだから、何か意味があるんだろう。あそこは押さえておくとして、やっぱりこの中は手分けして探さないといけないな」

「それでしたら、私とマモルさんが偵察に出るのがいいでしょう。その建物のことはお願いします。何かあれば私達もすぐに向かいますから」

「ああ、じゃあ行こうか」

タマキがそう言うと、要一とライトはタマキについていき、残ったカレンとまもるは上を見上げた。

「ではまもるさんはあちらをお願いします。何か見つけたら合図をしますから、タマキさんが言っていた建物で落ち合いましょう」

「わかりました。それじゃ、変身！」

まもるは変身して飛び去り、カレンも白銀の翼を広げると飛び立った。

それからしばらくして、タマキ達三人は最初の建物に到着していた。

「ここがタマキさんの言っていた建物ですか」

「そうだ。まだ全部調べたわけじゃないんだよ」

そう言ったタマキがドアに手をかけると、それはあっさりとも開いた。三人は中に入ると、タマキが壊したテーブルが変わらずにそこにあった。

「さて、今度どこから調べるか」

タマキがそう言った瞬間、轟音が響き、玄関にシャッターが下りた。三人が反応すると、窓にも次々にシャッターが下りて建物が閉鎖されていった。要一はすぐに玄関に駆け寄って確かめたが、ドアは動かない。

「駄目です。これじゃ力づくでなんとかするしかなさそうですよ」

「いいや、外に出る前に中を調べよう。俺達を閉じ込めたんだから、狙いは分断だろ。それならそれに乗ってやるのも面白そうだ」

「僕もそれがいいと思います」

ライトが賛成すると、タマキは軽く笑った。

「じゃあ行くか。何が起こるかわからないからちゃんと準備しておけよ、要一」

「はい」

要一は鉄槌を出すと、先に歩き出したタマキに続いた。

一方、カレンはビルの屋上に立って天井を確認していた。そこに映る空はまるで本物だったが、それ以外に特に変わったところもない。

だが、下方の離れた場所から、光が発したのが見えた。カレンはすぐにビルから飛び降りると、真っ直ぐそこに向かった。

そして、カレンの目の前には全ての窓が塞がれた状態になり、さらに屋上にドームができた建物があった。まもるもさっきの光に気づいたようで、少し遅れてカレンの側に降下してきた。

「カレンさん、この建物って」

「ええ、タマキさんが言っていた建物ですね」

「あからさまに何か起こってる感じですけど、どうします？」

「待ちましょう。何かあればタマキさんが報せてくれるはずです」

「じゃあ、それまで待機ですか？」

だが、そこでカレンは自分のショートソードに手をかけた。それから数瞬遅れて、建物の壁にあの刻印が浮かび上がった。

「これって」

まもるは銃を抜いたが、何も起こらない。ただ建物に刻印が浮かんでいるだけだった。

「何も起こりませんね」

「いいえ、あの刻印を中心に力が集中していっています。中で何かが始まったようですね」

「やっぱり待機ですか？」

「はい、外でも何が起こるかわかりません。それに、タマキさんなら大丈夫ですから。もちろん、準備はしておきますが」

場面は再び変わり、建物内部。タマキ達の目の前には階段があるはずだったが、そこには何もなく、ただの吹き抜けになっていた。

「これがさっきの音の原因か。さて、どういうことなんだろうな」

タマキがその吹き抜けの上下を覗き込んでいると、上から音がして、何かが降りてくるのが見えた。タマキがそれを見上げると、そこにはスクリーン越しに見た、大柄な男が浮かぶ足場に立っていた。

「直接会うのは初めてだな。というか、こんなところに居ていいのか？ 世界を統べる場所とやらがお前の居場所じゃないのか？」

「わざわざ貴様の相手をするためにここまで来てやったのだ」

「それはありがたい話だな。そういえば、名前をまだ聞いてなかったよな」

「我が名はアレインツ。その小さい頭に刻み付けておけ、神となる存在をな」

「アレインツ。わかった、覚えておいてやるよ。どうせここで終わりだしな」

それからタマキは右手を右目にあて、姿を変えると、左手でアミュレットを握った。

「いくぞ、サモン」

その言葉と同時に、タマキの左肩から黒いオーラが吹き出し、それがマントのような形になった。それを見たアレインツは足場から飛び上がって上階に姿を消す。タマキはすぐにライトと要一を有無を言わずに両脇に抱えると、それを追って飛び上がった。

タマキはそのまま壁を蹴って上に向かうと、屋上に出た。そこはドームに覆われていて、タマキ達が着地すると、その吹き抜けはすぐに塞がった。

そして、タマキの前には、今までにない力をその身にたたえたアレインツの姿があった。

「お前に刻んだ刻印は役に立った」

「どういうことですか！ あれは力を移すだけのもののはずです」

「あれだけならばな」

「でも、あなたに刻印はない。いや、そうだ！ この建物はそのためのものだったんですね」

「ほう、よく気がついたな」

そこでライトの肩を要一が叩いた。

「一体どういう話なんだ？」

「タマキさんの力を分割して、それを一つにまとめた。そして、その力をこの建物にさらに集中させたんです。おそらくここそのものが、力をより研ぎ澄まし、増幅させる役割を持っていて、あの人に集中させるためのものです」

「ふーん、まわりくどいことをやるな。そこまでして俺の魔力が欲しいもんか」

タマキがあきれた様子でそう言うと、アレインツは勢いよく腕を振った。

「貴様の力なぞどうでもいいことだ。ただ近くに都合がいいものがあったのを利用したに過ぎない」

アレインツの言葉にタマキはにやりと笑う。

「そうか、俺に目をつけたのはあんたの不幸だったな。それを教えてやるよ」

タマキは瞬時に加速してアレインツに迫った。

全てに打ち勝つ力

要一は巨大な盾でライトと自分の身を戦闘の衝撃から守りながら、戦いを見ていた。

「あの二人すごすぎるんじゃないか？」

「これでタマキさんは全力ではないんですか？」

「あの人の全力なんてあんまり想像したくないって、うわっ！」

大きな衝撃が走り、沈黙が訪れたので要一が盾から顔を出してみると、タマキとアレインツは動きを止めて対峙していた。

「お前のその右腕がそこまで進化するとはな」

「これか。お前なら詳しいことも知ってるんだよな。せっかくだから教えてくれよ」

「それは失敗作だ。いや、そのはずだったのだがな」

「失敗作ではありませんよ。ただ、それにふさわしい者がいなかっただけです」

ライトの言葉にアレインツは顔をしかめた。そしてライトは言葉を続ける。

「意識がある生命体ですから、ふさわしい者に力を与えるんです。失敗に見えたのはただ、あなたが認められなかっただけです」

「戯言を」

アレインツがそう言うと、その手の中に一振りの剣が現れた。そしてそれをライトに向ける。

「見ていれば間違いかわかるだろう」

タマキはそれを聞いて軽く首をすくめると、右手をアレインツに向けた。

「なら、さっさと証明してみせてくれよ」

「ほざくな、人間ごときが」

アレインツの姿が消え、タマキの頭上に現れると、そこから剣を振り下ろした。だが、タマキがそれを右手で受け止めると、左肩の黒いマントがひるがえった。

それはアレインツの目の前に広がりタマキの姿を隠すと、タマキ自身はその上に飛び上がっていた。そこから右腕を振り下ろしたが、それはアレインツの剣で受け止められる。タマキはそこから左足を振り回し、一撃を加えようとする。

しかし、アレインツはそれを身をかがめて避けると、下方から剣を突き上げた。その剣が黒いマントで包まれると、それと同時にアレインツは手を放し、両手に光の球を発生させた。

タマキはそれで攻撃されるよりも早く、再び黒いマントをその場に広げた。アレインツは全く躊躇せずにそこに光の球を二発投げ込むが、それはマントに吸い込まれて不発だった。

「なるほど、言うだけのことはあるようだな」

アレインツは瞬時に天井付近に移動していた。それから手を胸に当てると、そこに急激に力が集中していった。だが、それはすぐに中断されてしまう。

「そこまでです」

ライトの声が響いた。アレインツはすぐに顔を動かすと、そこには地面に何かを刻んだライトの姿があった。

「タマキさん！ 刻印に傷を付けてください！」

タマキは迷わず右手で自分の刻印に十字に傷を刻んだ。すると、ライトが地面に刻んだものが光り、それと同時にタマキの刻印、そして建物全体が光りだした。

「なんだ、これは！ 力が！」

場の力の流れが変わった。今までアレインツに流れていた力がタマキに向かって流れ出し、その身に吸収されていった。

「馬鹿な！ これだけの力を取り込めるはずが！？」

アレインツの言葉とは裏腹に、タマキはどんどん力を取り込んでいく。アレインツはそこに光の球を放ったが、それはタマキに到達せずに霧散した。それを見たアレインツは今度はライトに向かって二発の光の球を放つ。

「危ない！」

要一が盾を構えて前に出るが、光の球の着弾で二人は吹き飛ばされてしまった。アレインツはさらに追撃をしようとして、今度はレーザーのようなものを放った。

だが、それはいつの間にかその間に入っていたタマキの右手で握りつぶされる。

「なるほどな、力が戻ったというより、前よりも増えてるくらいだ」

タマキはそれから左手で右腕を一撫でした。すると、金色だった右腕は生身に帰り、タマキの顔も何もなかった元の状態に戻った。それからタマキは左手を掲げる。

「メテオストライク！」

声と同時に外から何か巨大なものが落ちてくる低い音が響いてきた。アレインツは上を見ると、その場から姿を消して退避していった。タマキもライトと要一の側に移動すると、二人を抱える。

「しっかりつかまれよ」

そのままタマキはドームを破って外に飛び出した。

「離れるぞ！」

「マモルさん！」

タマキの声の前にカレンは動いていて、声をかけられたまもるもすぐにそれを追う。それから数秒後、空が破れ、燃え盛る巨大な岩が姿を現した。

それは真っ直ぐタマキ達がいた建物に直撃し、それを押し潰していった。衝撃波と爆炎が周囲に拡散して、それが収まる頃には建物は一階の半分くらいだけを残して消えてなくなっていた。

「計算通り、ほどほどで済んだな」

タマキは建物の残骸の前に戻ると、のんきな調子で言った。カレンもすぐにその横に戻ると、タマキのを見る。

「なぜ残したんですか？」

「いや、まだ地下に転がってる奴がいるかもしれなかったからな」

「そうですか。それより、その右腕は」

「ああ、魔力が戻ったから本物っぽくしてみた。見た目だけだからどうってこともないんだけどな。まあそれよりも」

「はい、先にやる必要がありますね」

タマキとカレンが同時に上を見上げると、破壊された天井の近くに浮遊するアレインツの姿があった。

「マモルさんには少し離れた場所で待っていてもらっています」

「俺のほうも要一とライトはあっちのほうに置いてきた。ここからは」

「私達の仕事ですね」

カレンは剣を二本抜き、髪と瞳を黒く染めた。タマキはそれを見ると少し眉を上げる。

「使ったんだな。大丈夫か」

「問題ありません」

「じゃあ、俺もせっかくだから新しいことに挑戦するかな。一気に決めるために」

だが、タマキが何かする前に、アレインツから二人に向かって太い光線が放たれた。それは小

さいが凄まじい光の爆発を起こし、周囲の建物を照らした。

カレンはその中を自分の周囲に浮かぶ黒い円盤を蹴って、不規則な動きでアレインツに向かって上昇していく。アレインツはそこに向かって無数の細い光線を放ったが、それはカレンにかすりもしない。

いらついたらしいアレインツが両手を広げると、その背中から全方位に光線が撃たれ、急激に曲がると全てがカレンに降り注いだ。

カレンがそれに向かって右の剣を少し動かすと、その前に黒い円盤が現れ、高速で移動しながら光線を全て受けきった。カレン自身は何事もなかったかのように勢いを増してアレインツに迫り、一際大きな黒い円盤を蹴ると、さらに勢いをつけてそこに突進した。

アレインツはそれをかわしたように見えたが、カレンは空中に出現させた黒い円盤を蹴って急激に方向を変え、右手のショートソードを横薙ぎに振るった。

それはかわされるが、カレンはそのまま身体を回転させて左手の剣をアレインツに叩きつける。その一撃はかわしきれず、アレインツの身体は切り裂かれはしなかったものの、衝撃で流れた

。

「さあ、いくぞ」

その背後から声が響いた。アレインツが振り返ると、そこには背中から左右両側に、上半分が半分が金色、そしてグラデーションになって下が漆黒という翼が生えているタマキの姿があった

。

そしてタマキが構えた両腕に力が集中し、爆発的に開放された。アレインツは瞬時に地面まで落ちていった。それを見たタマキとカレンは、互いの顔を見ることもなく、タマキは左手、カレンは右手を伸ばして、その手をつないだ。

「眠れ」

二人の声が響くと、その体から溢れた白と黒の光があふれ出し、二人の空いた手が振り下ろされると同時に、地面のアレインツに向かってその白と黒の光が降り注いだ。

「で、そろそろまとまった話を聞かせてくれるのか」

タマキとカレンにライト、それから要一とまもるの五人は、次元の管理人のところにいた。

「ふむ、色々調べがついたのだ。まずあのアレインツと名乗っていた者だが、元々私以外の管理人の弟子だったらしいのだ。いつの間にか姿をくらましていたようだったが」

「それで色々やらかしてたのか。今までのことも」

「その通りだ。様々な異変の原因も作り出していたのだ」

そこでまもるが手を上げた。

「じゃあ、あいつはどうなるんですか」

「これからその管理人のところに送り、判断もそちらに任せることになる。私からも言うておくから、おそらく厳しく処罰されるだろう」

「まあ、そういうことなら任せておけばいいか。それより、あいつが色々やらかした後のことはどうするんだ？ ライトの世界とか」

「それについては少し話があるのだ。ライト君、君はアレインツに能力を見込まれて、その手伝いをさせられていたようだが、私を手伝う気はないかね」

「僕がですか」

「いいんじゃないか。お前ならあの世界のことはよくわかってるわけだし、俺も手を貸すからな」

「ありがとうございます」

ライトがそう言うと、カレンもうなずいた。

「私も協力しますよ」

「もちろん私達も」

まもるも要一の背中を叩きながら力強く宣言した。要一も少しむせながらうなずいてみせる。ライトはそれらにたいして頭を下げた。

「本当にありがとうございます。でも、僕には何もお返しはできないと思います」

「そんなことはない。俺ならもうたっぷり前払いで貰ったし、これからも手伝ってくれるんならそれで十分だろ」

タマキにそう言われると、ライトは少しの間考え込むように顔を下に向けてから、おもむろにその顔を上げた。

「精一杯やります」

「よし、話は決まったな。じゃあとりあえずは、ちょっと俺の実家に行くか。三日くらいは骨休めしてもいいだろ」

タマキが次元の管理人にそう言うと、管理人はうなずいた。

「うむ、その間に調整は済ませておくとしよう。しばらくは休んでくるといい」

それから数時間後、タマキとカレン、そしてライトは高崎家の前に立っていた。時間は夕方、家の窓からは光が漏れている。

タマキがチャイムを鳴らすと、ドアを開けて佐織が顔を出した。

「お帰り」

それからライトを見て肩眉を上げた。

「あんた関連のお客さんね。遠慮なく入りなさい、少年」

佐織はそれから顔を引っ込め、タマキは遠慮なくさっさとドアを開けて後ろの二人と一緒に中

に入った。

「たくっ、帰ってくるなら先に言っておけて」

そう言いながら沙織は冷蔵庫を漁っていた。タマキはカレンとライトをテーブルにつかせると、一緒に冷蔵庫を覗き込んだ。

「何もないな。買物行ってくるか」

「それじゃよろしく」

佐織はそう言うのと冷蔵庫を閉じ、テーブルの財布を手にとるとそれをタマキに手渡した。

「じゃあ適当に買ってくる。鍋でいいか」

「まかせる。いってらっしゃい」

それからタマキ達三人は近くのスーパーに向かった。ライトはずっと興味深そうに街や店内を見回していた。

「すごいですね。これだけの賑わいだなんて」

「そのうちお前の世界もこうなっていくさ」

「はい。できるだけことはするつもりです」

三人は鍋の材料を買くと、スーパーを出て佐織の待つ家に真っ直ぐ戻った。すでに佐織はテーブルの上にコンロと鍋を用意していた。

「じゃあ、始める前にそっちの少年の自己紹介でも聞こうじゃないの」

佐織がそう言うのとライトは背筋を伸ばした。

「ライトと言います。タマキさんには大変お世話になりました」

「あたしは佐織、そこの環の姉ね。無茶な奴だから、何も迷惑かけなかった？」

「いいえ、そんなことはありません。タマキさんがいなかったら、僕も今ここにいることはできませんでした。沢山迷惑もかけましたし、本当に感謝しています」

佐織はそれを聞いて感動したような様子だった。そしておもむろにライトの頭を撫でる。

「弟がこれだけ礼儀正しくていい子だったら良かったのになあ」

「でも、残念だけど、弟はここにいる一人なんだけどな」

「わかってるわかってる」

それから四人は一緒に夕食の準備を始めた。

そして夜、布団が足りないので遠慮するライトを説き伏せたタマキは、カレンと一緒に布団に入っていた。

「まあ、こうやってまたのんびりできて良かったな」

「そうですね、あの時、タマキさんが消えた時は私も不安でした」

「俺はあの直後は眠ってたからよくわからなかったな。それに色々あってけっこう必死になってたから、不安になる間もなかった」

「もう、こんなことは起こらないようにしたいですね」

「もちろんそうだ。やっぱり一人じゃな」

タマキはカレンの肩にまわしていた手に力を込めた。同じようにタマキの背中に手をまわしていたカレンも手に力を込めた。

「これからも色々なことがあるんでしょうね」

「あるんだろうな。でも、できないってことはないさ。二人でなら」

「はい、二人でなら」

二人は顔を見合わせると、どちらからともなく軽く唇を重ねた。

「おやすみ」

「おやすみなさい」